

【R—18】 男淫魔と元奴隷メイドの情愛

にやるが

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガ達ナザリック勢よりちよつと過去の時代に転移したインキュバスのオリ至高と、彼に助けられたツアレの物語です。

感想はどうぞご自由にお書きください。

目次

原作前

第一話

1

第二話

14

第三話

※エロ無し

29

第四話

※エロ無し

42

第五話

※エロ無し

53

第六話

65

第七話

76

第八話

※エロ無し

87

原作開始後

第九話

※エロ無し

101

第十話

※エロ無し

113

第十一話

※エロ無し

128

第十二話

※エロ無し

143

第十三話

※エロ無し

157

第十四話

※エロ無し

170

第十五話

※エロ無し

182

第十六話

※モブによる凌辱あり

194

第十七話

※エロ無し

203

幕間「ツアレと漆黒の剣」

212

幕間「ツアレと漆黒の剣その2」

220

第十八話

※エロ無し

229

第十九話

238

第二十話

※エロなし

248

第二十一話 「王国と帝国の戦争 前編」	259
第二十二話 「王国と帝国の戦争 後編」	270
モモンガとペロロンチーノのこれまでの旅路編	
第一話 「終わりと始まり」	285
第二話 「カルネ村」	294
第三話 「トブの大森林 前編」	303
第四話 「トブの大森林 後編」	310
第五話 「騎士の襲撃」	320
第六話 「陽光聖典 前編」	335
第七話 「陽光聖典 後編」	347
第八話 「天才薬師の来訪」	360
第九話 「告白と冒険者」	368
第十話 「城塞都市エ・ランテル」	377
幕間	
外伝 「ツアレとの“はじめて”の情事」	388
外伝 「ツアレの前戯」	403
外伝 「ツアレのアナル開発」	408
外伝 「夢の中のツアレ」	417
外伝 「エ・ランテルの夜」	430

原作前 第一話

「つあー！ ああああん！ ラキスケ様！」

「気持ちいいよ、ツアレ！」

清潔感のある部屋、穏やかな黄色味がかった明かりに照らされたベッドの上で一組の男女が正常位で繋がりがあっていた。

だが人間の交わりかといわれると否である。ツアレと呼ばれた青い瞳に綺麗で艶のある金髪のアレのある顔立ちの女の方は紛れもなく人間であった。

しかしラキスケと呼ばれた男の方は、身長は1.7mほどで肌は健康的な白さをしているものの、銀色の瞳は瞳孔が縦に割れており、紅い頭髮の左右のこめかみから山羊を思わせる角が軽い曲線を描いて後ろに向かって伸び、背中には蝙蝠のような皮膜状の翼があった。

男はインキュバス——女と交わる性の悪魔——であった。

ラキスケの肉棒がツアレの膣壁を何度も擦るように小刻みに動く。肉棒と繋がっている膣口からはすでに何度も射精されているのだから、夥しい量の精液が愛液と混じり合っぐちゅぐちゅと白く泡立っていた。

「んむっ……ちゅぶ、ちゅくちゅく」

ラキスケはツアレを抱きしめて互いの唇を重ね合わせ、舌はツアレの口腔内へと入り込む。ツアレもそれを拒絶するようなことはなく、むしろ積極的に舌を伸ばしていく。そしてお互いに貪る様に相手の唾液を味わい飲み干して舌を絡める。本来は無味無臭のはずの唾液も、お互いにとっては甘露な雫に感じられた。

彼の胸板に押し付けられているツアレの豊満な乳房は潰れて形を変え、精液とも異なる乳白色の液体でうっすらと濡れていた。それは、ツアレの薄いピンク色の乳首から出ている母乳によるものだった。

子供がおらず妊娠もしていないツアレだが、彼女には母乳が出る理

由があつた。生まれながらの異能によつて性的興奮をしている場合に限り、母乳が出るといふものである。

二人はしばらくの間くぐもつた喘ぎ声を発しながら舌を絡め合っていたが、やがて唇を離し名残惜しそうに舌を抜く。

「ちゅっ……れろっ……。ツアレ、少し激しくするよ」

「ちゅぱ……。はい。……。っはああん！」

そう言うと、ラキスケは今までの膣壁を擦りあげる小刻みな動きから、肉棒を膣内から抜けそうになる限界まで引き抜いては膣奥まで一息に押し込む荒々しいものへと動きを変える。

ツアレの腰をがっしりと掴んでパンパンとぶつかり合う音が響く。その度に既に何度も膣奥に注がれた精液がかき出されて溢れ、揺れるツアレの動きに合わせて乳房も弾む。

そんな本来ならば痛みを覚え悲鳴をあげそうになるような激しい性行為に対しても、ツアレは苦痛とは無縁な悦びの喘ぎ声をあげていた。

「ツアレ！ そろそろ射精するよ！」

「っはい！ 膣内にラキスケ様のザーメンを注いでください！」

ラキスケはツアレの望み通り、肉棒を押し込み膣奥で精液を注ぎ込む。既に何度もツアレの膣内に射精しているにもかかわらず、注がれる精液の量と勢い・粘度は衰える気配がない。

「ああああああっ！」

大量の熱い精液を膣奥に注がれたツアレは、仰け反りながら両手でシートを掴み、絶頂して全身を痙攣させていた。

ラキスケは射精しながらも、肉棒を動かしてマーキングするかのよう膣内に塗り込んでいく。

やがてツアレの嬌声をBGMにした長い射精が終わり、ラキスケは名残惜しそうにツアレの膣からいまだに硬さと大きさを保つたままの肉棒を引き抜く。

「——んあっ」

膣口から肉棒を引き抜いたとき、ツアレは気持ちよさそうに色気のある声を上げる。引き抜かれた膣口からは、膣奥に大量に注がれてい

た精液が愛液と混じって溢れてくる。

「はあはあ……ラキスケ様……、清めさせていただきます」

「それじゃあ、お願いしようかな」

絶頂の余韻で脱力しながらも、ツアレは精液と愛液で濡れたラキスケの肉棒への奉仕のために体を起こそうとする。ラキスケもツアレの両脇を抱えて体を起こそうとするのを助け、四つん這いの姿勢にさせた上で眼前に肉棒を突き出す。

ツアレは右手で肉棒を優しく包み込み、左手は睾丸をやんわりと揉みながら亀頭に口づける。こびりついた精液と愛液をこそぎ落とすように丹念に舌で舐め、尿道に残った精液も吸い上げていく。

「ちゅっ……れろっ、じゅるる……」

「ああ、気持ち良いよ」

初めは肉棒の汚れを落とすためだった優しく心地よい刺激のツアレの奉仕は、徐々にラキスケの性感を再び昂らせる扇情的なフェラチオへと変わっていく。

ツアレはラキスケの亀頭を口で包み込む。その口内では唾液を塗した舌が亀頭を這いまわり、雁首を丁寧になぞっていく、先端の鈴口から溢れる先走り汁を舐め取りながらチロチロと弄る。

ツアレから与えられる快感に、ラキスケは衝動に身を任せて腰を動かしたくなるが、一生懸命にフェラチオを続けているツアレをみると、十分に奉仕することができなかったから手を煩わせてしまったと勘違いされてしまいそうなので黙って受け入れる。

そうしてツアレのフェラチオを受け入れているうちに肉棒が膨れ上がり、再び射精感が込み上げてきた。肉棒の変化に気が付いたツアレは、肉棒を喉奥まで咥え吸い上げる力を強めることで応える。

「んっ……はむ、ちゅば……じゅるじゅる……」

「くっ……。ツアレ。射精するよ」

ツアレの頭を撫でながら、喉奥で咥えられている肉棒を少しだけ引く。その時、脈動した肉棒から精液が口内にぶちまけられた。

「んぐっ！……ぐちゅぐちゅ……こくこく……じゅるる」

ツアレは精液を喉奥に注がれると思っていたのか一瞬間くらって

いたが、口を離すことはせずにすぐに肉棒から吐き出される精液を少しずつ飲み下す。

ツアレは何度も口内に流れ込んでくる精液を嚙下し、飲み切れずに零れる精液を両手で受け止める。終わった後も肉棒の精管を吸って残る精液を吸い出した。

ツアレは口内に注がれた精液をすべて飲み干すと、肉棒の精管を吸って精液を吸い出し、ようやく肉棒から口を離す。そして、両手で受け止めていた精液を舐め取り呼吸を整える。

「はあはあ……。ラキスケ様の美味しいザーメン……。こんなに頂けてとても嬉しいです」

瞳を潤わせて恍惚とした表情のツアレの言葉に昂るものを感じながら、ラキスケは抱きしめて口づける。出したばかりで口内に残る自身の精液の残滓も気にせずツアレの口腔に舌を伸ばし、舌を絡める。

このままインキュバスの本能に従ってもっとツアレと睦み合いたい。犯したい欲求が湧いてくる。だが既にツアレを何時間も抱き続け、その間に10回以上休みなく膣内や口内に射精している。その相手をしていたツアレの体力はすでに限界を迎えているだろう。

「それは嬉しいな、ありがとうツアレ。けど、今日はこのくらいにして休まないかい？ ツアレも大分疲れてきたところだろう？」

「気を使ってくれ過ぎてありがとうございます。……あつあの、ラキスケ様。大変申し訳ないのですが……。お願いしたいことがございます」

「構わないけど、なんだい？」

「ラキスケ様にたくさん愛していただき、私の胸はとても張ってきております。このままでは眠れないのでどうか母乳を搾り出すのを手伝っていただけませんか？」

ツアレを休ませようとするラキスケの提案に対して、顔を羞恥で染めながらツアレは胸に溜まった母乳の処理を懇願する。

「……………」

「申し訳ありません。やはりラキスケ様の手を煩わせるわけには

「……、ラキスケ様？」

しばしの沈黙にツアレは懇願を撤回しようとするが、ラキスケはツアレの頬に手を当てる。

「ごめんよ、ツアレ。君がHな気分になった時に母乳が溜まることを知っていたのに、そこまで気が回らなくて」

「あついえ……、ラキスケ様が謝りになることでは」

「さっき何も言えなかったのは嫌だったとかじゃないんだ。沢山Hした後でも恥ずかしがっているツアレが魅力的すぎて、襲ってしまうのを抑えていたんだよ」

「わっ私が魅力的だなんて、そのようなご冗談を……」

ラキスケからの謝罪と賛辞にツアレは母乳の処理を懇願していた時以上に顔を赤くする。

「冗談なんかじゃないさ。この愛嬌のある顔立ちも、健康的で柔らかい唇も、大きく実った胸も、安産型に育ったお尻も、何よりもどれだけHをしても無くならない初々しさが魅力的だよ」

「ラキスケ様……」

ラキスケはツアレの頬・唇・胸・お尻へとなぞるように手を動かし、両胸の間に手を戻す。

「だから、ツアレのお願いに応えたいと思う。ううん、応えさせてほしい。ただ搾るだけだともつたいないから、ツアレのおっぱいを味合わせてもらえないかな？」

「……、どうぞ。私の胸でよろしければいくらでも味わってください」
そういつて、ツアレは仰向けに寝転がってプルンと胸を張る。乳房の頂点で存在を主張する勃起した乳首に誘われるようにラキスケは手を伸ばし、顔を近づける。

ツアレの胸はラキスケの手を柔らかな弾力で迎え入れる。指に少し力を入れるとそれに合わせて沈み込み、力を抜くと元に戻る。ラキスケの舌は右胸の頂上にある乳首——ではなくてその周辺の乳肉を舐め始め、顔を埋めていた。

舌全体で円を描くように胸を濡らす母乳を舐めとりながら、徐々に頂点の乳首に近づいていく。乳輪のところまで差し掛かって乳首に

触れるかという所で舌を離し、もう一方の胸の周りを同じように舐め始める。

予想していた強い刺激とは異なるくすぐったい愛撫を受けて、ツアレはラキスケが何をしているのかを何となく感じ取った。

その答え合わせかのように、両方の乳首以外の胸を舐め終えたラキスケが答える。

「ツアレのおっぱいを味わうならば、まずは今までのセックスで溢れた分もしっかり味わいたいって思ってたね。これから、乳首を味合わせてもらおうよ」

そう言うと、片方の胸を搾るように揉みしだき、その先端の乳首に舌を這わせてしゃぶりつき始めた。

もう片方も、乳首を親指と人差し指で摘まんでクニクニと転がす。

「ひゃあああん！ 私の……おっぱいのお味は……ひゅん！ ……いかがで……でしょうか……？」

「すごく美味しいよ。ほんのり甘く感じて……でもしつこくない。いくらでも飲みたくなるよ」

「良かった……。それでしたら、いくらでもおっぱいをお楽しみくだ……。あひゅうん！」

ツアレはラキスケの答えに安心して、気の向くままに胸を楽しむように伝えようとしたが、弄られ続けて敏感になったもう片方の乳首に吸い付かれて中断される。

吸い付いていないほうの乳首は絶えず弄られ続け、慣れてきたところでしゃぶりつく乳首を替える。時には勃起した乳首を甘噛みされたり、両胸を寄せて両方の乳首にまとめてしゃぶりつくこともあった。

絶えず与えられる快樂の中でツアレは、ラキスケがツアレの太ももに擦りつけている肉棒が今までよりも若干大きくなっていることに気が付かなかった。

「ツアレ、ちよつといいかな？」

「はひい？ なんれひようかあ？ (はい？ 何でしょうか?)」

「ツアレのおっぱいを飲んでいたら俺の逸物がいつもよりギンギンに

なってきたんだけど、何か心当たりはあるかな？」

「わらひのおっぱいできもちよくなつれくらはったんですね、うれひいです。もっほもっほわらくひできもちよくなつれくらはい（私のおっぱいで気持ちよくなつてくださったんですね、嬉しいです。もっともっと私で気持ちよくなつてください）」

これまでの疲労と練り返される快樂で呂律が回らなくなったツアレは、ぼんやりとした意識の中でラキスケの質問に気持ちよくなつてくれたんだと勘違いし、もっと気持ちよくなつてもらおうとおねだりする。

それを聞いたラキスケは揉みしだきしゃぶっていたツアレの胸から口を放す。そしてツアレの体勢を四つん這いにすると思つて背後から覆いかぶさつた。

また愛してもらえぬ。頭の中でそう思つたツアレだが、ラキスケの両手が広げ肉棒が触れた位置に気がついて意識が覚醒する。

「ラキスケ様！ そちらはお尻の穴にございます！」

「分かつているよ。膣内ばかり構つていてこつちの穴が寂しそうにしていたからさ、相手したいと思つて。でも、本当に嫌だったら嫌つて言つてね。……それじゃ、行くよ」

「……畏まりました。……ひうつ！ くううつ！」

本来ならば排泄のための器官でのセックス。何回かはラキスケともしたことはあるが逆に言えば今までの彼とのセックスの中でも何回かしかしたことがない、膣や口でのセックスとは違う羞恥心を感じながらツアレは受け入れる。

「ひい……、ふううつ……」

少しずつ肉棒がアナルに押し込まれていく。初めは緊張で固かつたアナルも、呼吸を合わせて落ち着かせながら徐々に締めりを弱めてほぐれていく。

肉棒が根元まで入った頃には、先ほどまで散々吸われていたツアレの乳房は再び張り始めていた。

「やっぱり、ツアレはお口や膣内だけじゃなくてお尻の方も素晴らしいね。気分はどうだい？」

「以前よりも……きつくて……、少し……苦しい……です。それなのに……、すごく……気持ち良くも……感じます。私は……お尻の穴で感じてしまう……変態さん……なのででしょうか？」

ツアレは少しの苦痛とそれをはるかに上回る快樂、そして羞恥心がないまぜとなつてぽろぽろと涙をこぼす。

ラキスケは涙を流すツアレと尻穴で繋がったまま後ろから抱きしめ、涙を拭う。

「……それはツアレが変態なんじゃなくて、私が畜生なんだよ」

「そんなことは……」

「いいや、私は畜生さ。私の方から言い出せばツアレは受け入れてくれるって知っていて、膣でも問題なかったのにお尻を楽しみたくて言い出すような……ね。今だって、こうやってツアレを快樂で染め上げて私好みに作り替えようとしている」

そう言うと、ラキスケはツアレのうなじに舌を這わせ、両手で弱く胸を揉みしだく。

「私はそういう畜生なんだ。だから、ツアレは自分が変態だなんて思わなくていいんだよ。それでも自分は変態なんじゃないかって思うならば、それは全部私の所為だって思つてほしい」

「ラキスケ様は……ずるいです。そう言われてしまったら、ラキスケ様の好みに合う変態さんになりたくなくなってしまいます……」

「そっか……ありがとう。じゃあ、動き始めるから痛かったり辛かったらすぐに言つてね」

そう言つて、ラキスケはゆつくりと腰を動かし始める。その動きは膣の時と比べると緩慢で、それでもツアレが苦悶の声を出すたびに一旦止めて舌や手でツアレを愛撫するのを繰り返す。

「あっあっあっ……、ああん！ ひゃあん！」

ツアレの声色に艶が入り喘ぎ声が混ざるようになってくるのに合わせて、ゆつくりとした腰の動きも少しずつ速くなっていく。それに合わせてうなじに這わせていた舌は頬、耳朵と移動して耳の中をほじくるようにしゃぶっていく。胸を揉みしだいていた手もゆつたりとしたものから搾るようなきついものへと変わり、乳首からは母乳が滲

み出てくる。

膣内を犯していた時のような腰の動きになるころには、今までに何度も粘度の高い精液を注がれてきた膣からも、絶頂の繰り返しによる粘度の低い愛液と精液が混じり合って零れてきていた。

肉棒から射精感が高まる。ラキスケはツアレに覆いかぶさり胸を揉みしだく体勢から上半身を起こし、母乳で濡れた両手で尻肉を掴む体勢に移る。それに合わせて腰の動きも激しく動かすものからより深くへと押し込むようなものへと変化する。

そして、繰り返される絶頂で意識が朦朧としていたツアレに大きな絶頂が訪れる

「くるっ！ イく、イっっちゃうー！ あっ……、はああああん!!!」

大きな絶頂で目を見開くツアレに、それに伴って締めまりが強くなつた尻穴の刺激による肉棒からの大量射精が始まる。灼けるような熱さの精液が次々と直腸に流れ込み、ツアレの意識は暗転した。

「っふう。気持ち良かったよ、ツアレ……っってしまったな。犯りすぎた」

今夜だけで口内に3〜4回、膣内には10回以上射精したうえでアナルにも手を付けた。初めにツアレに《生命^リ力^{ジュ}自動^ネ回復^ト》を掛けていたとはいえ、本当によく頑張ってくれた。

かつての自分ならば薬の力を借りてもとつくに枯れ果てていただろう回数の射精も、この肉体になつてからは疲れ知らずの衰え知らずだ。

ツアレのアナルからいまだに元気な愚息を引き抜き、腸液や愛液と混じった精液が溢れる前後の穴を拭うと、《清潔^{クリン}》の魔法が込められたマジックアイテムをアイテムボックスから取り出してツアレと自分の身を清める。このマジックアイテムは汚れを落とすのに便利なんだけど、かいた汗やせつかくのツアレの香りも一緒に落としてしまうから一長一短なんだよな。

この世界に来てから永い月日がたったというのに、種族としての性癖に引きずられてこんな犯し方をしてしまうことがある。むしろ肉体に精神が引つ張られているのか？

ツアレならばそこも含めて受け入れてくれるかもしれないが、かつて人間であつた身としては心まで怪物にはなりたくない。

一方的に快楽を貪るのではなくて、お互いに快楽を高め合うようなセックスを楽しむことが、人間だつた頃の信条なのだから。

以前の世界——便宜上現実世界リアルと呼んでいる世界——では中堅どころのAV男優だつた自分だが、今の姿はそちらで生きていた時にはまっていた、当時としては圧倒的な自由度がウリだつたDRMMOゲーム「ユグドラシル」で操作していたアバターのインキュバスになつている。

ビルドとしてはインキュバスとしては珍しいかもしれないが、回復メインの神官戦士職。そこに暗黒神官とその最上位職である暗黒枢機卿ダーク・カデーナルを加えて、正属性と負属性の両方の回復魔法を使用できるようにしている。

最大で100人のメンバーで構成できるギルドとしては構成メンバーが自分を含めて42人と少数ながら、アクの強いメンバーばかりがそろつた異形種ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」に所属していた。ギルドメンバーで同じタンク職のぶくぶく茶釜さんはアバターこそピンクの肉棒ともいうべきものだが、タンク職としてどうあるべきかを教授してくれた。彼女の弟のペロロンチーノさんは弓による広範囲爆撃を得意としたバードマンで、方向性は違えどもエロという方面では気が合い、バカな話もよくして茶釜さんに一緒にどつかれていた。

楽しかつたユグドラシルの思い出も流行り廃りがある以上、続けていけば終わりが見えてくる。アインズ・ウール・ゴウンも例外ではなくて、一人また一人と引退者が現れるようになっていった。自分がこの世界にくる直前ではぶくぶく茶釜さんもペロロンチーノさんも既に引退してしまい、残っていたのはギルドマスターであるモモンガさんと自分を含めて最盛期の3分の1にも満たなかつたはずである。

そんなある日ユグドラシルのプレイ中に頭が痛くなって、断りを入れてからログアウトしようとしたら、急に意識がなくなっただったな。

そして目を覚ましたら一面森の中。土の汚れとか葉っぱの揺れ具合を見ても、それまで現実世界でも実物は見たことないけどリアリティがかなり増していると思わなくて、ユグドラシルっていつの間こんなアップデートしていたのって思っていた。だけど匂いを感じたことから少なくとも通常のゲームで再現できる・再現が許される範囲ではないって気が付くことができたのは幸いだったな。

そのあと色々あってゲームの世界じゃない、昔からある一ジャンル「異世界転移」かもしれないという結論に達して、道中で助けたエルフの一団と一緒にこの世界で生きてきた。

「つと。まだやらなきゃいけないことがあるんだつた」

昔を思い出して情事の相手を放置するのはだめだろう。頭を切り替えていまだに意識が戻らないツアレを仰向けにすると、胸を搾るように揉んで乳首から出る母乳にしゃぶりつき始めた。

これはツアレからお願ひされていることなんだ、ただ楽しみたいだけじゃないんだ。

そう心の中で自己弁護しながら、唇全体で乳房をその柔らかさを堪能するようにムニムニと動かし、舌先で唾液を擦りこむように勃起した乳首から滲み出た母乳を舐めたてる。

しばらく続けて片方の乳首から母乳が出なくなるのを確認したら、もう片方にも同じようにしゃぶりつく。

リアルではAV男優として仕事で女性を抱いてきた身としては、この世界の女性はリアルの女性に比べて美しさのレベルが高い。ツアレの場合、美しいというよりは愛嬌がある・可愛らしいという表現が正しいだろう。

2年前に助けたときは肉付きのあまりよくない、生きること絶望した生気のない目をしていたが、今では心身共に健康になっている。やはりレイプ目はフィクションだけに限るな、なんというか、実際に見ると興奮せずに心が軋む。

あの時ツアレから聞いた話では、王国で10歳位の頃に妾として貴族に浚われて6年間慰み者にされ、その貴族がツアレに飽きたから娼館に売り払われたという。

あの時は別の目的で王都まで出向いていたけど、話で聞いたあの娼館で行われていた行為を考えると、あそこで気がついていなかったらツアレの命は無かっただろう。

それにしても、今回の情事で気づいたがツアレの母乳を吸ってから下半身の愚息が普段の勃起状態よりも大きくなり、体感的には身体能力や性欲も若干増している。以前は同じように吸ってもこんなことは起きていなかったのだが、ツアレの身に何か変化が起きてその影響を受けているのだろうか？

再び抱きたいと思わなくはない。むしろ抱かせてほしいくらいだが、そんなことをしたらいつまでたつても終わらなくなってしまふ。

原因については後ほど帝国にいるフルーダ達にツアレを見てもらおう。それよりも、今はツアレが風邪をひかないように服を着せてツアレの部屋に送るとするか。

「って、しまったな。今回は最初のセックスは着衣ックスだったから服もぐしよぐしよだ。この部屋にある女物の服となると、プレイ用のしかないぞ」

さすがにボンテージのようなエロを前面に押し出した服はまずい。そうになると、着せても問題がないあるいは少ない服は……と。

そうして服をしまっている押し入れから取り出したのは、上下ともに伸縮性のある柔らかい布地でできた服で、上は白色のシャツで下は紺色のパンツ……要するにブルマであった。

これはかつてカツツエ平野にあった廃墟で手に入れた、衣服用の素材を元に帝国で仕立ててもらった衣服の一つである。

ブルマー式をツアレに着せるとある事実に気づいた。おっぱいは主張するし、お尻の方もパンツがぴったりと食い込んでおり、要するにエロい。

リアルではAVでブルマプレイもあったが、大人の女性が履いても正直言っけきついなと思うところがあった。しかし顔つきに愛嬌があ

るツアレが履くと、幼げなイメージに反するスタイルとのギャップもあつてかなりそそられる。

むにゅんむにゅん、ぐりぐり……。

っは！ いかんいかん。思わず背後からツアレの胸を揉みしだき、肉棒をお尻に押し付けてしまっている。……よし、先走り汗は出てないから汚れていないな。

このまま考え事をしてしていると、理性が負けて再びツアレを犯してしまふ。というわけで、服を着て早速ツアレの部屋に連れて行こう。

おっぱいの誘惑を苦しいながらも振り切って手を放し、普段着にしている白のスーツを取り出して着こむと、俺はツアレをお姫様抱っこして部屋を出た。

第二話

上水月の中頃、太陽が昇り始めたばかりの朝焼け時に、バハルス帝国の西部に位置する帝都へと向かって草原を滑るように移動する船が見える。

かつてカツツエ平野を彷徨っていた幽霊船を占拠した上で改装したガレアス船で、魔力で宙を浮き航行する能力が備わっている。

手に入れた当時はボロボロで穴だらけであった船体も、現在では修繕されて立派な姿を取り戻している。特に異様に突き出した衝角は磨かれたように綺麗で、魔法のような朧げな輝きを放っている。3本あるマストも同様に修繕され、その役目を十全に果たしているように見える。

最大の特徴は、航行中は任意で船体から少し離れた周囲から非常に濃い特殊な霧が発生させることができることだ。この霧によつて外からはその姿をほとんど窺うことができなくなるが、内部からは問題なく周囲を確認することができるようになっていく。

この船の甲板には、人影が二つあった。

一人はラキスケ。現在は白のスーツを着ているインキュバスがこの船の船長を務めている。

もう一人は金色に輝く髪を短くドレッドヘアにまとめた、料理長と医師を兼任しているビアンゴという名の男のエルフだ。その瞳は透き通ったような碧色をしており、手には取手が鈍い輝きを放つ金属で覆われた古い歴史を感じさせる木製の杖が握られていた。

「ビアンゴ。俺が言うのもなんだけど、ツアレの様子はどうかだった？ 昂って何度も抱いてしまったから体調を崩していないか？」

ラキスケがツアレの容態をビアンゴに聞く。事前に回復魔法を使っていたとはいえ、アンデッドが蔓延るカツツエ平野の調査のためにはしばらく禁欲生活を送っていた反動で、船に戻ってきたときには普段よりもずっと長くツアレを抱いていた。性行為に延々と突き合わされたツアレが、体調を崩していてもおかしくないのではと不安になっているのである。

「診断したけれども、あの子ならば大丈夫よ。《生命力自動回復》のおかげで怪我をしている様子もなかったし、意識を失ったのだからって快樂が強すぎたからだもの」

「そっか。……良かった」

男性だが女性的な言葉でビアンゴは無事だと答え、それに安堵するラキスケ。

「だけど、部屋に送ってからすぐに出てしまったのは減点よ。また襲いそうだったからっていうあなたなりの配慮なのは解るけど、あの子って目を覚ました時に自分の様子を見て、真っ先にあなたに余計な手間をかけさせてしまったって落ち込んでいたもの。後で慰めてあげなさい」

「ご、ごめんなさい」

「謝るのは私に対してじゃなくてあの子にね」

だが事後のアフターケアが十分じゃないことも言われると、ラキスケは思い当たるところが結構あったので素直に謝るしかない。

「それにしてもあの子、相当あなたにお熱よねえ。あなたのメイドとしての仕事も積極的だけど、あなたに抱かれるときは特に嬉しそうよ。先に自分が意識を失ったせいで情事を終わりにしちゃったことを詫びていたくらいなもの」

「えっ、それ本当?! こっちの都合で休みなくツアレを抱いてたから、嫌われたりするんじゃないかって不安だったんだ」

「ええ、本当よ。あなたが望むならいくらでもって惚気てきたもの。あの子にとってはあなたと一緒にいられる今が幸せなの」

「幸せ……か、良かった」

「あなたたつてば、妙な所で悲観主義的な所があるわよねえ。もっと自分に自信を持ちなさいよ」

ラキスケの自身のことに、其れも恋愛が絡むことに関して悲観的に考える癖は今に始まったことではない。

女性を魅了しその性を貪るインキュバスでありながら、彼は互いに幸福になれる純愛を求めている。しかし、自身が保有している相手を魅了するスキルによって無意識に歪めてしまっているのではないの

かと不安で仕方ないのだ。

この悪癖は早々治せるものじゃないと知っているビアンゴは違う話題を出すことにする。

「そういえば、王国で探している方の調子はどうなの？」

「それが、全然見つからないんだ。こういう時、情報収集用の魔法を覚えておけばって思うよ」

「あの子の生き別れた妹だったわよね？ 今から4〜5年位前に村を出て行ってしまつて、それ以来行方が知れなくなっている……」

「——という名の女の子が今どうしているのかもわからない、そもそも生きているのかさえも。それでも安否だけでもツアレには知らせてあげたいんだ」

「あの子の記憶が臆気な上に、村に居たころの情報までしかないのが厳しい所よねえ。それでも諦めない辺り、本当にあなたもあの子にメロメロよね」

ラキスケだつて本当は薄々わかっているのかもしれない。何の力も持たない少女が村を出て、それから音信不通になつていくことは、既にこの世にいない可能性が十分あることは。その可能性がありながら探し続けているのは、ラキスケなりにツアレにしてやれることだからだろう。

その辺りを口に出すのは無粋なことだと考え、ビアンゴはあえて茶化すことにする。

「そ、そうかも。ツアレつてば愛嬌があるのにどこか庇護欲を誘うというか、それなのに俺とのセックスでもしてみたいことをさせてくれるし、それから……」

「はいはい、惚気話はそのくらいにね。相思相愛なんだから、もう結婚して子供作っちゃいなさいよ。あの指輪……に願えば種族の壁を越えて子を成すことも、あの子の寿命をあなたに合わせることで簡単でしょ？ 希少性を考えれば結婚指輪にするのだから余裕じゃない」

顔を赤くしながら照れるラキスケの惚気話に、ビアンゴは呆れながら二人が結ばれるための手段があることを提示する。ユグドラシルではないこの世界ではすでに新たに手に入れることができないであ

ろう方法を。

「……いや、それは駄目だ。あの指輪に頼ったら、俺が愛したツアレを歪め貶めることになる気がする。それは耐えられないし、きつと自身を許せなくなる。もし使うとしても、俺を変える方に使おうと思う」

「……そう、断るにしてもちゃんと考えていて良かったわ。そこであっさりとその手があつたかとか、勿体ないから使わないなんて言うようだったらば、私はあなたを燃やしていたわよ」

「俺とお前とでレベル差はかなりあるのに試していたのかよ」

それまでの照れていた表情から一転して真面目な表情で自分の意思を伝えると、ビアンゴは良い笑顔で試していたことを告げる。

「こういうのは相手が自分より強いかどうかじゃないの。自分がどう思うかが大切なよ。それに、結婚願望は否定しないのね」

「うっ……、そういうビアンゴはどうなんだ？ かつてNPC……だったお前でも、好きになった相手ぐらいいはいるんだろ？」

ラキスケの胸に抱いていた願望を指摘され、気恥ずかしそうにしながらもビアンゴにも同じことを問いかける。

「うーん……。確かにいたわね。スレイン法国とエルフの王国がまだ仲が良かったところに、こっそりとだけど付き合っていた子が。けど、忌々しいあの同僚の篡奪王が強い子を産ませるために攫った所為でそれどころの問題じゃなくなっちゃったのよ。幸か不幸か、あの子はスレイン法国の部隊に助け出されたけど私は二度と会えなくなった。だから篡奪王への腹いせとして、退職金代わりにこの杖持つていて、同じような思いをした同胞たちと一緒に出て行ったわ」

「その杖って確かレアリティが伝説級のとか言っていたよ……。持ち出して大丈夫な訳……。無かったな」

「あの篡奪王ってば、自分のことは棚に上げて私のことを盗人風情とか言ったのよ。あんな奴に使われるくらいなら、私が持っているほうがマスターの形見も喜ぶわ」

「あの時に出会ったオッドアイのエルフだったか？ 周りを飛び回っていた盾に防がれて攻撃が効かなかったから、お前や一緒にいたエル

フたちを連れて逃げたけど、やっぱり何としてもあそこで殺しておくべきだったか？」

自分が目を覚ました森——エルフの王国が保有する森——での彼との出会いを思い出して、あの時仕留めなかったことを悔やむラキスケ。

しかし、ビアンゴはそれを否定する。

「いいえ。あの時の私たちじゃあれを突破することはできなかったわ。仮に、あそこで殺せても今度はエルフの王国がスレイン法国に蹂躪されて滅ぼされていたでしょうね。あれの首を手土産にしても収まりがつかないくらい、やらかしが大きすぎたもの。それに、事が明るみになっていたら、最悪の場合は竜王たちも出張ってきて最終戦争まっしぐらだったわよ。神の血筋プレイヤーっていうのはこの世界ではそれだけ重く受け止められているのよ」

改めてプレイヤーのこの世界への影響力の大きさにラキスケは苦笑いするしかなかった。

この世界の歴史はユグドラシルからやってきたプレイヤーが与えた影響が非常に大きい。

600年前に降臨したとされる六大神がいなければそもそも今の人類は滅びていた。

500年前に六大神最後の一人であるスルシャーナを殺害した八欲王も、位階魔法の概念を広め、亜人種や異形種、特に竜種の勢力を弱体化させたという意味では人類に大きく貢献している。

200年前に現れたという「口だけの賢者」と呼ばれたミノタウロスや十三英雄のリーダーも、その強さや現実世界の文明の発明品を伝えたとという意味ではおそらくプレイヤーだろう。

そして、ビアンゴによるとエルフの王国は400年前に現れたエルフのおじいちゃんだったプレイヤーが建国したものらしい。国王となったそのプレイヤーは、当時のスレイン法国と対等な同盟を結び、民を慈しむ偉大なエルフだったという。

しかし、エルフは長命種だが元々高齢だったことが災いして100年前に寿命で国王が亡くなると、後継者に指名されていたエルフもわ

ずか十数年後にNPCである篡奪王の反乱によって処刑されることになる。そして、その篡奪王は自国のエルフの女性だけでなく、当時のスレイン法国の要人を攫って凌辱し孕ませたことがきっかけで、かつて同盟国だったスレイン法国との戦争を招いたという。

「そう考えると、他の先人方と比べて自分って……」

「そう自分を卑下しないの！ あなただから私達もツアレも助かったのよ！ 胸を張りなさいな」

過去のプレイヤーの偉業と今の自分を比較して落ち込むラキスケを、ビアンゴは背中をバシバシとたたきながら励ます。

「そ、そうだな。俺はあいつらにはなれないし、なるつもりもない。気が向いたら手を伸ばせる範囲で助けて、あとはこの世界を楽しめればいいだけだ」

「八欲王や篡奪王みたいな暴虐を行わなければ、楽しんだもの勝ちよ」

「八欲王と並べられるエルフの王ってある意味凄いな……」

「それじゃ、私はこれから食事の仕込みがあるから戻るけど、あなたもあの子のところは今すぐ行って慰めてあげるのよ」

「今からか……、分かった。行ってくる」

「慰めるとは言っても、Hなことは程々にして、あの子の好きなようにさせてあげるのよ」

「……善処します」

ツアレを慰めに行ったときに起こるであろうことに関し、ビアンゴはあまり意味ないだろうなと思いつつも、あらかじめクギを刺しておくのを忘れなかった。

この地上船の中には、船員のための私室の他に幾つか施設がある。

一日に決まった量まで水を生み出すことができる

湧水フオーセット・オプ・スプリングウォーターの蛇口と熱鉱石を組み合わせたものが設置された、身体を清め温めるための浴場もその一つだ。

現実世界では失われてしまった文化である、安全なお湯を張った風

呂場に浸かるのを夢見て、無理を言って作ってもらった設備である。

そこで俺とツアレは生まれたままの姿で体を洗っていた。

俺は甲板でのビアングとの会話の後、ツアレの所に向かい目が覚めるまで一緒にいてやれなかったことを謝罪した。恐縮するツアレを宥めて「何か欲しいものやしてやれることはないか？」と聞いてみたところ、俺の身体を洗いながらイチヤイチャしたいということをお恥ずかしがりながら言ってくれた。

やべえ、ツアレがめっちゃ可愛くてエロイ。普段はエッチなことを恥ずかしがるような子なのにセックスしている時は淫乱で、でも勇気を持ってこういうことを言える子でもすごい滾るんですけど。

その場で押し倒しそうになるのをぐっと堪えてツアレと一緒に浴場に向かい、お互いに服を脱がせて浴場に入る。俺が着せたままのツアレのブルマを脱がせる際の、プルンと揺れるおっぱいとお尻は眼福でした。

浴場に入ると、俺を椅子に座らせてからツアレは石鹸を泡立てて、まずは頭を洗ってくれた。髪は短めになっているけれども、巻き角があるから自分で洗うと面倒なんだよなあ。頭髪を優しく刺激しながら洗ってくれたり、角を溝の部分まで洗ってくれる時の、むず痒い感覚やよめかみに伝わってくる振動に気の抜けた声が出てくる。

頭を洗い終わると、次は背中と翼だ。鳥のような羽ではなくて、蝙蝠のような皮膜なのでまだ洗い易いほうだとは思うが、これも自分で洗おうとすると翼の付け根辺りがなかなか大変だ。ツアレもそのことには分かっているようで、付け根の所は丹念に洗ってくれる。脇腹をくすぐられるのに似た感覚がして、笑いが出そうになるのを堪える。

背中と翼も終わると、腕を洗い始める。指先の方は指を絡めるようにして洗ってくれて、肩から二の腕の所は石鹸を泡立てたおっぱいで挟んで洗ってくれている。おっぱいの柔らかい弾力に顔を緩めっていると、ツアレの吐息が微かだが熱く艶っぽくなっているのに気づく。もう片方の腕も同様に洗い終えた時には、俺の愚息もツアレの乳首も痛いほど勃起していた。

本来ならば体を使ったもつと上手な洗い方を教えるべきなのだろう。だが、拙くて初々しい動きにこれはこれで興奮する。それに、ツアレのやりたいようにやらせてみたい。

身体の前面を洗うためにツアレが俺の正面に来ると、勃起した肉棒に顔を赤らめて動きを止める。情事では何度も見たり啜えたりしていても、そうでないときに見ると恥ずかしいようだ。俺？ ツアレのおっぱいをガン見しております。

ツアレは俺の身体を洗う動きが止まっていることに気が付いて、慌てて謝罪する。

「も、申し訳ありません！　すぐに洗いますね！」

「大丈夫だよ、ツアレ。焦らないでゆっくりしてくれて。良いものも見せてもらっているしね」

「？　……!?!　ありがとうございますう……」

俺の言葉にツアレは少ししてから言葉の意味に気が付いて、消え入りそうな声でお礼を言いながら自身の胸を俺の胸板に押し付けて擦りつける。胸を隠すとかのリアクションをすのかなと思ったけど、やるべきことを優先したようだ。

おっぱいの柔らかい弾力とツンとした乳首が胸板に擦れる感覚が心地良いが、まだ不慣れなツアレでは俺を椅子に座らせたままではお腹辺りが洗いにくいようだ。

それと、俺の息が中途半端にツアレのお腹の辺りに触れてもどかしい。ツアレに身を任せて洗ってもらっただけのつもりだったけど……、ちよつとぐらいいは良いよな？

「ツアレ、ちよつと良いかい？」

「何でしょう……むぐうー！」

ツアレに呼び掛けてこちらを向いたところで左手を背中に回して抱き寄せて唇を奪う。右手はツアレの後頭部を優しく掴み、唇が離れないように抑えている。

「ぐちゅぐちゅ……じゅる、じゅぶじゅぶ」

「んんっ！　……くくく。じゅるじゅる」

ツアレの口内に舌をねじ込み、舌同士を絡ませながら唾液を送る。

初めは驚いていたツアレも、すぐに順応し蕩けきった瞳で両手を背中に回して俺が送り込む唾液を飲み干し、自分からも舌を絡め始める。俺の愚息はツアレのお腹に密着し、その熱さと固さを主張している。しばらくツアレの口内を味わっていると、ツアレの方はさすがに息が苦しくなったのか俺の肩をポンポンと軽くたたいている。俺はツアレの頭を抑えている右手を離し、その唇を解放した。

「ぶはっ、はあはあ……。ラキスケ様……」

「一生懸命頑張ってくれている君が魅力的で、つい悪戯したくなっただ。……そろそろ、こっちもお願いできるかい？」

俺はツアレの手を取り、すでに昂っている愚息を握らせる。

「……はい。ラキスケ様も辛そうですので、一度楽にいたしますね」

「ああ、頼むよ」

ツアレは椅子に座ったままの俺の股間の前で膝立ちになると、まず両手で愚息への奉仕を始めた。周囲の陰毛で石鹸を泡立てるように入念に洗い、できた泡で竿や睪丸を包んで優しく洗う。十分に洗ったところで桶に溜めておいたお湯でお互いの泡を濯ぐと、濡れた自身の豊満な胸で俺の愚息を挟み込む。

パイズリの柔らかく弾力がある感触に俺はツアレの胸を掴んで思うままに腰を動かしたくなるが、我慢してツアレの奉仕に身を任せらる。

「はあはあ……ちゅっ、んっ……ちゅぱっ」

ツアレは両腕で胸を上下させて竿全体を擦り、胸からちよこんと顔を出す亀頭を舌でチロチロと舐めていく。

ツアレを抱くようになったばかりの頃は、胸で挟めるほどは育っていないかったから乳首を擦りつける方法を教えたりしていたっけ。それがこうして挟めるくらいまで成長したのはツアレの素質なのか、それとも俺との性行為で刺激されたからなのか。そう考えると、感慨深いものがあるなあ……。

「はむ……れる。ラキスケ様の先走り汁、ちゅぱっ……美味しくて癖になっちゃいます」

俺が少し昔のことを思い出しているとツアレは同じ方向に動かし

ていた胸を今度は交互に動かし始め、亀頭を唇で啜って吸いあげる。パイズリを始める前から十分に昂っていた愚息は、強くなった刺激を素直に受け入れて膨張し射精する準備に入る。

我慢しようと思えばまだ我慢できるが、ツアレを焦らそうと思っているわけではない。ツアレの顔にぶっかけるのも良いが、愚息はツアレによって啜えられている最中だし、今回は口内射精でザーメンを味わってもらうか。普段は一声かけるけれども、今回はいきなり出してみるのが面白いかもしれない。

俺の中に悪戯心が芽生え、ツアレには何も言わずに口内に射精した。

「んむうっ！ ぐくぐくっ……、ちゅぶちゅぶ……じゅるる、ぐくん」
いきなり口内に射精されたツアレは驚きこそしたが、口を離すようなことをせずに次々と放出されるザーメンを一生懸命飲み干す。

長い射精が終わりツアレも精管に残っている分も吸いだしてザーメンを飲み切ると、啜っていた愚息から唇を離す。

「ぶはっ……。ラキスケ様のザーメン、いつ飲んでも濃くて美味しい。んっ……ああん」

いきなり口内射精されたにも拘らず、怒るところか俺のザーメンを褒めてくれるツアレの姿はエロかった。

トロンとした潤みをおびた瞳にほんのり赤く染まった頬、半開きの口からは舌が顔を出している。かなり発情しているのだろう、ツアレの乳房は母乳が溜まりだして張ってきており、彼女の手が伸びている股間からも愛液が零れていた。

今回はツアレとのHは程々にするつもりだったけど、このまま終わりにしたらツアレが生殺しの状態でつらいよな。この船で移動中はツアレとセックスしてばかりだけど、後でツアレにも性欲をコントロールする術を学ばせたほうが良いかもしれない。

けれども今は……。俺は自慰に耽っているツアレの手を取り、愛液のついた指を口に含んで舐め取る。

しばらくその様子をぼんやりと眺めていたツアレだが、自分が気持ちよくしたい相手がいるのに自慰に耽っていたことに気が付いたよ

うだ。

「ふえっ？ ……！ も、申し訳ありませんラキスケ様！」

「大丈夫だよ。それより、ツアレはまだ絶頂していないだろう？ 手伝ってあげるよ」

そう言つて、俺はツアレの股間、正確には膣口に指を這わせる。

「ああああっ……！ ひう！ んんっ！」

膣口を指で触れただけでもツアレは喘ぎ声をあげる。俺はそこから秘裂を人差し指と薬指で開き、十分愛液で濡れていることを確認してから中指を第二関節辺りまで膣口に埋没させる。すると、ツアレの喘ぎ声のトーンが変わり、快楽に身悶えした。

ツアレの手を握っていた方の手はツアレの背中に回して抱きしめ、もう片方の手指でツアレの股間を弄る。中指は膣壁に絡みつかれながらピストン運動を繰り返しては時折膣壁を優しく引っかき、クリトリスを親指で揉み解す。その度にツアレの淫らな喘ぎ声が浴場に響き、膣口からは愛液が溢れてくる。そして、中指が膣壁を引っかくのと親指がクリトリスを揉みつぶす動きが一致した時、ツアレは背筋を伸ばしてびくびくと痙攣させて絶頂した。

「ぴやああああっ！」

膣内から中指を抜き取り、愛液でふやけたそれを口に含んで舐める。

本音を言えば後2〜3回は手マンで絶頂させてから組み敷いて犯したい欲求がある。しかし、今回はツアレがやりたいことをさせてあげるべきところであり、今回の手マンの時点でそれを逸脱しているともいえる。そもそもそんなセックスは一方的すぎる。

ツアレが落ち着くまで背中に回した手で尻を撫で、もう片方の手で胸を優しく揉む。

「ツアレ、この後はどうして欲しいかい？」

絶頂から少ししてツアレの呼吸が落ち着いたところで、あえて曖昧な表現でツアレに確認をとる。

「はあはあ……、えつと……。おチンポでお願いします……。ご奉仕を忘れて自分だけ気持ち良くなるうとした私のはしたないオマンコ

を、ラキスケ様の逞しいおチンポで沢山犯して下さい」

ツアレが本番を求めることは予想できていたが、このおねだりの仕方は想定していなかった。ツアレの頭の中はピンク色に染まっているようだ。

少し前に失神するまで抱いた時もここまででは乱れなかったが、むしろあれでタガが外れてしまったのだろうか？ ツアレのおねだりする姿に一抹の不安を感じながら、ひとまずはツアレの性欲を発散することにする。

「わかったよ、ツアレ。持ち上げるよ」

俺はツアレの脇腹を持ち上げるように抱え、対面座位の体勢で愚息を挿入する。

ツアレの膣内に挿入した愚息を包む膣内の温かさと締め付けが心地よい。このまま緩々と心地よさに浸っているのも良いが、今回はツアレからのお願いがある。

俺はツアレの胸に顔を埋め、その柔らかかさと彼女の汗の匂いを堪能し、乳房を舐めまわしながら腰を動かし始めた。

両手はツアレの円やかなお尻を掴んで揉みしだき、愚息は膣内を突き上げるだけでなく、掻き回すように左右の動きも混ぜてGスポットやポルチオを刺激する。

「ああつ、ひうっ、そこっ！ 良いの！」

絶頂によって敏感になった性感帯を責められて、ツアレの喘ぎ声が浴場に響く。

俺の動きに合わせてツアレもさらなる快楽を求めて腰を動かし、俺の頭を掻き抱いて胸に押し付ける。

(姿見の鏡を用意しなかったのは失敗だったな)

今回のように乱れるツアレもそそられるが、俺が一番滾るシチュエーションは快楽の海に溺れているところから意識が引き上げられて羞恥心で恥ずかしがっているツアレを抱くことだ。

体位を背面座位にして今のツアレの乱れ具合を見せてやれば、相当良い抱き心地になっていただろう。

俺は一旦顔をツアレの胸から離し、身体がより密着する様に抱きし

める形に変えて耳元で囁く。

「ツアレの膣内、俺のを美味しいって啜えこんで気持ちいいよ。一度射精するから、膣奥でしっかりと受け止めておくれ」

「はいい！ ツアレのおマンコにラキスケ様の熱いザーメンを沢山注いでください！」

俺からの膣内射精（中出し）宣言に愚息も二度目の射精を迎えようと膨らみ、ツアレの子宮口をこじ開けようと突き進む。

そして愚息がツアレの膣奥を突いて絶頂させ、強くなつた締めりに合わせて膣奥めがけて濃厚な精子がドクドクと放たれる。数秒とも数十秒とも思える長い射精の間、ツアレは口が半開きのまま絶頂の快感に身を委ねて俺の大量の熱い精子を受け止めていた。

「あああああ……、ラキスケ様の熱いザーメンでお腹がやけちゃう」

長い射精を終えても未だ萎えていない愚息を膣内から一度引き抜くと、注がれた精液がどろりと零れてくるのを見てツアレは残念だと表情で訴えかける。

ツアレはまだ満足していないようだし、俺も膣内射精一回だけで終わらせるつもりもない。ツアレとの体位を背面座位に変えて愚息を再び挿入する。

両手でツアレの胸の搾乳を始めると、緩急をつけてリズムカルに搾り出される母乳に合わせてツアレの口からは断続的に喘ぎ声が漏れ、愚息を締めつけていく。

「あっあっあっ……」

「おっぱい搾られているだけで感じるなんて、ツアレはエッチだね。もっと欲しいってツアレのおマンコも求めているよ」

「おっぱいだけじゃ足りないんです。おマンコもおチンポで沢山突いて、お腹がパンパンになるくらいにザーメンを注いでください！」

「精液ボテが良いんだね。それじゃあ思いつきりいかせてもらうよ」

俺はそう言って、愚息による上下運動を再開する。

俺の疲労具合としてはとしては愚息を抜かずに回数を重ねて腹の中に溜めていく方が良いが、それだとツアレが途中で先にダウンしてしまう。だから次の射精で出す量を思いつきり増やして一回で精液

ポテまでもっていくことにする。

普通は無理な話だがインキュバスである俺ならば、一度に射精する精液の量をコントロールすることもできる。

結合部からは精液と愛液が混じり合ったものがぐちゅぐちゅと音を立てて泡立ち、一度腔内^中射精^ししたこともあって滑りの良くなった腔内を愚息が蹂躪する。

「ひあー！ んひいー！ んふおー！」

敏感になった腔内を何度も俺の愚息で擦りあげられ搾乳も続けられていたツアレは、言葉にならない喘ぎ声を出していた。

このまま射精しないでツアレが失神するまで犯していたい欲求を抑え込み、再び射精する態勢に入る。

「ツアレ、もう一度射精^すするよ。ツアレのお腹をポッコリさせてあげるから、しつかり受け止めてね」

「はい！ ……んあぁあぁ！」

俺はそう言って搾乳していた両手でツアレの腰をがっちり掴むと、愚息をツアレの腔奥まで突き入れて射精した。

ドロドロと先ほどの射精とは比べ物にならない夥しい量の精液が次々と注がれていき、ツアレの腔内を瞬く間に満たす。腔内が精液で満たされてもお射精は止まらず数分間続いた。射精が終わるころには、成りたての妊婦のようにツアレのお腹は少し膨らんでいた。

俺は注いだ精液が零れないようにつながったまま、ツアレの膨らんだお腹をさする。

「はあはあ、さすがにこの量を一回で射精^すすると、気持ちいい分だけ疲れるな。それにしても、これだけの量が俺の中にどうやって入ったんだ？」

「ラキスケ様……、ツアレの我儘を聞いていただきありがとうございます」

「ツアレ、お望み通り精液ポテにしたけれども気分はどうだい？」

「お腹が張って……少し苦しいですけど、嬉しいです。まるで、ラキスケ様の子供を身籠れた様な気分になります」

「……もしも俺の子を孕んだら、ツアレは産んでくれるのかい？」

「はい、もちろん」

ツアレを助けてから凡そ2年間、彼女を数えきれないくらい抱いた経験則で分かったことがある。

それは、今のままでは異形種である淫魔インキュバスの自分がツアレを孕ませることはできないということ。

そのことは分かっているけどもツアレの言葉は心に沁みる。

いつか決心がついた時には……。そう考えながら俺はツアレを優しく抱きしめる。

「ありがとう、ツアレ」

その後、湯船につかって体を温める前にツアレの膣内に散々吐き出した精液をかきだし、喘ぐツアレの痴態で再び元気になった愚息を口で奉仕してもらった。

結局、浴場から出たのは、太陽が昇り朝食の時間が過ぎた後であった。もちろん、ピアノゴには説教されて、帝都につくまで正座を続けることになった。

第三話 ※エロ無し

バハルス帝国の帝都アーウィンタールは人口こそ隣国リ・エステイーゼ王国の王都に劣るものの、現皇帝——ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスによるここ数年の大改革により発展の規模では大きく上回っていると言える。

道路一つをとっても王国では王都であっても本通りぐらいしかまともに舗装されていないのに対し、帝国の帝都はほぼすべての道路がレンガや石で舗装されているのだから、その差は歴然だろう。

その石畳の上を八本の脚を持つ魔獣、スレイブニール八足馬が引く一台の馬車が走っていた。馬車の御者台や屋根——荷台となるところを改良した場所には魔法詠唱者と弩マジック・キャスター いしゆみを持った戦士などが都合6名おり、周囲に警戒の目を走らせている。

馬車の中にいるのは五人。そのうち三人はローブを纏った魔法詠唱者らしい恰好をした男性で、残る二人のうち一人は白いスーツを着た男性——ラキスケはりラックスした様子であるのに対して、もう一人の盾を構ったブローチを胸元につけた白を基調としたメイド服を着た女性——ツアレはどこか落ち着かない様子で鳩を構った指輪をさすっていた。

魔法詠唱者の三人はいずれも帝国魔法界において名が知れたものであるが、その中でも最上位者は白髪の老人。

『三重魔法詠唱者』『逸脱者』などの二つ名で周辺諸国にその名が響き渡っている帝国最強にして最高の大魔法詠唱者であるフルーダ・パラダインだ。

他の二人はフルーダの高弟二人であり、いずれも若くして第四位階魔法の中でも後半レベルを行使できるエリートだが、フルーダはその先に行く第七位階……儀式魔法に限っては第八位階までも行使可能という生きる伝説である。

そのフルーダに対してラキスケは和やかに口を開く。

「すまないね、フルーダ。本来ならばこちらが足を運ばなければならぬのに、このような馬車まで用意して迎えに来てくれて」

「なに、このくらい問題にならんよ。それで、今回はどのような要件で来たのかな？」

ラキスケの丁寧ではあるがあくまで対等であるような言葉に高弟達は眉を顰めるが、フルーダは気にせず話を進める。

「今回は依頼されていた仕事の報告の他に、個人的な用事もあってね。まずは仕事——カツツエ平野の調査の方から話すよ」

「ほう、何か新しい発見はあったかな？」

「まず、カツツエ平野内に複数ある遺跡についてだね。大半は朽ち果てていて尚且つマジックアイテムの類も探しくされていたけど、竜王国側近辺の山脈の麓に地図には記されていない、状態が良い遺跡を発見したよ」

「それは本当なのか！」とても信じられない」

「お前たち、まだ話が始まったばかりだぞ、真偽を議論するのは後でもできる。今は話を聞くのだ」

「も、申し訳ありません」

アンデッドの出現率が異常に高い呪われた地であるカツツエ平野にいまだに手付かずの遺跡があったことを伝えられた高弟二人は思わず疑問を投げかけるが、フルーダの言葉がそれを遮る。

「まあ信じられないのも無理はないよ。俺が所有する地上船は周辺に濃い霧を発生させながら進むことができるけど、船内からの視界には外の霧も含めて影響を受けない力が備わっている。それにもかかわらず、その遺跡は目の前に突然姿を現したからね」

「ほう、突然とな？」

「ええ。警戒して距離をとったら目の前から消えて、船で近づくとまた現れる。船を離して徒歩で近づいてもそこには何もなかったのに、船をその遺跡に近づけていると確かにそこにあっただんです」

「幻術の類……ではなさそうだな」

「幻術を見破るマジックアイテムも試したけど、特に変化はなかったよ。おそらくだけど、その遺跡がある近辺は空間的に歪んでいるのかもしれない。あの船を条件として初めて入れる遺跡なのかもしれないね」

フルルーダは自らの長い髪をしごきながら、ラキスケの話に相槌を打つ。そしてラキスケが考えられる遺跡に入るための条件を挙げたところで、もう一つの可能性を提示する。

「ふむ……、あるいはその船が持つ特殊な霧が鍵の可能性もあるかもしれないな」

「ああ、そっちの可能性もあったか。そうになると、今度は霧を展開せずにあの辺りに行ってみる必要もありそうだね」

「それで、遺跡内には何かあったのかな？」

「それに関しては、実物を見てもらった方が早いかな。ツアレ、インフイニティ・ハヴァザツク無限の背負い袋をとってくれないかい」

「畏まりました。こちらです」

「ありがたい、ツアレ。馬車のスペースの都合もありますので、今お見せするのは一部のみですが、こちらをご覧ください」

ラキスケはツアレに預けていた無限の背負い袋を受け取ると、その中から目的のものを取り出していく。

それは置物であったり金属で覆われた筒状の平たい物体であったりと様々だが、ある共通点があった。それは、いずれも様々な猫の絵が描かれていることである。

フルルーダも二人の高弟も、取り出されたものを各々が手に取って検分していく。

「これは……金貨のようなものを持った猫の像か。白を基本として黒と茶色の三色で描かれているが、どうして片手を上げているんだ？」

「こちらは側面に猫と細かくした肉のようなものが描かれているが、古代文字か？ 文字が読めないな。まさか猫の肉ということはないだろうな？ どちらにしろ、わざわざ金属の筒で覆うとは……」

「魔力のこもったものが多いの。ちよつとよろしいかな？」

「アプレイザル・マジックアイテム道 具 鑑 定 ……なるほど、これはしばらく振ると猫の仲間になる生き物を近辺から呼び寄せるマジックアイテムのようだな」

「アプレイザル・マジックアイテム道 具 鑑 定 ……名前は……なんだ？ 始めが文字化けして読めないぞ。えーつと、後ろの方はまねきねこというのか。くそつ、効果も見れない」

「《魔法探知》。ふむ……、この金属の筒で覆ったうえで《保存》を掛けているのか。長期間の保存を前提にしているのか？」

他にも様々な発掘品を調べては議論していく三人。

「その猫の像は御神体のようなものではないのか？」

「覆っている金属の成分も調べた方が良さそうだ」

気が付くと馬車の目的地である魔法省はもうすぐになっていた。

「フルーダ、そろそろ到着する頃合いだし一旦片付けるけど、残る武器や他のマジックアイテムの類は魔法省についてからで構わないかい？」

「正直言えばこの場でもっと見たい気持ちもあるが、魔法省で調べた方が良さそうだし。それで構わんよ」

ラクスケはフルーダからの許可をもらって取り出した物を再び無限の背負い袋にしまい始める。

ツアレも手伝って最後の一つをしまい終えたところで、馬車は目的地に到着する。

広大な敷地は周囲を高く分厚い堀に囲まれ、物見塔が幾つも建てられ、内外を警戒している。地上は帝国八騎士団の内、最精鋭の第一騎士団と魔法詠唱者の混合警備隊が複数巡回に当たり、上空は飛行魔獣に騎乗した皇帝直属の近衛部隊である皇室空護兵団と飛行魔法による警戒に当たっている高位魔法詠唱者の混合部隊が巡回している。

此処こそが帝国の力の象徴であり、最も力を注いでいる重要機関の帝国魔法省である。

この機関では騎士たちに与える魔法の武器の生産・新たな魔法の開発。魔法実験による生活レベルの向上研究などが日々行われており、帝国の魔法の神髄が詰まった場所といえる。

フルーダはこの魔法省の総責任者——長官はまた別にいるが——を務めている。

馬車は敷地内にある一つの塔の前で止まる。そこには多数の人間の出入りがあったが、馬車の横手に刻まれた三本の杖が交差する紋章を一瞥すると、皆そろって足を止めて最敬礼をとって迎える。

馬車からは目上の者であるフルーダ、次いで二人の高弟、訪問者

であるラキスケ、そして女性のツアレの順に降りる。

「お前たちは二人を応接室までご案内して応対せよ。私は研究の進捗を確認してから向かう」

フルーダは従っていた二人の高弟にラキスケとツアレの案内を任せると、騎士や魔法詠唱者たちの最敬礼に軽く手を上げること
マジック・キャスター
で返礼としつつ、塔の入り口に潜る。

通路を抜けると、円筒状に広がる空間が現れる。外周側にはずらりと各地の遺跡から発掘された様々なマジックアイテムが発掘された遺跡別に陳列されている。

一見すると博物館のように見えるが、ここは遺跡から発掘されたマジックアイテムを調査し、既存の魔法技術の改良や新たな魔法技術を開発するための研究部門である。忙し気に働く数多の魔法詠唱者
マジック・キャスター
の中でも、最も地位の高いものが、フルーダのもとへ駆け寄る。

「研究の進捗はどうだ？」

「先日アゼルリシア山脈周辺の遺跡より発掘された、魔法武器に関する調査の進捗が遅れが見られますが、それ以外は問題なく進んでおります。師よ」

「ふむ……、進捗が遅れている原因は分かっているのか？」

「は、はい。魔法武器に対して《道具鑑定》及びを《魔法探知》
アプレイザル・マジックアイテム
デイトクト・マジック
使用してもレジストされたことに起因します。おそらくは魔法に対しての耐性を保有しているためと考えられます。また、使用されている金属の特徴が、現在われわれが把握しているどの金属とも異なることも影響しているかと」

「調査を始めたばかりならばそのような所か。魔法耐性を有する未知の金属で作られた武器であるとかわかっただけでも今のところはよしとしよう。そのまま研究を続けよ」

「畏まりました」

叱責がないことに安堵した担当者のお辞儀を横に、フルーダは付き従おうとする高弟達に供は不要と伝えて円筒状の通路の向い側、その奥にある応接室まで歩き出す。

応接室の扉を守る兵士が開いた先へフルーダは歩を進める。

「待たせたの」

「なに、問題ないよ」

応接室で待つていたラキスケとツアレにフルーダは声をかけ、ラキスケがそれに気軽に答える。フルーダも気にせず歩を進め空いている席に座る。

フルーダが座つたのを確認して、ラキスケは無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザツクから改めて中身を取り出し始めた。

馬車の中で見せたものの他にも動物の爪を模した手甲・足甲、魔法が込められている短杖に本と様々なものが無限の背負い袋インフイニティ・ハヴァザツクから取り出され、机に並べられていく。

「さてと……。改めて依頼されていた仕事の報告といこうか。今回の発掘品に関しては机に並べている分も含めてこちらの羊皮紙にリストとしてまとめているよ」

ラキスケはそう言って発掘品の一覧が記された羊皮紙をフルーダに手渡す。

「ふむふむ。この『きやつとふーど』というのが突出して多いが、いったい何かな?」

「それは馬車の中でもお見せした、猫と肉の絵が側面に描かれた平べったい円筒状の金属——缶詰——のことです。数があつたので、安全を確認したうえで幾つかは此方で開封して確認しましたが、開けると中に猫用の食べ物イが詰まっているんです」

「どうして猫用の食事と分かつたのだ?」

「この缶詰に書かれている文字、かつて私がいたところで使われていた『にほんご』というものなのですが、そこに書いてありました」

「この文字が読めるのか!」

「猫の肉ではなくて猫用の肉だったのか……」

フルーダのお気に入りとはいえ、所詮は亜人のワーカーだと思つていたラキスケが古代文字を読めることに高弟は驚く。

古代文字の研究は魔法省でも行われているが、資料が不足してあまり進んでいないのが現状だからだ。

「ええ。『にほんご』と『ろーまじ』辺りならば大体は。『えいご』」

とかになると大分怪しくはなりますね」

ラキスケは自信なさげに言うが、高弟達が受けるショックは小さくない。

自分たちが古代文字という括りで調べている言語が少なくとも三種類は存在し、そのうち二種類はある程度読んで理解し話せると目の前の男は言っているのだから。

「古代文字の話はあとでじっくり聞かせてもらおうとして、今は他の発掘品も見なければならん。『きやつとふーど』の詳しい調査は後ほど職員たちも交えて行うとしよう。次はこれだな」

フルーダが次に目を付けたのは、片手を上げてもう片手で金貨のようなものを抱えた三毛猫の置物だ。

「師よ。こちらは《道 具 鑑 定》でも『まねきねこ』という名前の一部以外の詳細が不明でしたが」

「うむ。だからこそだ。詳細が分からないということは、より上位の魔法で調べればわかるかもしれないということだ。名前から推測するに、何かを引き寄せる効果があるやもしれん。それがただのノラ猫程度ならば可愛いものだが、もしビーストマンの群れでも引き寄せるようなものだったらば早急に対処しなければならぬからな」

「ビーストマン……」

帝国にも情報としては存在する、竜王国を脅かしている亜人種の名前が挙がり、高弟達は息を飲む。

オール・アブレイザル・マジックアイテム
《道 具 上 位 鑑 定》

アブレイザル・マジックアイテム
フルーダが《道 具 鑑 定》の上位魔法を行使する。その様子を真剣な目で見守る高弟達。

「ふむ……。名前は祝福のまねきねこ……。分類はアーティファクト……なるほどの。安心せよ、これは危険を呼び込むような類の呪いのアイテムではない、むしろその逆だ。これは設置することで周辺の病や呪いのある程度祓い、供え物を施した者に金運をもたらす効果が備わっている」

「名前が示していたのは幸福を招く猫ということだったのですね」

「金運を招くのは具体的にどうということなのかも検証が必要になりそ

うだ」

フルーダが鑑定した結果を聞いてほっとした高弟達は、さっそくそのアーティファクトの研究方法について考える。

先に見た「きやつとふーど」に使われている技術も、祝福のまねきねこが持つ効果も、解析し再現することができるようになれば、軍民両方に様々な恩恵を与えるだろう。

それだけじゃない。今回は魔法のかかった武具や魔法そのものが込められているマジックアイテムも多数ある。それらに込められている魔法を解析することができれば、帝国の魔法技術のさらなる発展につながる可能性もあるのだ。

高弟達がそう考えている横で、フルーダは喜色の笑みを抑えて次に調べる発掘品を選ぶのであった。

応接室に持ち込んだ発掘品のリストと現物の照らし合わせが終わわり、報告書を受け取ったフルーダは先ほどまで興奮していた心を落ち着かせて深呼吸をする。

側に仕えていた高弟達はこの場にはいない。発掘品に含まれていた物のあまりの希少性に意識を手放してしまったため、フルーダに叩き起こされた後に比較的希少性の低い発掘品を運ぶ仕事を与えられたからだ。

「よもや第六位階魔法の《大治癒》ヒールや《天候操作》コントロール・ウエザーの込められたスクロールだけでなく、第七位階魔法の《上位転移》グレート・テレポーションが込められた短杖なども複数見つかるとは思わなかったぞ」

「極めつけはまさかの第十位階魔法《神炎》カリエルを修得するための本ときましましたね。内容を知った高弟達が揃って失神してしまった時は焦りましたよ」

「弟子たちも情けないものだ。私よりも若くして第四位階に至った者達もいるというのに」

「まあまあ。……それにしても、フルーダの反応も昔とは大違いで

すよね。100年前にカツツエ平野で俺たちと出会ったときは、ピア
ンゴに対して弟子にしてくれっつていきなり詰め寄ってましたよね。
当時のフルーダのままだったらば、この本とか見つけたら全身の穴
という穴から体液漏らしながら頬擦りとかしていたんじゃないかな
？」

高弟達の不甲斐ない反応にため息をつくフルーダに対して、ラキ
スケは初めて出会った頃のフルーダの反応を思い出し、それを茶化
しながら昔を振り返る。

「当時は私も焦りがあつたからのう。第六位階に到達し、老化を抑え
込んで100年以上の月日がたち、それでもなお先の見えない第七位
階。その領域に到達しているエルフと出会えたのだ。魔法の深淵に
また一歩近づけると思えば、居ても立っても居られなかったのだ」
「そのあと、アンデッドの軍勢を俺が浄化した時に今度は涙を流しな
がら俺の方に跪いてきたのは、正直ドン引きしたなあ」

「その時使用した位階魔法の位階を、ビアンゴ殿が教えてくれたから
ですな。あの時ほど、私の生まれながらの異能^トが魔力系位階魔法の位
階しか見ることができないのを恨んだことはなかったぞ。神の領域
ともいえる第十位階、その領域の魔法をその目で見ていながら自力で
は気づくことができなかったのだから」

「あんにやろう。まあでも、フルーダのおかげで俺やビアンゴ達が
帝国で路頭に迷わずに済んだし、感謝しているんですよ」

ラキスケの感謝はお世辞などではない本心からくるものだ。身寄
りも後ろ盾もなかったエルフたちを率いていたラキスケにとって、当
時のフルーダが対価として住居や身分の保証、生活の場を提供して
くれたことはとてもありがたいことだった。

尤も、当時のフルーダからすれば魔法の深淵を覗けるならば帝国
を裏切つても構わないと考えていたことを考慮すると、むしろたつた
これだけの対価しか求められなかったことは予想外だったのだが。

「それを言うならばこちらこそだ。この本に記されている魔法はまだ
私でも習得できない魔法だが、これまで伝承にしか残されていなかった
領域の位階魔法がプレイヤー自身を除いて確かに存在することを

発見できたのは実に素晴らしいことでもある。改めて礼を言わせてもらうぞ」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます。フルーダのおかげで、俺達の地上船が帝国で接収されずに済んでいますし」

「次にカツツエ平野の調査に向かう際は、是非とも私も乗せて欲しいものだ」

「俺の方は良いですけど、ちゃんと皇帝の許可は得てからにしてくださいね」

「……仕方ない、その時はジルに一声かけてからにしよう。それはそれとして、個人的な用事があると言っていたな、聞かせてくれんか？」

フルーダは悩みながら答え、ラキスケのもう一つの用事が何なのかを尋ねる

「実は、彼女の……ツアレの職業レベルを見て欲しいんです」

「それならば私でなくても問題ない筈だが、何かあるのか？」

「はい、ツアレの半生の中で俺と出会う以前の部分が大部分……その……悲惨だったところがありまして。そのころに刻まれたものももし職業として反映されていた場合、ツアレが周囲から嫌な目で見られる可能性があるんです」

「なるほど、それで私に頼むというわけか。まあいいだろう、お嬢さん、こちらへ来なさい」

「は、はい」

ラキスケは言葉を濁しながら理由を説明し、フルーダは自らの長い髪をしごいて少し考える。特に断る理由もないので引き受けることにした。

呼ばれたツアレが緊張しながらフルーダの前に立つと、フルーダはツアレの頭に手をかざして魔法を詠唱する。

《職業ジョブの系統ツリー》

この魔法は約30年前、フルーダがラキスケが個人個人の適性を数値化して適した職業を紹介するアイデアを基に開発したオリジナルスペルであり、現在では帝国で人材の効率的な育成や配置のために活用され、普及している。

その効果は対象が修得している職業や修得可能な職業に関する情報を看破する魔法である。どこまで看破できるかは使用する魔法詠唱者の技量に依存し、第二位階まで使用できる魔法詠唱者ならば基本的な職業の有無ぐらいだが、高弟達のように選ばれた魔法詠唱者で基本的な職業から派生したいわゆる上位職も判別できるようになる。そしてフルーダほどの大魔法詠唱者ともなれば、それに加えて職業ごとの特徴やどの職業がどの程度成長しているかもわかるようになる。

「ふむ……、わかったぞ。結果は今から言うが、それで起きることに責任は持たんぞ」

「はい、お願いします」

「まず、基本的な職業は二つ修得している。メイドと娼婦だ。メイドは基本を押さえた程度だが娼婦の方はかなり育っている。次に特殊な職業も二つ。一つはスレイヴ、奴隷経験があるものにつく職業だな。そしてもう一つは神聖娼婦。こちらは特徴として性行為を行った相手に一時的な能力向上を与えたり、疲労や呪い・病を取り除くことができるようだ」

神聖娼婦という聞きなれない言葉にラキスケは耳を傾ける。少なくとも、R18行為どころかR15行為さえ違反行為と見なされかねないユグドラシルでは聞いたことがない職業だ。

名前の響きと特徴から、支援と回復役を兼ね備えた職業ではあるようだが、その方法が性行為というのがエロいなあとラキスケは思った。

「ラキスケの性格を考えればスレイヴは出会う以前に与えられた職業だが、知らないものからすれば娼婦の職業レベルもあるからラキスケの性奴隷と受け取られてもおかしくはないか。このことは他の者達には黙っておくでしょう」

「ありがとうございます、フルーダ様」

「昔の苦い経験を掘り起こされても素直に礼を言えるとは、大分芯の強い娘ではないか。それにしても、他の職業と比べて娼婦だけ異様に高いのはどういうことだ？ 奴隷時代がどの程度だったかはわから

んが、スレイヴと比べても高すぎる。一体どうやってここまで育てたのだろうか？」

「あ、あう……」

魔法による職業レベルの検査が終わり、フルーダが突出した職業レベルに関して問うとツアレは顔を赤くしてうつむいた。

普通ならばツアレの様子から察するだろうが、そこは大魔法詠唱者^{マジック・キャスター}。年齢250を超えてもなお童貞のフルーダでは察することができなかった。

「フルーダ、それに関しては俺が話すよ」

「ほう、知つとるのか。他の分野でも応用できるかもしれんからな、是非聞きたいところだ」

他の分野も応^{セックスレベリング}用できてしまったら困る。ラキスケは苦笑いしながら、自分とツアレの2年間の情事についてフルーダに話し始めるのであった。

「うう……、恥ずかしかったです」

フルーダへの依頼の報告を終えて報酬を受け取った帰り道、ラキスケと共に中央道路の歩道を歩くツアレはフルーダに自分とラキスケの情事を根掘り葉掘り聞かれたことを思い出して羞恥に顔を染めていた。

フルーダに下心やスケベ心があったりしたならばラキスケも話を打ち切っていただろう。しかし、純粹に効率的に経験を積む方法——ラキスケはレベリングと呼んでいる——として聞いており、やましい心が一切なかったのだから性質が悪い。

「ごめんよ、ツアレ。恥ずかしい思いをさせてしまった」

「大丈夫です。必要なことでしたから、お気になさらないでください」
「それでも何か埋め合わせはさせてほしい。何か欲しいものはないかい？」

ラキスケの言葉に、ツアレはどうするか悩む。特に欲しいと思える

物が思い浮かばず、かといって埋め合わせに寵愛を求めるのも違う気がする。何かないかと考えていると、前から気になっていたことを思い出す。

「……それでしたら、私と出会う前のラキスケ様のお話を聞かせていただけないでしょうか」

「俺の過去？」

「はい。ラキスケ様に助け出されてから二年、私はあなたの御側におりましたが、私はそれより前のラキスケ様のことをほとんど知りません。本来は詮索してはいけないということは分かっております。けれども、私はもつとあなたのことが知りたい。もしよろしければ。愛しいあなたの半生を聞かせて欲しいのです」

「うーん……、分かった。内容が内容だからビアンゴと相談した上で、船に戻ってからになるけど良いかな」

「はい、分かりました。楽しみにしていますね、ラキスケ様」

ツアレは歩道の馬車道側を歩くラキスケの手に、自身の手を絡めて嬉しそうに微笑む。

太陽が照らすその微笑みは、ラキスケにとってとても美しく感じるものだった。

第四話 ※エロ無し

帝国魔法省からの依頼を終え、地上船内の食堂でラキスケとツアレ、ビアンゴの三人が食卓を囲んでいた。

かつては彼らに加えて、ビアンゴの部下である5人のエルフの冒険者チーム「森妖」が同居していたのだが、現在彼らは帝国の帝都にある上位の冒険者が利用する酒場を拠点とし、この地上船を離れている。

ビアンゴとツアレが作った根菜類のたっぷり入ったシチュー、皿によそった分の最後の一口を頬張るラキスケ。柔らかくそれでいて崩れないように煮込まれた具材を咀嚼し、飲み込む。

「ご馳走様。美味しかったよ、ツアレ」

「ありがとうございます、ラキスケ様。私もその言葉が聞けて嬉しいです」

「今日の料理は私も一緒に作ったけど、ツアレちゃんってばシチューとかの煮込み料理は、私よりも美味しく作れるようになってきているから助かるわあ」

鍋に残したシチューは《保プリザベーション存》の魔法をかけてから冷まして翌日の分にして、食後の団欒を楽しむ三人。

これが一般的なワーカー系の住居とする酒場なのであったらばこみ入った話はできないが、ここは個人所有の地上船の中。普通ならば話に出せない内容も団欒の話題に出てくる。

「フルーダお爺ちゃんってば、今度は自分も乗せてカツツエ平野の例の遺跡に行きたいって言ったのね?」

「うん、他の遺跡では出てこなかった高位階のスクロールやマジックアイテムが出てきたからね。好奇心が抑えられなかったんじゃないかな。一応、ジルクニフにはちゃんと許可は得てからにしてとは言っておいたけど……」

「皇帝陛下に一声はかけるでしょうけど、許可が出るかは関係なしに来そうよねえ」

「だろぅなあ……」

「そ、その場合お出しする料理は食べやすい柔らかいものにしたほうが良いでしょうか？」

「うーん……。固くなくてのどに詰まりにくくなければ、そこまで気を使わなくても大丈夫じゃないかしら？」

「後は、その時にはこっちからもジルクニフに連絡しておくことかな」
フルーダに関する話題を切欠に、団欒から次回の調査の時にやるべきことの相談に移る。

予定は未定だが一通り話を詰めたところで、ラキスケが帰りの話を振る。

「そういえばビアンゴ、そろそろツアレに俺たちの昔の話をしようと思っただけど、どの辺りの話が良さそうかな？」

「あら、いきなりねえ」

「ご、ごめんなさい。私がラキスケ様の昔のお話を聞きたいと話したからです」

「大丈夫よ、ツアレちゃん。そうねえ……。どのあたりのお話がいいかしら」

ビアンゴは頬に手を当てながら考える。

まずは自分たちとラキスケが出会ったエイヴアーシャー大森林でのお話……。これはさすがに自分たちの都合に巻き込みすぎる。それにツアレの境遇が篡奪王関連でどのような影響を与えるかも未知数だから却下。

次は30年前にこの地上船を手に入れた話……。手に入れたころまではともかく、その後のごたごたはあまり気持ちのいい話ではないから却下。

となるとカツツエ平野でフルーダと自分たちが初めて出会った話……。この辺りがいいだろう。

「それじゃあ、私たちやラキスケがフルーダお爺ちゃんと初めて会った時の、カツツエ平野での出来事辺りを話すのはどうかしら？」
「いいね。今日はちょうどツアレもフルーダと顔合わせもしたことだし、昔はどんな人だったかもしれていいと思う。ツアレもそれでいいかな？」

「はい、よろしくお願いします。ラキスケ様、ビアンゴ様」

ラキスケとビアンゴはその時のことを振り返って話始める。

「それは、私たちが祖国を出て行って、ラキスケと出会ってから間もない頃だったわ。出て行った理由とかは今回は端折るけど、祖国や法国からいったん離れるために、アンデッドが出現する呪われた地、カッツェ平原を徒歩で渡ろうとした時のことね。そこで私たちは、帝国騎士たちやフルーダお爺ちゃん及びその高弟たちと出会ったの」

「確かあの時は帝国騎士やフルーダの高弟たちは俺を見るなり臨戦態勢に入っていたつけ。後で聞いた話では、当時のカッツェ平原にアンデッドの軍勢が出現して集結しているのを察知して、それに対処するためにフルーダも含めて動員された兵力がそのアンデッドの軍勢の所に向かっていてるところだったそうだよ。そこにエルフを何人も連れた亜人と遭遇してきた。まあ、実際は亜人じゃなくて淫魔だけども。彼方からすれば俺らがその案件に何かしらかわっている可能性が高いつて思ってもおかしくないんじゃないかな」

「尤も、私たちはそのことを知らなかったから法国がすでに手を回していたって勘違いしちゃってね。帝国まで動員してくるなんてって思ったわ。お互いに勘違いしたまま一触即発の状態になったところで私を見たフルーダお爺ちゃんがいきなり言い出したのよ」

『あ、ありえない！ この巨大な力の奔流は私の力を超えておる。よもや……第七位階の領域に到達しているというのか！ これはきつと魔法を司るといふ小神の思し召し。失礼と知りながらも伏してお願ひいたします！ 私、このフルーダにあなたの教えを与えてください！ 何卒、何卒！』

「あの時は正直驚いたわねえ。故郷でも私が見える魔法の最大位階を知る者は少ないって言うのに、それを一目見て言い当てたのもあるけど、いきなり地面に額を擦りつけて弟子入りを懇願してきたのだもの。思わずポカーンとしちゃったわよ」

「まあ、それ以上にフルーダの周りにいた魔法詠唱者たちが明らかに動揺していたけどね。今思えば、個人で帝国軍全体と渡り合えると言われる魔法詠唱者マジック・キャスターがそんなこと言いだしたら、動揺するのも無理はないか」

『パラダイン様、お気を確かに！ お前たち、パラダイン様を誑かすあの者達を捕らえろ！ パラダイン様が到達していない第七位階を使えるなど、デマカセに決まっている！』

『ええい、離さぬか！ お前たちもそのような無礼なことを止めよ！ 今まで私の生まれながらの異能トが裏切ったことなど一度もないのだぞ！ あのエルフの力が私より上を行っているのは事実だ！

……申し訳ございません、私の弟子たちがとんだ御無礼を、どうか許していただけないでしょうか』

『えっええ、私は別に構わないけれども……。貴方たちのこの大所帯、何か探しているの？』

『ええ、その通りでございます。このカツツエ平野に出現したアンデッドたちが一か所に集結しつつあるという情報が入り、それを討滅するために編成・投入された帝国軍にございます』

『パラダイン様あー！ 機密、機密情報！』

「あの時、必死にツツコミ入れていた高弟にはちよつと同情しちやつたなあ」

「適当にはぐらかされるだろうって私自身も思っていた質問に答えられたら、配下の者達も焦るわよ」

「そ、そうだったのですか。私がお会いしたフルーダ様とはだいぶ印象がその……、違いますね」

「ツアレ、正直に言っても良いんだよ。当時のフルーダは魔法キチだったって」

ラクスケたちが初めて出会った時のフルーダの事を聞いたツアレは、帝国魔法省で話をした彼とのギャップに戸惑い、ラクスケは優しい眼差しで答える。

「今でこそ大分丸くなったけど、当時のフルーダお爺ちゃんは、魔法のためならば他の全てを投げ売っても構わないっていう危うさが

あつたものねえ」

「そうだなあ。なまじ、生まれながらの異能で魔力系位階魔法の位階を視覚化できるから、ある意味では孤独だったのかもなあ」

「生まれながらの異能って、本人の適性と合っけていても幸せとは限らないんですね」

ツアレは自分の胸に手を当てながら呟く。今でこそ自分の生まれながらの異能はラキスケに愛されているが、知ったばかりの頃は性奴隷になるために産まれてきた存在だという烙印を押されたような気がして、こんな生まれながらの異能無ければよかつたのと思つたことも多々あつた。

「俺は好きだよ、ツアレの生まれながらの異能」

「うう……。言葉だけだと嬉しいのに、内容を知っていると恥ずかしいです」

「ちよつと、ラキスケつてばそれはセクハラよ？」

「あつ……。その、ごめん」

「話が逸れちやつたけど、カツツエ平野での話だつたわね。そんな感じで帝国軍と一悶着があつたけど、そうこうしている内に騒ぎを聞きつけたのか、それとも生きている命が集まっているのを感じいたのか、アンデッドの軍勢がやってきたのよね」

「ああ、それも十や二十じゃない。明らかに作為的に産みだされ、集められた千に届きそうな数のアンデッドが奇襲してきたんだよな」

『パラダイン様！ わが軍の両側面よりアンデッドの軍勢が突如出現、攻撃を仕掛けてきました！ 数は目視できるだけでも百を超え、死者の大魔法使い及びの骨の竜も複数確認されております！』

『何？ この地は常に薄い霧が張っているとしても何故そこまで接近を許した！ ……そうか、広範囲化した《不可視化》と《静寂》で姿を隠していたのか！ しかし、カツツエ平野に出現するアンデッドの中でも強力な死者の大魔法使いと骨の竜が複数、それもここまで統率された動きをされると、自然発生による偶発的なものとは思えん。となると……』

『フールーダお爺ちゃんて良かったわよね？ 明らかにやばい状況だ

けども、私たちも手を貸しましょうか?』

「明らかに放置できるような状態じゃなかったから、こつちから協力を申し出たのよね」

「あの状況で我関せずと言って逃げてても、安住の地は無かっただろうしなあ。副官と思しき軍人は拒絶していたけど、フルーダが執成してくれて助かったよ」

『貴様らぐいときに我らが手を借りるだと、ふぎけるな! そもそも、このアンデッドも貴様たちの差し金ではないだろうな!』

『そのようなことを言っている場合ではなからう! 恥を忍んでお願いいたします。強力なアンデッドを含む軍勢に挟撃され、このままでは全滅する恐れもあります。どうか我らに協力してはいただけませんか?』

『そんなに畏まらなくていいのに、分かったわ。報酬とかは後で相談するとして、まずはこの場を切り抜けましょう。私たちはフルーダお爺ちゃんと一緒にの方に行くから、ラキスケは反対側の方をお願い』
『分かったよ。生きている兵たちを治療してアンデッドたちを殲滅したら、そつちの方に行くから』

「とまあ、こんな感じでフルーダからの緊急依頼っていう体裁をとって帝国軍と共同でアンデッドの討伐に参加することになったの」
「ここからは順番的にまずは俺が担当したほうを思い返していくか。そのあとビアンゴ達の方を話して、合流後の話という順番かな」

——スケルトンにモーニングスターを振るい砕く、砕く、砕く。

——剣を振るいスケルトンウオリアーを切り裂きながら、剣から放たれた炎で周囲のスケルトンを燃やし尽くす。

——魔法効果範囲拡大化で広範囲化された《マス・スライト・キュアウーンス集団軽傷治療》で、複数のアンデッドたちを巻き込んで消滅させながら傷ついた帝国兵たちを癒す。

スケルトン系で構成されたアンデッドたちには戦場を駆ける暴風

として、帝国兵には傷を癒す施しの風としてラキスケは任された戦列を駆ける。

ラキスケが左手に持つモーニングスター——グッドモーニングver5.1は特別な効果を持たない伝説級の武器だ。様々な特性を付与したタイプやギミックを組み込んだバージョンの物もあるが、耐久性と攻撃力を重視したシンプルなこの武器を打撃武器として愛用していた。

右手に持つ剣——シグナルバスターも同じ伝説の武器で、鈍い銀色の輝きを持つ刀身の中心線上に青緑・黄・赤の三色の宝玉がはめ込まれている。一見すると実戦用ではない儀礼剣に見えるが、宝玉の色に応じて氷属性・電気属性・炎属性の属性ダメージを任意で使い分けて斬撃に上乗せできる逸品である。

死者の大魔法使いの指揮の下、複数のスケルトン・メイジが放つ回避不可能の特性を持つ《魔法の矢》の弾幕も、ラキスケが保有する職業レベルからくるスキル、全ダメージ固定軽減によって尽くが無力化される。尤も、仮にダメージが入っても彼が装備する鈍い輝きを放つ銀色の鎧——神器級装備のファフニール・ソウルに備わっている自動HP回復によって無意味であるが。

他にも様々な装備で基本的な状態異常には完全耐性を、属性攻撃や特殊な状態異常に対しても高い耐性を持つラキスケを止められる手段は、アンデッドの軍勢はもちろん辻斬りならぬ辻ヒールを受けている帝国にも持ち合わせていなかった。

「守りながらこの数を相手にするのはさすがに面倒だな」

始めは帝国兵たちに群がり、接近したラキスケにも攻撃を仕掛けていたアンデッドたちだったが、瞬く間に100体近く滅ぼされてからは死者の大魔法使いの指示で不用意な接近はしなくなっている。

アンデッドたちを一か所に固めずに分散させているのも嫌らしい。ラキスケが突っ込めばその分帝国兵たちから離れることになり、残るアンデッドたちに再び襲われることになる。スケルトンは一体一体は弱い、未だに数百入るうえに帝国軍の精鋭でも複数でかからないと危険だと言っていたスケルトン・ウォリアーも10体以上混ざって

いる。

魔法詠唱者たちは最初の奇襲の際に重点的に狙われて少なくない数が死亡している。残っているものに関しても、戦線を維持するために魔法を使い続けたことで魔力切れを起こしているものが多く、戦えないものばかりだ。

（こういう時、モモンガさんならばアンデッドたちを支配するなりスキルで生み出したアンデッドたちで手数を増やして一掃することもできるんだろうなあ）

ふとユグドラシルで所属していたギルドの長であるモモンガのことを思い浮かべる。他にもワールドチャンピオンのたち・みーならば白兵戦だけでも守りながら殲滅はできるだろうし、ワールドディザスターのウルベルトならば一撃で殲滅することも容易いだろう。ペロロンチーノだって有翼の爆撃王の二つ名に恥じない活躍を見せるはずだ。

ラキスケは回復型タンクというビルドの都合で殲滅力に関してはあまり高くないと自覚している。第十位階の信仰系魔法でまとめ一掃することも考えたが、この殲滅戦が終わった後に友好的なままとは限らない相手を前に手の内はあまり晒したくない。単純に、レベル一桁から高くても20台程度の相手に使うのがもつたないし恥ずかしいというのものもある。

（考えてみれば俺だけで殲滅する必要はないし、帝国軍の兵士たちを強化してやれば楽になるかな？）

そう考えて助けた帝国兵たちの方に顔を向けると、相手は此方をまだ警戒しているのか、怯えながらも剣を構える。

ラキスケはちよつと失礼だなど思いながらも、自分が逆の立場だったらばしようがないかと思うことにして声をかける。

「今からあなたたちに強化魔法をかけてからアンデッドたちに突っ込むので、私がいけない間は耐えてくださいね」

帝国兵たちが口々に何かを言っているが、気にせず順次《集団標的》《魔法効果範囲拡大》で集団化・広範囲化してから強化魔法を行使する

《下級筋力増大》《下級敏捷力増大》《下位属性防御》《鎧 強化》
《一矢守りの障壁》《ウォール・オブ・プロテクションフロムアローズ》
これだけ掛ければスケルトン・メイジやスケルトン・アーチャーの
援護を受けたスケルトン・ウォリアー相手にも遅れはとらないだろう
とラキスケは判断する。

上位魔法で彼らを強化しないのはこのくらいでも十分と判断した
ことと、手の内を明かさなためである。

「それでは、死者の大魔法使いと骨の竜は此方が受け持ちますの
で、残りはお願います」

そう言つて、ラキスケは幾つかに分かれたアンデッドのグループの
内、死者の大魔法使いと骨の竜がいるアンデッドの一団に飛び込
んだ。

死者の大魔法使いと複数のスケルトン・メイジによる《火 球》と
《魔法の矢》の弾幕をスキルで無効化しながら、道を阻むスケルトンた
ちを次々と滅ぼしていく。

2体の骨の竜が左右から尻尾でラキスケを吹き飛ばしにかかる
も、両手に持つ武器で一方の尻尾を砕き、もう一方の尻尾を切り飛ば
しながら本体を燃やして灰にする。

骨の竜が一体瞬く間に滅ぼされたことに驚愕する
死者の大魔法使いをよそに、もう一体の骨の竜の頭蓋を砕いて活
動を停止させる。

「く、来るなっ！ 《恐怖》！」

「いや、効かないから。それじゃあね」

死者の大魔法使いは接近されて苦し紛れに放った魔法もラキスケ
には意味を成さず、モニングスターによって頭部を置いて胴体を
粉々に吹き飛ばされる。

「お許しを……、アアップ……アウト様」

「アアップアウト？ このアンデッドたちを支配している奴の名前か
？」

滅びゆく死者の大魔法使いの弱弱しい断末魔に首をかしげるラキ
スケだったが、残りのアンデッドを帝国兵たちに任せていたのでひと

まずはそちらに向かうことにした。

「ラキスケ様が戦った方は随分あっさりしていましたね」

「まあ、この時点でやっていたことと言えば、砕いて切って回復してばっかりだったからねえ。帝国兵たちへの支援の効果がどのくらい影響したかとかもあまり見ないで残りも挟み撃ちにして殲滅しちゃったし。そのあとすぐにビアンゴと合流しに行っちゃったから帝国兵がどういふことを言っていたかとはよく聞いていなかったんだよ」

淡々とした内容に、ツアレは感想を漏らす。

この場面、実は帝国の劇で美化されたうえで吟遊詩人などによって繰り返し脚色された結果、流離の騎士が危機に瀕した都市を帝国の騎士たちと共に守るため、首魁である死者の大魔法使いと従えている骨の竜相手に単身で死闘を繰り広げる内容になっているが、劇に対して興味を持っていないラキスケは内容がかけ離れていることもあって知る由もない。

「次は私たちが担当した戦線の方ね。こっちはフルーダお爺ちゃんたちと協力していたこともあって、帝国兵とは比較的スムーズに協力できたわね。役割も下級のスケルトンたちは帝国兵と『森妖』のみんなが、死者の大魔法使いが率いるスケルトン・ウォリアーと骨の竜はフルーダお爺ちゃんと私が担当したのよねえ」

「こっちの敵は俺が尽く倒したからなあ。協力らしい協力はしなかったな」

「骨の竜の魔法耐性が第六位階までしか防げないことを説明しながら、《ナバーム焼夷》で周辺ごと焼き尽くした時は、フルーダお爺ちゃんはもちろん敵の死者の大魔法使いも安心していただけだよ」

「なにそれ、凄い見たかった」

この世界では位階魔法に対する絶対耐性を持つとされていた骨の竜に対する認識を、帝国内で改めるきっかけになった出来事

でもある。

当時はフルーダでも第六位階であったことから結局は召喚魔法でない位階魔法では倒せないという認識が多数だったが、第八位階まで上り詰めた今では「骨スケリトル・ドラゴンの竜を位階魔法で倒すところこそが魔法系の逸脱者の登竜門」と言われるようになった。

「問題は、フルーダお爺ちゃんが死者エルの大魔法使いダーリツチを倒して、スケルトンウオリアーも残り数体辺りまで減らした辺りで現れた奴らなのよ」

「それって、ラキスケ様の話の方で最後に出ていた……」

「そう、ズーラーノーンの十二高弟の一角にして死者エルの大魔法使いダーリツチの進化した姿の一つ、將軍ジェネラルの大魔法使いリツチ。名をアップアウトというわ。彼自身も強力だけど、彼が使役しているモンスターが、ラキスケ以外の私たちにとって問題だったのよ」

第五話 ※エロ無し

薄い霧が絶えず出ているカツツエ平野、深く響くような重い声が
インサイジビリティ
《不可視化》を解除して姿を現したアンデッドの軍勢——その先頭から聞こえた。

そこには古ぼけながらも禍々しさを伴ったフード付きのクロークを被った、かつては煌びやかな装飾が施されていたであろう錆びついた鎧を着た骸骨が宙に浮いていた。

右手には暗く吸い込まれそうな宝珠が付けられた杖を持ち、腰には剣を帯剣している。両方の指には人差し指から薬指までそれぞれ一つずつ異なる指輪が合計六個嵌められていた。

『ふん、よもや骨スケリトル・ドラゴンの竜を魔法で打ち倒す輩を見るのは、100年ぶりだな。死者の大魔法使いでは荷が勝ちすぎていたか』

「フールーダお爺ちゃん、あの將軍の大魔法使いはあなたの目ではどう見える？ 目の前にいる圧力は感じるのに、気配を感じなくて違和感がしようがないのよ」

「將軍の大魔法使いというアンデッドは聞いたことがありませんが……、おそらく探知防御をしているのでしょうか。私の目には奴からは何も見えないのです」

『我らが盟主たるズーラーノーンや、魔神どもを滅ぼした奴らの中にいたプレイヤーなる存在によれば探知防御は必須だそうぞ。尤も、分かっていても実現できるものは多くはいないがな』

將軍の大魔法使いの言葉に、ビアンゴは警戒を強める。

言い方からするとあの將軍の大魔法使いはプレイヤーではないが、プレイヤーを知る存在。

モンスターとしての將軍の大魔法使いの基本レベルは40。この世界の英雄がレベル30に到達するかどうかであることを考えると自然発生はまずありえず、邪悪な秘密結社であるズーラーノーンが関与している可能性が濃厚だ。

饒舌な部分があるようだから、ラキスケが来るまでの時間を稼ぎながらなんとか情報を引き出したい。

「それにしても、随分な規模のアンデッドの群れたちじゃない。こんなに集めて何が目的なのかしら？　ただピクニックがしたいなんて理由では『さらなる高みへと至るためだ』……なんですって？」

『ここより北にある人間たちの都をわが軍勢でもって死都とし、それにより生まれる負の力でもって我が身をさらなる高みへと至らせるのだ』

「ここより北の都……、帝都を滅ぼそうというのか！」

『そのために、我は100年の月日を待った。人間の都が成長し、収穫するにふさわしい都となる時をな』

目的を直球に語ってくるのは少々予想外だった。それに、言っていることが本当ならば、あの將軍の大魔法使いは少なくとも、生まれてから100年の月日を過ごしていることになる。本来の將軍の大魔法使いよりも強力な存在である可能性は十分に高い。

「そんなこと、できると思っているのかしら？　あなたの配下の死者の大魔法使いも、骨の竜も倒したわ。あとはあなたを倒せばそれで終わりよ」

「まだ骨の竜を残していても、この方の魔法ならば滅ぼすことができる。死者の大魔法使いは私でも倒せるしな。お主の目論見はすでに崩れておる」

『あれらに与えていた配下は所詮数合わせ。貴様ら二人を始末し、アンデッドとして支配すれば余裕で元は取れる程度のものだ。見せてやろう、このアップアウトとともに100年の月日を歩んだ我が配下を』

そう言つてアップアウトと名乗った將軍の大魔法使いが骨の指を鳴らすと、《不可視化》が解除されてアップアウトの下に一体の巨大なアンデッドが姿を現す。アップアウトは宙に浮いていたのではなく、そのアンデッドの上に乗っていたのである。

それは骨の竜によく似た、全身を骨で作られた竜であった。しかし、全長が3m程度の骨の竜よりも二回りは大きく、身体を構成する骨も太い。何より、その竜は頭が三つあった。

「これは骨の竜の亜種か？」

『亜種？ 違うな。こやつは三頭首骨竜。お前たちが倒した骨の竜を、力も防御力もスピードも上を行く上位種だ。その力の一端を見せてやろう。やれ』

「っ！ 第三位階以上の魔法で防ぐか避けなさい、急いで！
負の吐息が来るわよ！ 《魔法効果範囲拡大》《火炎障壁》！」

帝国兵たちと三頭首骨竜の間を遮るように広範囲化した炎の壁を展開したビアンゴの言葉と行動に突き動かされるように、ビアンゴについてきた5人のエルフの内二人の魔法詠唱者とフルーダ、遅れて帝国の魔法詠唱者たちが防御魔法を詠唱する。

《中級属性防御》《飛行》《次元の移動》

三頭首骨竜の三つの口から放たれる闇色の負の吐息を各々に唱えた魔法でしのぐ。

「そんな、魔法が発動しな……ぎやああああ!!!」

しかし、その中でとっさに第二位階の防御魔法を使用してしまった魔法詠唱者が、ビアンゴの《火炎障壁》で覆いきれていなかった一部の帝国兵たちと共に負の吐息に吞まれて命を落とす。

「これは！ あのアンデッドはブレスを使えるだけでなく、魔法詠唱者の低位の魔法の行使までも阻害するということのか！」

「ええ、そうよ。具体的には第二位階以下の魔法を使えなくするの。何より厄介なのは……」

『知っているようだな、ならば隠すまでもないか。そう、この三頭首骨竜は第八位階までの魔法の悪影響を受けない』
「なっ！」

フルーダが絶句する。つい先ほどまで魔法への完全耐性を有すると思っていた骨の竜でさえ、自分が使える位階の限界である第六位階までの魔法を防ぐことができるというのに、このアンデッドは自分の先に行く目の前のエルフが使える第七位階どころか、その先に行く神話の領域の第八位階さえも防いでしまうという。

あのエルフの表情が芳しくないことから、この情報は本当だろう。しかも、物理的な直接攻撃手段しかない骨の竜とは違ってブレス攻撃も可能となると、スケルトン系のアンデッドに有効な打撃攻撃も

危険だ。

せめてあのアンデッドだけであれば召喚魔法で呼び出したモンスターを使い、帝国の全兵力を利用して多大な被害は出るが討伐は不可能ではなかっただろう。しかし、あのアップアウトと名乗った魔法詠唱者のアンデッドがいることで、それは余計な屍を築いて相手を利するだけとなる。

撤退は……できない。そのようなことをすれば相手の軍勢はさらに膨れ上がって帝国どころか人間国家の存亡にも発展しかねない大勢力と変貌するだろう。

ちらりと師と仰ごうとしたエルフを見る。彼らは本来無関係の立場だ。自分たちを置いて全力で逃げに徹すればこの場を離脱することはできるだけの実力がある。しかし、彼らにそのような様子はなく、あまつさえ帝国の兵たちを守ろうとしてくれている。

「フルーダお爺ちゃん。ちよつと悪いけど、ここからはラキスケがこっちに来るまで時間稼ぎをするわよ」

「ラキスケ……先ほどまで一緒にいた、もう片方の戦線に出向いた悪魔の事ですな。信じられるのですか？」

フルーダの言葉には二つの意味が込められていた。一つは実際にこちらに来てくれるのかということ。もう一つは、彼一人が加勢したところで、状況が好転するのかということ。

それに対して、ビアンゴは頷く。

「ええ、彼は来てくれるわよ。だって彼、私たちの中で実力もお人よしさもダントツの最強なもの」

「ほう、それは正しいですな。もとよりこの状況での撤退は悪手です。なので、どうやってアップアウトと名乗ったアンデッドと刺し違えるかを考えていたところでした」

マキシマイズマジック トリプレットマジック ドラゴン・ライトニング
《魔法最強化》 《魔法三重化》 《龍 雷》
サイレントマジック デイメンジヨナル・ムーブ
《魔法無詠唱化》 《次元の移動》

アップアウトから放たれる最強化された上で三重に放たれる第五位階の雷撃魔法を、ビアンゴとフルーダは無詠唱化した移動魔法で回避する。

「私は彼の方と共にあのアンデッドを相手する。お前たちが存命の將軍と共に指揮を執り、残るスケルトンたちを相手せよ」

「か、畏まりました！ 師よ、どうかご無事で！」

「そういうわけで、私はフルーダお爺ちゃんと一緒にあれを足止めするから、帝国と協力して凌いで頂戴。それと、ラキスケが来たらこつちに来るように言つてちょうだいね。それが、私たちが生き延びる勝利条件よ」

「分かりました、ビアンゴ様！」

フルーダの言葉に高弟達は師の無事を祈りながら残る軍を再編してアンデッドの群れに対応する。

ビアンゴの方も、彼以外の6人のエルフのまとめ役ともいえるレンジャーのエルフ——カチャトラが他のエルフたちを率いて帝国軍に合流する。

（ふん。このまま急ぎ潰しても問題はないが、奴らが希望としているラキスケとやらが合流してからまとめ潰した方が、希望からの絶望によって負の力もより多く蓄積できるな）

それぞれの思惑の下に、カッツエ平野での戦いが繰り広げられることとなった。

フルーダの召喚した粘体生物系のモンスターが

三頭首骨竜にまわりついて酸で骨を溶かそうとするが、アツプアウトの魔法で焼かれる。

付与魔術師と低レベルながら修行僧の職業レベルを有するビアンゴが炎属性を付与した拳で殴りかかるが、アツプアウトの魔法で強化された三頭首骨竜の防御力を超えることができずに弾かれる。

一方のアツプアウトは一度に5発放たれる《魔法の矢》で二人を徐々に追い詰めながら三頭首骨竜に指示を出して追撃させる。

その気になればより高位階の魔法を使えるのに第一位階の魔法をわざわざ使っているのは、必中効果を持つ《魔法の矢》で生命力や防

御のための魔力をじりじりと削っていくためもあるが、彼らが来るのを待っているラキスケという悪魔との一戦のために魔力を温存しているという理由からだ。

一見するとビアンゴとフルーダをゆっくりと甚振っていて余裕があるように見えるアップアウトだが、弱小ばかりとは言え配下のアンデッドたちが次々と消えていくのを感じ取り、その原因であろうラキスケへの警戒心は高まっている。その見た目から戦士職であろう彼に対する切り札が多大な魔力を消費し続けるため、下手に使ってラキスケとの一戦の時に魔力が足りない事態を避けるためにも他の高位階魔法の乱用は避けなければいけなかった。

そして、その時は訪れた。反対側に展開していたアンデッドを殲滅し終えたラキスケが到着したのだ。

「ごめん。こつち来るまでにいたアンデッドたちも殲滅するのに時間かかって遅れた」

「あの数のアンデッドを本当に殲滅したのか……」

「殲滅って……、確かに言っていたけど律儀よねえ。目途がついたところで残っている帝国兵に任せても良かったんじゃないの？」

「怪我の具合がやばそうなのもそれなりにいたからさ、放置するわけにはいかなかったし。本当にごめん」

「まあ、貴方らしいけど」

遅れたことを謝るラキスケに、フルーダは道中のアンデッドの軍勢を殲滅したその実力に呆然とし、ビアンゴはしようがない男だと呆れる。

そしてアップアウトは一つ一つが自身の装備よりはるかに上を行く、それこそ100年前のプレイヤーたちの装備に匹敵どころか凌駕しかねないラキスケの装備を見て警戒心を一気に引き上げた。

本来は絶望を与えるために用意していた魔法を無詠唱化して先んじて発動する。

『貴様がラキスケとかいうやつか』

「そうだけど、あんたが死者の大魔法使いが最期に言っていたアップアウトとかいうやつか？」

『如何にも』

「じゃあ、さよならだ」

そう言つて、ラキスケは傍から見たら瞬間移動したような速度で接近し、モーニングスターで三頭首骨竜に殴りかかる。そのまま三頭首骨竜の頭蓋の一つを破壊する……かと思われた一撃は、何の抵抗もなく三頭首骨竜の頭部をすり抜ける。

『《霧化》の魔法か』

『ほう、戦士でありながら第五位階のこの魔法を知っているか。ならばその効果も分かっているだろう』

「対象を霧の肉体に変えて、非実体の星幽界体になることで物理的な攻撃を一方的に無力化する魔法だったな。本来は上位吸血鬼が有するミストフォームのほぼ劣化版で、代償として魔法防御力が皆無になるが……」

『そう！ 三頭首骨竜の魔法耐性と掛け合わせることで、第九位階以上の星幽界体に有効な魔法以外の一切を無力化する究極の防御ともいえる存在となるのだ。消費し続ける魔力の問題でこの状態ではほかの魔法は使用できないが、これを突破できるのは、プレイヤーと言えども、魔法詠唱者しかおるまい！』

「なんだと！ それでは倒しようがないではないか！」

可能性に賭けた時間稼ぎは、相手があらかじめ持っていた対抗策によつて潰されたフルーダは思わず膝をつき、叫ぶ。その様子に周囲の帝国軍にも動揺が広がる。

「安心なさい、フルーダお爺ちゃん。何の問題もないわ」

「どこに安心できる場所があるのだ！ 確かにこの短時間でアンデッドの軍勢を殲滅した力量は信頼できましよう。しかし、それはあくまで戦士としての力量。神話の魔法が必要な怪物相手にはその力は意味を成さない！ 王国に存在する五大秘宝の一つである武器ならばともかく、先ほどの様子ではそうではないでしょう」

「だからこそよ」

「なんですと？」「なんだと？』

ビアンゴの余裕の笑みに、フルーダとアップアウトは揃って疑問

の言葉をこぼす。続いて、ラキスケがアップアウトに向けて話しかける。

「あんた自身が言っていたよな。『これを突破できるのは、プレイヤーと言えども、魔法詠唱者しかおるまい!』って」

『まさか……、しかし、ではあの身体能力に説明がつかん! これほどの動きができる戦士でありながらこの防御を超える魔法を使えるなど!』

「悪魔やアンデッドじゃなかったら、手間がかかっていたから、その点では助かったよ」

『アンデッドや悪魔じゃなかったら? まさか!』

「そういえば言っただけじゃなかったね。俺がここに来るまでにいた帝国軍の生きていた負傷者は、俺が全員魔法で治療したよ」

『貴様、神官戦士かあ!』

「正解だ。そして改めて言おう。さよならだ」

《魔法抵抗難度強化》《魔法最強化》《魔法効果範囲拡大化》《浄化》の
・ピュアファイケーション
炎陣》

ラキスケの魔法詠唱と共に大地に炎が現れ陣を描き出す。

アップアウトは目の前にいるラキスケには目もくれずに、

トライヘッド・スケリトル・ドラゴン
三頭首骨 竜に撤退の指示を出す。アンデッドとしてではなく、

生前の魔法將軍としての直観が特大の警笛を鳴らしているのだ。

アレは不味い。あれが完成する前に効果範囲の外に逃げなければ、

トライヘッド・スケリトル・ドラゴン
三頭首骨 竜の耐性も関係なく滅ぼされる。

アップアウトは即座にそう判断するが、トライヘッド・スケリトル・ドラゴン
三頭首骨 竜が飛び出

そうとしたところで、ラキスケが取り出した魔力のこもった鎖が霧化している三頭首骨 竜に絡みつき、その動き束縛する。

「こいつは俺の友達が昔作ってくれた、非実体化している存在を捕まえることに特化した特殊な鎖だね。普段は使わないんだけど、こういう時には逃がさないのに便利なんだ」

『ぎ、貴様あー!』

「それじゃあ、しっかりと味わってくれよ。対アンデッド・悪魔用の第十階魔法を」

炎の陣が完成し、範囲内の大地が輝きだす。絶えずアンデッドの反応を示す薄い霧が張られ濁っていた空気はその輝きに触れて浄化され、清浄な空気へと変わっていく。

それに呼応するように、残っていたアンデッドたちが次々と消滅していく。しかし、その消滅は怨念を晴らせなかった無念を抱えたものではなく、そういった負の感情から解放され救済されているかのような気がした。

『ああ……っ、われ……は……』

トライヘッド・スケリトル・ドラゴン

三頭首骨 竜も消滅し、若干の退散耐性を有するアップアウトも消滅が迫っていた。

ボロボロと肉体は崩れ、眼孔に宿していた赤い輝きは光を失う。末期に何を思い出したのだろうか、先ほどまでの焦りを含んだ声ではなく、穏やかな言葉を最後にアップアウトは消滅した。

「つとという感じで、ズーラーノーンの十二高弟の一人が抱いていた野望を打ち砕いたのが、フルーダとの出会いの顛末だった。こうやって思い出しながら話して気づいたけど、彼はどういう理由で自身をさらなる高みに至らせようとしていたんだらうな？」

「そうねえ……。確かにそれは気になるところよね」

「話を聞いた限りでは、最後は穏やかに逝けたみたいですけど……。ひよつとして、何か悲しい理由や使命が初めはあったのかもしれないですね」

ラキスケの昔話を聞いて、ツアレはそのアンデッドが何を思って最期を迎えたのかを考える。

「まあ、そういうのを考えるのは吟遊詩人の仕事だな。とにかく、この一件で俺たちはフルーダとコネクションができて、無事この帝国に亡命することができたんだ。まあ、魔法省でツアレには話したけど、アンデッドたちを浄化した後にフルーダが涙を流しながら俺に跪いてきたのはドン引きしたよ。あの時はアップアウトにだけ聞こえ

るように言ったつもりの言葉が聞こえたのかって思ったけど、ピアンゴがばらしたんだってね」

「だってしょうがないじゃないの。狼狽しきっていたフルーダお爺ちゃんを静かにさせるには、貴方が何をしているのかを説明するのが手っ取り早かつたんだもの」

「ああ、なるほど。あの状況だったらそりやしようがないか。だけど感覚的に魔法が使えるだけで、どういう成り立ちで使えるのかとかの論理的な説明が全くできないから、フルーダに教えるのにかなり苦労したんだよ」

「そこでちゃんと教えようとする辺り、真面目よねえ」

「まあ、フルーダが信仰系魔法をあまり使えなかったことと、暗黒神官職は修めていなかったからどうかできたのが大きいかな？」

ラキスケがフルーダに対して最初に確認した事は、フルーダがどのような職業を修得しているかであった。

フルーダの場合、魔力系・信仰系・精神系の三種類の魔法に関連する魔法詠唱者の職業を修めており、高位階の魔法を修得しようとするには非効率なレベル構成となっていた。

ユグドラシルであればあえて死亡し、デスペナルティによるレベルダウンを利用することでより効率的なレベル構成にすることも容易であったが、大きくレベルを上げる手段が乏しいこの世界ではその方は有用ではないと判断したラキスケは、次善の策として暗黒神官職を修得させることで魔力系魔法詠唱職と信仰系魔法詠唱職を関連付けることにした。

ラキスケが修めている暗黒神官や暗黒枢機卿ダークカーディナルといった暗黒神官職は、修得していると信仰系魔法のレベルだけでなく魔力系魔法のレベルの積み上げにも効果を発揮する。そしてその効力は他の神官職・神官戦士職の職業レベルも一部含まれるため、ラキスケは第10位階までの信仰系魔法だけでなく第6位階までの魔力系魔法の行使も可能となっている。

一見すると強力な職業特性にも思えるが、欠点もある。まず、暗黒神官職のレベルを上げることで習得できる魔力系魔法に強力な魔法

が少ないこと。次に修得した暗黒神官職より上位の職業のレベルは積み上げに反映されない事。そして、信仰系魔法に影響を与える信仰値と魔力系魔法に影響を与える魔力値の伸びが中途半端でどちらかに絞ったほうが良いこと。

これらの欠点に加えてラキスケたちレベル100プレイヤーが狩場とするエネミーに対して使う位階の目安は第8位階からであることもあり、ユグドラシルでは暗黒神官職はロール向きの職業であり実践向きの職業ではないとされていた。

しかし、第三位階で熟練の魔法詠唱者、第五位階で英雄の領域に至り、当時のフルーダが修めている第六位階で伝説の領域になるこの世界では、暗黒神官職のこの特性は大きな強みに変わる。

さらに、ラキスケがユグドラシルで布教用に暗黒神官職を修得するために必要な本型のアイテムを所持したままだったことも、フルーダに魔法を教えるのに大きな助けとなった。

その結果、現在では儀式魔法を含めればフルーダは第八位階までの魔力系位階魔法を行使できるだけでなく、第三位階までの信仰系魔法も行使できるまでに至る。

「今回のお話はこんな感じで終わりだけでも、ツアレの要望には応えられたかい？」

「はい。ありがとうございます、ラキスケ様」

「良かった。話しながらあれ？ これどちらかというとフルーダの話じゃないか？ って途中で思っただったんだよね」

ツアレの返答にホツとするラキスケ。

「けど、私たちとラキスケが出会ってからの昔の話となると結構難しいのよねえ。戦闘は大体すぐ終わっちゃうからお話としての盛り上がり欠けるし、政治的な話はあまり話したくないからNG。そうすると、私たちと出会う以前の頃の話とかの方が良いんじゃないかしら？」

「それもあつたか……。楽しかった思い出もたくさんあるけど、信憑性のない御伽噺にしか聞こえないんだよね」

「そこはあなたの語り部としての能力の見せ所よ。脚色して面白おか

しく話しても良いわけだし、ピロートークにはちょうど良いんじゃないかしら？」

ビアンゴの提案にラキスケは悩みながらも前向きに考える。

自身が所属していたギルドであるアインズ・ウール・ゴウンは、個性豊かなギルドメンバーが多く在籍していたこともあつてこういった雑談に使えるような話題には事欠かない。

この世界で再開できる可能性はゼロではないが限りなく低いと考えている。その間、ギルドや仲間たちのことを全く話してはいけないなんて言うことはないし、話のタネにはちょうどいいだろう。

「まあ、頑張ってみるか。まず初めに、今夜にでも……」

ラキスケはそう結論付けて、ツアレをベッドに誘う算段をつけるのであった。

第六話

ある日の夜、俺は地上船の自室にツアレを誘って睦み合っていた。ベッドの上で唇を重ねて舌を絡めながら身体を愛撫し性感を高めていくのが、二人のお気に入り始め方だ。

その時の気分によって全身を愛撫してスローセックスをすることもあれば、一部だけを集中的に愛撫したりすることもある。

今夜は胸を集中的に愛撫しよう。そう考えながらツアレの豊かな胸を両手で揉みしだき始める。

彼女と絡めたままの舌の上でお互いの唾液を混ぜ合わせ、服越しに柔らかい乳房に指を沈み込ませるよう捏ねていると、ツアレはくぐもった喘ぎ声をあげ始めた。

彼女の乳房を愛撫し続けながら乳首を指先の感覚で探し当てて摘まんでやると、ツアレはビクンと体を震わせて彼女の服の乳首の辺りが湿りだす。

俺はツアレと舌を絡めていた唇を放し、彼女の胸の先端の湿っているところに顔を近づけて嗅いでみると、微かに甘いミルクの香りを感じる。

「ツアレ、もう気持ち良くなっているんだね。おっぱいから母乳が出てきているよ」

「はい……。ラキスケ様に触れられると、それだけで嬉しくて、気持ち良くて。……んっ」

他の男にツアレの身体をみだらに触れさせるつもりは毛頭ないが、俺が愛撫しているからツアレが気持ち良くなっていると言われると嬉しいものがあるな。

ツアレの服を捲り上げて肌を露わにし、彼女の胸に直接触れる。乳首を指先で転がしながら全体を揉み込んでいくと、乳首から乳白色の液体——母乳が滲み出てきた。

俺はそれを舐め取るように舌をツアレの胸に這わせ、唇で乳房を覆うように啜えて吸い始めた。

「あうっ……。あん、……。んんっ」

ほんのり甘い母乳を味わいながら、もう一方の胸も乳首を摘まみ揉みしだいていく。滲み出た母乳が手を濡らして滑りを良くしていく。

胸を吸うために空いてしまった手はツアレの股間へと伸ばし、服の内側に潜り込んでいる。クリトリスを探し当て、すでに濡れている膣口の入り口を指先でなぞりながらクリトリスを愛撫してやると、ツアレはビクンと震わせながら甘い喘ぎ声を伴った声をあげ始める。

最近はずアレの母乳を吸っていると、俺の愚息も一段と元気になってくる。このままツアレの膣に挿入して存分に射精したいという思いはあるが、片方の胸だけ吸っているのもバランスが悪い。吸っている方の乳首から唇を放し、腕をツアレの背中側を迂回するようにして吸う胸と揉みしだく胸を入れ替える。

ツアレの股間を愛撫している手も、中指と薬指を膣内へ侵入させて内部で蠢かせながら親指と人差し指でクリトリスを摘まむ深い快楽を刺激するものへと変えていく。

「あああつーラキスケ様あ……。おっぱい、ちゅーちゅー吸われて……。ひいうつ！オマンコもぐちゅぐちゅされると、頭の中が……。ああん！真っ白になっちゃいますう！」

スイツチが入って乱れてきたツアレも絶頂が近いようだし、本番前に一度絶頂させてあげることしよう。

そう考えて吸っている乳首を甘噛みし、揉みしだいている乳首を摘まんで引っぱり、膣壁を傷つけないよう軽く引っかく様に埋没させた指を曲げる動きを同時に行うと、ツアレは俺の頭をかき抱いて身体を弓なりに反らしながら繰り返しビクツビクツと震わせた。

ツアレが絶頂して脱力するのを確認した俺は彼女を横にすると、愛撫していた顔と両手を放して愛液と母乳に濡れたそれぞれの指を自分の口に含んで舐め取っていく。

指についたツアレの体液を綺麗に舐め取った後は、まだ絶頂から抜けきっていない彼女の唇を奪い、舌を絡める。

「じゅぷ、じゅる……。ぷはあ。ラキスケ様、ツアレの膣内にラキスケ様のを下さい……」

「分かったよ」

ツアレに何が欲しいかは聞かない。言わなくてもわかるし、俺の愚息も先走りの汗が出て痛いぐらいに主張していてこれ以上は我慢できそうにもないからだ。

俺はツアレを四つん這いにして彼女の着ている服をパンツごと脱がすと、いきり立つ愚息をズボンから取り出して彼女のぐしょぐしょに濡れた膣口にあてがって一息に突き入れた。

「んあああっ！ラキスケ様のおちんちん、大きくて……奥まで来ています！」

ツアレの膣内がもたらす愚息への締め付けと快楽に酔いしれながら俺は彼女に覆いかぶさる形で密着し、先ほどまで執拗に揉みしだき吸っていた胸を再び両手で揉みしだき始める。

先ほどまでとは体勢が違うからか、ツアレの胸はより重量感を感じるようになって元々良かった揉み心地もさらに良くなっている気がしてきた。

胸を揉んで乳首を摘まむ度にツアレは甘い喘ぎ声をあげて母乳を乳首から溢れさせ、膣内に埋まった愚息をお返しと言わんばかりに締め快感を与えてくれる。

「ツアレのおっぱいは触っていて気持ち良いよ。いつまでもこうしていたくなる。おまんこも締まって気持ち良い」

「ラキスケ様あつ……もつと、強く揉んでえ。おっぱいビュービュー出すの気持ち良いんです……ああんっ！」

俺はそれに応えるためにツアレの胸に沈み込ませるように愛撫する指に込める力を強くし、摘まんでいた乳首をクニクニと弄るように指先でころがす。

搾るように揉まれている乳房の先端にある乳首から溢れる母乳の量が目に見えて増え、シートに零れて染みを作り始めている。

そのうえで、ツアレの膣奥まで埋めた愚息をぐりぐりと上下左右に動かしてポルチオ性感帯を刺激し、彼女にさらに快楽を与えながら絶頂まで導こうとする。

「あつ、ああー！ラキスケ様あ……もういつちやいますう！」

「ツアレ、俺もそろそろ射精するからいつでもイッていいよ」

そう言つて俺はツアレの胸から右手を放してそのまま指伝いにお腹を辿つてクリトリスを指先で押しつぶすと、ツアレは身体を再びビクビクツツと痙攣させて二度目の絶頂を果たした。

ツアレの二度目の絶頂に合わせて愚息を包む肉壁の締めりが一段と強くなり、俺は欲望の白濁液を子宮口に浴びせるように注ぎ始める。

「ひゃあああああつ！ラキスケ様のお……熱いザーメンが、奥にい……」

俺は射精が終わるまでの間、ツアレと深く繋がったまま彼女の長い金髪に顔を埋めてその香りを嗅いで安らぐことにする。

膣内に収まりきらなかった精液が膣口から零れながらも続いた長い射精が終わると、俺はツアレの尻に手をやって膣内から愚息をゆつくりと引き抜いていく。

「あんっ」

膣壁を愚息の力り裏が擦る感覚に喘ぐツアレの目は淫蕩に蕩け、半開きになった唇からは唾液が零れていた。膣内から愚息を逃がしたくないと蠢く膣壁の動きは、艶やかな声もあつて劣情を煽ってくる。

ツアレのお尻をムニムニと揉みながら愚息を引き抜いた膣口からは愛液と混ざった精液が零れ、彼女の太股を穢しながら垂れていく様子に俺は生唾を飲む。

そのまま愚息を再び挿入しようとしたところでツアレから待ったがかかった。

「ラキスケ様、少しお待ちください。ラキスケ様から寵愛を受け取つてばかりですので、私からもご奉仕させてくれませんか？」

「それじゃあ、お願いしようかな」

俺がツアレの要望を快諾して愚息を引くと、彼女は四つん這いのまま身体をこちらに向き直つて顔を俺の愚息へと近づけて、竿の部分を右手で握つて前後に動かしながら陰囊を左手で優しく揉むように愛撫し、亀頭に舌を這わせ始めた。

「ツアレっ……気持ち良いよ」

「ちゆるっ……れろっ、ラキスケ様の逞しいおちんちんがビクンって

「して、可愛いです……。もつとしますね」

一度射精している愚息だが、萎えずに勃起したままだったこともあって亀頭を舌で舐められる度にビクンと何度も跳ねる。

愚息の反応を見たツアレが手コキを続けたまま亀頭への舌での愛撫を繰り返していると、亀頭の先端から先走り汗が滲み出してくる。

それに気が付いたツアレは亀頭全体を口の中に啜え、舌先で亀頭の先端の割れ目を刺激して先走り汗の分泌を促しながらそれを吸い始めた。

「ちゆる……ラキスケ様えつひな御汁おひる、じゆるじゆる……
じゅぶ、ひよつとひよつひやくへおいひいでふ」

温かくてヌルヌルしたツアレの口内の感触に加えて亀頭を啜えたまま喋るツアレの吐息が、敏感になっっている亀頭に心地よい刺激を与えてくれる。

早く射精してツアレにザーメンを飲ませてしまいたい欲求がある一方で、奉仕のために懸命に俺の愚息にしゃぶりついて頭を上下に振り動かしているこの淫らな光景をもつと眺めていたい欲求も湧いてくる。

そう考えている俺を余所にツアレは愚息から際限なく溢れてくる先走り汗を舐め取り、もつと欲しいと言わんばかりに吸い出そうと卑猥な音を立てながら口淫をより激しくしていく。

「うっ……ツアレっ」

愚息へと絶え間なく与えられる快樂に俺の劣情は膨れ上がり、抑えていた声が漏れてしまった。

「じゆるつ……ラキスケ様えつひな御汁おひる、じゅぶ、んちゅ……
我慢あまんひなくていいんでふよ。
沢山あまんひなくていいんでふよ。
飲ませたくはんざーめん飲ませのませてください

俺の声を聞いたツアレは亀頭を啜えたまま射精を促すように言うと、竿の所まで啜えこんで先ほどまでよりも激しく頭を上下に振り始めた。

ツアレが頭を上下に動かす度に彼女の長い金の髪が舞い乱れ、喉奥に亀頭の先端が当たって俺に快樂と強い刺激をもたらす。

「んぐっ、じゆる……ううっ、ゴクツ、じゆぶ……んくうっ」

さすがに喉奥に亀頭がぶつかるとは苦しいのかツアレは時折苦しうに眉をしかめるが、それでも行為を止めずに何度も口内へ愚息を深く啜えこむ。

快楽に任せてツアレの頭を掴んで腰を振り喉奥で射精するべきか、無理しなくていいと言って喉奥で啜えこむのを止めさせるべきか……。どちらもツアレの奉仕を終わらせてしまうものであり、俺は両手を宙に彷徨わせて決断することができないまま愚息に与えられる快楽を受け入れていたが、あつというまに情欲の限界を迎えてそれどころではなくなってしまうた。

「ツアレっ……射精するよっ」

「んんうっーんぐっ……んぐっ、ズズッ……んぐっ、んぐ……」

愚息の先端からツアレの口内に向けて欲望の白濁液が勢いよく流れ込む。

ドクツドクツと繰り返して送られてくるそれをツアレは喉を鳴らしながら飲み下していく。

数十秒ほどの間、ツアレの口内に大量の白濁液を吐き出し続け、彼女が飲むのが追い付かずに口内から溢れそうになったところで愚息からの射精は落ち着いた。

「んんっ……ゴクツゴクツ、じゆるるうっ……」

ツアレは口内に溜まった白濁液を飲み下すと、亀頭にしゃぶりついて尿道に残っていた分も吸い出していく。

そして、吐き出された全ての精液を飲み切るとツアレはようやく愚息から口を放した。

「ぶはあ……、ラキスケ様の精液ごちそうさまでした。沢山出してくれて嬉しいです。ラキスケ様のおちんちんはまだ元気ですけれども、次はいかがなさいますか？」

赤い舌で唇を舐め、お腹を擦りながら話すツアレは蕩けた表情を浮かべていた。

俺と出会う以前のツアレは地獄のような日々を送ってきた。その反動なのか、俺とのセックスで貪欲に快楽を求めるときがある。

「それじゃあ、跨ってくれるかい？」

「はい」

俺は膝立ちだった姿勢から胡坐をかく姿勢に変えると、ツアレを跨らせて対面座位の体位で愚息を膣内に挿入した。

一度膣内射精したツアレの膣内は滑りが良く温かく心地いい。

互いに背中に手を回して抱きしめ合うと愚息が少し膣奥へ進んでツアレを刺激し、愚息を包み込んでいる膣壁が締まる。

「あっ……、気持ちいい」

「ツアレは欲しがり屋さんだね」

「その……ラキスケ様にだけです」

本当に、ツアレは嬉しいことを言ってくれる。顔を赤らめているツアレの表情に、俺の落ち着かせた心が再び興奮していくのがわかる。

ここで本能に負けてしまうとツアレが失神するまで犯してしまうから、気を付けて愚息の注挿を開始する。

俺が腰を動かす度にツアレの秘部からぐちゅぐちゅと精液と愛液が混ざった水音が鳴り響き、豊満な胸は俺の胸板で形を歪ませながら乳首から母乳を滲ませる。

愚息が引き抜かれる度に膣内から掻きだされた精液が零れてベッドのシーツに染みを作り、押し込んで膣奥を小突く度にツアレの膣内は蠢いて愚息から精液を強請るように締め付けてくる。

「あっ、ああん……んうう、ひゃん！」

今回のストロークは激しいものではないが、動きに合わせてツアレの喘ぎ声にも艶が含まれていく。俺はその声をもっと聴きたくて、ツアレの背中に回していた手で彼女のお尻を揉みしだき始めた。

ツアレのお尻は胸とはまた違う魅力が詰まっている。触った時の柔らかさは胸に軍配が上がるがその分張りがあり、どちらも違う楽しみ方ができるので甲乙つけがたいものだ。

「んっ！ああっあんっ……んうっ！」

「ツアレの膣内、ヌルヌルなのにきゅうきゅう締めてきて気持ち良いよ」

ツアレのお尻を両手で捏ね繰り回しながら愚息でゆっくりと膣奥

を繰り返して小突くと、その度に彼女は感じて喘ぎ膣壁はキュッキュと愚息を締めてくる。

激しい性行為で短時間に何度も射精するのも気持ち良いが、こうやってゆったりとした性行為も心地よいものだ。

精神的な充実感にしても前者はある種の征服欲が、後者はツアレと一緒に快楽を積み立てていく感覚が満たされるので、どっちの方が良いとか優れているとかは言えない。

こうやって20〜30分ほどだろうか。ツアレの膣内をゆったりと味わい続けていたが、彼女の膣内は痙攣しそうなくらいに震え始め、愚息の方も射精感がじんわりと強くなってきた。

「ツアレ、もうそろそろ膣内射精するから受け止めてくれないかい？」
「あふう……。はい、私の膣内に……。ひいう、ラキスケ様のザーメンを下さい」

ツアレからの答えを受け取った俺は彼女を放さないように両腕で抱きしめて口づけすると、舌を絡ませながら膣奥のポルチオ性感帯を刺激する様に愚息で繰り返し擦る。

ツアレも両足を俺の腰に絡めて密着し、腰をくねらせて愚息を刺激する。

「ふあ……。んんんっ！」

ツアレが体を弓なりに絶頂し、膣壁が愚息から精液を強請るように蠢き締め付けるのに合わせて白濁液を子宮めがけて浴びせるように解き放ち、膣内を満たしていく。

三度目の射精だがその量の濃さも衰える様子はなく、その熱さと勢いにツアレは絶頂の余韻を味わいながら体を震わせていた。

長い膣内射精が終わった後も俺はツアレと繋がったまま彼女の唇と舌を味わい、両手で彼女の敏感になっっている全身をまさぐる。

「んふう……。じゅぶ、レロレロ。んん！ちゅば……。ラキスケ様のおちんちん……。あん、こんなに一杯射精しているのに大きいままで、元気にびくびくしています」

「ツアレのおマン」も、もっと欲しいって強請りながらきゅきゅ縮めて気持ち良いよ」

「ふふ……わかっちゃいましたか。ラキスケ様とエッチなことをもつとしたいです。大丈夫ですよね？」

「ああ、勿論だよ。俺もツアレともつと繋がっていたい。今夜は寝かせないよ、ツアレ」

そう言つて俺は再び腰を動かし始めた。

それから対面座位でもう一度膣内射精した俺は、ツアレに口内射精するまで口淫してもらつてはお返しに母乳を吸い、体位を変えて彼女を抱いたら再び口淫してもらうのを繰り返して朝になるまでセックスに勤しんでいた。

以前ならば疲労と快楽の蓄積によつて途中で失神していたツアレだったが、今回はそういう様子もなく俺とのセックスを楽しんでいた。

この間フルーダにツアレを見てもらった時に判明した、神聖娼婦の職業スキルか何かの影響だろうか？

背面座位の体勢で後ろからツアレの巨乳を揉みしだいて母乳を搾りながら膣内射精し、満足したところでふとそう思った。

「はう……ラキスケ様のおちんちん。いつも思いますけど元気なままですよ。特に最近エッチするほど元気になっている気がします」

「うん。少し前からツアレのおっぱいを吸うと元気になってくるんだよね」

「ものの例えではなかったのですか？」

「うん。最初はツアレのおっぱいを飲んで興奮しているだけかと思って思っていたけど、今はツアレのおっぱいに何か変化が起きていると思う。多分、フルーダにツアレの職業を見てもらつた時に分かつた神聖娼婦の職業が関係しているんじゃないかな？」

俺はツアレのおっぱいから片手を放し、手についた母乳を舐め取る。すると、それに合わせて愚息が脈打つてツアレの膣壁を刺激した。

「あん……またビクンって。まだ続けますか、ラキスケ様？」

「んー。俺は満足しているけど、ツアレはどうだい？」

「私も満足していますので大丈夫です。それに、これ以上続けたら朝ごはんの時間になっても続けそうですし」

確かに、朝食の時間になってもセックスし続けていたらビアンゴに説教されるな。

この地上船では食事は基本的にビアンゴが調理していて、ツアレは昼食や夕食に手伝うくらいである。

俺？現実世界^{アル}の頃から料理経験は皆無だった上に、以前肉を焼くのに挑戦した時には途中で意識が飛んで気が付いたら炭が出来上がっていた。

はつきり言えば、料理関連では役立たずと言っている。

「それじゃあ今回はここまでにしようか。そういえば、今回は何度も俺のザーメンを飲んだけれどもお腹とかは大丈夫かい？」

「実を言うと、朝ご飯はあまり入らなそうです。それに、顎も疲れているのでスープの類だけにさせて貰おうかなって」

「あー……ごめんな」

「いえ、私がしたくてしたことですから謝らないでください」

これは二人ともビアンゴの説教確定だが、確定してしまった未来のことは一旦置いておこう。

俺は頭を切り替えてツアレの膣内から愚息を引き抜き、膣内に溜まった精液を指で掻き出しながらお掃除フェラをしてもらう。この際にツアレは一度潮を吹き、俺は口内射精した。

それから朝まで続いた情事によるお互いの身体と部屋の汚れを《清潔^{クリーン}》の魔法が込められたマジックアイテムで綺麗にした。

このマジックアイテム、俺が持っているアイテムの中では断トツで使用頻度が高いのではないだろうか。

これが無かったら情事の後始末も大変だったし、匂いとかも大変なことになって船内でのセックス禁止令が出ていたかもしれない。

ユグドラシルだったらばあまり重要ではなかったこのアイテムのありがたさに感謝しながら、俺たちはあらかじめ用意しておいた今日

の服を着始めるのだった。

第七話

リ・エステイザー王国を根城とする裏組織、八本指にはある取り決めがある。

それは定期的に各部門のトップが王都に集結し会議を開くことだ。一つの組織として協力関係こそあるが、元々は複数の裏組織から成っている弊害で部門ごとに利権を喰いあうことも多いこの組織に置いては本来ならばメリツトのない行為だ。

しかし、互いに相手の動向を監視するための取り決めとしてこの会議に出席しないものは裏切りの可能性があるとして肅清の対象とされる。

そのため、滅多なことでは王都に來ない部門の代表でもこの会議のために参加上限である自身を除いた二名の護衛を連れてこの王都にやってくる。

下風月の三日、6:00に開かれた会議では進行役であり、八本指のまとめ役である男の定例会の開始を告げる言葉から始まった。

幾つかの議題について予定調和ともいえる取り決めが決まったところで、それまで目を閉じて話を聞いていた顔の半分に獣の入れ墨を彫りこんだ鍛えこまれた肉体を持つ禿げた男——警備部門の長であり最強戦力である六腕の一人でもあるゼロの低く、すさまじい力を押し込めた声が響く。

「俺の方から、今回あげたい議題がある。2年前に八本指にたてついた愚か者の所在が判明した」

「ああ、2年前にうちの麻薬の集積・加工拠点の一つが焼け野原にされちまった奴だね。本当に、痛い出費だったよ。あの一件でバレた可能性がある生産拠点は引き払わなくなっちゃらなくなったし、麻薬の流通量もかなり絞られる羽目になったからね」

ゼロの言葉に反応したのは肌の色から着ている衣装まで白い女だった。女の名はヒルマ——麻薬部門のトップであり、紫の毒々しい煙を上げるキセルを持つ手から肩口まで、昇る蛇の入れ墨をしている。

麻薬部門は斜陽傾向の奴隷部門と比べればずっとましではあるが、それでも二年前の案件を引きずって以前程の流通量を未だに確保できていない。

王都内に隠匿されていた麻薬の集積・加工施設の全焼事案。麻薬の原料となる植物が燃え上がることよって発生した有毒な煙は王都の一角に多数の死者・中毒者を生み出し、それまで中毒性こそ高いが副作用はないと喧伝されていた黒粉の危険性を王国に知らしめることとなった。

「そして、忌々しいが当時六腕の一人だったパウークが死んだ案件でもある」

ヒルマと同じようにゼロにとってもこの案件には苦い記憶がある。

当時の六腕のナンバー2であり、様々な裏仕事に精通していたパウークの喪失は八本指の警備部門への信頼性を損なうものでもあったからだ。

今では欠員を埋めてこそいるが、六腕に新たに選ばれたサキユロントはあの男ほど優秀とは言えない。

「それでゼロ、その愚か者とはいったい誰なのだ？」

「それに関しては、私が答えるわん」

ゼロへの問いかけに対して口を開いたのは、ゼロとは対照的になよつとした線の細い男——奴隷部門のトップであるコツコドールだった。

「その男の名前はラキスケ。帝国でワーカーを生業としている亜人よん」

「ゼロとコツコドール、そして私の部門で集めた情報をまとめたことで明らかになった、確かな情報さね」

その場にいた各部門のトップたちがざわつく。

他部門の足の引つ張り合いが当たり前の八本指において、複数の部門が協力することはそれだけ珍しい事であったからだ。

「それでどうするのだ？ 昔の案件を掘り出して犯人が分かりましたで終わりというわけがなからう？」

「当たり前だ。奴は見せしめに殺す。八本指にたてついた奴に安寧の

場所はないことを教えてやる」

抑えきれない殺意がゼロの言葉から漏れ出ているのを感じ、他部門のトップや護衛達は息を飲む。

「それは分かったが、その者が帝国にいるとなると問題があるぞ。かつての六腕を葬ったと思しきものを殺すとなると、同じ六腕級のものが複数は必要だろう。しかし、それだけの大戦力を帝国に送り込んだら王国の蒼や朱に気づかれてその隙に攻勢をかけられる恐れがある」

「それに、王国と違ってあの鮮血帝だ。自分の支配下で他国の組織がそのようなことをして何もり返してこないわけがない」

他部門のトップの懸念ももつともである。

八本指は王国を牛耳る裏組織を言えるが脅威となる敵がいないわけではない。その筆頭が話に出てきた青と朱——アダマンタイト級冒険者チームである「蒼の薔薇」と「朱の雫」である。

それに王国とは戦争状態にあり鮮血帝によって無能な貴族が尽く排除されている帝国は、八本指もその影響力を發揮しにくく揉み消すことも困難だ。

「その点は安心しろ。奴は王国領におびき寄せて始末する」

「その亜人、どうやらある人間の女に相当入れ込んでいるみたいなんだけど、その女が実はさつき話に出てきた二年前の案件の時に死んだと思われていた娼館の女だったのよん。その女の名前はツアレニーニヤ・ベイロン」

コツコドールの話を聞いた他部門のトップは、何故奴隷部門が警備部門と麻薬部門に協力したのかに納得がいった。

特にパウークの嗜好を知る者は、その女が本来ならば二年前の事案に関わらず生きているはずがない事にも気が付き、ラキスケという亜人が関わっていることにも思い当たる。

「ふん、異常性癖者か。だがその女も帝国領にいるのだろう、まさかその女を誘拐するつもりなのか？」

「それこそまさか。でもその女を調べてみたら、ウチの娼館に売り払われる前に貴族の妾として村から連れていかれる際に、生き別れた妹がいるのよね」

「探し出して見つければ攫って人質に、そうじゃなくても適当な話をでっち上げて助けを求めさせる寸法って訳さ。女に溺れた男の行動なんて、大体同じようなもんさね」

「そうしておびき寄せた奴を、俺を含む六腕総出で始末するというわけだ」

コッコードル、ヒルマ、ゼロの言葉に他部門のトップたちは本当におびき寄せることができるのかという部分はさておいて一応納得する。

表舞台の最強が近隣諸国で最強の戦士と言われる王国の戦士長ガゼフ・ストロノーフやアダマンタイト級冒険者ならば、裏世界の最強が六腕だ。そんな人物たちが総出で掛かるならばどんな相手であっても一方的な蹂躪は避けられないという安心感があった。

「ならばその人質にする女の捜索にはこちらも協力しよう」

「それならばこちらは……」

暗殺部門のトップが声をかけたのを切欠に、それぞれが協力の声をあげていく。無論それは無償のものではなく、ゼロたちに多少なりとも恩を売ろうという打算によるものだ。

八本指の暗躍がラキスケを絡め捕ろうとしていた。

八本指が暗躍を始めたその日の夜、そのようなことを知らないラキスケは自室でツアレと睦み合っていた。

「んちゅっ……ちゆる、つむちゅう……んんっ」

抱き合って口づけを交わす二人だが、今回はいつものように衣服を脱いで……というわけではない。

ツアレはラキスケが用意した紺色で上下一体型の服——ラキスケは「スク水」と呼んでいる——を着ていた。

伸縮性のある生地できていてスク水がツアレの体にぴったりと食い込み、彼女の豊満な胸や安産型のお尻を際立たせるように身体のラインを浮かび上がらせている。

ラキスケも上半身は裸の下半身に濡れても大丈夫なショートズボンを履いた状態で、ズボンの中ですでにいきり立っている肉棒をスク水越しにツアレの股間に押し当てて擦っている。

スク水によつて締め付けられて弾性が増しているツアレの胸は、ラキスケに抱きしめられることで彼の胸板で潰れて形を変える。

「んぐう、んう……じゆる、んんっ……こくこく」

お互いの唾液を口内で混ぜ合つて飲み込むツアレ。舌を絡めてツアレの口内を味わうラキスケ。

ツアレの目は既にトロンと惚けた様子で、ラキスケに肉棒を擦り付けられている股間を自分からも擦り付けていた。

「ぶはっ……。ツアレ、お尻をこっちに向けてくれないか？」

唇を放してベッドの上で仰向けになつたラキスケの言葉に、ツアレは言われた通りに跨つてラキスケの顔に自身のお尻を向けると、ラキスケのズボンから肉棒を取り出して口で奉仕を開始した。

ラキスケもツアレの股間を覆う湿り気を帯びたスク水をずらすと、隠されていた秘部にキスをしてから両手で膣口を開いて舌での愛撫を開始する

「んじゆる、レロレロ……んちゆう、んんっ！　じゆるじゆる……レロ」

ツアレの膣口から溢れる愛液をラキスケは舌で舐める度に、ツアレは喘ぎながらも肉棒への奉仕は途切れさせない。

ならばとラキスケは両手でツアレのスク水越しにお尻を掴み、舌で膣口を穿る様に押し込んで膣内で舌を蠢かせる。

「んんっ！　ラキスケ……様あ、ああん！　じゅぶ……ひいうん！」
舌先で膣壁をくすぐる様に刺激するたびに、ツアレは喘ぎ声を上げて身体をくねらせる。

ツアレにさらなる快楽を与えようと、ラキスケは彼女の秘部に吸い付いて漏れてくる愛液を啜ると、ツアレは肉棒から唇を放して弓なりに身体をそらして震える。

「あああうっ、んひいい！　あっ、あうう……ああん！」

「じゆるっ、こく……ツアレ、いつでもイって良いからね？」

「ああうああ！ は、はいっ、ひいん！」

ラキスケの言葉にツアレは叫ぶように答える。

愛液を漏らす膣口に埋めているラキスケの顔は、繰り返し吸い出したツアレの愛液でベトベトになっていた。

掴んでいるお尻をムニムニと揉みしだきながらラキスケは舌先で膣壁を舐めまわし、ジュルルと卑猥な音を立てながら愛液を啜る。

「さあツアレ、君の淫らかな声を聞かせておくれ」

「もう……いつちやいますう！ ああっ……んうう、ラキスケ様より先にい……いつちやいますう！ ……ああああっ!!!」

ツアレは叫ぶ様な喘ぎ声を上げながら身体を一層弓なりに反らすと、ビクツビクツと大きく震わせた。

絶頂した数秒の後にツアレはラキスケに被さらないようにくたりとベッドに身体を横たえる。

「はあ……はあ、すみませんラキスケ様。おちんちんへのご奉仕を途中で止めてしまっ」

ツアレは荒い息を吐きながらラキスケに謝罪する。

豊満な双丘は汗と母乳でスク水を濡らしてそのポリユーム感を露わにしながらツアレの呼吸に合わせて大きく上下を繰り返す。

「十分気持ち良かったから大丈夫だよ、ツアレ。それに……」

身体を起こしたラキスケはそう言うと、ツアレの上に覆いかぶさって両腕でツアレの股を開き、いきり立つ肉棒をヒクついている膣口にあてがう。

「今日の一回目はツアレの膣内に射精だしたかったからね。良いかい？」

「んっ……。はいっ、ラキスケ様が望むままに私を抱いて下さい。――あああっ！」

ツアレが頷くのに合わせてラキスケは肉棒を膣内へと埋没させる。

ツアレの膣口はラキスケの亀頭をすんなりと飲み込んで、肉棒を膣内で迎え入れる。

膣壁が蠢くことによる刺激だけでなく、ずらしたスク水の生地が肉棒を擦る事でラキスケに普段とは違う快樂をもたらして肉棒の注挿

を深く激しくする。

「んんっ、ああっ、あああん！　あああああああ！　深くてっ、凄いのぉ！」

肉棒を突き入れる度に亀頭がツアレの膣奥を叩き、コリツとした部分を押し上げる。その度にツアレは甲高い声で喘いで身体を小刻みに震わせる。

ラキスケは一突きごとに揺れるツアレの巨乳を鷲掴みにすると、スク水越しに乳首を探し当てて摘まんでは転がすように指で愛撫する。「ひいああああっ！　あっあっあああん！　お、おっぱいも弄られると、またイっちゃやう。イっちゃいますううう！」

「普段の柔らかいおっぱいも良いけど、今の弾力のあるおっぱいも気持ち良いよ。俺も一緒にツアレの膣内に出すから、イって良いよ」

「はいい！　来て、ラキスケ様の……ザーメンを下さい！　——
イ、いくううっ！　ああああああっ！」

二度目の絶頂を迎えたツアレの膣壁がギュウっと肉棒を締め付ける。

その刺激にラキスケも膣奥に押し込んだ亀頭から白濁液を大量に解き放つ。

ラキスケは射精中もジュポジュポと卑猥な音を立てながら肉棒の注挿を繰り返し、膣内全体を白濁液で染めるように繰り返し精を放つ。

射精が終わっても大きさと硬さを保っている肉棒を膣内に埋めたまま、ラキスケは乳房を揉みしだき乳首を愛撫していた両手を放してスク水の肩紐に手をかけると、肩ひもをツアレの胸下までズリ下げた。

戒めから解放されたようにその双丘がプルンと揺れるのを見てラキスケは生唾を飲む。

「はあああっ……んんっ、ああっ、んふう……はあっ。ラキスケ様あ……んちゅ」

ラキスケはツアレの唇に自身の唇を押し当てながら乳首を摘まんでコリコリと転がすように弄り、挿入したままの肉棒を小刻みに揺す

る。

「あつ……んっ、んちゅっ……はあんっ」

先ほどまでの注挿と比べると激しい快樂はないが、お互いにじわじわと快感が積もっていく。

10分ほど経過した辺りだろうか？ ラキスケが腰の動きを止めて両腕でツアレの腰を掴むと、くるりと互いの位置を入れ替えた。

騎乗位の体位になったツアレと両手を絡ませると、ラキスケはツアレを押し上げるように腰を打ち付け始めた。

「あああああつ！ あんっ、ラキスケ……様あ！ おちんちんがぁ……奥までえ！ おっぱいもビュウって、ビュウって出ちゃいますう！」

抑えるものがない双丘はラキスケが腰を打ち付ける度に弾み、乳首から溢れた母乳が飛沫となつてラキスケの身体や周囲を白く汚す。

結合部ではグチュグチュと肉棒が精液と愛液を掻き混ぜる淫らかな水音と肉同士のおつかる音が鳴り響き、ツアレの甘く甲高い嬌声と合わさつて室内に響く。

「あああああつ！ んううっ、ひいうんっ！ ラキスケ……様あ、ああうんっ、私い……もうっ、んんう！」

ラキスケが肉棒でツアレの膣奥を突きあげる度に、惚けた表情でだらしなく口を半開きにしているツアレの唇の端から唾液が零れる。

ツアレの三度目の絶頂が近いと感じ取ったラキスケは、膣奥で小刻みに注挿を繰り返して絶頂へと導こうとする。

そして――

「ああつ……あああああああつ！」

ツアレは鋭い嬌声をあげて背筋をぐっと反らした。

ツアレの膣内が啞えこんだ肉棒から精液を搾り出そうときつく収縮する中、ラキスケはその膣内のきつい締め付けを味わうように注挿を続ける。

「あああああつ！ イ、イくうううっ！ ごめんなしいい！ 私わらひばかりしやきにイっちゃってええ！」

ツアレは切迫した様子で喘ぎ声を上げて、ラキスケに謝りながら絶

頂する。

「謝らなくても良いよ、ツアレが罪悪感を覚えなくなるくらい何度でもイかせてあげるから。俺も……出る！」

ツアレの身体が痙攣したように繰り返し震え、それから少し遅れてラキスケが膣奥に白濁液を大量に流し込む。

「あああああつ！ んうう、ひやあああああああ！ んくううう……」

射精している途中でも膣壁はお構いなしに蠢いて、肉棒から白濁液をさらに搾り取ろうとし、亀頭から吐き出される白濁液がツアレの膣奥を叩く度に、ツアレは身体をビクつかせてラキスケの射精を受け止めて甘い嬌声をあげる。

何度も吐き出される射精が終わると、ツアレはラキスケに覆いかぶさるように倒れ込んだ。

ラキスケはツアレを受け止めると、繋がったまま体勢を入れ替えてツアレを仰向けにする。

惚けた表情のまま荒い呼吸を繰り返すツアレが落ち着くのを待つまでの間、ラキスケは汗をかいたツアレの身体を動物が毛繕いする様にゆったりとした動きで舐めていく。

ラキスケがツアレの身体を舐める度にツアレは甘い声を上げて身をよじる。

汗だけでなく母乳でも汚れている乳房は丹念に舐められ、乳首を吸われた時にはツアレは嬌声をあげて繋がったままの肉棒を締め上げたりもした。

そしてツアレの顔を舐め終わったところで、今度はツアレがラキスケの身体を舐め始める。

そうやって互いの身体を舐め終わった頃には、ツアレの膣内は啜えこんでいる肉棒から新たに精液を強請って蠢き始め、ラキスケの肉棒もツアレの膣奥に新たな精液を注ごうとする準備が整っていた。

互いに何も言わないまま口づけを交わすと、ラキスケは再び肉棒の注挿を開始するのであった。

翌日の朝というにはまだ太陽が昇っていない早い時間、ラキスケは溜まった母乳によってパンパンに張ったツアレの双丘を搾るように両手で揉みしだき、両方の乳首を口に含んで吸っていた。

あれから何度も様々な体位でツアレの膣内に精を注ぎ、時折口で肉棒に奉仕してもらっては口内射精でザーメンを飲ませたりもした結果、ベッドの上は夥しい量の精液と愛液でぐちゃぐちゃに汚れ、シート類も終わったら取り換えが必要になっている。

「あつあつあつ……ラキスケ様あ。おっぱいチュウチュウ吸ってくれて、気持ち良いですよ」

「ツアレのおっぱい、気持ちいいし美味しいよ。いつまでもこうしてセックスしていたくなる位、ツアレの身体は俺にとって魅力的だ」

ツアレの母乳を吸い終わると、ラキスケはツアレに口づけをして舌を絡める。

「ちゅっ……じゅるっ、んちゅう、むちゅう……ちゅっ、ちゅう……」

しばらく唇を合わせていた二人がやがて名残惜しそうに唇を放すと、ラキスケは《清潔^{クリーン}》の魔法が込められたマジックアイテムをアイテムボックスから取り出してツアレや自分、部屋そのものに使用していく。

「さすがにそろそろ寝ないとな。俺はともかくツアレはきついだろう？」

「すみません。本当はラキスケ様ともっと睦み合いたいのですが」

「大丈夫だよ。凄く気持ち良かった。普段のセックスも良いけど、たまにはこういう趣向を凝らしたセックスも良いよね」

「はい。恥ずかしさはありませんけど、こういうのも新鮮で気持ち良かったです」

ラキスケは綺麗にしきれないぐらいに汚れたシートを外して前もって用意しておいた替えのシートに取り換えながら、スク水を脱いで寝巻用の衣服に着替えたツアレにお礼を言う。

ツアレに着てもらっていたスク水は、現実世界^{リアル}にいた頃にあったコ

スプレセックスの衣装を俺の記憶を基にして帝国の技術開発局と協力して再現したものの一つで、ブルマと同様にカツツエ平野の廃墟——おそらくはあれもネコさま大王国の遺跡の一つ——で手に入れた衣装用の素材が基となっている。

この素材、実は重量軽減の魔法が施されたミスリル糸で編んで作られたツアレのメイド服よりも強靱で軽いのだ。

幸いフルード主導の研究で最近になって少量ながら生産が可能になったという話だが、それでも金貨百枚単位の値が付くような超高額素材となっている。

コスプレセックスに使う衣装の数々に付けられるだろう値段をツアレが聞いたら卒倒するに違いない。そう考えてラキスケはツアレにこれらの衣装の価値を伝えていない。

「さてと、それじゃあ寝ようか。おやすみ、ツアレ」

ベッドのシーツを新品に取り換え、自身も寝巻用の衣服に着替えたラキスケはベッドに入ると、ツアレを招き寄せて布団を掛ける。

「おやすみなさい、ラキスケ様。……すう」

軽く触れるだけの口づけをすると、既に情事で疲れていたのだからツアレはすぐにスヤスヤと眠りにつく。

ラキスケもツアレの寝顔を見ながらゆっくりと眠りにつくのであった。

第八話 ※エロ無し

下風月の中旬頃、ビアンゴは拠点としている地上船に届いた自分あての手紙を読み進めていた。

その手紙にはかつて自分と共にエルフの王国を出奔し生き残った部下にして同郷の森妖精^{エルフ}達、その中で現在もオリハルコン級冒険者として活動しているチーム「森妖」の一人である戦士のアラビータから、闘技場の闘技大会に参加するので観戦しに来ないかという誘いの文と闘技場のチケットが添えられていた。

戦闘好きの彼らしいと苦笑しながらビアンゴは三枚あるチケットを眺める。

(これって、私やラキスケだけじゃなくてツアレちゃんも誘えつてこ
とよねえ)

一人だけ除け者にしないという彼なりの配慮なのだろうが、死者が出ることも珍しくない闘技場の試合を彼女が見て卒倒しないかという心配があつた。

かといって闘技場の演目で最も人気が高い闘技大会のチケットは他の演目と比べて若干高い。それを三枚も用意してくれたのに行かないのも申し訳なく思えた。

「まずは二人に見に行くか聞いてみるところからね」

そう言つて、ビアンゴは《^{メッセージ}伝言》でラキスケに連絡を取る。

「ラキスケ、ちよつといいかしら？」

『ビアンゴかい？　ちよつと待つて……良いよ。何か用事かい？』

「アラビータから闘技場の観戦チケットを三枚貰ったのだけれども、貴方も観戦しに行く？」

『闘技場か……、演目は何だい？』

ラキスケはチケットの演目を尋ねる。闘技場の演目には亜人奴隷を魔獣と戦わせる殺戮ショーのような悪趣味なものも存在し、そういう類の演目は好まないからだ。

「闘技大会だそうよ。アラビータが参加するのですつて」

『闘技大会か……、ほかにどんな選手が出場するかも気になるし、久し

ぶりに観戦しに行こうかな。ちょうどツアレも一緒にいるから一緒に行くか聞いてみるよ。三枚つていう事はツアレにも確認をとるつもりだろう?」

「あら、ツアレちゃんも一緒にいたのね。明るい内のお楽しみは程々にしておくのよ」

『ははっ……残念ながら御想像とは全く違うよ、ツアレに魔法の基礎を教えていたんだ。神聖娼婦の職業はユグドラシルには存在しなかったけれども、現実世界リアルワールドでは宗教に纏わる役目として存在した覚えがあつてね、ひよつとしたらと思つて試しに巻物スクロールで《軽傷治癒》ライト・ヒーリングを使つてもらつたら使用できたんだ』

ラキスケがツアレと一緒にいることを知つたビアンゴが茶化すと、ラキスケは笑いながらツアレに魔法を教えていたことを話す。

「それは良かったじゃない。それで、ツアレちゃんにはどんな魔法を教えるつもりなのかしら?」

『魔法の修得には年単位の時間はかかると思うけど、今のところは信仰系魔法を中心に教えてみようかなつて思つているよ。あとは《兔の耳》ラビッツ・イヤール《兔の足》ラビッツ・フット《兔の尻尾》バニー・テール辺りかな』

「前半はともかく、後半は分かり易い位に欲望に忠実ね……」

兔さん魔法と呼ばれ、三つを同時に唱えると女性の服装が変わる魔法も習得させようとしているラキスケにビアンゴは呆れる。

「まあいいわ、それじゃあ、一時間後に甲板に集合で良いかしら?」

『ああ、それで大丈夫だよ』

「それじゃあ、《伝言》メッセージを切るわよ」

ビアンゴは《伝言》メッセージを解除すると、出発の準備を始める。

ツアレの事だからラキスケが行くならば一緒に行くだろう。ラキスケがこの船に連れてきた2年前と比べて、彼女の人間恐怖症は精神を安定させるマジックアイテムである鳩を模った指輪を常日頃から嵌めていることもあつて大分和らいでいる。

今ではラキスケが随伴すれば他人がいる所にも怯えずに行くことができるのは、船の外に出ることを恐れていた当時からすれば大きな進歩と言えるだろう。

機会があつたらツアレにおしやれをさせるための買い物に三人で出かけて、ラキスケにツアレのファクションを品評させてみるのも面白いかもしれない。

そう考えたところで、ビアンゴは昔のことを思い出して口から言葉が漏れる。

「もう叶わないけれども、あの子ともまたおしやれとか買い物とかしたかったわねえ……」

バハルス帝国でも帝都にしか存在しない独特な建物である闘技場は、公共の娯楽施設の一つであり帝都内でも人気の高い観光スポットでもある。

入るためには入場料が必要になるが、市民の不満解消の意図もあつて絶対に手が出せないほどの額ではない。それもあつて帝都の庶民にとつて最大の娯楽の一つになっている。

プロモーター 興行主たちによつて日々様々な演目が行われており、死者が出ない日は滅多にない。むしろ死者が出るほど盛り上がりを見せ、その中でも最も人気がある演目が今日行われる闘技大会だ。

到着したラキスケ・ビアンゴ・ツアレの三人は受付で闘技大会の観戦チケットを見せるとそのまま階段を昇り、指定された観客席へと向かう。

「みなさ〜ん、こちらですう」

座る観客席の近くからラキスケたちに声を掛けられる。そこにはピンと小さく尖った耳に栗色の髪と透き通った碧色の瞳を持つ少年の姿が手を振っていた。

その周囲にはビアンゴも見知った顔が4人。闘技大会に参加しているアラビータ以外の「森妖」のメンバーだ。

「あら、マリナラじゃない。みんなも元気してた？」

「ええ、ビアンゴさん。元気に商いをさせて貰っておりますよ〜」

マリナラは一見すると幼い少年——マリナラ・ラッドは、100年

前にエルフの王国を出奔した森妖精エルフの一人の女性と今は滅びたアベリオン丘陵の丘小人ヒル・ドワーフの生き残りとのハーフであり、その容姿に反して長い時を生きている。

母親共々商人としての手腕は優れており、彼の商会が取り扱う商品は幅広い。冒険者やワーカーが使用する武具や魔法のアイテムから、日常生活に必要な雑貨品まで様々である。

実際、修理する当てがないためにアイテムボックス内で温存されているユグドラシル時代の装備の代わりとして、ラキスケやビアンゴが普段使っている装備にも彼が仕入れた商品が含まれている。

「ビアンゴ様もお元気で何よりです」

初めにビアンゴに挨拶したのは金髪翠眼のエルフの男だった。

男は オリハルコン級冒険者チーム「森妖」のレンジャー兼リーダーのカチャトラ。

ほっそりとした体つきをしており、指には魔法効果が込められた指輪がはめられている。着ているものは皮鎧だが、履いている靴と合わせて指輪と同様に魔法効果が込められている。

「今回はアラビータが闘技大会に参加するということで、皆様をお招きさせていただきました」

ラキスケたちを招待した経緯を話す、背中に全身を覆うことができ、る大きさの薄緑色の大盾を担いでいる茶髪藍眼の男はアチューガ。

味方を守るガーディアンでありながら着ている装備は鎧チエインシャツ着以外は防御力を念頭に置いたものではない軽装だが、それは彼が担いでいる大盾に理由がある。

彼がエルフの王国を出奔する際に持ち出したこの大盾は強固にして魔法耐性も有し、致命的な破損さえ防げば再生する機能が備わっている。

そして最大の特徴が、使い手が特定のキーワードを唱えることでナツクルガードのついたジャマダハルと小盾を伴った全身鎧フルプレートメイルへと変形する能力だ。

はるか昔にドワーフの王が生み出した逸品とも異世界の加工技術が使われているとも言われるこの大盾の出所は、エルフの王国が興さ

れた時から当時のエルフの王に仕えていたらしいビアンゴでも詳細は知らないという。

「強いて言えば出会いがないから春が来ない」

「『フォーサイト』のイミーナ嬢には彼氏がいるから失恋済みで冬の時代」

二人揃って自身の恋愛状況をネタにする双子の兄弟は、ハイ・ドルイドのジェノーベとフォレスト・メイジのヴァージリッコ。

ともに第四位階までの魔法を行使できる魔法詠唱者で、容姿がエメラルドグリーンマジック・キャスターの髪と金の目で同じ双子を見分けるコツは、羽織っているクロークに縁どられた色と手に持つ杖の種類である。

緑色の線が縁に入ったクロークを羽織って長い杖を持つのがジェノーベ、青色の線が縁に入ったクロークを羽織って短い杖を持つのがヴァージリッコである。

どちらも交際相手ができず寂しいようだ。

「みんな変わった様子がなくて安心したわ、誘ってくれてありがとね。ジェノーベとヴァージリッコは残念だけど、私でも恋人の斡旋・紹介は無理よ」

「恋愛成就是ギガントバジリスクの討伐より難しい」「そもそも出会うことが稀なのもそっくり」

ビアンゴ達の会話の脇では、マリナラがラキスケと商談を行っていた。

「装備の更新や補修の方は大丈夫ですかあ？　もしよろしければ、特別価格で私共が対応いたしますよ」

「装備の方はまだ大丈夫かな。……そうだ、代わりに情報系魔法が込められたスクロールとか、それに類するマジックアイテムをお願いできるかいい？」

「情報系魔法の類は希少価値が高いのでその分お値段は張りますが、よろしいですか？」

「ああ、構わないよ」

「畏まりました。今日の闘技大会が終わり次第、見繕ってきますね」

ラキスケの大雑把な注文に難色を示すことなく了承するマリナラ。噂では帝国魔法省やドワーフの国とも独自のコネクションがあるとも言われているが、実際の所は不明である。

「書面での契約は後程として、今はもうそろそろ始まる闘技大会を楽しむとしましょうか」

「そうだね。アラビータがどこまで行けるのか楽しみだ」

「そうですね。今日の闘技大会の参加者リストはつと……おやおや、昨日まではいなかった飛び入りの参加者がいますねえ」

「飛び入りの参加者？ 誰なんだい」

「えーつと……、闘技場では無敗の剣士と名高い『天武』のエルヤー！ ウズルスですねえ」

エルヤーの名前が出た瞬間、『森妖』のメンバーたちは顔を顰める。

「よりによって彼か……」

「直前になってということとは、アラビータが参加するのを知って自分が上だと知らしめるために狙って参加した可能性もあり得るな」

「俺たちをバカにしたうえで何かとちよっつかいかけてきてウザったい」

「見た目だけ大きくなっても、中身は癩癩持ちの子供」

『森妖』のメンバーからのエルヤー評は散々なものだった。実際、彼らは度々エルヤーから難癖をつけられてはトラブルになっているのだから当然である。

『天武』はワーカーチームでこそあるが実質的にエルヤー個人で成り立っている。というのも、エルヤー以外のメンバーは彼が購入した女性の奴隷のみだからだ。

エルヤーは自身の剣の腕に裏打ちされた傲慢さと、森妖精のような人間以外の人間種や亜人種を侮蔑しつつ森妖精を奴隷として使役しては慰み者にしたりに使い捨てるように扱う嗜虐心を持つ。

森妖精の奴隷の大部分は、エルフの王国で戦争に駆り出された者たちがスレイン法国に捕らえられ、様々な方法で心を砕かれたうえで奴隷に墮とされた者たちである。

帝国の奴隷制度では帝国臣民の場合は人間種でも亜人種でも、奴隷であつても帝国の法律によつて守られる。しかし、他国の人間種や亜人種はその範疇に含まれないため、あくまでエルフの王国の奴隷森妖精^{エルフ}を虐げているエルヤーの行為は帝国の法律に違反するものではないのだ。

それでも、スレイン^{スレイン}法国とエルフの王国との間で戦争が勃発した時に出走した彼らにも、かつての故郷の同族に対する憐憫の情は残っている。

『皆様お待たせしました。ただいまより本日のメインイベント、闘技大会を開催いたします！』

一同の中でエルヤーへの悪口がこれ以上続く前に、マジックアイテムによつて増幅された進行係による闘技大会の開催を告げる声が闘技場に響き渡る。

始まった闘技大会の試合は多くが一進一退の攻防が繰り広げられる組み合わせが多い中、他の試合に比べて突出して短い試合があつた。エルヤーの試合とアラビータの試合だ。

アラビータという男はアチューガと同じ茶髪で藍色の瞳を持つエルフである。

熊の魔獣の毛皮を被せた兜にダークブルーの全身鎧、金属質な鳥の羽根でできたマントを羽織っており、戦士でも両手で扱う前提の大斧を片手で振り回す膂力の持ち主だ。

エルヤーが剣技で対戦相手を一刀のもとに切り伏せたなら、アラビータはその膂力をもつて一撃で対戦相手を吹き飛ばす。

そうして闘技大会は進んでいき、決勝戦で両者はぶつかり合うことになった。

『闘技大会も残すところ決勝戦！ここまで勝ち残った二人の選手の入場です！まずは帝国のオリハルコン級冒険者チーム、“森妖”の“狂腕”アラビータ!!』

闘技場内に響く観客の歓声の中、アラビータは人間大の大きさがあ
る大斧を肩に担いだまま片方の入場口から現れ、堂々とした足取りで
闘技場の中央まで歩を進める。

その道中で不敵な笑顔で観客やチームメンバー、ラキスケたちに手
を振るのも忘れない。

『対するは帝国闘技場で常勝無敗の天才剣士！　ワーカーチーム　天
武』エルヤー・ウズルス！』

反対側の入場口からは、エルヤーがアラビータに負けない自信に満
ちた足取りで向かってくる。

互いに所定の位置についたところで相對するや否や、二人は言い合
いに突入する。

「おやおや、人もどき風情が決勝まで上がってくるなど、どうやらそち
らの対戦相手はよほど弱かったのでしょうねえ」

「はっ、そういうてめえは独りぼちなまま見た目だけ育って中身は
全然変わってねえなあ、エルヤー」

「ふんっ、人間様に劣る劣等種物がほざくなよ」

「その劣等種と呼んでる森妖精エルフにしか相手してもらえない、てめえの
シモの短刀が哀れだなあ」

「貴様！」

『おおっと！　試合開始前から二人の舌戦が始まったぞお！　これは
荒れる試合になること間違いなしだあ！　だがっ、だが試合開始の鐘
が鳴るまでは堪えてくれよ！』

進行役の二人を煽りながらも暴走は抑えようとするアナウンスが
入る。

「この試合が終わったら、無様に這い蹲っているお前の耳を削ぎ落し
てやりますよ」

「始まる前から勝った気になるなんて、とんだ妄想野郎だな」
「妄想などではなく確定している結末ですよ」

一触即発な状態を維持しながら二人は互いに獲物を構える。

試合開始を告げる鐘が鳴った。

先手を取ったのはエルヤー。構えていた刀に武技を乗せて振る。

「《空斬》！」

放たれた斬撃は空を切り裂き、アラビータに向かって走る。

アラビータは羽織っているマントで飛ぶ斬撃を弾く。彼のマントは斬撃耐性がある金属質な羽根で編みこまれており、低位の武器ならばこれだけで防いだうえで刃毀れさせることができる。

《空斬》の連撃を防ぎながらアラビータは片手で大斧を振りかぶりながら走り出してエルヤーに接近を試みる。

「どおりやあー！」

攻撃をもつとせず重戦士とは思えない機敏な動きに、下手な戦士ならば大斧の一撃で沈められるのは避けられないだろう。

しかしエルヤーは、アラビータの一撃をギリギリまで引き付け、足を動かさずに横にスライドする様に移動して避ける。

《縮地改》と呼ばれる、本来は前方にしか移動できない武技《縮地》を前後左右へと移動できるように改良した武技だ。

アラビータの闘技場の大地を深々と砕く一撃にも動じずにエルヤーは刀を振り下ろす。

「ちええいー！」

エルヤーの斬撃を、アラビータは避けずに背中を向いてマントで受け止める。

闘技場に金属同士が激しく擦れあう音が響く。エルヤーの武器が刃毀れした様子はない。

「オラあー！」

アラビータは反撃に大斧を持たないほうの手で裏拳を放つが、エルヤーの《縮地改》による後方移動で避けられる。

エルヤーが最小限の動きでアラビータの裏拳を避け、追撃をしようとしたところで、今度は大斧の薙ぎ払いが迫る。アラビータは裏拳が避けられること、そしてエルヤーが即座に反撃に移ることを予想して、回転する動きに合わせて大地に突き刺さっていた大斧を力づくで引き抜いてそのまま横薙ぎにしたのだ。

あの一撃は受けたら不味い。そうエルヤーは判断してとっさに《縮地改》による緊急回避して距離をとる。

「はあっはあっ……糞が！」

「ちっ！ さっきのでも当たたらねえか」

アラビータの攻撃は一発も当たっていないが、短時間での武技の連続使用はエルヤーにとっても負担になる。

一方のアラビータも今のところエルヤーから致命となる一撃こそ受けていないが、《空斬》を受け続けたうえで攻撃が一向に当たらないことに苛立ちを覚えていた。

「だったら、これでどうだあ！」

アラビータが大斧を地面に叩きつけながら振り上げると、巻き上げられた土の塊が砕け散りながら礫となってエルヤーを襲う。

「そんな猿知恵の攻撃が当たると思ってた！」

エルヤーは大きな土塊は避け、小さな土塊は刀で切り払いながら左右に移動して《空斬》で反撃する。

アラビータもエルヤーの《空斬》を時には受け止め、時には回避しながら土礫をまき散らして反撃する。

闘技場の大地が抉られながら近接距離でも遠距離でも互いに決定打を避ける戦いが続き、観客席からは歓声の声上がる。

「劣等種の分際でこの私に余計な時間をかけさせるんじゃない！」

「だったらとつととギブアップしちまえよ。そうすりゃ人生からリタイアはしないで済むぜ？」

「だったらこれで終わりにしてあげますよ。武技！ 《能力向上》《能力超向上》!!!」

エルヤーにとって自慢であり切札である武技を発動する。《能力超向上》は本来ならばエルヤーのレベルでは習得不可能とされる武技だ。

この武技を修得しているからこそ、エルヤーは自分が天才であり強者であるという自負を持っている。

「だったらこっちも！ 武技《能力向上》《外皮強化》《痛覚鈍化》！」
負けじとアラビータも今まで使用しなかった武技を発動する。

互いに相手に向けて突進し、獲物を振りかぶる。

先に振り下ろしたのはアラビータの方だった。アラビータの渾身

の一撃をエルヤーは《縮地改》で大斧が届かないギリギリの所まで後ろに下がってやり過ごし、それから振り下ろす一刀のもとで両断しようとしたところで、

「《怒涛震撃》!!!」

アラビータが新たな武技を発動して、そのまま大斧を大地に叩きつけた。

その瞬間、闘技場が揺れた。それは比喩的なものではなくアラビータが放ったオリジナルの武技による一撃で発生した局所的な地震である。

エルヤーは一瞬理解できなかった。アラビータの一撃は確かに回避したはずなのに、地にしっかりと足がついていたはずなのに、宙に浮いて自分が吹き飛ばされていることを。

ダメージは深くない。止まっていた思考を瞬時に再起動させてエルヤーは着地しようとするが、そこでエルヤーに不運が襲う。

着地先の大地は先ほどアラビータが抉った穴が複数あり、そのうちの一片足が嵌ってしまったのだ。

「なあっ！」

衝撃を殺し切れていない状態で後ずさった片足が嵌り、エルヤーはバランスを崩す。

そしてアラビータはその隙を見逃すほど甘くはなかった。地面に深々と突き刺さった大斧を手放し、ガントレット小手をはめた拳で追撃を仕掛けてきたのだ。

「こいつで、終わりだあー！」

エルヤーがとっさに振り下ろした刀をアラビータは左手で手首を掴むことで防ぎ、右手の握り拳をエルヤーの胸当てに叩きつける。

「こひゅおっ！」

エルヤーがそのままさらに吹き飛ばされる……事はなかった。片足が穴に嵌ったうえで片手を掴まれて無理矢理繋ぎ止められたことで、衝撃を逃がすこともできなくなっている。

鎧の胸当てがメキメキと悲鳴を上げて拉げ、心臓を強く圧迫する。同時に肋骨もベキベキとへし折れる音がエルヤーの体中に響きなが

ら、肺から空気が無理矢理押し出される。

激痛と酸欠によってエルヤーは吐血しながら朦朧とした意識で必死に考える。

なぜこんな事になったのか、劣等種でありながら群れてオリハルコン級という分不相応な立場を持つている連中に現実を見せつけるいい機会だったはずだ。

なのに実際は追い詰められ致命の一撃を受けているのは、どうしてか？ それは闘技場に空いた穴に足をとられたからだ。それがなければあのまま押し切ることだって容易かつたはずだ。

だったらこの闘技場の地面を施工した奴が悪い！ きつと、いや絶対にかいと裏で繋がってこうなるように仕込んでいたはずだ！ 見つけ出してこの落とし前をつけさせる必要がある！

非合理的な怒りを燃やすエルヤーの思考は、アラビータが追撃として蹴り上げた金的による局部を守っていたものが砕け散る衝撃と何かがつぶれる鈍痛、そして浮遊感を最後に途切れた。

闘技大会の閉会式が終わった後、ラキスケたちはマリナラや、森妖のメンバーと共にアラビータと合流して彼らが宿泊している宿屋で祝勝会を開いていた。

「優勝おめでとう、アラビータ。怪我の様子はどうだい？」

「なあに、治療魔法を使うまでもない程度だよ。ラキスケの旦那」

「それは良かったわ。今回の試合は上手く噛み合って大した怪我もせずに勝ってたけど、ちよつとでも流れが違っていたら大怪我じゃすまなかつたでしょ？」

「まあビアンゴの大将の言うとおりだわな。いくら布石は仕込んでいたとはいえ、あのタイミングであいつが穴に足をとられたのは俺にとつても予想外だったからなあ」

アラビータはそう言うと、骨付き肉を一口齧り取り咀嚼する。

戦いに疎いツアレはドリンクを飲みながら、彼らの話に首をかしげ

る。

「ツアレのお嬢が良く分かってない様子」「素人にもわかりやすい説明をしてあげるべき」

ヴァージリツコとジェノーベの言葉に、咀嚼していた肉を飲み込んだアラビータが話を続ける。

「しゃあねえな……つまりだな、地面を掘り起こしていたのは別の目的があつて、今回はたまたま違う形で引っかけたんだよ」

「別の目的……ですか？」

「地面を凹ませたり土塊をぶちまけることで、エルヤーの奴の武技による移動を制限するためのな。まず、《縮地》は体勢を変えないで移動できる武技だ。その改良版である《縮地改》は本来前進しかできないのを前後左右に動けるようにした武技だ。実用性の高い武技なんだがこれにはある欠点がある」

「欠点……、ああ！ ひよつとして、跳んだり跳ねたりすることができないのですか？」

「その通り。武技による移動は便利なようで融通が聞かない部分があつてな。例えば《縮地》の場合、跳んでる最中に空中で使用することはできないし、《縮地》を使用している間は跳ぶこともできない。そして、《縮地》による移動は足を動かさずに行われるが、地面に触れていないわけじゃないし高低差の影響も受ける。まあ馬車みたいなもんと考えればいいか。つまりだ……」

「つまり、凸凹道にすることでエルヤーの機動力を殺して」「アラビータの馬鹿力で叩き潰すのが本来の流れだった」

「お前ら、あとちよつとという所で説明役奪うなよ……」

最後の最後で結論を話すヴァージリツコとジェノーベに、アラビータは呆れた様子で止めていた食事を再開する。

「しかしまあ、エルヤーは今回の試合で敗死したようですね」

「まあ、生き残ったとしてもあの怪我に加えて彼の名声を支えていた闘技場で無敗という肩書は消える以上、恨みも多く買っている彼は早晩立ちいかなくなっていた事でしょう」

カチャトラとアチューガがエルヤーの顛末を語る。

三人いた奴隷エルフに関しては、あの後アラビータが優勝賞金と個人資産で一括購入したことにした上で奴隷契約変更の誓約を行って帝国の法律で守られるようにした。奴隷の証として半分に切り落とされていた耳もラキスケが治療している。

装備の強化や更新のために貯めていた費用が大分消えたとアラビータはぼやいていたが、そもそも彼の装備はそれこそグドラシル時代の品や国宝級でもない限りはこれ以上強化するのは難しい所まで突き詰めている。

それに、マリナラの商会に元奴隷エルフたちが働けるように頼み込んでいたことを知っている一同は、彼女たちが社会復帰するためのモチベーションとしてわざとそう言っているのだとも気が付いている。

実際のところ、アラビータは同情や善意だけで彼女たちを助けた訳ではない。「弱者は強者のために働き、強者は弱者を守るために戦う」という彼の価値観に則って強者となった自分のために彼女たちが十全に働ける環境を整えた結果である。

帝国の法で守られていない状態では彼女たちを守れているとは言えないから、奴隷契約を変更し耳の治療を頼んだ。彼女たちが自分のために働けるようにするために信頼できるところを斡旋した。

美談のように思える話も蓋を開けてしまえばこの通りである。それでも、奴隷として使い潰されるはずだった彼女たちを結果的に救ったことには変わりない。本人にその気はなくても、彼女たちから少なからず好意を抱かれる理由にはなっている。

思い思いに食事をとり、酒を飲み、話をしていると、ラキスケはマリナラに話しかける。

「そういえば、マリナラは近日中に王国に行く予定ってあるかい？」

「そうですね。来月の頭辺りにエ・ランテルへ都市一番の薬師とポーションの契約交渉をしようとは考えておりますね」

「じゃあその時に一緒に乗せて行ってもらえないかな？」

「別に良いですけども、理由を教えてくださいませんか」

「うーん……よし、分かったよ。遅かれ早かれ伝えることだしね。王国の大都市でツアレと一緒に妹の消息を本格的に探そうと思ってね」

原作開始後

第九話 ※エロ無し

リ・エステイーズ王国の城塞都市エ・ランテルは、その名に相応しい三重の城壁で囲まれた大都市である。その城壁に取り付けられた門は、外周部分にある者が最も強固且つ巨大であり、のしかかってくるような無骨な重厚感に満ち満ちていた。

その門の横手には検問所が設けられており、旅人のチェックと違法な荷物の運搬や他国のスパイの発見のために幾人もの兵士が詰めている。

早朝の門が開いたばかりの筆舌に尽くしがたい忙しきを超えて、太陽が天空の最も高い所に登りつつある頃、棧のみの窓からぼんやりと外を眺めていた兵士の一人が、ちらほらと旅人の姿が見え始めた街道にその一団とは別に進んでくる荷馬車の一団に目を止めた。

「来た方向からして帝国からの隊商か。こりや忙しくなるぞ」

座っていた兵士は溜息をつきながら、今からくる隊商を迎えるために立ち上がる。

兵士たちが見守る中、馬車の一団は門の前まで進み、動きを止めた。

先頭の馬車の扉から降りてきたのは四人の男女であった。

一人はピンと小さくどがった耳をした栗色の髪と透き通った碧色の瞳の少年は恐らく半森妖精だろう。仕立ての良い服を着ていることから森妖精を愛人にした商人の息子辺りかもしれない。

もう一人は王国や帝国にはよくいる青い瞳に金髪で愛嬌のある顔立ちの女だ。羽織っているローブは地味な色合いだが仕立ては良く、柔らかな光を放っているような宝玉が柄にはめられた杖を握っている。

「あの女、魔法詠唱者か？」

「かもしれないなあ」

検問対象としては厄介な魔法詠唱者かもしれない女に兵士は小さく顔を歪める。

目を引いたのはほっそりした体つきの金髪翠眼の森妖精の男で、皮

鎧を着て弓を持っていることから野伏^{レンジャー}だろう。驚いたのは首からぶら下げている冒険者プレートがオリハルコンであることだ。

エ・ランテルに存在する冒険者組合の冒険者は、最高位でミスリル級だ。オリハルコン級はその一つ上の位階に存在し、人類の英雄とも評されるアダマンタイト級の一步手前であることを意味している。そう考えると自分達では想像することもできない人物であることが分かる。

問題なのは瞳孔が縦に割れた銀色の瞳に、紅い頭髮の左右のこめかみから山羊を思わせる角が軽い曲線を描いて後ろに向かって伸びた男の亜人だ。

亜人は基本的に人間よりも高い身体能力を持っている種族が多い。亜人が村などに現われて交流することはあるらしいが、王国の都市に堂々と現れたという話は殆ど聞いたことがない。

それに加えてその亜人は武器を装備している。それもただ皮鎧を着ているだけのような簡素なものではなく、兜を外した全身鎧に加えて腰に剣とメイスを差しており、本格的だ。

見える範囲だけでもそれらの装備が放つ輝きはただの鋼ではなく、より上位の金属で作られている事を物語っている。

「皆様方、お仕事お疲れ様です」。私、日常生活の品から冒険者の装備まで商売させていただいて、商人のマリナラ・ラッドと申します。そして此方は護衛をしてくださった冒険者一党のリーダーと、相乗りしていただいたラキスケさん方一行でございます。」

「どうも、チーム「森妖」のリーダーを務めさせていただきます。チャトラと言います」

「ラキスケです」「えっと……ツアレです」

兵士が亜人へどのように対応するかを決めあぐねている間に、先頭にいた少年が兵士達を労いながら自分たちの簡単な自己紹介を行う。

一見すると礼儀正しいようにも聞こえるが、自分達よりはるかに強いでであろう亜人が商人に雇われた護衛ではなくて相乗りした旅人だとわかったことで、兵士は油断なく彼らに近づく。

「まずは色々と確認したいことがあるので、詰め所に来てもらっても

構わないかね？」

「ええ。構いませんよ」

「はい、分かりました。ですが彼女は人見知りなので、私と一緒に構いませんか？」

他の旅人たちもやってき始めているこの時間帯に一人一人別々に応対していたら時間が足りなくなってしまうので、兵士も了承して詰め所に連れていく。

隊商キャラバンの荷物の検査の担当になった兵士は、横目で詰め所に入っていく彼らを見ながら最近起きた出来事を思い出す。

大凡一週間前の深夜に発生した、トブの大森林の上空を中心とした闇を完全に消し去るかのような謎の発光現象。大地を揺るがすような爆音が連続して鳴り響いたかと思ったら、その音と光は瞬く間に消えていったという。

エ・ランテルからもはつきりと観測されたそれは、都市内でも噂となっており、様々な憶測が生まれている。

トブの大森林に住まう森の賢王の怒りか!? と慄く者もいれば、帝国が何かの実験を行っていたのではないのか? 怪しむ者もいた。荒唐無稽な憶測では、神が降臨したとトブの大森林の方角に向かって礼拝を捧げる神官も現れたという。

「頼むから面倒べとは起こさないでくれよ……」

エ・ランテルの墓地区画、その最奥にある霊廟のさらに奥の石の台座には隠し階段へ通ずる仕掛けがある。

そこを通った先の広い地下空洞に二人の人影があった。

一人は目が落ちくぼみ、土気色という言葉がふさわしい顔色の痩せた男だ。頭部どころか体毛と呼べる毛が一本もないのではないのかと思えるほど毛らしきものがない。

血の色にも似たどす黒い赤のローブを纏い、アンデッドモンスターマジック・キャスターに似た容貌の魔法詠唱者だ。

もう一人は漆黒のフード付きのマントを纏った短い金髪の女だ。猫化の動物じみた愛らしさと肉食獣としての危険性を内包した顔立ちをしている。

「やっほー、カジっちゃん」

「その挨拶は止めないか。それとカジットと呼べと言っているだろうに……それで、今度はどんな理由でここに来た？　ここで儂が死の宝珠に力を注いでいることは知っておろう」

女の気の抜けた挨拶にカジットは顔を顰めながら、女が来た目的を問う。

「ふふーん。ここで頑張っているカジっちゃんのために、これを持ってきてあげたんだよー」

そう言つて女がマントの下でござござと手を動かして取り出したのは、蜘蛛の糸のような細さの金属糸の所々に無数の小粒の宝石がつけられ、水滴が付着した蜘蛛の巣のような繊細なつくりのサークレットであった。

「それは！　スレイン法国の最秘宝の一つである叡者の額冠ではないか！　確かにそれが使えれば儂の計画は一気に前進することにはなる。使えればな……」

着用者の自我を奪い、その人間そのものを人間が使える限界を超えた高位魔法を使用するためだけのマジックアイテムに変貌させる狂気の神器を前にしてカジットは目を見開くが、すぐにそれが使い物にならないことを思い出して溜息を吐く。

「本来ならばこのアイテムに適合するのは女性だけ、しかも百万人に一人の割合だから使い物にならないねー。けど、この街にはまさにうってつけの生まれながらの異能——すべてのマジックアイテムを使用できる人物がいるでしょ？　そいつならこのアイテムも使えると思うんだよねー」

「……なるほど。噂に聞くあれか。だが奴は今、ミスリル級冒険者を連れて町を出ているぞ」

適合者という問題を解決できる目途がついたにもかかわらず、カジットはすぐに目的のために実行することを躊躇している様子を見

せる。

「ええー、なんでいないのさー。でもさ、例の儀式の準備はもう大体は揃ってるんでしょ？」

「確かにそれを使えば、儂の計画は大きく前倒しして実行することはできる。しかし、そいつを攫って使わせることができたとしてもすぐに計画を実行することは出来んぞ。ズーラノーンにとって警戒しなければならぬ輩が、帝国からこの街に訪れておるからだ。神官戦士の亜人であるラキスケだ」

「うげー、ラキスケって言ったらスレイン法国でも亜人でさえなければ漆黒聖典に勧誘されていたって、その道では有名な奴じゃん。なんぞ来ているんだよー」

予想外の相手に女は顔を顰めてぶつくさ文句を言う。

「知らんわ。相棒の森妖精エルプはおらんから個人的な用事かもしれん。どのみち奴に嗅ぎつけられたら儂の五年間の努力が水泡に帰すことになる」

「カジっちゃんってば、やけにそいつを警戒するねー。まあしようがないよねー。相性は最悪だし、ズーラノーンの十二高弟の一人にして、魔神にも匹敵する災厄と呼ばれたアンデッド將軍を、あの帝国最強の大魔法詠唱者であるフルーダ・パラダインがいたとはいえ倒しちゃうくらいなんだからさー」

百年前にあったとされるズーラノーンの十二高弟の一人によるバハルス帝国未曾有の危機。表向きはフルーダが死闘の末にカツツエ平野で首謀者を討ち取ったことにされているが、スレイン法国の諜報機関やズーラノーンに伝わっている話では、カツツエ平野を縦断しようとした亜人と森妖精エルプの一団の助力があつてこそだったということが分かっている。

「分かっているならば、しばらくはこの街で騒ぎを起こすでないぞ。クレマンティーヌ」

「はいはい。善処します。それじゃーねー」

「……まったく。何事も起こらなければいいが」

クレマンティーヌが気の抜けたような返事をしながら出ていくの

を見たカジツトは、一抹の不安を感じながら計画の要となる死の宝珠に力を注ぎに戻るのであった。

「つふう、この姿のまま王国の都市に入ったのは初めてだけど、入れてよかった」

ラキスケはツアレと共に、城塞都市エ・ランテル最高級の宿屋である「黄金の輝き亭」に宿泊することとなった。

検問所に派遣された魔術師組合の魔法詠唱者によるマジック・キャスター《魔法探知》ディテクト・マジックと《道 具 鑑 定》による調査で、身に着けている幾つものマジックアイテムが反応して一騒ぎは起こったが、マリナラが兵士たちに何かを見せると兵士は詰め所を出て走り出し、しばらくして明らかに肥満体の男——パナソレイ都市長がやってきた。

マリナラと親しそうに話してから、滞在を許可する証明板が発行されることとなったのでこうして入ることができたのだ。

ちなみにその際に通行税と合わせて多額の献金が行われたがこれは賄賂の類ではなく、正規の規則に則った保証金である。額が跳ねあがったのはラキスケが亜人であることに加えて、多数のマジックアイテムを都市内に持ち込むことになるためだ。

そして都市長自らが滞在許可を出した相手のみずぼらしい安宿に止めるわけにはいかないと、紹介されたのがこの宿である。

都市の商会ギルドに赴いたマリナラや、彼に護衛として雇われた「森妖」の面々とはここからは別行動となる。なぜならば、大凡一週間前の深夜に発生したトブの大森林の上空を中心とした闇を完全に消し去ったかのような、大きな爆音を伴った謎の発光現象があったからだ。

依頼人の護衛に専念したいということもあり協力を取り付けることは期待できない。

そしてビアングは拠点である地上船を使って別の依頼に赴いているため、此処にはいない。

ラキスケ達の目的であるツアレの妹——セリーシア・ベイロンの情報を探すのは自分達の足と耳が基本になる。

「私、本当に……王国に戻ってきたんですね」

ツアレが呟く。自分から望んで再び足を踏み入れたが、それでも彼女にとって王国はつらい思い出ばかりがある土地だ。

関係が無いのは理解しているが、都市長の容姿が彼女を妾として連れ去った肥え太った貴族を思い出させて気分を落ちこませる。

「大丈夫、俺が君を守るから」

ラキスケはそう言うと、ツアレの唇にキスをしながら優しく抱きしめる。

ラキスケと初めて肌を重ねた時のように、お互いの唇を舌でなぞったり舌同士を触れ合わせる。

「んっ……くちゅ、レロ……ちゅぱ」

情欲を誘い貪り合うようなキスとは違う、昔を思い出してささくれていたツアレの心を癒すような優しいキスを二人はしばらく続ける。

キスを終えて抱きしめていた腕を放すと、二人はベッドに腰掛けて今後の相談を始める。

「まずは今の段階で分かっている、妹に関しての情報をおさらいしようか」

「はい、妹の容姿は最後に見た時の記憶から変わっていないければ、濃い茶髪で私と同じ青い瞳をしています」

「そして、幻術で人間になりすまして前にツアレ達が暮らしていた村で聞き込みをした時には、君が領主である貴族に連れ去られてから6年後、今から4年前に妹は旅に出てそれつきり村には戻ってきていない。おそらく、彼女は君を助ける方法を得るために旅に出たんだと思う。そして発端が貴族である以上、貴族の力を借りる選択肢はほぼ有り得ない」

「セリーは、そこまでして……」

前もってそれまでラキスケが得ていた情報は聞かされていたが、改めて聞いているとツアレに瞳に涙が込み上げてくる。

「そして、これは本人か確定できていないけれども俺が最期に得られ

た情報では、魔法の個人塾を開いている人に才能を見込まれてしばらくの間教育を受けていた子供たちの中に、似た容姿をした子供がいたそう。その子は本来ならば数年かかる魔法の習熟をその半分の期間で修めた天才だって褒めていたよ」

「あの子にそんな才能が……」

「まだ本人かは分からないけどね。今回はその子が妹であると仮定して、その足取りを追っていいこうと思う。今思いつく中ですぐ候補に挙げられるのは、魔術師組合の組員に冒険者、それとワーカー辺りかな？ そのうち魔術師組合は検問で詰め所に来た魔法詠唱者マジック・キャスターに確認してみたけど、そういう特徴を持った女性の組員はいないってはっきり言われてしまったからひとまず優先度を下げておくよ」

「そうなるよ、今回調べていくのは……」

「冒険者やワーカーが中心になるね。国への帰属意識が低い傾向にあつて戦争にも駆り出されない冒険者は、力や食い扶持が必要な妹にとっては都合が良いだろうし」

ラキスケはそう言って腰かけていたベッドから立ち上がると、ツアレの前に手の平を差し出す。

「それじゃあ行くこうか」

「はい。行きましょう」

ツアレはラキスケの小手を嵌めた掌を握って立ち上がると、一緒に部屋を出た。

エ・ランテルの貧民街を歩く複数の人影があつた。

暴力を生業とするような雰囲気を持つ男たちに囲まれて歩くのは、皮の服を着た、濃い茶髪に青い瞳の若者だ。肌は白く中世的な美しさをしており、呼吸と共に漏れる声はやや甲高い。ベルトからぶら下げられた奇妙な形の瓶や変わった形の木工細工が、歩く動きに合わせて揺れる。

(姉さん……！ 待ってて、今行くから！)

銀級冒険者チーム「漆黒の剣」の魔力系魔法詠唱者であるニニヤは、溢れそうになる感情を必死に抑え込んで歩いていった。

幼い頃に唯一の肉親であった姉を領主である貴族に妾として連れ去られたニニヤは、姉を取り戻し貴族に復讐するために力を得る手段として冒険者となった。

自らの適性と生まれながらの異能が噛み合い、それを教えることができる師匠にも恵まれた。

自分が貴族を憎み、姉を助けようとしているのを知りながら、チームに加えてくれた「漆黒の剣」のみんなという良縁にも恵まれた。

おかげで、恥ずかしいが若くして『術師』の二つ名で呼ばれるくらいには優秀な素質を持つ魔法詠唱者になることができた。

それでも、目的を達成するためにはまだ力が足りない。そのためにも、もっと力をつけないといけない。

そう思っていたある日、モンスター退治に赴く前のアイテム調達のために他のメンバーと分担して買い物をしていると、後ろから自分を呼び止める声が聞こえた。

「漆黒の剣」のニニヤ、いや……セリーシア・ベイロンだな」

「漆黒の剣」の他のメンバーにも伝えていない、自分の本当の名前を呼ばれてニニヤは目を見開いて後ろにいる男の方を振り向く。

「貴様の姉、ツアレニーニヤ・ベイロンに関して話がある。一緒に来てもらおうか」

「お前……、姉さんを知っているのか!」

有無を言わせない高圧的な態度で姉の名前を出す男にニニヤは詰め寄るが、背後から近づいてきた男達に囲まれ、肩を掴まれて引き離される。

「くっ! ……一緒に行けば、姉さんのことを教えてくれるんだな?」
「話が早くて助かる。ついてこい」

ニニヤは男たちの要求通りについていくしかなかった。

人影のない裏通りを進みながらニニヤは考える。

彼らは真つ当な立場の人間ではないことは明白だ。かといって姉を連れ去った豚貴族は自尊心や虚栄心が強く、民衆と貴族の立場の違

いを思い知らせて優越感に浸るために、姉を連れ去った時のように部下を引き連れた馬車に乗って自分が直接出向くはず。

そこから考えられるのは、姉の身柄はあの豚貴族から目の前にいる彼らの雇い主に移っており、尚且つ姉に関して彼らにとって不利益な問題が起きたことだ。

恐らく自分は、その損失の穴埋めのために連れていかれるのだろう。もう二度と、日の目を見ることはできないかもしれない。

(ペテル……、ダイン……、ルクルット……、ごめん)

心の中で仲間たちに謝罪しながらニニヤは、考えられる可能性ごとに何をすべきかを考えて足を進める。

男たちに連れていかれた場所は、貧民街の中でも廃棄された区画にある小さな広場だった。

「サキュロント様、例のガキを連れてきました」

「おう、分かった。おまえらは周囲を見張っている」

光に当たってないような青白い肌に、痩せこけた頬と相まって死肉をあさる猛禽類のような鋭い目つきをした男が上司らしい。

如何にも暴力に慣れた、冒険者よりもワーカーのような汚れ仕事に似合う男だ。

「ね……姉さんはどこにいる」

その雰囲気呑まれそうになっている自分を心の中で叱咤しながら、ニニヤはサキュロントと呼ばれた男に問いかける。

「ここにはいないな。会いたかったら、俺たち八本指に協力しろ」

「八本指……」

八本指という言葉にニニヤは握っている杖を構える。姉の足取りを探す過程で知った、王国に根を張る裏組織の名だ。

此処でその名前が出てきて自分に協力を強要してくるということ、姉は八本指やそれらに手を貸している貴族たちと敵対する誰かの下に——それも親しい間柄でいる可能性が出てくる。

希望的観測が過ぎる考えだが、もし当たっていた場合、自分がここで捕まったら十中八九、人質か何かにされてしまう。

「断る……って言ったらどうする」

「その時は、痛い目にあわせてから言うことを聞かせるだけだ」

サキュロントがゆつくりと剣を構える。その剣は同じ冒険者チームの戦士であるペテルのものと比べてもはるかに上等な金属で作られていることを示すように、輝きを放っている。

周囲で見張っている男達も、それぞれが武器を手に持って二ニヤににじり寄る。こちらにもサキュロントの剣には劣るが自分たちの装備よりは上等だ。

数の上でも、装備の質の上でも、そして感じ取れる実力で見ても、二ニヤに勝機がないことは本人が良く分かっている。それでも、何もしないで言いなりになる事だけはしたくない。

「衝撃……！ ガハッ！」

二ニヤが僅かにあるかもしれない突破口にかけて魔法を詠唱しようとしたところで、唐突に腹部に殴られたような鈍痛が走る。

(そんな、誰も近くにいないはずなのに……)

二ニヤは薄れゆく意識の中でその答えを探そうとするが、続く頭部への衝撃でそれも叶うことなく意識が暗転した。

ラクスケ達がエ・ランテルでツアレの妹を探し始めて二日が経過した。

分かったことと言えば、妹と同じ髪の色と瞳を持つ魔法詠唱者マジック・キャスターで有名な生まれながらの異能を持つ少年が、この都市の冒険者にいることだ。

名前は二ニヤ。『魔法適正』という魔法の習熟にかかる時間を本来の半分にする生まれながらの異能で、若くして第二位階まで至っているという。

所属している冒険者チームの名は“漆黒の剣”。銀級冒険者チームで、若いながらも連携の取れたチームで今後が期待されている。

冒険者組合の受付嬢の話では、大きな爆音を伴った謎の大規模な発光現象という異常事態が起きたトブの大森林近辺へ赴くことは、冒険

者組合の正式な調査が行われるまで自粛するように低位の冒険者や依頼人に要請されている。

その間、糊口を凌ぐためにどうするかを仲間と相談していたところを前日の夕方に見たのが最期だという。

二日目はラキスケの特殊技能ススキルによって生み出した影シャドウ・デーモンの悪魔も動員されているが、今のところ誰かに気が付かれた様子はないものの有力な手掛かりもつかめないでいた。

探していた特徴に合致する人物が少女ではなくて少年であったことに落ちこむツアレ。ひよつとしたらと期待していただけに外れてしまつて少なからずショックを受けているようだ。

ラキスケはツアレを励ましながら太陽が沈み《コンティニユアル・ライト永続光》式の街頭が辺りを照らす通りを歩いていると、後ろから呼び止めるものがあった。

「その亜人、あんたに渡すもんがある」

声に反応すると、そこにいたのは堅気とは言い難い雰囲気を持つ一人の男だった。

「……あなたは」

問い掛けながらもラキスケはツアレを自身の背中に隠すように移動する。

「俺はあんたにこれを渡してくるように言われた、ただの案内人だ」

そう言いながら男は懐から丸められた一枚の羊皮紙を取り出すと、放り投げるようにラキスケに手渡す。

ラキスケは警戒しながら羊皮紙を開くと、驚いた容姿で固まる。

「どうかしたのですか？ ……!!!」

ラキスケの様子を心配したツアレが横から羊皮紙を覗くと、そこにはツアレにとって予想外の内容が書かれていた。

『八本指に逆らう愚かなラキスケへ。ツアレニーヤ・ベイロンの妹、セリーシア・ベイロンは預かった。その命が惜しければ、ツアレニーヤとともに二人でエ・ランテルの共同墓地の霊廟前まで来い』

第十話 ※エロ無し

エ・ランテル外周部の城壁内の大凡四分の一。西側地区の大半を使った巨大な一角にエ・ランテルの共同墓地がある。

これほどの大きさになっているのは王国と帝国の戦場が近くであり、戦争による多数の死者をアンデッドにしないための巨大な墓地が必要とされたためだ。

その最奥にある霊廟に程近い場所に複数の人影が存在した。

各員がそれぞれ違った武装を纏っており、兵士などの雰囲気は皆無だ。

「ボス、ターゲットは本当に来るのか？」

光に当たってないような青白い肌に痩せこけた頬と相まって死肉をあさる猛禽類のような鋭い目つきをした男——六腕の一人である『幻魔』のサキユロントが呟く。

その目の前に倒れている人影——貧民街で気絶させて此処迄運び込んだ少女のニヤが、後ろ手に手足を縛られて猿轡を噛まされた状態で転がされている。着ていた皮の服は剥かれ、一糸まとわない状態だ。

「来ようとも来なかつても、既に奴は詰みだ。馬鹿正直に来たらこのままこいつを人質にして俺たちで罫り殺しにすればいい。そうでなければ罪を着せて権力で捕らえてから始末するだけだ」

「それにしてもボス、こんな簡単に済むならこの都市で一番の薬師の孫も攫えば良かったんじゃないですか？ 孫を押さえて婆を脅せば、この都市のポーションの権益も俺らの所に転がせるわけですし、悪くないと思うんですが」

「ふん、そのためにまだ戻ってきていない人間を待つと？ 冒険者たちに敵対されるリスクも読めんのか。我らが敗れるなどとは思っていないが、今はオリハルコン級冒険者が滞在しているのだぞ。余計な敵を増やしてそれを始末する間に救出されたら面倒だ」

サキユロントの言葉に、墓穴から話しかけられたような、背筋を凍らせるような声が虚ろに響く。

その声の持ち主は黒く染め上げられて裾をまるで炎を象っているような真紅の糸で縫い上げられたフード付きのローブを被った死者の大魔法使い——『不死王』のデイバーノックである。

「そうそう、そんなだからあんたは六腕の中では一番下にみられるんだよ。それでボス、人質は用事が終わったらサクツと殺しちゃおう？」

薄絹を纏い手首や足首に金の輪をつけて、腰のベルトには六本の三日月刀が釣り上げられている身軽そうな女——『踊る三日月刀』のエドストレームがクスクス笑いながらゼロに人質の扱いを尋ねる。

「いや、人質と例の女はできればコツコドールに渡す手筈になっている」

「あらあらかわいいそうに、ウフフ」

短く答えるゼロにエドストレームはクスクス笑ったままだ。

「しかしまあ、人質を見つけた矢先にターゲットの方からやってくるとはね。おかげで手間が省けたね」

煌びやかな金糸刺繍を施した上着やチョッキを着用し、薔薇から剣先が突き出したようなレイピアを持つ優男——『千殺』のマルムヴィストが軽薄そうに話す。

隣にいる無骨な全身鎧で身を守り、剣をしつかりと鞘に収めている男——『空間斬』のペリュシアンは終始無言のままだ。

「どうやら要求通りに来たようだぞ。歓迎の準備をしてやろうじゃねえか、お前ら」

ゼロの言葉に六腕の面々はそれぞれの武器を手取る。

ほどなくして部下がターゲットを連れてやってきた。兜を外した全身鎧を身に着けた巫人のラキスケと、柔らかな光を放っているような宝玉が柄にはめられた杖を握って地味な色合いだが仕立ての良いローブを羽織っている女は、且つてはコツコドールの所の娼婦だったツアレニーニヤだ。どちらも眉間に皺を寄せ、ゼロたちを睨みつけている。

彼らを案内させた部下をゼロは下がらせる。

「お前たちが俺たちを呼んだ八本指の連中か」

「セリー……!!!」

「おっと、これ以上近寄るなよ」

妹の惨状にかけ出そうとしたツアレだが、サキュロントが少女の頭を踏みつけてミスリル製の剣をその首に突きつけたことでその足を止める。それでも少女が目覚める様子はない。

「今はまだ薬で眠っているだけだ。だが、こいつの命は俺たちの手にある。殺されなくなかったら言う事を聞くんだな。まずは武具を全部外してもらおうか。当然、マジックアイテムもだ」

「……分かった」

ゼロの要求にラキスケは苦虫を噛み潰したような表情で装備を外していく。

魔法効果が施されたオリハルコンの鎧が、剣が、メイスが、そしてツアレの持つている杖が地面に落ちる。ラキスケの十の指の内、八か所にはめられた指輪も外して小袋に入れて地面に置かれる……。

「なんて量の装備とマジックアイテムよ……」

「一体、どうやって手に入れたんだか……、八本指でも個人には与えられない数だね」

「やはりな。奴が二年前にパウークを始末できたのも、それだけ多くのマジックアイテムを総動員したからか」

ラキスケが外していく数々の装備とマジックアイテムにエドストレームとマルムヴィストが言葉を漏らす。その質と量には六腕の面々も苦笑いするしかないほどだ。

ゼロの推測に、ラキスケは何も答えずにチエインシャツ鎧着ごと上着を脱いで上半身裸になる。

「……ふん。沈黙は時に雄弁に真実を語るぞ。人質を無視して戦っていれば俺たちの何人かは道連れにできたかもしれないのに、馬鹿な野郎だ」

「俺が身に着けている武具とマジックアイテムはすべて外したぞ」

ゼロの嘲笑にも、ラキスケは動じずに答える。

「気に食わねえ。その澄ました顔をぐしゃぐしゃにして、八本指に歯向かったことを後悔させてやる」

「好きにしろ。ただし、ツアレとセリーシアには手を出すなよ」
「ラキスケ様……」

「大丈夫だよ。だから、ツアレは後ろに下がっていて」
心配するツアレを、ラキスケは後ろに下がらせる。

「お別れは済ませたな。お前が生きている間は手を出さないでやるよ。尤もその時間はすぐに終わって、すぐに姉妹揃って娼館送りだな！」

苛立つゼロがラキスケの鳩尾に拳を叩きこむのを見た他の六腕がニヤニヤと嗤う。ゼロの拳は強固な鉄の扉さえも突き破り、手刀ならば紙を破る様に切り裂くこともできる。そのような一撃を生身で受けて無事であるはずがない。

……そう、無事であるはずがないのだ。本来ならば。

「どうした？ 随分と優しくボディタッチするんだな」

「てめえ！ おい、お前らも加われ！ 全員で殺すぞ！」

顔色一つ変えずにゼロを嘲るラキスケに、ゼロは他のメンバーに総攻撃を指示する。

「ゼロ、いったん離れろ。《ファイヤー・ボール火球》！ 《ライトニング雷撃》！」

デイバーノックの指先から火球と雷撃が放たれる。

「踊りなさい、死の舞踏を！」

エドストレームが舞踏ダンスの魔法付与が施された宙を舞う五本の三日月刀シミターでラキスケを包囲し、全方位から切り刻む。

「俺の『空間斬』を喰らえ！」

ペリユシアンが口を開き、己の魔技を叫びながら鞘から剣を抜き放ち、三メートルは離れた先にいるラキスケに超速の斬撃を放つ。

「こいつで惨たらしく死にな！」

マルムヴィストが致死性の猛毒が仕込まれたレイピアによる、閃光の如き突きを連続して放つ。

本来ならばどれか一つだけでも相手を絶命に至らせる必殺の魔技。周辺諸国で最強の戦士とされている王国の戦士長ガゼフ・ストロノーフでも絶命させるであろう四連撃を受けてもなお、ラキスケの素肌には傷一つついた様子はなく、涼しげな表情だ。

装備はすべて剥がしたはずだ。にもかかわらず今なお無傷で立つたままの亜人にデイバーノックが、エドストレームが、ペリユシアンが、マルムヴィストが恐怖を覚える。

「かあああああああ!!!」

警備部門の長であり、六腕筆頭の『鬪鬼』ゼロの雄叫びが上がる。

一日の使用可能回数の制限から、本来ならば温存するために一種類のみの使用に留める己の特殊^ス技術^キを全て同時起動させることで成り立つ最強の一撃を放つためだ。

それは何の小細工もない、特殊^ス技術^キと数々のマジックアイテムで限界まで強化に強化を重ねた正拳突きだ。ゼロ本人でも制御が困難なほどに高められた速度と破壊力を持つこの一撃が、ラキスケの腹部に突き刺さった。

ゼロの最強の一撃を受けたラキスケは……、それでも倒れるどころか手傷を負った様子もなく平然としていた。

「ばか……な」

絶句するゼロと他の六腕たちがラキスケを信じられないような目で見る中、ラキスケはゼロの拳を無造作に掴む。

とつさにゼロは正拳突きを放った右腕を引こうとするが、ラキスケに掴まれた腕はびくともしない。

「て、てめえ何をしてやがる！ 人質がどうなっても良いのか!!!」

「もう手遅れだよ、お前ら」

叫ぶゼロに対して、それまでの怒りを抑え込むような言葉からはかけ離れた、氷のように冷たさを感じさせるラキスケの言葉に六腕は息を飲む。

「サキュロント！ 人質を始末し……!」

六腕の誰かが咄嗟に人質を取っているサキュロントの方を振り向いて叫んだ言葉は最後まで続かなかった。

サキュロントは、全身が漆黒の痩せこけた人型の異形に背後から取り押さえられていた。その異形は瞳のみが病的な黄色の輝きを放ち、蝙蝠のような羽と途中から鋭利な爪と化している指を持っている。サキュロントが抑えていた人質もそのうちの一体に確保されている。

ラキスケを総攻撃するために意識から逸れていたとはいえ、何故サキユロントの異変に気が付かなかったのか。ゼロは闇から這い出てきた一体が持つている道具が、八本指でも他者に聞かれたくない会話をする場合に用いられる、一定範囲内の音を外部から遮断するマジックアイテムであることに気が付く。

これによってサキユロントを聴覚的に孤立させて奇襲を仕掛けたのだ。

「何だ……こいつらは」

「俺の特殊技術^{スキル}で呼び出した悪魔だ。偵察とか調査とか、他にはこういう奇襲とかに便利なんだよ」

「悪魔……だと!?」

六腕の面々は知らないことだが、この悪魔はラキスケがこの都市で情報収集するために特殊技術^{スキル}で昼と夕方に分けて6体ずつ呼び出した影^{シャドウ・デーモン}の悪魔だ。

特殊技術^{スキル}で呼び出した悪魔なので時間制限はあるが、六腕にとっての不運はラキスケが影^{シャドウ・デーモン}の悪魔を呼び出したのが案内人と遭遇する数十分前で、制限時間にはまだ十分に余裕があった事だった。

6体の影^{シャドウ・デーモン}の悪魔のうち、サキユロントを取り押さえられている個体と人質を確保した個体以外の4体が、残る4人の六腕に襲い掛かる。

応戦する六腕の面々だが、初めて見る悪魔の闇に溶け込む能力で攻撃のチャンスが掴めずに攻めあぐねている。闇を照らし出すような魔法は存在するが、六腕の中ではすでに取り押さえられているサキユロントしか使用することができない。

八本指の最強戦力である六腕と拮抗している悪魔を目にした、ラキスケを案内した構成員は逃げようと走り出す。しかし、影^{シャドウ・デーモン}の悪魔の一体が投げた石礫を後頭部に受けて脳漿をまき散らしながら絶命した。

そうしている内に人質を確保した個体がツアレの下に到着し、人質の少女を引き渡す。

「ありがとうございます。セリー、ごめんね……。私の所為でこんな酷い目に合わせてしまつて」

涙をポロポロと零しながら、未だに目覚めない妹を抱き寄せて謝るツアレを見たラキスケは、ゼロの方に向き直る。

「さて……ツアレを悲しませた分の落とし前、つけさせてもらおうぞ」
ラキスケは空いている手を空中に伸ばしてアイテムボックスから何かを取り出す。ゼロからすれば、ラキスケの腕が途中から消えて何も無い所からなにかを取り出したように見える。

取り出した物は汚泥を煮詰めて固めたような細身の漆黒の剣であった。そのあまりの禍々しさにゼロの表情が引きつる。

「な……なんだそれは?! いったいどこからそんなものを!」

「腐剣コロクダバールさ。昔、遺跡で見つけた武器でね。危なすぎて普段は使わないけれども、その力の一端を味わってもらおうか」

200年前の英雄の一人が所有していたと言われる剣の名前を出されて青褪めるゼロに対して、ラキスケは鍛えこまれたゼロの左足の太股に腐剣コロクダバールを突き刺す。

「ぐわあ! ……な、何が起こっている!？」

ゼロが感じた痛みは一瞬だけ。不可解に思ったゼロが左足を見ると、腐剣コロクダバールによって傷つけられた場所が瞬く間にどす黒く変色していく様子が目に映った。そして太股から先の感覚が無くなって力が入らなくなる。

十三英雄の一人で悪魔の血を引くとされる「黒騎士」が所有していたという四本の漆黒の剣。そのうちの一本である腐剣コロクダバールは、癒えない傷を与えるとされている。

その正体は治癒の阻害とステータスダメージ効果、さらに腐食のスリップダメージに現在HPの認識阻害という四重のデバフを相手にもたらす呪いの剣。

痛みが一瞬だったのは現在HPの認識阻害の呪いが痛覚の麻痺という形で再現されたためだ。

程なくしてゼロの左足が腐った箇所からぐじやりと崩れてゼロがバランスを崩すと、ラキスケは続けてゼロの右足・左腕・右腕と順番に同じように突き刺す。

「があっ! 止めろ! ぐおっ、止めてくれ! ひいつ! せめて

……、普通に殺してくれえええ！」

痛み無しに体が腐り落ちていく感覚に、ゼロはラキスケに慈悲ある死を懇願するが……。

「ツアレは、お前たちの所で二年間も地獄を見てきたんだ。それでも、お前たちの方から手を出してこなければ……俺達はこれ以上関わらないつもりだった。それなのにお前たちはツアレの妹を黽つて、彼女達を再び地獄に引きずり込もうとした。お前たちを俺は許さない。お前はそのまま朽ち果てていけ」

「ああ……俺の、腕が……足が……」

己の武器であり六腕最強を誇った自慢の肉体を失ったゼロを地面に転がすと、ラキスケは腐剣コロクダボールをしまい、ツアレに歩み寄ってアイテムボックスからローブを取り出してツアレの妹を覆うように被せる。

そしてラキスケは外させられた武具を回収しながら影の悪魔と交戦している残る六腕を睨みつけた。

さすがはアダマンタイト級に匹敵すると言われる六腕だけあって、レベル30に近い——難度にして80〜90ある影の悪魔を相手に拮抗した戦いを繰り広げている。最初に取り押さえられてもがいているサキユロントを除いてだが。

「さて……さすがに影の悪魔の時間制限まで粘られた場合は面倒だな。早くセリーシアの治療もしたいし、残りはさっさと殺すか」
「それなら俺たちに任せてくれませんか？ ラキスケさん」

聞きなれていないはずなのになぜか懐かしさを感じさせる言葉に、ラキスケは咄嗟に声がした方向を振り向いた。

ラキスケが振り向いた先に現れたのは、非常に高価そうな漆黒のローブを纏った魔力系魔法詠唱者の格好をした者だった。

自分も持っているがツアレに出会い愛し合うようになってからは被れなくなつた奇妙な仮面——嫉妬する者たちのマスクで顔を隠し

ており、を示すプレートを首から下げて両腕には無骨なガントレットをしているが、かつて現実世界リアルでユグドラシルを遊んでいたところに所属していたギルドのギルドマスターを彷彿とさせる。

「あ……あなたは？」

突然現れた人物にツアレは困惑して妹を抱きしめる。

「え……そんな、まさか……。ひよつとして、モモンガ……さん？」

「ええ……お久しぶりです、ラキスケさん。ペロロンチーノさんも一緒に来ていますよ」

「おーい、ラキスケ。元気だったか！ それと、そちらの美人さんは誰？」

上空から聞こえてきた声の主は猛禽類の頭と翼を持ち、肘と膝から先も鳥の爪のようになっていているバードマンだ。

纏っている金色の派手な鎧からは、まるで金色の粉が散っては消えていくような輝きを放っている。手に持つ太陽の輝きを持つ弓は、有翼の爆撃王カッパークラスの異名を象徴する彼のメインウェポンである羿弓ゲイ・ボウだ。こちらも銅級カッパークラスを示すプレートを首から下げている。

「ペロロンチーノさんも！ 二人とも、どうしてここに？」

「積もる話は沢山ありますが、まずはあちらをどうにかしましょう。頼むぞ、ハムスケ」

ツアレが目にしたのは圧倒的な存在感を放つ白銀の毛皮と蛇の尻尾を持つ四足獣だった。深みある英知を感じさせる漆黒の瞳を持つ、伝説の魔獣といっても差し支えない強大さを感じさせる。

しかし、ラキスケにとっては違うようだ。

「えつと、この……でかいハムスターは一体何？」

「ラキスケさん、このでかいハムスターはハムスケ。トブの大森林で森の賢王と呼ばれていたこいつが同格の妖巨人トロールに襲われていたのを助けたら、懐かれました」

「この者が殿たちの御友人でござるか？ 某は森の賢王、殿たちに助けられハムスケと名付けて頂いた恩義のために忠誠を尽くす所存でござる」

「この大魔獣が、伝説の森の賢王……！ なんと英知を感じさせる雄

姿なのでしょいか

ツアレの感想を聞いたラキスケが困惑した表情で彼女に問いかける。

「えっ……ツアレ？ 見た目ハムスターだよ？ 大型鼠をもつと大きくしたような生き物だよ」

「ラキスケ様……、あの大魔獣を 大型鼠と同類に扱うのは失礼にあたるかと……」

「ええ……」

「ラキスケさん、慣れましょう……」

「俺達も通った道だからさ」

「……あ、はい」

「それでは、行ってくるでござるー！」

釈然としないラキスケを尻目にハムスケはそう言つて、影の悪魔と交戦中の六腕の四人の所に向かつて走り出す。

「影の悪魔、今からやってくる魔獣は味方だ。連携して残る六腕を始末しろ」

気を取り直してラキスケは影の悪魔にハムスケとの共闘の指示を送る。サキュロントを取り押さえていた個体はその際にサキュロントの首をへし折つてから援護に回つたが、ラキスケにとっては些事であつた。

ただでさえ自分たちと同じ数の影の悪魔と拮抗していた六腕の四人にとって、新たに一体追加されただけでなく圧倒的な存在感を放つ魔獣の参戦は致命的であつた。

蛇の様な鱗に覆われた硬質な尻尾による突きが放たれる。哀れな第一の犠牲者となつたのはマルムヴィストだ。

「びゅっー」

己の渾身の突きよりも遠い射程からの一撃を受けて顔面が半壊しながら絶命した。

第二の犠牲者はエドストレーム。マルムヴィストを沈めた一撃を受けまいと思わず五本の三日月刀をハムスケの前面に展開したことで、がら空きになつた背後から2体の影の悪魔が襲い掛かり、その鋭

利な爪で胴体と首を刎ねられた。

ペリユシアンはハムスケを狙って超速の斬撃を放つが、見た目にそぐわぬ金属質な毛皮に阻まれて傷一つ付けられない。

「お、俺の『空間斬』が……こいつにも効かないだと！ な、ならばせめて、うおおう！」

「ほう、某を前にしてなお立ち向かうでござるか。その心意気やよし！ 協力者殿、この者は某が相手をするから残るアンデッドを任せるとでござる！」

鞘から取り出した斬糸剣を鞭のように振るい、ハムスケに切りかかるペリユシアンに、戦士としての矜持を見たハムスケは1対1で相手することを選ぶ。

とぼつちりを受けたのは5体の影シャドウ・デーモンの悪魔の相手をする事になったデイバーノックだ。《火ファイヤー・ボール 球》や《雷撃ライトニング》をいくら連射できるとは言ってもこの数に包囲された状態では手数が圧倒的に足りない。

「くっ！ むざむざ滅ぼされるくらいならば！ 《下級敏捷力増大》！

《第四位階死者召喚》！」

影の悪魔に包囲される前にデイバーノックは自身に強化魔法を唱えた上で四体の骸骨戦士スケルトン・ウォリアーを召喚すると、影の悪魔シャドウ・デーモンにぶつけて一目散に霊廟へと逃げ込もうとする。

「なんと！ 仲間が一騎打ちをしている最中に戦わずに逃げるとは、戦士の風上にも置けない奴でござる！」

ハムスケの渾身の体当たりを受けて吹き飛ばされ、壁に激突してそのまま動かなくなったペリユシアンを尻目に敵前逃亡したデイバーノックをハムスケが非難する。

「ほざけ！ 私にはより多くの魔法を修得し、魔導の深淵を覗きこむ大望があるのだ！ このような所で滅ぼされ……」

デイバーノックの叫びは最後まで続かなかった。ラキスケが仕舞っていた翼を広げ、逃げるデイバーノックに飛翔して肉薄すると、その頭蓋を掴んで大地に向けて一気に力を込めて叩きつけたのだ。

バキバキと骨がへし折れる音を響かせながら、デイバーノックはそ

の偽りの生命をあつけなく滅ぼされる。

「お前如きが、彼の悲願と同じ言葉を口にするな」

「嘘だ……。俺たちが、六腕がこんなあつさりと全滅するだなんて……そんな、そんな……」

残るゼロも肉体を蝕む腐食の呪いによつて絶望に打ちのめされながら朽ち果てていく。

こうして、八本指の最強戦力である六腕は一夜にして瓦解することとなった。

「あの死者の大魔法使い、態々霊廟の方に逃げようとしていた。霊廟に伏兵でも置いていたのか？」

「ラクスケさん、俺の特殊技術で確認しましたがその霊廟の中からア宁德ッドの反応が多数ありますよ」

手に着いた骨の欠片を払いながら、ラクスケは疑問を口にする、モモンガが霊廟に潜むア宁德ッドの存在を告げる。

「そっか……。統率者を喪ったア宁德ッドたちが暴走する危険もあるからまとめて浄化しておくか。念のためにモモンガさんは少し離れてもらっていいですか？」

「分かりました」

《マジック・オブ・ピュアライフイネーション
《魔法最強化》《浄化の炎の陣》

ラクスケがこれから発動する魔法の効果範囲外にモモンガが出たのを確認すると、最上位浄化魔法を唱え、霊廟を包む様に炎の陣が描かれて陣内の大地が輝く。

「こちらが分かる範囲ではア宁德ッドの反応は全部なくなりましたね」

「確認ありがとうございます、モモンガさん」

ラクスケは回収した装備やマジックアイテムを着直しながらモモンガにお礼を言う。

すると、ペロロンチーノが武器を拾ってラクスケの方に持ってきて

くれた。

「ほい、理由は分からないけど身ぐるみはがされていたんだろ。拾っておいだよ」

「ありがとう。影シャドウ・デーモンの悪魔が奴らを奇襲する準備が整うまで引き付けておく必要があったからさ。要求を呑んで装備を外して時間を稼いでいたんだ」

「弱い装備ばかりだけでも、本来の装備はどうしたんだ？」

「ああ、そっちはアイテムボックスの方にしまつてあるよ。普段使いするには周囲に目立ちすぎるし、修理する当てがないからいざという時のために耐久力を温存しておきたいっていうのもあったからね。現地である程度安定して調達できる範疇で揃えたら、アダマントライト鋼から一段落ちるミスリルかオリハルコン辺りまで抑える必要があったんだ」

「そっか……。そう考えると俺達も普段使い用の格落ち品を用意しないとダメかなあ」

ラキスケが本来よりはるかに格の落ちる装備をしていた理由を聞いて、ペロロンチーノとモモンガは自身の装備に頭を悩ませる。

神器級ゴッズよりは数段劣る手持ちの他の装備にしても、アダマントライト鋼より上位の金属をいくつも使っている装備ばかりで、現地ではそれらも伝説に謳われるような装備になつてしまうからだ。

「まあ、その問題は俺個人の感性による部分もあるから好きにしていんじゃないかな？」

「目途がつくまではこの問題はいったん棚上げしておきますか」

「そうだね。ところで、一緒にいるあの女の子は誰？」

「彼女はツアレ。俺の恋人だから手は出しちゃだめだよ」

「寝取り寝取られは範囲外だから安心して……。って、「恋人!？」」

ペロロンチーノに釘をさすラキスケに対して、モモンガとペロロンチーノはラキスケに恋人ができたことに驚愕する。

モモンガとペロロンチーノはかつて妻帯者や彼女がいる一部を除いたギルドの男性陣でモテない同盟を結んでおり、その中にはラキスケも含まれていた。

無課金同盟よりも大所帯かつ長期にわたって続いていた同盟から、時を越えて離脱者が出た事実にもモンガ達は打ちのめされる。

「つまり、御二人は番つがいだということでござるな！ 某も子孫を残すために同種の雄と番になりたいでござる……」

「まあ、色々あつて二年前に出会ってからおつきあいしているんだけど、今回はそれ絡みで報復に來た犯罪組織から刺客が送られてきたんだ」

「ラキスケ様がいなかったら、私は二年前のあの日に殺されてしまった」

「まるで、たつちさんの現実リア世界での奥さんとの馴れ初めみたいですね。……つてハムスケ、お前メスだったのか!？」

「酷いでござる、殿お。どこからどう見ても某は立派なメスでござる！」

「それなんて恋愛ゲー的展開？ ラキスケってばこつちの世界で人生エンジヨイしてない？」

話題がごちゃごちゃしてきて收拾がつかなくなりそうな気がしたので、ラキスケは一旦咳払いして話を切り出すことにする。

「とりあえず、人質にされていたツアレセリーシアの妹に盛られた薬を先に解毒するから、詳しい話は落ち着いてから宿屋でしましょう」

「そうですね。俺もラキスケさんとは落ち着いたところでお話したいです。ここの事後処理は冒険者組合に任せるとして、組合にはどう説明したのか……」

ラキスケはツアレに歩み寄って眠っているツアレセリーシアの妹に《大治癒ヒー》を唱え、それから《生命の精髓ライフ・エッセンス》や他人の状態異常を調べる魔法で異常がないことを確かめる。

「これで大丈夫なはず。それじゃあ、街に戻ろうかツアレ。妹は俺が運ぶよ」

「分かりました。妹セリーをよろしくお願いします」

「ふむふむ、この展開は妹ともフラグが立っての姉妹ど……」言わせないうぞ、ペロロンチーノ「……あつはい、すみません。ドスの利いた低い声は姉ちゃんを思い出すから勘弁して」

ラキスケはツアレからいまだに眠ったままの彼女の妹を受け取って、所謂お姫様抱っこで運ぶ。

ズーラーノーンの十二高弟の一人の野望を打ち砕いたことに気が付かぬまま、ラキスケ達は墓地を後にするのであった。

第十一話 ※エロ無し

六腕との戦いから一夜明け、エ・ランテルの冒険者ギルドの会議室のような部屋に、ラキスケや服を着替えたセリーシアだけでなく銀級の冒険者プレートプレートを首から下げた三人の若い男達も詰め掛けていた。

彼らはニニヤ——ツアレの妹であるセリーシアが用いていた偽名——と組んでいる冒険者チーム「漆黒の剣」のメンバーだ。

彼らは前日から行方不明になっていたニニヤを探して都市中を駆け回り、野伏レンジャーのルクルット・ボルブが墓地から出てきたラキスケ達と遭遇した際には一悶着あったが、その頃には目を覚ましていた彼女の証言から穩便に済ませることができた。

その後、冒険者組合からはラキスケがワーカーであることから犯罪行為を疑われたが、オリハルコン級冒険者チーム「森妖」のアラビータと、ミスリル級冒険者チーム「クラルグラ」のイグヴァルジが事情を説明して執り成しながら聴取は進んでいった。

証言をもとに現場に派遣された冒険者たちの報告から、墓地の最奥にある靈廟近辺の死体は王国に根付く犯罪組織である八本指の構成員の中でも、装備の品質から最上位に位置する戦闘員であること。そして靈廟の隠し部屋からは秘密結社スーラーノンの存在と、都市を死都に変貌させる邪悪な儀式である死の螺旋の実行計画を仄めかす証拠品が見つかったことが確認された。

これらの情報と死エルダーリッツの大魔法使いが八本指の構成員にいたという証言をもつて、冒険者組合は八本指がスーラーノンと結託してこの都市で戦力拡充のための実験を行おうとしており、それをラキスケ達によって阻まれたと判断。ニニヤはその稀有なタレントと適性の噛み合いから死の螺旋でアンデッド化させる素体として誘拐されたという事になった。

冒険者組合の聴取を終えて、心身共に疲労しているツアレは森妖の面々にお願ひしてマリナラの所で休んでいる。可能性は高くないだろうが、一人で宿屋に戻らせると八本指の手の者に攫われる危険があると考えたからだ。

戦士風の金髪碧眼の男性——漆黒の剣のリーダーであるペテル・モーク——が深く頭を下げるのに合わせて残る三人も深く頭を下げる。

「それでは改めて、ニニヤを……俺たちの仲間を助けていただいて、本当にありがとうございます！」

「いや、ニニヤの恩人なのに疑っちゃってごめんね」

「ルクルット、へらへらししないでちゃんと謝るのである！ 本当に申し訳ない！」

「それだけ仲間の事を深く思っていたという事ですし、無事に済みましたからそのお気持ちだけで大丈夫ですよ。むしろ、今までツアレの妹と一緒にしてくれたのが貴方達で本当に良かったです」

全体的に痩せ気味で、手足の長いルクルットの非礼を詫びているのは、かなりがっしりした体格の森祭司^{ドレイド}であるダイン・ウッドワンダーだ。

「実は漆黒の剣の皆様依頼したいことがあるのですが、まずは話を聞いて頂けないでしょうか？」

「俺たちに依頼……ですか？」

「はい。実は今回の一件で俺はこの王国でやらなければならないことができてしまって、ツアレと一緒にホームであるバハルス帝国の帝都に戻る事ができそうにないんです。そこで、漆黒の剣の皆様には帝国の商人であるマリナラ氏の護衛という名目で、ツアレを帝都まで送ってほしいのです。依頼料は一人当たりこの辺りで……」

漆黒の剣の面々に相談を持ち掛けてラキスケが見せた金額は、銀級冒険者が受けるレベルの護衛依頼と比べても大分高い金額であった。

ペテルはしばし考え込んでから口を開いた。

「……いくつか窺って宜しいですか？ まずその依頼、私たちの安全のために王国から離れさせる意味合いもありますよね？」

「ええ。王国にいる限りは、八本指の手の者がいつやってきてもおかしくありませんからね。ほとぼりが冷めるまでは、八本指でも手が出しにくい帝国に避難していただきたいのです。長引きそうな場合にはある程度生活費をこちらで負担させていただきます」

「生活費も出してくれるなんて、太っ腹だね〜」

「ルクルトト、まだ依頼を受けると決まったわけではないのだから、誤解を招く言い方は控えるのである」

「でもさあ、折角ニニヤの姉貴が見つかったのに、この依頼を受けなかったらまた離れ離れになっちまうんだぞ」

「姉さんと……また。でも……」

ルクルトトの言葉に、セリーシアは身体を震わせて呟く。ツアレを助けるために村を出た彼女にとって、再開した姉と再び離れ離れになる事は耐えがたい事だろう。しかし、だからと言って自分の都合のためにチームのメンバーを巻き込む事も、相当抵抗があるようだ。

「もう一つ確認させてください。ラキスケさんは王国に残って一体何をなさろうとしているのですか？」

「それに答えさせていただく前に……失礼、これで防音は大丈夫ですね」

ペテルの質問に対して、答える前にラキスケは懐から取り出した道具を発動させる。

すると、部屋の外の音の聞こえ方が遠くなったような気がしたようにペテル達は感じた。

それからラキスケは質問に対して答え始める。

「簡潔に言えば、八本指に対する報復です」

「報復……」

「そもそも俺が八本指に狙われるようになった切欠は、二年前にツアレを助けたことです。言っておきますが、俺はそのことに対して後悔なんて一欠けらもありません。ですが、これ以上関わり合いにならないければいいと考えた当時の俺の甘い判断の所為で、セリーシアは危うく死ぬよりひどい目に遭う所でした。八本指の行動次第では、皆さんも口封じをされていたかもしれません。だからこそ、二度とこういう真似ができないように八本指を徹底的に叩くつもりです」

ラキスケは当時のツアレの詳細をぼかしながら、過去にあった八本指との因縁とこれからどうするのかを伝える。

すると、漆黒の剣の面々はラキスケを心配して必死に止めようとし

始めた。

「まさか一人で行くつもりですか!? 無謀です!」

「王国の暗部を牛耳っている裏組織を相手にするのは拙いって!」

「二ニヤからは聞いたが、八本指と懇意になっている貴族も多くいるという話である!」

「そんな、姉さんを助けてくれた方が危険に晒されるなんて嫌です!」

漆黒の剣の面々の説得に、ラキスケは微笑みながら答える。

「ふふっ。皆さんが俺を心配してくれるのはとても嬉しいです」

「でしたら!」

「ですが、俺達に対して差し向けた刺客が返り討ちになったことを八本指が知ったからと言って、大人しく手を引くとは考えにくいんです。より強い戦力を投入してくるのか、それとも権力を利用してくるのか……。場合によっては俺が人間ではないことを理由に軍や冒険者に討伐させようとするかもしれません。負けるつもりは毛頭ありませんが、そのために無関係な周囲が傷つくのは、心にききますからね」

「決心は……。変わらないんですね」

「ええ……。俺たちの未来のためにも、八本指がのさばっているのは非常に困ると痛感しましたので。……。それで、この依頼を引き受けてくれますか?」

「……結論はこの場で出しますので、チームのみんなと相談させてください」

ペテルはそう言って、ラキスケから少し離れて漆黒の剣の面々と相談し始める。

そして大凡10分ほど経過した頃だろうか。結論が出たのか、それほどペテルはラキスケの前の席に座り直すと口を開いた。

「決まりました。その依頼、漆黒の剣が引き受けさせていただきます」

「ありがとうございます。それでは組合の方には指名依頼を出しておきますね」

漆黒の剣の判断に、ラキスケは安堵した表情で謝意を伝えるのだった。

漆黒の剣との話し合いの後、彼らには組合の建物の前にいるハムスケの所で先に待ってもらおうように頼み、ラキスケが組合受付で指名依頼の手続きを終えた所で、モモンガとペロロンチーノが別の部屋から出てきた。

周囲の冒険者たちの視線がモモンガとペロロンチーノに集まる中、二人はラキスケを見つけると近づいてくる。

「お待たせしました、ラキスケさん」

「いや、待たせちゃってごめんね」

「いえ、こちらも彼らへの指名依頼の手続きを丁度終えた所でしたから。それでは二人とも、行きましようか」

「はい」「うん」

そのままラキスケ達が外に出ていったのを確認すると、その場にいた冒険者たちは騒めき出した。

「亜人がこの都市で冒険者になるなんて、この都市じゃ今までなかったことだよな？」

「ああ。それに見た感じ、魔法詠唱者と弓手アーチャーのコンビだな。相手に近づかれないようにするのはどうしているんだ？」

「なんでもあの奇妙な仮面をつけた魔法詠唱者の方は、巨大な魔獣を従えているって話だぞ」

「俺は昨晚偶々見かけたけどよ、あの深い英知を感じさせる瞳は相当な魔獣だつて一目でわかるぜ」

「マジかよ。一体そんな立派な魔獣をどこで見つけたんだ？」

感嘆・瞠目・驚愕を秘めた会話が飛び交う中、ぽつりと呟いた男がいた。

「その魔獣は森の賢王だ」

森の賢王、それはトブの大森林を住みかとする伝説の大魔獣である。

冒険者たちがその言葉を発した人物の方を見やると、そこにはミスリル級冒険者チーム「グラルグラ」のイグヴァルジが椅子に座って

いた。

イグヴァルジのチームはこの都市一番の薬師の孫であるンファイア・バレアレの依頼で昨夜戻って来るまでカルネ村へ向かう護衛を請け負っていた。

本来ならばこの都市で最高位であるミスリル級冒険者が引き受ける難度の依頼ではない。しかし、大凡10日ほど前にトブの大森林近郊で発生した大きな爆音を伴った謎の大規模な発光現象の影響で、トブの大森林の近くへは低位の冒険者は近寄らないようにという組合側からの要請があったことから、今までチームメンバーを喪ったことが無い実績を持つクラルグラに白羽の矢が立ったのだ。

「森の賢王だつて！ イグヴァルジ、お前何か知っているのか!？」

「さん付けしろよ、さん付け。少なくとも俺達がカルネ村に到着した時点で、森の賢王はモモンガっていう魔法詠唱者に懐いていたぞ。今はハムスケとかいう名前と呼ばれている」

「森の賢王が同行するくらいに懐くとは、一体何をやったんだ？ ……それにしても、よくこの都市の検問で止められなかったなあいつら」

「俺はこの都市に帰る際に依頼人だけじゃなくてあいつらとも一緒になったんだけどよ、あいつらはガゼフ・ストロノーフの紹介状を持っている」

「ガゼフ・ストロノーフって言えば、近隣諸国最強と言われるこの国の戦士長じゃないか！ 何がどうしてそんな有名な紹介状が出てくるんだよ」

「そこまでは知らねえよ。他に分かっているのは、あいつらが言っていることだが遠い所から旅をしてきたってことぐらいだ。…昨日から俺もほとんど寝ていないから、今日はこれであがらせてもらおうぜ」

イグヴァルジはそこまで言い切ると、もう話せることはないと言いつつ上がって欠伸をかみ殺しながら組合の建物を後にした。

イグヴァルジへの質問を終えても謎が尽きない未知の二人組への興味が飛び交う騒めきは、結局結論が出ないまま昼過ぎにはお流れと

なった。

ラキスケはモモンガとペロロンチーノ、漆黒の剣の面々を連れて街道を歩く。あまり広くない通りだが、モモンガの後ろについていくハムスケの威容に気圧された通行人たちが彼らを避けていくため、歩く邪魔になることはない。

始めは人間ではないペロロンチーノや知性のある大魔獣であるハムスケに怯んでいた漆黒の剣のメンバーも、話している内に打ち解けていっていた。

ラキスケがモモンガ達に等級についての話を聞いてみると、トブの大森林の主の一体であった森の賢王を従えている事実と、ズーラーノーン及び八本指の企みを阻止した功績から、冒険者に成りたてでありながら二人とも、近々何段階か飛ばして昇級することが決まったようだ。

死の大魔法エルダーリッチを使いを役する犯罪組織を討伐した事実を鑑みれば、実力としてはミスリル級でもおかしくはないが、正式な依頼は受諾していなかった事と、冒険者として今まで実績がなく事件の調査も不十分だという事から、調査が完了してからそれまでに依頼達成した結果も踏まえた等級に昇格するという結論に落ち着いたのだという。

「そういうえば俺達はまだ冒険者としての正式なチーム名をつけていないけれどさ、漆黒の剣ってどういう由来で付けたチーム名なの？ チーム名をつけるときに参考にしたくてね」

ペロロンチーノの言葉にルクルットが苦笑いを浮かべる。他の面々も似たような反応で、特にニニヤは恥ずかしい記憶を突き付けられたのか顔を仄かに紅く染めている。

「ああ、それね。実は俺達がチームを結成した時にニニヤが欲しいって言った伝説の武器から取ったんだ」

「ルクルット。若気の至りというものであまり言いふらさないでくれませんか」

「恥じることはないのである！ 夢を大きく持つことは重要な事である！」

「ダインまで。勘弁してくれませんか、本当に」

漆黒の剣の面々がニニヤに朗らかに笑いかけて、ニニヤは転げまわりそうな雰囲気です。恥ずかしがっている様子を見たモモンガは、ふと自分がギルド拠点のNPCとして作成したパンドラス・アクター歴を思い出します。

（あるよなあ。当時はカッコいいと思っていた内容が、後々見返すと恥ずかしくてたまらない事って。軍服は今でもカッコいいと思うけどさ）

「へえ。俺達ってこの辺りから遠く離れた所から旅してきたからさ、その伝説の武器ってどういう代物なのか教えてもらっても良いかな？」

「分かりました。漆黒の剣というのは十三英雄の一人で『黒騎士』と呼ばれる方が持つ四本の剣の事なんです。それぞれ異なる特殊能力を有した強力な魔法の武器といわれていて、闇のエネルギーを放つ魔剣キリネイラム、癒えない傷を与える腐剣コロクダバル、かすり傷でも死に至らしめる死剣スフィーズ、そしてどんな特殊能力を持つかも不明な邪剣ヒューミスです」

ペテルが四本の剣の名前を挙げたところでラキスケがぴくつと反応する。

「なるほどなあ。まるでカースドナイトの特殊技能スキルみたいだね」

「カースドナイト？ 初めて聞きますが、どういうものなのでしょうか？」

「カースドナイトは呪いによって汚れた神官騎士とされる職業で、様々な呪いに苛まれる代わりに強力な力を得るって言われているんだ。その中にさつき話に出てきた剣の特殊能力と似たような特殊技能スキルがあるんだよ。多分だけど、その四本の剣はカースドナイトの特殊技能を武器で使えるようにしたものなんじゃないかな？」

「なるほど。そんな職業があったなんて知りませんでした」

「ペロロンチーノ殿は物知りであるな！」

ペロロンチーノの説明に感心する漆黒の剣の面々。ペロロンチーノもドヤ顔で胸を張っている。

「とまあ、この四本の剣を発見するのを俺たちの第一の目標ってわけさ。伝説の武器本当に色々あるけれども、その中でも存在がしっかりと確認されている武器だしな。まあ、今も本当に残っているのかは不明だがねー」

「……あー、その武器のうち二本は誰が持っているか知っています」
バツが悪そうにラキスケが話した爆弾に、漆黒の剣の全員が弾かれたように勢いよく向き直る。

「だ、誰ですか!」

「うおー! マジかよ! 半分はもう見つかったんのかよ!」

「むう。全員分行き渡らなくなったのであるな……」

ラキスケは頬を掻きながら答える。

「えっと、一本目は魔剣キリネイラム。持ち主は王国のアダマンタイト級冒険者『蒼の薔薇』のリーダーを務めているラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ」

「うげえ。最高峰であるアダマンタイト級かあ。じゃあ仕方ねえか」

「それじゃあ、もう一本は……?」

「もう一本は腐剣コロクダバール。持ち主は……俺」

「……はい?」

目の前に目標としていた武器の持ち主がいると言われ、思考が停止する漆黒の剣の一同。

「伝説の武器を手にいれているなんて凄いやないですか、ラキスケさん。……ちよつと見せてもらっても構いませんか?」

「……お、俺達にも是非!」

アイテムコレクターでもあるモモンガがまず食いついて、続いて漆黒の剣の面々もそれに追従する。

「良いですけど、目的地に着いてからでお願いしますね」

ラキスケは後で見せることを約束すると、再び歩き出す。

やがて空気に薬品や潰した植物の匂いが含まれる区画に到着すると、ラキスケは左右を見渡し始めた。

「えっと、確かこの辺りのはず……あった。あそこで待ち合わせすることになってるんだ」

ラキスケが指さしたのは店舗と工房が前後に並ぶ中でも最も大きく、そして工房に工房を継ぎ足し、さらにそこに工房を継ぎ足して建てられたような家屋であった。

ラキスケが入り口の扉を押し開けると、上に取り付けられていた鐘が来客を告げる音を大きく鳴らす。

「失礼します。マリナラさんと待ち合わせをしている者ですが」

入った部屋の中央には向かい合った長椅子が置かれ、そこには待ち合わせをしていたマリナラが老婆と少年——リイジー・バレアレとンフィーレア・バレアレの二人と熱心に話をしており、その脇で森妖の面々が立つ。そしてツアレがもう一人の少女——エンリ・エモットと一緒に話をしながら座っていた。

「お帰りなさい、ラキスケ様」

「ただいま、ツアレ」

立ち上がってラキスケに寄り添うツアレをラキスケは優しく抱きしめて、そのまま唇を重ねようとしたところで邪魔が入った。

「ラキスケさん？ その行動は彼女のいない俺達を煽っているんですか？」

「PVPの申し出ならば受けて立つよ。俺とモモンガさんの二対一で」

モテない同盟のモモンガとペロロンチーノである。いつの間にかペロロンチーノも嫉妬マスクをつけているあたり、本気で怒っているわけではないが妙に芸が細かい。

「あ……ごめん。仕事明けの感覚でつい……」

「す、すみません。他の方がいるのにはしたくない事をしてしまつて」

二人は謝罪するが、互いを抱きしめている腕は放していない。

（いや、雰囲気は桃色になってるからまずは離れろよ……。っていうか仕事明けはああやってるって……）

モモンガとペロロンチーノは、かつてはモテない同盟を結んでいたラキスケの変わり様に驚きながら、同時にそう思った。

「姉さん……」

ニニヤも行方を捜していたツアレ姉の様子に呆れている。

「おやおやく。レイジーさんと有意義なお話をしていましたら、随分と熱々ですね〜」

「ンファイレアがここまでとはいかなくても、もう少し積極的になってくれると曾孫が生きている内に見られるかもしれないのには」

「お、おばあちゃん!」

「ンファイとはまだそう言う関係じゃ!」

「ほう、まだ……と。なんじやい、ちよつと前まではエンリの嬢ちゃんと友人からちつとも進んでいないと思っていたら、交際すると言い出して、そういう事を意識するくらいには進んでいるじゃないかい」

レイジーの言葉にンファイレアと呼ばれた少年と、エンリと呼ばれた少女が赤面する。

「この流れ、俺にもきつとチャンスが来る」

「そう思い続けて幾星霜。冬の時代は未だ終わらず。アラビータに先を越されたのはショック」

「おいこら」

「アラビータ、落ち着いて下さい。ジエノーベとヴァージリッコも仲間をそういう風におちよくらないで」

森妖の面々にも飛び火した辺りで、モモンガが咳払いして周囲の目を自分に向けさせる。

「……あー、恋愛事情は人それぞれですが、今はまずやるべきことを先に済ませませんか?」

「そうですね〜。ラクスケさんから《メッセージ伝言》で事前連絡はありましたが、今後の予定について再確認と調整をしないとイケませんしね〜」

「あ、あはは……。重ねてごめん」

ラクスケは謝罪すると、名残惜しそうにしながらようやくツアレの身体を放す。

それから一通り自己紹介を行うと、それぞれの用事を片付けていく。

その際に、ンファイレアから話を聞いていたレイジーがモモンガに

赤いポーション——マイナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬を見せてもらおう。

するとリイジーは神の血と呼んで狂ったように笑いだし、どこで手にいれたのかを鬼気迫る勢いで聞き出そうとしたり、それが薬師にとつてどれほどの価値があるのかを熱弁し始める。

さらには既に滅びた国という設定で誤魔化したユグドラシル跡地へ案内する様に要求し始めたので、最終的にモモンガがマイナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬を研究用としてバレアレ薬品店にいくつか売却することで落ち着いた。

その時のモモンガ曰く、

「負ける要素は一切ない筈なのに、あの剣幕に凄いビビッて精神安定化が何度も発動した」

とのことである。

マリナラは残る交渉事が終わる数日後にエ・ランテルを出発して帝国に戻る予定で、その時にツアレと漆黒の剣の面々も同乗することになった。

他にも大凡の用事を片付けたところで、モモンガや漆黒の剣の面々と交わした約束も果たすために、他の人たちに取り出す様子が見えないように背を向けてからアイテムボックスにある腐剣コロクダバールを取り出して一同に見せる。

「これが、腐剣コロクダバール……!」

「なんとも禍々しい剣であるな!」

「僕たちが探し求めていたうちの一本りが目の前にあるだなんて」

「うひゃー、確かにこんなので斬られたらただじゃ済まなさそうだ」

汚泥を煮詰めて固めたような細身の漆黒の剣を見た漆黒の剣の面々からは、畏怖を伴った感想が漏れ出る。

「薬師としては、傷を癒せなくする武器というのはありがたいですけれどね……」

「一応、呪いの類だから解呪できれば治療はできるんですけどね」

「……一応確認しますけど、解呪にはどの程度の力量が必要ですか?」

「大凡だけでも、治療と解呪に特化した神官で第五位階相当の実力は必要かな?」

「それって英雄の領域じゃないですか!? 蒼の薔薇のリーダーでもできるか怪しいですよ!」

ンフィーレアは王国のアダマンタイト級冒険者でも解呪できるか分からない、腐剣コロクダバールが齎す呪いの恐ろしさに驚愕する。同じようなことを言いそうなりイジーは、モモンガから買い取ったポーションを詳しく調べるために既に実験室へと籠っているため、この場にはもういない。

「えーと、どれどれ。《道具上位鑑定》……ほうほう、なるほど。こんな効果が含まれていたから、黒騎士は一人で四種類の剣を持っていたのか」

「えっと……モモンガさん? 何か分かったのですか?」

モモンガは腐剣コロクダバールを調べるために魔法を使うと、頭の中に浮かび上がってきた情報に感心している様子だ。魔法詠唱者であるニニヤが問いかける。

「どうやらこの剣は他の暗黒剣を全て揃える事で、より強力になるようです」

「この武器、さらに強くなるんですか!」

「ええ、この剣の場合は呪いの種類と効力が強化されるようですね。おそらくですが、一つ一つの武器に組み込める容量の限界を補うためにシリーズアイテムを別々の武器に組み込んで、それらを関連付けることで一つの武器にまとめた際の効力を条件付きで発揮できるようにしたのでしよう」

「なんか良く分からないけど、全部揃うともっと凄くなるっていう事だけは分かった」

「そろそろしまいたいけど、もういいかい?」

ラキスケは腐剣コロクダバールを一通り見せ終わると、懐から無限の背負い袋を取り出してその中へとしまおう。

見た目よりも多くのものを収納することができる魔法の背負い袋の存在はペテル達も知っているが、中々に高価な品なために実物を見るのは初めてのようで、その様子をまじまじと見つめていた。

「それでは、皆様も昨夜から忙しかったでしょうし、そろそろお開き

といたしましたしょうか」

「そうだね。僕もおばあちゃんと一緒に神の血のポーシオンを調べなくちゃ」

「もう、ンファイーってば。本当にポーシオンの事になると周りが見えなくなるんだから。しようがないわね」

昨夜からあまり寝ていないにもかかわらず、ポーシオンの研究に勤しもうとするンファイーレアに、エンリは口では呆れながらも優しい表情で見つめていた。

「ピュアな恋愛空間は心に沁みるんじやー」

「激しく同意」「こんな恋愛してみたい」

「……同士よー」

その様子を見たペロロンチーノは身体をくねらせ悶えている。ジェノーベとヴァーヅリツコも同意して、三人の間に奇妙な連帯意識が芽生えていた。

その様子を見たラキスケは、ユグドラシル時代のペロロンチーノの性癖とのずれを感じ、モモンガに尋ねた。

「ペロロンチーノさん、以前より初心なくなってる？」

「なんでも、大作になると読んで購入したエロゲが寝取られEndのオンパレードだった上に、寝取られるヒロインの容姿がシャルティアに似ていて声を当てていたのが茶釜さんだったようで……。それ以来、純愛物を欲しているそうです」

「ああ……、それはきつい」

ペロロンチーノの性癖が変遷した事情にラキスケは同情する。

実の姉が好みの容姿をしているヒロインの声を当てているだけでもきついのに、それが何度も寝取られるとなるとそのショックは計り知れないだろう。

「まあもう少しすれば戻って来るでしょう。……ラキスケさん、例の件の話でこの後よろしいですか？」

モモンガの例の件とは、墓地では一旦後回しにしていた、自分たちがこの世界にやってきたことについてだ。

ラキスケとしても折を見て二人とは話し合おうと思っていたので

了承する。

「ええ、良いですよ。それで俺達だけになれそうな場所に心当たりはありますか？ 俺達が宿泊している宿屋——黄金の輝き亭は個室もありますけどかなり値段が張りますし、そもそも王侯貴族とか大商人御用達の宿屋だから、これ以上人間以外の他種族を入れさせてもらえるか……」

「……すみません。他の場所を探そうにも、昨夜この都市に来たばかりでどこに何かあるのかほとんどわかりません」

「それでしたら、私が使っている馬車を利用してはいかがでしょうか？」

話し合いの場所に困っていたモモンガ達とラキスケだが、そこでマリナラが助け舟を出した。

「えっ、良いんですか？」

「ラキスケ様のご友人という事ですし、業務提携したりイジーさんに有意義な物を売ってくださったので、今回は特別に無償でお貸ししますよ」

「ありがとうございます。それではそろそろ……」

「そうですね、そろそろ行きましようか」

「ええ、分かりました」

「それじゃあツアレ、そろそろ——」

「——エンリさん、ンフィーレアさんと頑張つてね。はい」

ラキスケはツアレを呼ぶと、エンリと何かを話していたツアレは最後に一言添えてからラキスケに近づいて、彼の腕に抱き着く様に体を絡めた。

マリナラも森妖の面々を連れて宿に戻る準備を始めている。

モモンガとペロロンチーノの他に、ジェノーベとヴァーヅリツコからの「リア充もげろ」という思念を込めた視線を、ラキスケは努めて無視するのであった。

第十二話 ※エロ無し

城塞都市エ・ランテルにある馬車の中でもマリナラが所有する馬車は立派だ。六人以上が乗り込んでもまだ余裕がある大型馬車の車内にいる面々は、ラキスケ、その隣にツアレ、そして向かいの席にモモンガとペロロンチーノの四人。ハムスケは馬車の隣で寝息を立てているがその眠りは浅く、誰かが近づいてくればよほど隠れるのがうまくない限りはすぐに目を覚ますようになっていく。

「……よし、これでひとまずは大丈夫かな。それじゃあ二人とも、まずは何から話をしようか?」

ラキスケが幾つかマジックアイテムを起動して外に声が漏れないようにしてから、モモンガとペロロンチーノに話題を尋ねる。

モモンガは手を顎にやってどれから話題に出すかを考えていると、ペロロンチーノが挙手をして口を開いた。

「はいっ！ それじゃあ、ラキスケとツアレちゃんの馴れ初めからで！」

「ペロロンチーノさん、いきなり本筋から脱線しないで下さいよ。もっと聞かなくちゃいけない事は沢山あるでしょう? ユグドラシルからこちらに来たのはいつ頃だったとか、他にプレイヤーと出会ったりはしたのかとか……」

「二人とも相変わらずのようで、安心しましたよ」

ラキスケは昔の記憶と変わらない二人の様子に苦笑しながら、口を開く。

「そうですね……、俺の場合はユグドラシルでモモンガさん達と一緒に遊んでいる途中、頭痛がしたから断りを入れようとしたら意識を失って、此処から南にあるエルフの王国の近くにある森の中で目を覚ましたんです。それが大体、100年くらい前だったかな?」

「そもそも時代が違ったかあ……。そうになると、こうして出会えたのは本当に奇跡だなあ」

「ひゃ……。百年。よく覚えていられたなあ」

モモンガは出会えた奇跡を噛み締め、ペロロンチーノが感心してい

る。

二人の様子から、ラキスケは少なくとも二人は自分とはこの世界にやってきたタイミングが違う事を察した。

「ラキスケ、シヨックな話になるけどさ……お前、現実世界では俺達がかつちに来る数年前に死んでいるんだ」

「えっ……ラキスケ様、が？」

「ああ……異世界転移じゃなくて異世界転生の方だったのか。考えてみれば、現実世界では身体ボロボロだったし、あり得ない話ではないか」

「あれ？ 意外とシヨックが小さい？」

「うーん。体感時間としては現実世界よりもこの世界の方がかなり長く生きているからね。それに、この世界に残っているプレイヤーと思いき痕跡とかを調べると、俺がユグドラシルをプレイしていた頃は健在だったギルドと思いき廃墟が存在したりするから、少なくともこの世界にやってくるときに時間の流れは歪んでいるんだなって漠然とは感じていたし」

「待って、ギルドも転移していたりするんですか？」

「憶測の域は超えないけどね。現地の人たちでは作れないアイテムや装備品が発掘されることがあるから」

現実世界という場所で、ラキスケが死んだことになっていて事を聞いて動揺しているツアレの頭を撫でて落ち着かせながら、ラキスケはワーカーとしての経験則に基づく推論を語る。

「まさかギルドごとこの世界にやってくる可能性があったなんて。ひよつとすると、ナザリツクもどこかに転移している可能性が？」

「今後も含めると、可能性はゼロではないかな。それと、NPC達も設定をベースに不足分は製作者の性格が反映された状態で自我が芽生えるらしいよ」

「……え？ NPCに、自我？」

「うん。ペロロンチーノさんのシャルティアなんか、凄い事になっていと思う」

ラキスケの言葉に、モモンガとペロロンチーノの二人はそれぞれ自

分のNPCを思い出して悶絶し始めた。

シャルティアは、ペロロンチーノの性癖をこれでもかと詰め込んだ吸血鬼のNPCであり、モモンガのNPCであるパンドラズ・アクターは、中二病を患っていた制作当時のモモンガが思い描いたカッコよさを詰め込んだドツベルゲンガーのNPCだ。

「あ、あの……お二人とも、大丈夫でしょうか？」

「ツアレ、若かりし頃の恥ずかしい記憶を思い出しているだけだから、大丈夫だよ」

「あ……はい。ラクスケ様がそうおっしゃるなら」

心配するツアレに問題ない——ある意味では大問題だが——事をラクスケが告げる。

「それはそうと、二人はどういう切欠でこの世界にやってきたんですか？ その様子だと、俺の時とはだいぶ違うようですけど」

「ああ……、俺達の場合はユグドラシルが最期を迎えるので、ナザリツクの近郊で花火を盛大に打ち上げたら、気がついた時には草原にいましたね。大体10日前の夜です」

「……ん？ 10日前で……夜で……花火？」

「……あ」

二人が転移した時期や場所が、同じ頃にトブの大森林の上空を中心とした闇を完全に消し去るかのような謎の発光現象と被っている事に気がついたラクスケが、二人を問い詰め始める

「二人とも、ちよつと良いですか。花火はどんなのを使ったんですか？」

「そ、それは……その。花火自体は運営が安く販売した市販の打ち上げ花火です。ただ……結構な量がありました」

「なるほど……。どのくらいの数だったかは覚えていますか？」

「俺とモモンガさんで、五千発……ずつです」

「……では最後に聞きますけど、10日前にトブの大森林の近くで発生した爆音と発光現象について、思い当たる節は？」

「……ご、ごめんなさい。まさかあんなタイミングで異世界転移するだなんて、思わなかったんです」

二人の自白に、ラキスケは目元を手で覆って天を見上げる。ツアレも、帝国と王国の両国で騒ぎになっている噂の正体に顔を引きつらせていた。

「どうか……どうかこの件は内密に！」

「カルネ村の人たちやガゼフ戦士長にバレたら、白い目で見られるどころじゃない！」

二人の必死の嘆願に、ラキスケはなんで王国の戦士長の名前が出てくるの？　と思いつつ、口を開いた。

「……まあ、俺も吊し上げるために聞いたわけではありませんし、二人の場合は不可抗力だったわけですから、どうこう言える立場ではありませんけどね」

「本当にすみません……」

「ただ、森は相当荒れるでしょうから、フォローはしておいてくださいよ？　ハムスケという森の賢王が不在になっているならなおさらでしょうし」

「その点は西の魔蛇と呼ばれるナーガのリュラリユースにハムスケの縄張りを引継いで貰ったりとか、周辺の村を襲わないようにする約束とかは取り付けたので、一応大丈夫なはずですよ」

「東の巨人って呼ばれていたトロールももういないから、モモンガさんが護衛と監視を兼ねて置いていた死の騎士デス・ナイトもいるし、トブの大森林はもうしばらくしたら安定すると思うよ」

「それなら、まあ……良いんじゃないかな？　他には——」

情報交換を兼ねた交流はそれから続いた。

ラキスケと組んでいるビアンゴや、敵対するエルフの狂王などのNPCについて、日々の生活をどうしているか、Etc……。

情報交換を兼ねた交流も進んだ頃、ラキスケの隣で聞き役に徹していたツアレが口を開いた。

「そういうえば、ペロロンチーノ様は私とラキスケ様の馴れ初めをお聞きしたのでしたよね？」

「えっ良いの？　恥ずかしかつたりしたら無理して話さなくても良いんだよ？」

「ツアレ……、思い出すことが辛かったら、無理しなくて良いからね」
「待って、そんなに重い話なの？ 俺、聞いちやいけないこと聞こうと
していた？」

「……いえ。私とラキスケ様の出会いは、昨夜の事にも大きくかか
わっているので、話させてください」

ツアレの口から語られたのは、ラキスケと出会うまでの悲惨な半生
であった。

幼少期に両親を喪い、妹と共にひもじい思いをしながら暮らしてい
た村娘の頃。

下衆で醜悪な領主に妾として連れ去られ、慰み者として弄ばれた六
年間。

その領主に飽きられて八本指が経営する娼館に売り払われた地獄
の二年間。日々下衆な客の慰み者になり、時には暴力を伴った輪姦や
動物との交わりを強要されたこともあったこと。

そして、当時の六腕の一人だった男にコレクションとして絞殺され
そうだった所を、館に押し入ったラキスケに助け出された二年前。

嗚咽を漏らし、涙を流しながらも話し続けたツアレを、ラキスケは
抱きしめて彼女の背中をさすっていた。

「お〃お〃お〃！ ひでえよ〜！」

ツアレの話聞いたペロロンチーノも涙を流して嗚咽を漏らす。
現実世界でシチュエーションとして似たような話をしていた頃は、
「それなんてエロゲ？」などと喋っていたが、こうして被害者の実体験
を聞かされると、相当心に響くようだ。

モモンガも、涙を流せず感情の起伏も弱くなった身体ではあるが、
ツアレを連れ去った領主や八本指に対する苛立ちを募らせている。

「ラキスケさん……、その八本指とかいう連中を潰しませんか？ と
りあえず、超位魔法とかでまとめて殲滅します？」

「待って、八本指に対して報復するのは確定事項だけでも、それだと無
関係な人たちを大勢巻き込んでしまうから待って……」

「ぐすつ……。モモンガさん、それは最終手段として取っておいて、ガ
ゼフ戦士長に協力を仰ぐのはどうかな？ 彼ならば、こういうことを

知ったら協力してくれそうですし」

「ペロロンチーノさん。俺としては二人がこの短い間にどんな人脈を築いたのかは気になる所なんですけど」

モモンガの過激な手段を抑えていると、号泣から立ち直ったペロロンチーノが協力者として王国戦士長の名を挙げる。

実際、八本指や癒着している貴族たちに容易に潰されず、王に直訴できるような立ち位置の者とのコネクションは、ラキスケにとってもありがたい。

元々は、女性のみで構成された王国のアダマンタイト級冒険者チーム“蒼の薔薇”に接触をはかり、女性を下衆な欲望を満たすための消耗品にする八本指に対する嫌悪感を駆り立てて協力を取り付ける予定であった。他にも八本指に不満を持つ者たちを焚きつけるつもりでもあったが、おかげで実行までの時間を縮めることができそうだ。「それにしても、ガゼフ戦士長か……」

「彼と何か因縁でもあるんですか？」

「いや、俺じゃなくてビアンゴの知人がさ。四年前に王国で開かれた御前試合で、決勝戦の相手をしたって言う話なんだ」

「ほえー。その知人って、どういう人なの？」

「ブレイン・アングラウスっていう剣士だね。現在はビアンゴが紹介した竜王国って言う国で、ビーストマン相手に傭兵として戦っているって話だよ」

竜王国のある町で、町を覆う外壁の門を遮る様に佇む一人の男——
ブレイン・アングラウスがいた。

ブレインの装備は鎧チエイシヤツ着の他にはベルトに引つ掛けた皮のポーチとネックレスに指輪と、軽装だと言える。

特徴的なのは腰に下げた二本の武器で、近隣諸国では珍しい“刀”という、南方の砂漠の中にあると言われる都市から時折流れてくる、魔法が掛かっていなくても下手な魔法武器を凌駕する切断性能を発

揮する非常に高価で扱いの難しい武器だ。

ブレインはそのうち一本は鞘にしまった状態で、自身を取り囲む様に集まっているビーストマンの一挙一動を観察していた。

虎や獅子の顔を持つ肉食の亜人であるビーストマンは人間と比較して、同じように成人した場合でも人間とは10倍近い差のスペックを誇る。

ビーストマンにとって竜王国は食料が群れている餌場という認識なのだが、どのビーストマンも目の前のブレインに対して強い警戒と怒り、そして恐怖の眼差しを向けていた。

膠着した状況による緊張に耐えきれなくなった一体のビーストマンがブレインに跳びかかる。

「ちえすとおー！」

ブレインが咆哮と同時に手に持つ刀を振り上げ、大上段から一気に振り下ろす。その勢いは豪風が舞うほどで、跳びかかったビーストマンを一刀のもとに両断する。

肩から胴体に掛けて両断され、断面から大量の血を噴き出し臓物をまき散らしながら絶命したビーストマンを尻目に、ブレインはその茶色の瞳で他のビーストマンの動きを注視する。

ブレインを取り囲んでいるビーストマンたちは唸り声を上げて威嚇するが、委縮しているのか同じように跳びかかってはこない。

「おいおい。同じ部族の連中かは分からんが、お前たちの族長を仕留めた奴を前にして尻込みしたままで良いのか？」

ブレインの言葉に、ビーストマンの一部から大きな怒気が放たれると、他のビーストマンを掻き分けて他よりも一回り大きいビーストマンが前に出た。

「言ってくれるではないか！ 貴様を討ち取って我が部族ブラッドスキンの汚名を晴らしてくれ！ このガードルフがな！」

どうやら、ブレインがかつて討ち取った部族の関係者がいたようだ。ガードルフは目を血走らせて怨嗟の籠った声を上げると、近くにいたビーストマンの頭を掴む。

「な、何をする——！」

「光栄に思え、臆病な貴様を有効利用してやるのだからな！」

「ま、待て！　ぐぎやああっ!!!」

他のビーストマンの抗議を無視してガードルフはそう言うのと、掴んだ頭をねじり切って噴水のように噴き出る血を全身で浴びる。すると、体毛に隠れて見えなかった全身の入れ墨のような模様が輝くと同時に、全身の筋肉が隆起した。

ビーストマンは種としてのスペックが人間と比較して秀でていないからなのか、個としての強者が少ない。しかし全く存在しないわけではなく、ガードルフというビーストマンはその中でも更に稀少な特殊能力をもつ個体のようなのだ。

「ガハハハっ！　今の俺をほかの凡百な連中と一緒にするなよ！　血を浴びた俺の強さは、こいつらの三倍だっ！」

「その能力……確か三年前に同じような能力を使う奴がいたな」

高笑いするガードルフに、ブレインは過去に戦ったあるビーストマンを思い出す。

「同じ部族の連中やお前に討ち取られた親父は、血に吞まれるなどと言って怯えるような臆病者ばかりだが、俺は違う！　俺はこの力で、ビーストマンの王となるのだ！」

「……」

「どうした？　恐ろしくて何も言えないようだな。だが、それもしょうが——」

「いや……あいつと違って、お前からは恐ろしさをちっとも感じなかったんでな」

「——ない。……なんだと!?　俺が、親父よりも弱いだと、ふざけるな！」

憤怒するガードルフに、ブレインは淡々と告げる。

「断言してやるよ。単純な身体能力だけならお前の方が上だろうが、強いのはあいつの方だ」

「ぎいー… さあ！　まあああー！」

自らが臆病者だと嘲笑した父親よりも弱いと言われ、ガードルフはあっさりと激昂する。そしてブレインとの距離を瞬く間に詰めると、

その鋭利な爪を振るう。

今まで数多くの人間を鎧食料ごと切り裂いて屠ってきた傲慢の爪だ。ガードルフは無残に切り裂かれるブレインの姿を脳内に思い浮かべ、その腸を喰らう事を夢想し——ガードルフの視界がくるくると回った。

眼下には頭を失い、勢いのままに壁に激突する自らの身体がある。ブレインを引き裂くはずだった爪は虚しく何も無い空間を薙いでいた。

(なん……で?)

ガードルフは状況を把握することもできないまま、頭が地面に落ちるとともにその意識は闇に落ちていった。

「ったく。あいつならこの程度でブチギレたりなんかしないで、俺を倒すために策をめぐらすぞ……って、もう聞こえていないか。……それで、お前らはまだ続けるかい?」

ブレインの言葉に、周囲のビーストマンたちの戦意は急速に萎びていく。

ガードルフはあまりにも呆気なく討ち取られたが、それは彼が弱かったからではない。むしろこの場にいるどのビーストマンよりも強く、獰猛であった。

それを傷一つ負う事なく首を刎ねて見せたブレインを前に、ビーストマンたちは後退りしてその距離を離していく。

その時、此処からは離れた別の外壁の近くで、天高く火柱が上がる。「あつ……あれは!」に、逃げるぞ!」「早くしないと、俺達も燃やされる!」

ビーストマンたちは怯えた様子で口々にそう言うと、ブレインに背を向けて蜘蛛の子を散らすように逃げ始めた。

一方のブレインは相手に心当たりがあるようで、火柱自体には驚いた様子もなく呟く。

「あれは……あの人が来たのか。だとしたら、此処で待っていれば迎えに来るだろう」

ビーストマンが去っていったのを確認したブレインは、ポーチから

取り出した拭い紙で刀に付着したビーストマンの血や汚れを拭うと、刀を鞘にしまう。本格的な手入れは後で行うつもりだ。

しばしの間待っていると、ブレインの言葉通りに視線の先に地面を滑るように移動するガレアス船が現れた。

今回のビーストマンの襲来を防いだ町、その中央にある大きな広場では、町の料理人たちと共に短いドレッドヘアのエルフ——ビアンゴが住民や防衛に携わった者たちへ炊き出しを行っていた。

「はいはい。まだまだ沢山あるから、順番に並んでね」

ビアンゴは料理人たちと共に手慣れた手つきで炊き出しの料理を配っていく。

「ああ……こんな温かくて美味しい料理を食べられるなんて、久しぶりだ」

「物資の補給だけじゃなくて、こういう事もしてくれるんだからありがたい話だよ」

「この炊き出し、食べると力が湧いてくるんだよな。なんというかこう……これからも頑張るぞーって気になれるんだ」

「そう言ってくれると、私も嬉しいわ」

口々に感謝の言葉を告げる人たちに、ビアンゴも嬉しそうだ。

今回の炊き出しは、竜王国の依頼で運ぶ分の物資とは別にビアンゴが帝国で買い付けた食糧で行っている慈善行為だ。無論、完全な善意だけで行っているわけではない。

決して規模は大きくないが、竜王国からの依頼を受ける度に行っているビアンゴの行為は、少しずつだが竜王国の意識に影響を与えている。

表立ってではないが竜王国から多額の資金を見返りに救援のための兵力を派遣しているスレイン法国は、エルフの王国と100年にわたって戦争状態にある。かつては同盟関係にあったエルフの王国に裏切られた経験から、エルフという種に対する敵意がスレイン法国の

中では根強い。

一方のエルフの王国を支配する篡奪王は、竜王国の窮状に興味がない。女王であるドラウディロン・オーリウクルスを孕ませれば、彼女の血筋——竜王に由来する異能を戦力に組み込めるのではと考えているかもしれないが、行動に移していないのだからそこまでの価値を見出してはいないだろう。

ビアンゴは法国のエルフ憎しの思想が竜王国にも伝搬するのを防ぐため、そして来るべき時に備えてバックについでくれる国を少しでも増やすために竜王国にできる範囲の支援を行っている。

尤も、ビアンゴは元々料理を作ったり振る舞ったりすることが好きなので、趣味と実益を兼ねた行為になってはいるのだが。

しばらくして、炊き出しを終えたビアンゴが片づけをしていると、ブレインが近寄ってきた。

「よう、ビアンゴさん。盛況だったみたいだな」

「ええ、みんな美味しそうに食べてくれていたわ。料理人冥利に尽きるって奴ね」

「それにしてもきつきの火柱……あんたの魔法だろ？」

「そうよ。今回は防衛の依頼はされていなかったけど、一発だけサービスしてあげちゃった♪」

ウインクしながら何でもないかのように答えるビアンゴに、ブレインは苦笑いする。

ブレインとビアンゴの出会いは4年前、リ・エステーゼ王国で開かれた御前試合の決勝戦でガゼフ・ストロノーフに敗北した頃に遡る。

自分の世界に籠っていたブレインに、王国にいる強者の調査という名目で観客として観戦していたビアンゴがしつこく話しかけた事が切欠だった。

——負けたから悔しくて引き籠っているんでしょうけど、あなたほどの逸材を腐らせるなんてもったいないわ！

——私の見立てでは、潜在能力は貴方の方が上よ。負けたのは、それまで培ってきた経験の差ね。むしろ傭兵として活動していた彼を、

才能だけであそこまで追い詰めたあなたが凄いというべきなんでしょうけど。そういう慰めはいらないでしょ？

——ガゼフに勝ちたいなら、とにかく戦って経験を積むのが手っ取り早いわ。でも畜生に堕ちるのは駄目。貴方の真つ直ぐな心が淀んで何かの拍子にぼつきり折れるかもしれないもの。

始めは好き勝手言うエルフだと苛立っていた。ビアンゴに反論する頃には敗北の絶望感を踏み碎いて立ち上がったが、今思えばあの出会いがなかったら、ガゼフに勝利するためにすべてを投げ捨てる剣鬼になっていたらとブレインは考える。

ブレインが竜王国にいるのも、ビアンゴが強者との戦いに困らない場所として紹介されたからだ。三年前の戦いを筆頭に何度も死にかけたが、おかげで人型の相手との戦いの経験をかなりに密度で積むことができた。

今では戦って力を付けられる場所を示し、強くなるための手助けもしてくれている事にブレインは感謝している。

あのロリコンのセラブレイトがリーダーのアダマタイト級冒険者チーム「クリスタルティア」の連中と共闘したり、一緒に酒を飲んで話をしたりするのもそれなりに楽しく感じる。

今は何らかの理由で本国に帰還している、スレイン法国の陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインから時折スカウトされるのは鬱陶しいが、集団戦での戦い方や時には装備を融通してくれたりと得難い経験もあった。

何より——

「あつ！　つめきり爪斬」の旦那！　この町を助けてくれてありがとうございます！
います！」

「ブレイン殿、我々からも感謝の言葉を。貴方が門の一か所を受け持ってくれたおかげで、我らの部隊も他の門に戦力を回すことができました」

「傭兵の身としては、あんたみたいな人間になりたいもんだ」

——昔の自分では考えられないことだが、行く先々で感謝や尊敬の思いを受け取るのも悪くないとブレインは思えた。

「爪斬^{つめきり}」は三年前に竜王国を襲ったビーストマンの部族長とブレインの死闘の末に、開眼した新たな武技で爪を全て断ち切りながらその首を刎ねたことから付けられた二つ名だ。

多くのビーストマンがその身体能力にかまけて策も何もないごり押しで戦う中、その部族長は効率的に「狩り」を行うために策を弄し、幾つもの都市を陥落させてきた猛者だった。

ブレインが多くのビーストマンを屠った猛者だと知った時も、少数の戦力をぶつけては被害が出る前に引かせ、休む暇を与えない波状攻撃で疲労させてから仕留めようとしていた。

実際、あの時にクリスタルティアの面々が救援に来ていなかったら、斃れていたのは自分だったとブレインは確信している。

「ふふっ。今の貴方、昔よりもずっといい表情しているわね」

「ん？ そうか？」

「ええ。目標に向かってギラギラしている貴方も良いけど、綺麗で真っ直ぐな瞳って言うのは本当に良いものよね」

ビアンゴがブレインを褒めると、ブレインに感謝の言葉を送っていた陽光聖典の隊員が豪快に笑って賛同した。

「ガハハ！ あなたはエルフですが、良い事を言いますな！」

「んも、イアンさんってば。国を乗っ取った篡奪王がクソエルフなのは事実だけれども、みんなが同じではないのよ」

「ほう……あの国の王は、同族である貴方にも憎まれているのですな！」

「そりやそうよ！ だってあれは自分の恋人だけじゃなくて母親や姉妹、娘まで女ならば片っ端から力づくで連れ去るような外道よ！ しかも、産ませたらそのまま戦場に送り込んで放り捨てる。強すぎて反抗できないから従わざるを得ないって言うのが多いだけで、本心ではすぐにでもぶち殺してやりたいって思うのが大半よ」

ビアンゴは篡奪王の目的を伏せてその所業を告げる。愛も肉欲もなくただ強い兵力を産ませるためだけに強姦しているなど言っても、信じてもらえないと分かり切っているからだ。

イアンと呼ばれた男は、握り拳を作りながら力説するビアンゴの言

葉に、ブレインと共に言葉を失う。

陽光聖典の班長を務めているイアンはエルフに対して好感は抱いていないし、本国が捕らえたエルフを奴隷にしている事にも反発していない。しかし、話に出た篡奪王の様な非道の王の下で戦っていたエルフたちの事情には多少なりとも同情心が芽生えていた。尤も、本国から指令があれば個人の感情は無視して実行するが。

「……おいおい、リ・エステイーズ王国の貴族でもそこまで大っぴらには……いや、以前は割としていたな」

「うーむ。碌でもない存在が力と権力を握ると、酷いことになる典型ですな！ あの八欲王にも比肩する酷さがあるとは！」

「伝承の八欲王と違って、一人だから身内での潰しあいも期待できないのよねー」

「ビアンゴはため息をついたが、イアンにとっては同士討ちが期待できないのは、ため息では済まない頭の痛い問題だ。

「イアンさん、そういうえばあなたの所の隊長を見ていないけど何かあったの？ ブレインと一緒に伝えておきたいことがあったんだけど」

「俺とニグンの奴に伝えたいこと？」

「ニグン隊長ですな。詳細は教えられませんが、本国に一度帰還しましたぞ。私が責任をもって隊長に連絡しますので、よろしいですか？」

「あーら、ありがとう。それじゃあ……これで良しつと」

「ビアンゴはマジックアイテムを使って周囲に声が漏れないようにすると、ゆつくりと口を開いた。

「近い内に帝国が竜王国の救援要請に関して、派兵に向けた交渉をするそうよ」

「マジか……」

「それは朗報ですな！」

「それにあたって、今年でリ・エステイーズ王国との戦争に決着をつけるつもりみたい。ブレイン、貴方が目標としているガゼフとの一騎打ちのチャンスは今年が最後になる可能性があるわ」

第十三話 ※エロ無し

モモンガ達との話し合いから数日が経過し、マリナラがエ・ランテルを出発して帝国に戻る日がやってきた。

六腕とズーラーノーンの企み（誤）を阻止した功績でプラチナ級への昇格が決まったモモンガやペロロンチーノは、ハムスケやラキスケと共に王都に向かうための準備は既に済ませている。

セリーシア
ニニヤ以外の漆黒の剣と森妖の面々も、既に装備や道具の確認を終えて担当する馬車に乗り込んでいた。

「姉さん、出発前にラキスケさんとキスは済ませてきたの？」

「セ、セリー!？」

「いつまで離れ離れになるか分からないんだから、出来る事は済ませておいた方が良いでしょう」

「う、うん……。それじゃあ、ラキスケ様の所に行ってくるね」

妹に勧められてツアレは顔を赤らめながら、見送りに来ているラキスケの所に向かう。

「あ……。あの、ラキスケ様。少し……。よろしいでしょうか？」

「何だい、ツアレ?」

「そ……。その、私たちが帝国に戻る前に、ラキスケ様とキスをしたいのですが……。よろしいでしょうか?」

ラキスケに対して上目遣いでお願ひしてくるツアレに、ラキスケは胸を高鳴らせていた

この数日間、夕方になると二人は逢引宿で繰り返し体を重ねて愛し合っていたが、その時に見ることが出来る淫靡な表情や艶声とも違う、庇護欲を誘う表情と声はとても心地よい。当然、断るなんてもつたいたないことはない。

「ああ、良いよ。ツアレからご褒美をもらえるなんて嬉しいな」

快く受け入れたラキスケは、ツアレの背中に腕を回して抱き寄せる。彼女の柔らかな唇に自らの唇を重ねる。すると、ツアレも両腕をラキスケの背中に回して抱きしめながら舌を伸ばし、ラキスケの口内へと侵入させてきた。

「……えっ?」

一時とはいえ離れ離れになるのだからと気を効かせて何も言わなかったペロンチーノやモモンガ、そして触れるだけの軽いキスぐらいだろうと考えていたニニヤは、ツアレの積極的な行動に固まる。

一方のラキスケは始めこそ少し驚いていたが、すぐに順応して自分からも舌を伸ばし、お互いの舌を絡め合わせ始める。しばらくチュパチュパ、チュプチュプと二人の深いキスが奏でる水音が響き、ツアレはゆっくりと唇を離すと、ラキスケに微笑んだ。

「ラキスケ様。続きはラキスケ様が戻ってきてからでよろしいですか?」

「ああ、それは楽しみだ。何としても生きて帰らないとな」

(((続きがあるの!?)))

困惑する三人を余所に、ラキスケとツアレは二人だけの甘い空間で約束を交わすと、名残惜しそうに身体を離してお互いに待っている相手の所へと向かった。

「モモンガさん、ペロンチーノさん。それでは行きましょうか」

「セリーシア、待たせてごめんね? 私はもう大丈夫だから」

「ラキスケさん、一つ良いですか」「姉さん、一つ良いかな?」

「なに?」

何もおかしなことはなかったかのように合流した二人に、モモンガとニニヤは揃って口を開く。これだけは、ここで何としても言わなければならぬという意志を込めて。

「誰がそこまでやれと言った?」

リ・エステイーズ王国の王都では、八本指の麻薬部門の長たるヒルマが紫の毒々しい煙を上げるキセルを吹かしながら部下からの報告を受けていた。

それは近隣諸国で麻薬としては落ち目になってきた黒粉に代わる新たな麻薬の開発研究の最中、ある人物の協力で出来上がった代物に

ついでだ。

「……生き残りの話では他とは違う変異をした一体が反旗を翻したようです。製造済みのシードの一部は奪われ、残りも大部分は燃やされてしまったようです」

「他と違う変異？ 具体的には？」

「肌の色は緑色となり、瞳は一つになったようです。それと、他の個体と違って理性を残したままでした」

「理性が残ったままというのが面倒だね。それで、シードを製造していた村はどうしたんだい？」

「無事だった分のシードと原料を回収した後に、証拠隠滅のために焼き払いました」

「分かったよ。生き残った人員は他の製造拠点に移しな。くれぐれも他の部門の連中には気取られないようにするんだよ」

「畏まりました」

部下に指示を出したヒルマは、心を落ち着かせるようにキセルを吹かせる。

8本指最強の6人である六腕を全員投入することが決まったことで2年前の案件が片付くと思った矢先に、今度は新開発した麻薬が起こした事故。

本音を言えばこの新薬の研究を早々に打ち切つて損切したいところだが、主力商品であった黒粉の需要が大きく落ち込み、麻薬部門の力が大きく削がれた現状では躊躇してしまう。

それに、あの新薬が完成すれば八本指の勢力バランスを大きく塗り替えるだけの力を秘めているのも事実だ。

動くべき時に動かない者は、餌として食われる。それが彼女の信念であり、それを守ってきたからこそ、高級娼婦からここまでのし上がってきたのだ。

新薬に関する技術を提供してきたあの男にどのような思惑があるのかが分からないのは癪だが、リスクを承知の上で進むしかない。

「つたく……この二年間、忙しすぎて熟睡の一つもできやしないよ。今度の定例会で朗報があると良いんだけどね」

王都へと繋がる石畳の街道から外れた草原で、その戦いは起きていた。

その戦いは赤子と大人ほどある体格差があり、しかも大人と評される側は複数であるのに対して赤子と評される側はたったの一人。

しかしそれは赤子と評された側が小柄であることを意味していない。むしろ巨石と表現するのが相応しい大柄で全身が太い筋肉で覆われていて、冒険者ならば知らないものはまずいない人物だ。

その人物の名はガガーラン。王国に二組しか存在しないアダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」に所属する戦士だ。ちなみに見た目に反して立派な女性である。

この一か月、大きな動きを見せない八本指の動向を探るためにリーダーのラキュースと姉妹忍者のティアとティナが調査している中、魔法詠唱者のイビルアイと二手に分かれて冒険者としての仕事をこなしていた。

そう言った理由で単独行動している最中に、どこかの村から王都へ向かう所だったらしき一団が襲われている事に気がついて駆けつけたのだ。

そんな彼女が赤子に見えてしまう程の巨体を持つ者たち、それは人間をそのまま大きくしたような姿をした亜人種族である巨ジャイアント人とその近縁種、下位単眼巨人レックスアイクロボスである。

巨人は強靱な肉体を持ち、種族によっては固有の特殊能力を有している。そのおかげで人間では生活できないような劣悪な環境でも耐えられるため、そう言った場所で生活することが多く、人間社会のかかわりをあまり持たない種族だ。

下位単眼巨人はガガーランも初めて見たが、イビルアイが以前話していた過去に存在した危険なモンスターの一例として挙げられていた事を覚えていた。

粗暴で人間にとつては危険なことが多い巨人の中でも、緑色の肌と

大きな単眼が特徴の下位単眼巨人は凶暴で、人間を喰らうために襲う事もあるという。

ガガーランが相手しているのは、レッサーサイクロプス下位単眼巨人が1体と巨人が5体。この内、3体の巨人はこれまでの戦いでガガーランによって倒されている。

「オラアッ！」

「グアアアッ！」

ガガーランは両手でしっかりと握っているウオーピック刺突戦鎧——フェルアイアン鉄砕きを巨人の一体の膝に叩きつける。

ダメージが増すという一点に特化した魔法付与がなされているその一撃は巨人の膝を砕き、野太い悲鳴を上げながら倒れる。

ガガーランは亜人に対して攻撃的な性格をしている訳ではない。むしろスレインが人類を守るために非好戦的な亜人の集落も虐殺している事に激しい怒りを覚えるような人間だ。

それでも、戦う力を持たない相手を襲って、噛いながら鬨り殺しにするような悍ましい連中に情けをかけるほど甘くはない。

殺された者たちの代わりに、倒れ込んだ巨人の頭部にフェルアイアン鉄砕きを振り下ろして止めを刺す。

「グルオオオオッ！」

もう一体の巨人がガガーランに向けて拳を振り下ろす。巨体から繰り出されるパワーと重さは、直撃すればガガーランでも無傷とはいかない一撃だ。

それでもガガーランは回避せずに振り向きざまにフェルアイアン鉄砕きを振り上げ、迫りくる拳に叩きつける。

フェルアイアン鉄砕きを通してガガーランに大きな衝撃が走るが、手放してしまいうような失態は犯さずに勢いのまま振りぬく。一方の巨人は振り下ろした拳が砕かれただけでなく、仰け反って数歩よろめいた。

その隙をガガーランは逃さない。フェルアイアン鉄砕きを圧倒的な筋力で振り上げた姿勢で押し留めると、ウィングブーツ飛翔の靴によって重戦士では考えられない速度で巨人の膝上まで駆け上がり、そこを足場に跳んだ。

拳を砕かれた巨人の苦悶の表情が驚愕に変わる。狙われているの

は生物の弱点の一つである心臓。仰け反っている姿勢では回避も迎撃もままならない。

「剛撃ー！」

ガガーランの武技が巨人の心臓に振り下ろされる。胸骨と肋骨がベキベキと折れる音を響かせながら巨人は地響きを立てて倒れた。

ガガーランは空中で即応反射の武技で体勢を立て直して着地する。本来ならば着地の際に相当な衝撃が身体に響く高さだが、これも飛翔の靴によって緩和されている。

「つちい！ よりにもよって蒼の薔薇の連中と出くわすとは、自我も残っていない本能で動くだけの木偶の坊では数を揃えても駄目か！」
「なんだ、お前は喋れるのか。お前みたいな奴にも知られているなんて、俺も人気者だねえ。さて、後はてめえをぶちのめせば良いだけだ！」

「つく……………！ このまま殺されるくらいなら！」

「おいっ！ 逃げるんじゃないやねえ！」

他の巨人とは異なつて人語を介する下位単眼巨人が数歩後ずさると、腰に括り付けていた袋の中身を取り出そうとしながら、ガガーランに背中を見せて走り出す。

ガガーランが追いかける中、下位単眼巨人が袋から取り出したのは、大量の種のような形をした物だった。

無造作に掴んだために袋の中身が零れるのも構わず口に放り込んで飲み込む。すると、下位単眼巨人の動きが見るからに鈍くなり、身体も痙攣し始める。

一瞬、自殺でもするつもりかとガガーランは走りながら考えるが、それでは先ほどの台詞と辻褃が合わない。何より彼女の直感が、このまま放置したら拙いことになるかと告げていた。

「何かしでかす前にぶっ潰す！」

ガガーランは飛翔の靴によって、ついには蹲って痙攣する下位単眼巨人の頭上まで跳び上がり、渾身の一撃を振り下ろそうとして――

「グルアアアアッ！」

——咆哮と共に下位単眼巨人レッサーサイクロプスの肩から突然生えてきた腕によつて殴り飛ばされた。

「がはっ！」

予想外の攻撃にガガーランは10m以上吹き飛ばされ地面に落下する。

何度も地面をバウンドしたにもかかわらず、意識と鉄砕フェルアイアンきは手放さずに済んだのは、不幸中の幸いとしか言いようがない。

ガントレット・オブ・ケリケイオンケリケイオンの小手による癒しを自身に使いながら、ふらつく足を叱咤して立ち上がると、下位単眼巨人レッサーサイクロプスだつたものの変貌を目の当たりにすることとなった。

まず、緑色だつた肌がくすんだ灰色に変色した上で、全長が大凡5〜6mはあつた巨体はさらに大きくなっていく。ガガーランの目算だが大凡8mを超えているだろう。

変化はそれだけではない。先ほどガガーランを殴り飛ばした、肩から生えてきた腕は、三対六本にまで増えている。頭部も数が三つに増えて、単眼から人間と同じ双眼に変わっていた。

「……おいおい、なんだありや。こんな化け物、見たことも聞いたこともねえぞ」

ガガーランは、初めて見る悍ましい異形が放つ威圧感に身震いする。あれはもはや巨人種という亜人の括りを超えている。同類がま
ずいない、一種一体の存在になつたと考えた方が良いだろう。

「アギヤギヤ……」

三つに増えた顔はいずれもだらしなくにやけており、単眼だつた時は瞳から感じ取れた理性は、もはや残っていない。まるでトリップした麻薬中毒者のようだ。

それにもかかわらず、この化け物の禍々しさはイビルアイが過去に話していた魔神の再来をガガーランに想起させた。

ここから先は一方的な戦いだつた。

全身を滅多打ちにされたガガーランは鉄砕フェルアイアンきを支えにしてどうにか立っている状況だ。

ガントレット・オブ・ケリユケイオンケリユケイオンの小手の癒しの力を使える一日の使用回数は限界を迎え、手持ちの回復用アイテムも使い切ったため、顔の痣や流血を止めることもできない。

「ヴオアアア……」

化け物が三つの口からよだれを垂らし、唸り声を上げながらガガーランに腕を伸ばす。

立ち上がるのもやつとなガガーランは、少しでも抵抗しようと鉄砕フェルアイアンきを持ち上げようとするが、泥亀の様な遅さだ。

（くそ。わりい……ラキユース、ティア、ティナ、イビルアイ。俺はここまでみたいだ。やっぱ俺は、英雄の領域に踏み込むことはできないみてえだ）

蒼の薔薇のメンバーに心の中で詫びを入れながら、強大な魔法が込められている指輪をいつでも暴走させられるように準備する。

暴走した魔力の奔流が。万が一にもこの化け物を打倒してくれるならばそれで良し。そうでなくても手傷を追わせて、後に仲間たちがこの化け物に対して有利に戦えるようにするためだ。

「来るなら……来やがれ！」

ガガーランが吠え、化け物の腕がガガーランを捉えようとしたその時、化け物の上空から何かが大量に降り注ぎ、様々な輝きを放つ光の爆発を引き起こした。

「グウギヤアアア!!」

「二応は女性に対して、涎垂らしてお触りしようとするのはNGだよ」叫びながら後ずさる化け物の前に立ちふさがるように、上空から現れたのは、猛禽類の頭に翼を持ち、そして肘から先と膝から先を鳥の爪へ変えた鳥の亜人と思しき者だった。

一目見ただけで凝視殺しゲイズ・ペインやケリユケイオンの小手とは比べ物にならない逸品と分かるキラキラ輝く金色の派手な鎧を着用し、鎧から金色の粉のような粒子が散っては消えていく様子は他に見るものがいればある種幻想的とも神々しいとも言えるだろう。

手に持つ弓は太陽を宿しているかのように輝き、光り輝く矢は化け物に向けられている。

「お……お前さんは、一体」

「ん？ 俺はペロロンチーノ。ヘカトンケイルは俺が相手しておくから、必要だったらもうすぐ来る仲間から治療を受けておいて」

「仲間っていったいどこに……ってうおっ！ なんだこりや！」

状況の変化に困惑するガガーランだが、すぐ脇に楕円形の下半分を切り取ったような深みある漆黒の闇が浮かび上がると、思わず驚いて声を上げる。

その闇の中から現れたのは、鈍い輝きを放つ銀色の鎧を着こんだ、銀色の瞳と山羊を思わせる角が生えた男。

「えっと、ガガーランさんでよろしいでしょうか。俺はラキスケと言います」

「あ、ああ……ラキスケって言えば、帝国最強のワーカーじゃねえか！

なんでこんな所に……うぐっ！」

「無理はしないで。今治療を施しますから」

かつてティアとティナ、さらにはイビルアイからも敵対するようなことは避けるべきと念押しされた帝国最強のワーカーの名前が出てきて驚くが、身体の至る所が上げる悲鳴にガガーランが声を詰まらせると、ラキスケは《大治癒》^{ヒール}を発動して彼女を治療する。

そうしている間にヘカトンケイルと呼ばれた化け物は、様々な輝きを放つペロロンチーノの矢によって爆散していた。

「……ははっ。忠告する間もなく終わっちまった。強さの桁が違い過ぎねえか？」

瀕死だった肉体は瞬く間に健康そのものに戻り、ガガーランは目の前で起きた出来事の連続に苦笑いするしかなかった。

すると、まだ残っていた闇から新たな影が現れる。

それは金と紫で縁取りされた漆黒のローブを纏った魔法詠唱者^{マジック・キャスター}風の人間だ。その表情は顔をすっぽり覆う、泣いているような、怒っているような形容しがたい表情が彫られた仮面を被っていて読み取ることができず、無骨なガントレットによって肌を徹底的に隠してい

る。

「そりゃあ、私の自慢の友人ですから」

後からやってきた魔法詠唱者^{マジック・キャスター}が自慢げに言うと、ヘカトンケイルだった肉片を確認しながら首を傾げる。

「それにしても……ヘカトンケイルにしては弱すぎますね。私たちが知るヘカトンケイルと同じ強さだったら、安全に倒そうとするならペロロンチーノさんだけでなく私とラキスケさんも一緒に戦わなくてはいけないはずなんですけど」

「あ、それは俺も思った。そもそも、ヘカトンケイルにしては大分小さくない？ 目晦ましのつもりで放った溜め無し攻撃で怯んでいたし、ヘカトンケイルの幼体だったのかな？」

「この世界、あそことは種族や職業の修得法則が大分異なるからね。このヘカトンケイルも本来必要な要素を大分省いて生まれたのかもかもしれませんよ」

倒したヘカトンケイルに関して和気藹々と歓談する三人。ガガーランはそんな彼らの話についていくことが出来ず、いつの間にか隣にいる雌の魔獣と顔を合わせる。

その魔獣は蛇の様な鱗を持つ長い尻尾の生えた白銀の四足獣だ。漆黒の瞳は英知を感じさせこの魔獣の強大さを感じさせる。人間の言葉を介する知性があり、ハムスケと名乗った魔獣から感じ取れる実力は間違いなく自分より上であった。

彼らが何者なのか、そしてなぜ帝国のワーカーが王国の王都の近くまで来ているのか。確認しなければならぬことはあるが、まずは言わなければならないことがガガーランにはあった。

「お前ら、危ないところを助けてくれてありがとな」

巨人たちに殺された人たちを供養し終えたところで、ガガーランは改めて口を開く。

「そんじゃあ、改めて自己紹介だ。俺は蒼の薔薇に所属しているガ

ガーラン。情けない所は見せちゃったが、一応は王都ではアダマンタイト級冒険者をしている」

「私はモモンガと言います。そして此方がペロロンチーノとハムスケで、正式なチーム名はまだ決まっていますませんが同じ冒険者チームです」

「よろしく」 「よろしくお願いするでござる」

「俺はラキスケ。モモンガさん達とは違って帝国でワーカーをしているけど、彼らとは昔からの友人です」

簡単な自己紹介を終えると、ガガーランはラキスケを見ながら顎に手を当てて問いかける。

「しかしまあ………助けられて言うのもなんだが、帝国のワーカーがどうして王国の、それも王都の近くに来ていているんだ？」

「実は、蒼の薔薇の皆さんに提案したいことがあって王都に向かう途中だったんです。そしたら、ペロロンチーノさんがヘカトンケイルと戦闘している貴方を見つけまして」

「ふーん。まあ言うだけ言ってくれや。さすがに犯罪の片棒を担ぐようなことはしないが、そうじゃなければ大抵のことは聞いてやるよ」
「ありがとうございます。蒼の薔薇や王国にとっても、この提案が成功すれば悪い話ではないと思います」

「俺達や王国にも利のある話……ねえ」
「簡潔に言えば、王国に巢食っている八本指を一緒に叩き潰しませんか？」

ラキスケの提案は、ガガーランにとって予想外のものではあった。

蒼の薔薇はリ・エステイーズ王国の第三王女であるラナーからの秘密の依頼で、八本指の影響下にある施設に襲撃を仕掛けているが、王国を蝕む八本指が巨大で強大すぎて対症療法にしかかっていないのが実情だ。政治的にもその魔の手をかなり伸ばしており、正攻法ではなく暴力に頼った最終手段でしか手が無くなっている事が、影響力の大きさを表している。

その最終手段だって、アダマンタイト級冒険者に匹敵すると言われる警備部門最強の六腕が出張ってきたら厳しいものとなるだろう

う。

そこでガガーランはふと考える。自分が殺されかけた怪物をあつさり討ち取ったペロロンチーノとその仲間のモモンガという魔法詠唱者、それに、ハムスケという魔獣がいるからこそ、ラキスケも八本指を倒すことができるかと踏んだのだろう。

ならば、確認するべきことはなぜ八本指を倒そうとするのかだ。傑物だと言われているバハルス帝国の鮮血帝シルクニフからの依頼だったりすればまだマシだが、ラキスケが八本指を倒そうとする理由が、帝国の裏組織が王国に根を張るためだったりすると洒落にならないからだ。

「そりゃ素敵な提案だな。俺としては願ってもない事だが、お前さんには何のメリットがあるんだ？」

「恋人とその家族の身の安全です」

「……ほう？」

「信じるかどうかはご自由にお任せしますけど、どこからの依頼というのではなく個人的な理由です。八本指に狙われた恋人を安心させたい。そのためには八本指には消えて貰わないと困るんですよ」

「惚れた女のためって訳か」

「ええ、ゆくゆくは結婚したいと思うくらいには」

ガガーランはラキスケの表情と目を見て確信する。この男は本気で言っている。

もし自分達に断られたとしても、この男は八本指を潰すために行動するだろう。そうなったら、その過程で王国に大きな被害を与える可能性だってある。

蒼の薔薇と共同戦線を張ろうとしているのは、彼なりの誠意と配慮だろう。ならば、此処で自分がすべきことは――、

「……いいぜ。その話、乗ってやるよ。リーダーや他のメンバーの事も俺が説得してやる。こっちとしても、王国に巢食う八本指はどうにかしたいと思っていたからな」

「ありがとうございます。それでは、蒼の薔薇の皆さんと詳細を詰める為にも王都へと向かいましょうか」

——ラキスケの提案に乗って、余計な被害が出ないようにコントロールすることだ。

それに合わせて、ガガーランはあることを尋ねる。

「そーいやお前らがヘカトンケイルって呼んでいた化け物だけだよ、どういふ巨人なんだ？ 聞こえた話からするとあれでも本来よりも弱いみたいだけれどよ」

「それでしたら俺が答えますよ。ヘカトンケイルは巨人種の中でも最上位に位置する種族の一体です。外見的特徴としては見ての通り三対六腕と三つの顔を持つことですが、本来ならば大きさとしてはこの倍はあるかなり大型の巨人なんです。他には、全身から一回り小さい腕を自由自在に生やしたり、ドルイドが扱える信仰系の位階魔法も操るので、本来ならば戦士一人で立ち向かう相手ではありません」

「その様子だと、ヘカトンケイルの事は知らなかったみたいだけでも、どういふ経緯で戦っていたの？」

モモンガがヘカトンケイルの特徴を教え、ペロロンチーノが戦っていた理由をガガーランに尋ねる。

「それがな、元々は下位単眼巨人だったんだよ。取り巻きの巨人を倒して追い詰めたのは良いんだが、そいつが種みたいなのを大量に飲み込んだらヘカトンケイルに変わっちゃったんだ」

「（確かにヘカトンケイルは単眼巨人系の巨人種が最終的になる種族だけど、上位単眼巨人を飛ばしてアイテムで変化したのか？）その種って残っていたりは……」

「ああ……モモンガさん、ごめん。多分だけど俺がゲイ・ボウで跡形もなく吹き飛ばしちゃった」

「あちゃあ……まあ、過ぎたことは悔やんでも仕方ないですね」

下位単眼巨人をヘカトンケイルへと変貌させた種の正体は分からないのは気になるが、検証できないことに引きずっても仕方ない。モモンガ達は頭を切り替えて王都へと向かうのであった。

第十四話 ※エロ無し

リ・エステイーゼ王国、王都リ・エステイーゼ

古き都市という言葉こそ最も相応しい、良く言えば歴史ある、悪く言えば古めかしいだけのしよぼくれた都市の中央通りを、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは茜色に染まりだしている空を見上げてから自宅へ帰宅するために歩を進めていた。

様々な国の中継地点としても利用されるエ・ランテルと比較すると舗装されていない道路が多い王都だが、その中では珍しく石畳でしっかりと舗装され、大きな道幅を持った通りだ。

活気に満ちた人々に反して、ガゼフの巖の様な顔は顰められている。その理由は、数日前に王城口・レンテの敷地内にあるヴァランシア宮殿、幾多の貴族や重臣が集まっている宮殿の一室で行われた宮廷会議での出来事であった。

毎回行われるおべんちやらや権力闘争が横行する会議では、例年よりも早く帝国から来た布告官が持ってきた宣言文に対する協議と、それに伴う威勢だけはいい貴族たちの言葉が飛び交っていた。

宣言文を要約すると、

近隣諸国に広まっている麻薬に対して、リ・エステイーゼ王国がそれを黙認しているのは、人民を守る国家の義務を蔑ろにするものであり、近隣諸国に対する侵略行為でもある。

王国は直ちに麻薬の製造・拡散を強力に摘発し、近隣諸国の治安を担保しなければならない。

従わないのであれば、バハルス帝国は王国に侵攻を開始し、それを代行する。

これは正義の行いであり、王国の怠慢と不法を正して人民の平穏を守るものである。

読み上げられた内容は近年、帝国が王国に対してクレームをつけている内容を戦争の理由にこじつけたものだ。

レエブン候やボウロロブ候といった一部の貴族は、帝国が開戦の時期を早めた事を訝しんでいるが、宮廷会議に参加している貴族の多

くは楽観的で、嘲笑する者も少なからずいた。

貴族たちは例年ならば四軍——4万人規模の軍勢を用意していた、帝国軍が昨年は一軍減って三軍しか動員していなかった事から、帝国は動員できる戦力が先細りつつあると楽観的に言い、今年こそはこちらから攻め入るべきだと無責任に活気づく。

しかし、ガゼフからしたらそれは全くの誤りで、王国が例年通り徴集する兵力に対して動員する兵力を減らしても問題ないという帝国の余裕の表れだと受け取っている。

力をつけていつている帝国とは対称的に、年々国力を落としている王国の実情を理解していない貴族たちの、恒例ともいえる無神経な発言にガゼフは内心で苛立っていた。

だが、一番腹を立てていたのはその前の、国王ランポツサ三世への報告のためにガゼフがカルネ村で起きた出来事を語った時の事だ。

実際は王には他の貴族たちに極秘で真実を打ち明けているが、貴族たちの前で王に報告しないのは怪しまれる。だからこそ、貴族の前で王に報告を行ったという既成事実のために、カルネ村で事前にモモンガと話し合って決めた範疇を言葉にする必要があった。

特に細かく説明したのはカルネ村を守った森の賢王——ハムスケについてであり、旅人であったモモンガやペロロンチーノに関しては、できる限り貴族たちの印象に残らないように注意していた。

捕縛した騎士たちは、王都に着くや否や役人と兵士達に無理矢理連れていかれてしまった。おそらくは六大貴族の中でも貴族派閥に属する者が手を回したのだろう。既に証拠隠滅のために始末されているのではと考えると、奴らの背信行為を暴く機会が潰されたのは痛い。

そうなるとスレイン王国の工作員については、むしろ真実はごく少数が知っていればよい話となる。そのままこの話題を持ち出すのは不味いと判断して、所属不明の信仰系魔法詠唱者の集団という事となった。

数百年の時を生きると言われる伝説の魔獣に関する話題は、王だけでなくトブの大森林の近郊に領地を持つ一部の王派閥の貴族たちか

ら感嘆を込めた言葉が出たが、幾人かの貴族——いずれも大貴族派閥の者たちからは森の賢王やガゼフを軽視する発言が幾つも飛び出す。曰く、

——胡散臭い話だ。

——トブの大森林に住み着いている害獣ごときの力を借りなければならぬ戦士長の力量が知れる。

——本当にそれは森の賢王なのか、そもそも森の賢王という存在自体が子供に読み聞かせるおとぎ話で、それを騙った獣ケダモノなのではないのか。

——それに、情報を聞き出そうとすると死に至る魔法など、そんな都合のいい話があるはずなどない。

果ては、話に出た魔法詠唱者が自分を売り込むため、或いは帝国のスパイとして潜り込むためにその魔獣と騎士や魔法詠唱者を動員して御膳立てしたのではないかという意見すらあった。

ガゼフは口下手な自分では言葉では貴族たちには勝てないことが分かっているので、決して顔には出さないように怒りを堪えていた。しかし貴族たちからハムスケやモモンガ達を捕らえるべきという話まで出てきて、さすがに口を挟む。

王も貴族たちを諫めてその場は収まったが、そうでなかったら会議は恩人たちに仇で返すような内容になっていたかもしれないが、(……いかな。何を考えているんだ俺は。訓練の時もそうだが心に雑念ができてしまっている)

昨日の武技を用いた訓練では、あの戦いの時ほどではないが六光連斬の精度も向上し、同時に起動できる武技の数も、切札を使わずに7つに増えていることが確認できた。

自身の身に起きている変化、いや……成長の切欠には心当たりがある。カルネ村の一件で戦った、スレイン王国の最高位天使だ。ハムスケと共闘し、モモンガの支援を受けたあの激闘は、成長の限界に達しつつあった自身の殻を破ってくれたのだろう。

英雄譚では強敵との戦いを切欠として、物語の主人公がさらなる強さを得る展開はよくあるが、まさか自分がその経験をするとは思って

もみなかった。

だが、それでもあの戦いで最後に放った新たな武技——次元断を再び使用できる領域には未だに達していない。あの時の感覚はしっかりと覚えてはいるが、それを再現するには自身の能力がまだ不足しているのだ。

(目指す先は遙か先……か)

ガゼフは弱音とも受け取れる言葉を、心の内で考えていた。もし大貴族派閥の者に聞かれでもしていたら、王に対する格好の攻撃材料を与えてしまいかねないため、実際に言葉に出すことはできない。

だが、ガゼフには悲壮感はなかった。モモンガの魔法的な支援と切札による強化があつたとはいえ、一度は到達した高み。再び至れずして何が王国戦士長か。

それに、あの戦いで魔法詠唱者が戦いに与える影響の大きさを実体験することもできた。帝国では、生ける伝説ともいえる大魔法詠唱者フルーダー・バラダインの下で魔法詠唱者の教育に力を入れているという。

兵も武器も質で劣り、魔法技術は話にならない。王国が軍事面で帝国に対してアドバンテージがあるのは、農民の徴兵による物量だけだ。そのアドバンテージも、国力を疲弊させる代償を伴いながら無理矢理捻出している。

「(戦士団と共に戦う魔法詠唱者の部隊設立を王に具申するべきだが、マジック・キャスターどれだけ早くても今年の戦争には間に合わないな。それに、マジック・キャスター魔法詠唱者を軽視している者が多いこの国の貴族の妨害は確実にあるだろう。それでも、王国の未来のために今年の戦争を何としても耐え凌ぎ、無理してでも通さなくてはならない)」

通りを歩く人々とぶつからないようにすれ違い、今後の事を考えながら家路を黙々と歩いていると、ぐう……と腹が鳴った。

ガゼフは貴族たちのいる王宮で鳴らなかつたことに感謝しながら、今夜からしばらくの間は自宅に住込みで働いている老夫婦がいないことを思い出す。

「(そういえば、孫の奥さんにもうすぐ子供が生まれるから休みを与えていたんだつた。そうなる……今日は何を買っていくか。折角だ

から味の濃いものを食べたいところだ)」

料理を作る事は全くダメなガゼフがそう考えて再び歩き出したところで、横の通りから声をかけられた。

「おや？ ひよつとしてガゼフ殿でござらんか？」

聞き覚えのある深みのある静かな声の方を振り向くと、そこにはカ
ルネ村で共闘した森の賢王、ハムスケがいた。

ハムスケのすぐ脇にはモモンガとペロロンチーノ、それと蒼の薔薇
のガガーラン。そして、初めて会う角の生えた面頬付き兜クロイズド・ヘルムを被り、金
と紫で縁取りされた漆黒の全身鎧フルプレートに身を包んだ人物がいる。

「これはハムスケ殿。それにモモンガ殿とペロロンチーノ殿も王都に
来ていたのか」

「ええ、つい先ほど到着した所です。蒼の薔薇のガガーランさんが
王都を案内してくれていたんです」

「戦士長の家には、明日訪れようかなって思っていたけれども……こ
こで出会ったのも何かの縁という事で、もしよかったらばだけでも
一緒にご飯食べに行かない？」

ペロロンチーノからの誘いに、ガゼフは少しばかり考えてから答え
る。

「ふむ……分かった。王都に来てくれた際には歓迎すると約束してい
たしな。折角だから今晚の食事は俺が奢るとしよう」

「えっ、良いの！ ありがとう！」

「ガゼフ殿、某も沢山食べさせてもらうでござるよろ！」

ガゼフからの提案に、ペロロンチーノとハムスケがハイタッチして
喜ぶ。

その様子を間近で見たガガーランが、感心したように呟いた。

「へえ、マジで王国戦士長と知り合いだったとはなあ」

「モモンガさんもペロロンチーノさんも、無自覚に人誑しですからね。
あの二人が切欠で同じチームに所属したメンバーも結構いましたよ」
「へえ、その中にはお前も含まれているんだろ？」

「ええ、勿論。ちよつと事情があつて結構長い間離れ離れでしたが、
こうして再会できたのは、ある意味では奇跡だと思つていますよ」

「詳しい経緯とかも聞きたいところだが、それは野暮ってもんだな。そんじや、ガゼフのおっさんも加えて行くとするか」

茜色に染まっていた空が暗くなった王都の大通りを、数は少ないながらもすれ違う仕事帰りの人々とぶつからないように、四人の人物が器用にすり抜けながら歩いていた。

一人は漆黒のローブで全身をすっぽりと覆い、額の部分に朱の宝石を埋め込んだ仮面を被った魔力系魔法詠唱者^{マジック・キャスター}。イビルアイ。

そしてオレンジに近い金色の髪をした、スラリとした肢体を全身にびったりと密着するような黒色の衣装で包んだ双子の女性。ティアとティナ。

最後に煌びやかな装備に身を包んだ、命の輝きともいえる様な生命力あふれた魅力を見せる女性、ラキュース・アインベル・デイル・アインドラ。

四人とも、同じアダマンタイト級冒険者チーム“蒼の薔薇”のメンバーだ。

四人が向かっているのは拠点にしている冒険者の宿屋。急いでいるのにはいくつか理由があった。

それは数時間前にティアとティナの二人が集めてきた新たな情報を、別行動をとっていたガガーランに伝えるためだ。

一つは王国に巣食う巨大な裏組織、八本指の最強戦力である六腕全員が王都から出払っているというもの。

六腕は一人一人がアダマンタイト級冒険者に匹敵するとも噂され、危険なアンデッドである死者の大魔法使い^{エドゥルリッチ}も所属しているとも言われる。

蒼の薔薇の人数は5人。欠員がいなければ6人いる六腕と真っ向からぶつかり合いになるのは、数の差もあってイビルアイはともかく他のメンバーが非常に危険なのだ。

そのような存在が王都を離れている状況は、国の行く末を憂いでい

るラナー第三王女の願いでひっそりと八本指と戦い続けている蒼の薔薇の面々にとつては、千載一遇のチャンスともいえる。

もう一つは、八本指の王都における拠点の情報。

真偽の検証を終えたラナーの推察では、王国に潜んでいる帝国のスパイが提供してきたのではないかという。

提供した情報を王国が有効利用して八本指を摘発しようとするれば、必然的に八本指とぶつかり合うことになる。敵国が自浄作用を発揮すれば、帝国自らが矢面に立たずに巨大な裏組織を弱体化させながら、敵国の力も短期的には削ぐことが出来る。

反対に、王国がこの情報を握りつぶすなりリークするなりして八本指を利用する行為を行った場合、王国にはこの地を治める資格なしと帝国が攻め込む大義名分を与えることとなる。

そして、八本指と深く癒着している貴族が多い王国では、このままではほぼ確実にこの情報は活かされない。それだけこの国を蝕んでいる腐敗は深いのだ。

ならば、ラナーの様なごく一部のみで動いて対処するしかない。

ガガーランと合流する際に伝える内容を頭の中で整理していたラキユースだが、目的地がある大通りで人だかりができている事に気がつく。

何事かと耳をそばだてると、人だかりからは驚きと恐怖を含んだ声で不安を滲ませながら話していた。

——宿の庭にいるあの魔獣と亜人は一体何なんだ？

——あれほど立派で聡明そうな魔獣は見たことがない。

——俺達に襲い掛かったりしてこないよな？

——でも戦士長と蒼の薔薇のガガーランが一緒にいるなら、大丈夫なのか？

どうやら目的地にガガーランの他に戦士長と魔獣、亜人がいるらしい。正直言つて、どんな状況なのかさっぱり読めない。

ラキユース達が人だかりを抜けて大通りの横手にある宿屋へと向かうと、確かに庭には初めて見る魔獣がいた。

その魔獣は蛇の様な鱗を持つ長い尻尾の生えた白銀の四足獣だ。

漆黒の瞳は英知を感じさせこの魔獣の強大さを感じさせる。そんな魔獣が大皿に大量に乗せられた野菜や果物をむしやむしやと美味しそうに食べていた。

目的の人物——ガガーランは魔獣の近くに置かれた大きな丸テーブルに他の人物と共に座っている。

同じテーブルにガガーランの他にいたのは4人。一人は金と紫で縁取りされた漆黒のローブを纏い、形容しがたい表情の仮面をつけた魔法詠唱者風の人物。もう一人は角の生えた面頬付き兜を被り、金と紫で縁取りされた漆黒の全身鎧フルプレートに身を包んだ人物。

此処まではまだ冒険者なら実力を値踏みする意味の興味を持つだけで済んだ。問題は残る二人だ。

一人は、キラキラ輝く金色の鎧を着用した、猛禽類の頭と翼を持つ鳥の亜人だった。

イビルアイとティアは王国では見ない亜人に警戒するが、魔法詠唱者風の人物と鳥の亜人の首元に、冒険者であることを示すプレート——その中でも上位の白金級を示すものが掛けられている事に気がつくのと、幾分かは警戒を緩めた。王国と隣接している評議国の冒険者は亜人が多いと聞くからだ。

そして残る一人が、近隣諸国で戦いに関係する仕事をしている者ならば知らぬ者はいない、近隣諸国最強の戦士。王国戦士長のガゼフ・ストロノーフ。

骨付き肉に豪快に齧り付いて飲み込み、酒を大きな口で一口飲んだガガーランが、ハスキーな大声を上げた。

「おつ、ラキュースじゃねえか！ 待ちくたびれて先に飯食つちまっ
ているぞ。詳しい話は後ですからよ、先に飯食おうぜ」

「はあ。本当はすぐにでも聞きたいけれど、周りにこれだけ人がいたら、それも無理そうね。分かったわ。みんな、まずは食事にしまし
よう」

ガガーランに対して、ラキュースはため息をつきながら応えるのであった。

食事を終えて、ハムスケと呼ばれた白銀の魔獣が馬小屋で夢の世界に入った所で、宿屋2階の大部屋一つを貸し切ってイビルアイが防音対策用のマジックアイテムで周囲に音が漏れないようにする。

そうして始まった話は、まずガガーランとモモンガ達が出会ったいきさつからとなった。

その過程で漆黒の全身鎧フルプレートに身を包んでいたラキスケが顔を見せると、ティアとティナ、イビルアイが強く警戒したが、ガガーランとラキュースが止めに入って話は続けられた。

ちなみにラキスケが顔も隠せる漆黒の全身鎧フルプレートを身に着けていたのは、王都に入る際に八本指のものに察知されるのを防ぐためである。その際にはルーシーという偽名も使っている。

「——つまり、ガガーランは貴方達に助けられたという事ね。ありがとう、貴方達がいなかったら私たちは大切な仲間を一人失ってしまう所だったわ」

「いえ、こちららも蒼の薔薇の皆さんにこうしてお会いできましたし、アレを放置するわけにはいきませんでしたから」

「それにしても、ヘカトンケイルと言ったか？ 王都の近くにそれほどの脅威が迫っていたとは……私からも礼を言わせて欲しい」

ラキュースとガゼフがモモンガ達に謝意を述べるのに対して、イビルアイはヘカトンケイルに変貌した下位単眼巨人レッサーサイクロプスが使ったものに興味を向けていた。

「気になるのは、ただでさえ脅威な下位単眼巨人レッサーサイクロプスをさらに上位の存在に変貌させたマジックアイテムについてだな」

「私を知る限りでは人間種を巨人に転生させるマジックアイテムの存在はありますけれども、本来の過程を無視して最上位種にするものは知りませんね」

「下位単眼巨人レッサーサイクロプスに従っていた巨人たちやヘカトンケイルになった奴に自我が残っていなかったことも妙なんだよなあ。あれはまるで、禁断症状で暴れる麻薬中毒者みたいだったぜ」

「麻薬……ひよつとして、八本指が絡んでいる?」「でも、いくら八本指でもそんなマジックアイテムを用意できる?」

「こうなってくると、ヘカトンケイルを粉々にしたのは失敗だったかなあ」

イビルアイの話から各々がその話題について語り合う。

現物があれば、アブレイザル・マジックアイテム《道具鑑定》で調べることができたのだが、そ

れを纏めていた袋はヘカトンケイルを倒す際に一緒に燃え尽きてしまい、草が生い茂る広い草原から、僅かに零れた分を判別して探し出すのは無理だった。

「現状では答えが出ないその話は後にして、そろそろ本題に入りましょうか」

ラクスケは皆の注意を惹く様に両手を叩くと、蒼の薔薇に要件を話し始めた。

「今回、私が蒼の薔薇の皆さんにお会いしたかった理由は、八本指を叩き潰す協力をして欲しいからです」

「言っておくけどよ、俺個人としては受けて良いと思ってるぜ」

ラクスケの簡潔な説明に、ガガーランは蒼の薔薇の他のメンバーに先んじて自分の意思を告げる。

「ガガーラン……」

「助けられた恩を返す意味もあるけどよ。俺じゃ倒せなかった怪物をあっさり倒せる奴らが、八本指と敵対しようとしているんだ。これはチャンスだと思うぜ」

「丁度、六腕は王都から出払っているし、全てではないけど拠点も明らかになっている」

「成功すれば大きなリターンが得られるのは確か」

「あまりに都合が良すぎて怪しくは思えるが……。ラキュース、お前が乗るならば私は別に構わんぞ」

「そうね……。明日にでもラナーと相談して決行の日取りを決めましょう」

「ありがとうございます。でも、良いんですか? ほとんど初対面の俺の言葉をこんなに簡単に信じて」

「このまま対症療法的に八本指の末端を叩いても、じり貧になるだけだもの。それに、ガガーランがここまで信じている相手を無下にするのはねえ」

「ガガーランに春が来た」

「すみませんが、俺には恋人がいますのでそういう関係はちよつと……」

「ガガーランの春は終わった」

「そもそも始まってすらいねえだろ。というか、そういう目では見てねえよ」

ラキスケからの要請を快諾した蒼の薔薇の脇で、ガゼフはモモンガに尋ねていた。

「なるほど、食事の後も俺を引き留めていたのは、この一件に引き込む為だったのか」

「すみません、戦士長。戦士長の人柄ならば信頼できると考えて、勝手に進めるよりは話だけでも通しておこうと思ひまして」

「モモンガ殿、謝らなくて大丈夫だ。俺としても、この国を蝕んでいる八本指はどうにかしたいと思っていたからな。戦士団を動かすとなると国王の許可はあるが、おそらくは大丈夫だろう」

「ありがとうございます」

ガゼフもモモンガから事情を聴いて快諾する。

そこにペロロンチーノが疑問を投げかけた。

「六腕が王都から出払っているって話だけど、どういう連中なの？」

「六腕は、八本指最強の六人の事で、一人一人がアダマンタイト級に匹敵する猛者だと言われている。現在の六腕は、『不死王』『デイバーノック』、『空間斬』、『ペリユシアン』、『踊る三日月刀』、『エドストレーム』、『千殺』、『マルムヴィスト』、『幻魔』、『サキユロント』、そして警備部門の長『闘鬼』、『ゼロ』。外見は――」

ティアがペロロンチーノの疑問に答え始めた所で、ラキスケは考え始め、何かを思い出したような反応をした。

「ん？ ゼロにサキユロント？ ……あつ」

「ラキスケさん、どうかしましたか？」

「ああ、いえ。もう終わった事だったからさつきまで忘れていましたけど、ティアさんの説明で思い出しまして」

「何だ？ まさか六腕と遭遇しているだなんて言わないだろうか？」

「エ・ランテルで返り討ちにした八本指の構成員、名前とか特徴がその六腕と一致していたもんで。そもそも、俺が八本指を潰そうとしているのは、俺と恋人を狙って襲い掛かってきた奴らへの報復ですし」

「ああ、あの時の彼らでしたか。冒険者組合で調べた結果では八本指の最上位の戦闘員だろうって結論でしたけど、まさか最高戦力だったんですね。そうだと分かっていたら、誰かは生かしたまま捕らえて、情報を引き出すこともできたのですが」

ラキスケが思い出した内容を話すと、モモンガもラキスケと再会した時にいた者たちの事を思い出す。

その話を聞いたガガーランがポツリと呆れながら呟いた。

「ラキユース。八本指の拠点を襲撃した後の懸念が、一気に無くなっちゃったな……」

「そうね、ガガーラン。もう、彼らだけでも大丈夫なのではないかしら……」

「いや、あいつらただだと王都中を風潰しになるだろうから途中で逃げられるかもしれないし、無関係な連中も大勢巻き込まれる」

「そっかあ……。彼ら、この国に配慮してくれたのね」

六腕の壊滅を知ったラキユースは、嬉しい筈なのに苦笑いするしかなかった。

第十五話 ※エロ無し

翌朝、蒼の薔薇の面々はガゼフやモモンガと共に王城口・レンテに朝一番に登城した。ラナーに面会して八本指への対処に新たな協力者ができた事と、彼らが六腕を全滅させるほどの卓越した実力者であることを伝えるためだ。

この時、人間の姿をしていないペロロンチーノとハムスケ、そしてまだモモンガが魔法で作成した全身鎧フルプレートを脱いで本当の姿を見せるわけにはいかないラキスケはイビルアイの監視の下、門前にある建物で待機することとなった。

「モモンガさんに押し付ける形になっちゃったけど、大丈夫かなあ」
「本当は発案者の俺が行くべきなんですけども、八本指を潰すまでは正体に気づかれる訳にはいきませんからねえ」

「殿ならば大丈夫でござるよ!」
三者の雑談をイビルアイは素顔を隠す仮面の下で注意深く観察する。

ワーカーだがバハルス帝国の鮮血帝ジルクニフとも繋がりがあるとも噂されているラキスケには、もう一つ見過ごすことが出来ないある疑惑がある。

それは100年ごとにこの世界に現れて多大な影響を与える存在、
“ぷれいやー”だ。

そんなラキスケとかつて同じ組織の仲間だったというモモンガとペロロンチーノの事も、イビルアイは強く警戒している。

「(もしもこいつらが“ぷれいやー”の場合、100年の一度の揺り戻しが今回も起きたことになる。たとえば“ぷれいやー”ではなくその血を引く神人だったとしても、その本質が危険ならばツアーの奴に伝える必要がある)」

「ん? 俺達のことをじっと見ているけど、イビルアイちゃん——」

「(拙い、気づかれたか!?)」

「——ひよっとして、一緒におしやべりしたかったりする?」

「……は?」

こちら側に残った真意を見抜かれたかとイビルアイは警戒したが、ペロロンチーノの見当違いの言葉に呆気にとられる。

「いや〜。イビルアイちゃんみたいなかわいい子とおしゃべりするのは、俺は大歓迎だよ」

「いや待て、どうしてそうなる。そもそも私はお前に素顔を見せたりなんてしていないだろう」

「仮面に付与している効果か何かで声質を分かりにくくしているみたいだけれども、声優をやっている姉ちゃんの声を常日頃から聞いている俺には、イビルアイちゃんの本当の声がどうなのか簡単に分かるよ。声質と体格から想像するに、肉体的には大凡10代前半くらいだよな? それから——」

「……ひえっ」

熱く語り始めたペロロンチーノに対し、イビルアイは背筋がぞわつとするような、恐怖とも異なる寒気を感じて小さく悲鳴を上げる。

リグリットから泣き虫だとか散々言われていたが、悲鳴を上げるのは実に200年ぶりだ。それも魔神との戦いではなくて只の雑談で悲鳴を上げたことなど今までであっただろうか?

未知の感覚に震えるイビルアイの意識を現実に戻したのは、ペロロンチーノの頭に叩き込まれたラキスケのチョップだった。無論、全力ではないが、それでもガントレットを嵌めた腕での一撃はペロロンチーノの言葉を遮るには十分な衝撃を与えたようだ。

「あだっ!」

「ペロロンチーノさん……ストップです。傍から見たら、完全に事案ですよ」

「まって!? イエスロリータ、ノータッチは守っているから! イビルアイちゃんからは合法ロリのオーラを感じただけだから!」

「ペロロンチーノ殿は時折、度し難い事を言うでござるな〜」

「ハムスケえ……」

チョップされた辺りを両手で押さえてペロロンチーノは弁明する。

そんな彼のある言葉からイビルアイは、かつて十三英雄のリーダーと同じ“ふれいやー”だった一人に揶揄われた時の事をふと思い出

す。

——それにしても、あの国墮としての正体が、合法ロリの吸血鬼ヴァンパイアだったとはねえ。

彼は巫人だったために十三英雄の伝承には残されることはなかったが、その強さと知識には大いに助けられたものだ。

確か合法ロリというのは、見た目は幼子だが年齢は大人の女性に対して用いる言葉だったか？

遠回しに幼子だと言われている事に、イビルアイは仮面の下でムツとする。確かにこの身はあの出来事で200年以上前から12歳で止まっているが、国墮としとして伝説にすら謳われる女。舐められるのは気分が良いものではない。

というか、どうして英雄譚サーガや演劇で扱われる国墮としては、妖艶な身体ヴァンパイアの美女という設定で十三英雄のリーダーとの悲恋が描かれているんだ。

以前ティアがどこかから持ち込んだ艶本でも、国墮としてはその美貌に嫉妬した魔女によって吸血鬼ヴァンパイアに墮とされた亡国の姫君という設定で、種族の垣根を超えて十三英雄のリーダーと一夜の過ちを侵すという内容があった。

伝承と本来の容姿が異なるのは正体を隠す上では有用だが、それにしても下心と恋愛脳に満ちた設定に改変するのは如何なものか。そもそも、彼は大切な仲間であったが恋愛感情など一切ない。

思い出したらなんかムカムカしてきた。どうしてアンデッドの肉体だというのに、こんな事で苛つかなければならないんだ。

「……っはあ。何を私は昔のことを思い出しているんだ。あれは既に過ぎ去った過去だ」

「ん？ イビルアイちゃん、なんか言った？」

「なんでもない」

「そっか、じゃあ聞かないでおくよ。……そういえばさ、確か四大暗黒剣の内一本を蒼の薔薇のリーダー、ラキユースさんが所有しているって話があったよね？」

イビルアイの眩きを、ペロロンチーノは詮索せずに流す。代わりに

十三英雄の一人である暗黒騎士が所有していたという四大暗黒剣の話を持ち出す。

「ええ。エ・ランテルでそういう話をしましたね。それがどうしました？」

「我らのリーダーが魔剣キリネイラムの事だな。それがどうした？」

「ラキスケが持っている腐剣コロクダバールをモモンガさんが調べた時に、四大暗黒剣は種類を揃えるほど強力な効果が使えるようになるって分かったけど、呪いの種類と効力が強化されるコロクダバールに対して、キリネイラムはどんな風に強化されるのかなって気になってね」

「んー……エネルギー放出系の能力だから、出力と効果範囲が広がるとかじゃないかな？」

「……以前《道具鑑定》で調べたが、四大暗黒剣にそんな効果が隠されていたなんて初めて知ったぞ」

「そこは《道具鑑定》と《道具上位鑑定》の効果範囲の違いかな？ 《道具鑑定》だと分からない情報って、割とあるし」

「そうそう。一見有用そうに見える装備品やマジックアイテムでも、オール・アブレイザル・マジックアイテム《道具上位鑑定》で調べると隠されていたデメリットが大きくて使い物にならないっていうパターン、結構ありますしね」

「そうなってくると、残り二本の暗黒剣がどんなふうに強化される武器なのかも気になってくるな」

「死剣スフィーズは名前の響きや分かっている効果から即死確率の上昇だとして、効果が分かっている邪剣ヒューミスはちよつと予想がつかないですね」

「カースドナイトの職業が使えるスキルとかが基になっているだろうから、装備品の破壊効果とかかな？」

「カースドナイトと言えば、帝国の知り合いにその職業を持っている人がいるんですよ」

四大暗黒剣の話題から始まった雑談は、ラキスケの発言で別の話題へと変わっていく。

「カースドナイトって前提職が60レベル分必要ですけど……ああ、

この間のヘカトンケイルみたいに、正規の方法じゃないのか」

「ええ。話だとモンスターに死の際の呪いをかけられた所為で取得したみたいです。本人が望んだわけじゃないから何とかしてあげたいんだけどねえ」

「使う武具がすぐ壊れて困っているみたいない感じ？」

「いや……。そっちの方は問題ないけれども、顔に呪いが出ちゃってね」

「日常生活が不便なパターンか……。職業に由来する呪いって、特殊なアイテムとかじゃないと緩和は出来ても封じ込められないからなあ。……さてよ、アレならばひよつとしたら」

「何か当てがあるんですか？」

考え込んだペロロンチーノが何か思いついたようで、ラキスケはそれが何かを尋ねる。

「うん。実際に通用するかは分からないけど、本来のカーズドナイトの呪いに戻す分には何とかなるかなって」

「そうですね。まあ、機会があつたら彼女に話を通しておきますよ」

「帝国に立ち寄ることがあつたらよろしくね……。って彼女？」

「そういえば言っていないませんでしたね。その人は帝国の女騎士なんですよ」

「……浮気？」

「断じて違います」

彼らがプレイヤーなのかを見極めようとイビルアイは観察するが、幾つかの情報を得たものそれ以上に話が逸れていくことの方が多く、途中で何度も打ち切ろうかという考えが頭によぎるほどであった。

ペロロンチーノたちが話の花を咲かせている頃、王城内の一室では、自らの装備一式をまとめた袋を床に置いた蒼の薔薇一行が、ラー第三王女にモモンガを紹介し終えたところだ。

モモンガは普段のまま仮面も外していない。そんな恰好が許されているのは、同行したガゼフが戦士長として責任を持つと言ったためだ。

「——あなたが戦士長様に助力して下さいました、魔法詠唱者マジック・キャスターですね」

「はい、戦士長殿には微力ながら協力させていただきました。今はその時に戦士長殿と共闘した森の賢王ハムスケと、私の友であるペロロンチーノと共に旅をしております」

「まあ！ 森の賢王と言えば、以前クライムが話してくれた伝承にある、トブの大森林に住まうという伝説の魔獣の事ですね。そのお話では、白銀の毛皮と蛇のような尻尾を持つ四足獣だと言い伝えられているのですが、本当なのでしょうか？」

ラナーの後ろに控える少年と青年の丁度境目の様な男——クライムの表情が、ラナーの口から自らの名前が挙がった時により一層固まる。

モモンガから見たクライムは、とても真面目だが緊張している新入社員の様な雰囲気を感じた。彼が漂わせる重い空気は、まるで失敗が許されない初めてのプレゼンに挑むかのようだなど、モモンガは思う。

それにしても、聡明で平民を慮った政策を立案する優しい姫だとは聞いていたが、どうやら好奇心も強そうだ。

「ええ。城内に入れてしまうと城の者たちがパニックになると考えて、ハムスケには門前の建物で待ってもらっています」

「ラナー。森の賢王のお話は私も聞きたいけれども、今は本題に早く入りましょう」

「明らかになっている八本指の拠点についてね。元々の計画では、八本指最強戦力の六腕が王都にいない内に襲撃する手筈になっているけれども……ひよつとして、彼らも協力してくれるの？」

「正確には、私の友であるラクスケさんに危害を加えようとした者たちを返り討ちにしたら、それがたまたま八本指の六腕だったという話ですけどね。どこに八本指の拠点があるかなどの情報はさっぱりでしたので、蒼の薔薇の皆さんが八本指と敵対している事を知ることが

出来て、本当に良かったです」

モモンガの言葉に、クライムは目を見開く。六腕は一人一人がアダマントタイト級冒険者に匹敵すると言われている戦闘集団だ。白金級冒険者のプレートプレートをを首から下げているモモンガでは、本来ならば勝算などないはずの相手なのだ。仮に相性が良い相手だったとしても、誰か一人に勝てるだけでも大金星と言ってもいい。

「そ……それは六腕の誰かを倒したという意味でしょうか？」

「あー……言葉が足りませんでしたね。実際に戦ったのはハムスケとラキスケさんの二人ですが、六腕は六人全員打倒しました」

「ぜっ……全員!!」

思わず口に出してしまったクライムに対するモモンガの返答に、クライムは思わず絶句した。

「ラキスケは帝国最強のワーカー」「今は正体を隠すために全身鎧フルプレートで姿を隠して偽名を使っている」

「帝国の……ですか。あの鮮血帝や帝国の貴族からの依頼を受けてという可能性はあるのではないしょうか？」

「そういう依頼を受けている可能性は否定できないが、少なくとも理由としては二番目三番目になっているぜ。あいつは惚れた女のために八本指を潰そうとしているんだよ。童貞、お前さんだって、王女さんに身の危険が降りかかってきたら、勝てるかどうか考えないで何としても守り抜こうとするだろう？」

クライムがラキスケの素性を聞いて心配するのに対して、ガガーランはクライムのラナーに対する忠誠・思いを例に挙げて説明する。

それは遠回しにクライムはラナーに惚れていると言っているようなものであった。

「クライムなら大丈夫。どんな時でも私を必ず守ってください」

「ラナー様……。……っは！ 申し訳ございません。お話し中に突然割り込んでしまっただけ！」

「大丈夫よ、クライム。貴方が聞いてくれたおかげで、作戦の後の懸念だった六腕との全面対決が無くなったことが分かったし、彼らの実力が信用できることも分かったもの」

「彼らの話を信じるならば、六腕はズーラーノーンと結託してエ・ランテルで邪悪な儀式を行おうとしていた可能性もあるらしいわ。アンデッドであるデイバーノックを六腕に引き入れる連中だから、信憑性はそれなりにあると思うの」

「でもそうになると、今夜にも早急に計画を実行する必要があるわ。ズーラーノーンとの繋がりが六腕あるいは警備部門の範囲で収まっているならばともかく、もしも八本指全体の総意だったとすれば、計画が頓挫したことにすぐ気がついてもおかしくないわ。六腕がもういないならば、拠点の一つずつ順番に襲撃するのではなくて、分散して同時に襲撃して、一気に落とすことも十分に可能だと思うの」

「ラナーが修正した計画の内容に、静まり返る。」

この作戦に従事するのは、元々は蒼の薔薇のみだった。そこにモモンガ達とガゼフも参加することになったが、それでも明らかになつていく八つの拠点を全て同時に襲撃するには、手が足りるのか不安が残る。

「静寂を破つたのは、モモンガであった。」

「あー、今回の作戦にあたって、対象に加えて欲しい所があるのですが、よろしいでしょうか」

「八本指が関わっている重要な場所であれば構いません。今回が大掃除のチャンス。この機会を逃せば王国が自力で立て直せる好機は失われてしまうかもしれませんから。それでその部門はどこなのですか？」

「おそらくは奴隷部門が運営していると思われる、悪辣な娼館です」「ラナー。彼が言っている娼館って、ひよつとしてまだ正確な場所は分かっていない例の娼館じゃないかしら？」

「かもしれない。もし違っていたとしても、放置する理由がないわ」「ありがたいございます。私の友も、最悪でもそこだけは完膚なきまでに潰さないと気が済まないと言っていましたので」

「ほつとしたモモンガは感謝を述べながら安堵する。」

それを聞いて蒼の薔薇の一行は、ラキスケの恋人がどういう境遇の女性だったのかを大まかに察した。

「でも、王女さんよお。モモンガ達やガゼフのおっさんが加わったとはいえ、襲撃箇所がさらに増えて手は足りるのかよ？」

「単純な数だけならば私の召喚魔法で増やすことはできますが、さすがに都市内でモンスターを召喚するのは拙いですよね？」

「ええ。そうなると森の賢王を単独で動かすわけにもいかないものね。そういう意味では巫人であるペロロンチーノさんも誰か付いた方が良いかしら？」

「私たちが入手した情報にある八本指の拠点は八か所。そこに娼館を追加すると、九か所になる」

「私たちが全員別々の拠点を襲撃して、森の賢王とペロロンチーノは誰か一人ずつ付けるとした場合、同時に襲撃できる箇所は八か所まで。一か所を見逃すことになる」

ガガーランの懸念を切欠に、モモンガの提案を受け入れて増えた襲撃箇所を含めると、全てをカバーしきれないことが明らかになる。

「クライムも含めれば数は揃うけど、彼だけで向かうなんて自殺行為よねえ。だからと言って、森の賢王やペロロンチーノとは初対面だから組ませるわけにもいかないし」

「力が足りず、申し訳ありません」

「ごめんなさい、クライム。そういうつもりで言ったのではないの」

「そうなると、娼館は後回しにして他の拠点への襲撃が終わってからにするか？ でも、それで取り逃がしたらラキスケさんがブチギレかねないしなあ……」

「それでしたら、信頼できる貴族の力を借りようと思います。たった一人だけ信頼できる貴族を存じておりますので」

「そんな貴族を知っているのですか、姫様」

「はい、戦士長様。貴方にとつてはとても意外に思われる方ですが、レエブン候をこちら側に付けようかと思えます」

「レエブン候ですか!？」

ラナーの口から出た貴族の名に、ガゼフは思わず声を上げる。

確かにレエブン候は現状を打開するのに求める人物像に当てはまる。しかしそれはもつとも重要な信頼性という一点を除いた話だ。

「確かに候直轄の親衛隊はかつて高位の冒険者だった者たちですから、戦力としては期待できるでしょう。ですが、候は自らへのメリツトを求めて王派閥と貴族派閥を蝙蝠のように動く男です。八本指とのつながりを持っていてもおかしくはないのではないのでしょうか？」

「ええ。確かにレエブン候は周囲にそう思われるように振る舞っております。ですが王派閥を陰で纏め、王国を二分するような内紛を幾度も阻止してきた功労者でもあるのですよ」

「なっ！ それは本当なのですか!? 確かに、言われてみれば。いや、しかし……」

ガゼフの否定的な意見に、ラナーは微笑みを絶やさないまま答える

一方のガゼフは幾つか心当たりがあるようだが、それでも長年考えていたレエブン候のイメージとのギャップがあり、心の底から信じ切ることができていないようだ。

「はい、今回の計画が無事に終わったら、お父様と私と一緒にレエブン候に尋ねてみてはいかがでしょうか？」

「……畏まりました」

「そういう訳で、クライム。レエブン候を呼んできて。つい最近の会議にいらしてましたので、まだ王都内にいらっしやるはずです。八本指の六腕がすべて打倒されたという話をすれば、会ってくれるはずだから」

蒼の薔薇の一行の、レエブン候が来るのは早くてもお昼ごろにはなるだろうという予想を裏切って想定よりも早くやってきたレエブン候と、同伴してきた小太りの男——第二王子のザナック・ヴァルレオン・イガナ・ライル・ヴァイセルフに、一行は驚きを隠せなかった。

ザナックの提案で三人だけで話すことがあるために一旦は隣部屋に移ることになった蒼の薔薇一行とクライム、モモンガとガゼフは頭を下げてから各々の荷物を抱えて隣部屋へと移動する。

「先ほどの話では、レエブン候はかなり力のある大貴族だと聞いてい

ましたけど、フットワークも軽いですね」

「ああ、候程の大貴族となれば、朝から他の貴族との面会などの予定が多岐にわたってあるはずだ。陛下直属の命であればともかく、姫様は大きな権力をお持ちでない方だから、候にとつての優先順位は低い筈なのだが……」

「私も驚いたわ。レエブン候には良いイメージがなかったけれども、ラナーの言葉が本当ならば、王国を存続させている功労者という事になるもの」

モモンガの眩きに、ガゼフとラキユースは自らが抱いていたレエブン候のイメージと、ラナーが話した内容のギャップに戸惑う。それだけレエブン候が周囲に持たれているイメージは良いものではなかったのだ。

「やはり……姫様の仰ることは本当なのだろうか。だとしたら、俺は候に対して不敬な念を抱いていた事になる」

「相手を見る上では第一印象ってかなり大きいですからね。それも、周囲にそう思われるようにワザと振る舞ってきたとなれば、気づかなかったのも仕方ないのではないでしょうか？ 私だって仮面で素顔を隠した魔法詠唱者マジック・キャスターです。道中でガガーランさんと出会っていなかったら、怪しまれてこうして参加できていなかったかもしれないし」

「ウジウジしていても仕方ねえさ。今回の作戦を無事に終えたら、王女さんが面と向かって話す機会を作ってくれるんだろう？ だったら、その時にはつきりさせればいいんだよ」

「さすがは兄貴。漢らしい」「性別間違えて生まれてきている」

「おいこらてめえら」

「ティア、ティナ。ガガーランを茶化さないの。ラナーの交渉が上手くいってくれると良いんだけど、あの子って根回しとかがとても苦手なのよねえ」

「もしもダメだったら、転移魔法を駆使しての過密スケジュールも考えられるのか。そういう時に限ってイレギュラーが起きやすいから、できれば余裕を持って行動できるようにして欲しいや」

「わかる。息抜きに小さい子と戯れたい。クライムは大きくなり過ぎだから論外」「この間鬼ボスが組んだスケジュールは殺人的だった。ご褒美に鬼ボスの身体払いを所望」

「二人とも……」

堪えてはいるがこめかみに青筋を立てているラクユースの声は、弱い者であつたらばそれだけで委縮させてしまいそうな凄味があつた。

ガゼフとクライムも、テイナとティアの性癖の発露に顔を引きつらせて困り顔となっている。

その様子を見たモモンガはふと思った。蒼の薔薇の人たちって、個性豊かだなあ……と。

第十六話 ※モブによる凌辱あり

八本指の奴隷部門が経営する違法娼館。その一室では、ベッドの上で一人の裸の男が少女を組み敷いて犯していた。

男の名はエルヴィー・メーラ・デイル・クレメンズ。クレメンズ領を治める子爵であり、この娼館に客を斡旋する人物の一人でもある。

「いぎいいいっ！ あがつー！ い、いやあああつー！」

「もつと私を気持ちよくしろ、ガキが！」

泣き叫ぶばかりの少女の顔に、自分を悦ばせない事に苛立ったエルヴィーは繰り返して平手打ちをする。

テンポよく、パアンとはたかれた音が部屋に響き、その度に、裂傷によって血を流しながらエルヴィーの逸物を啜えこんでいる膣内が痙攣して彼に快楽をもたらす。

「あぐっー！ い、痛いよお……助けてえ、お母さん、お父さん」

両親に助けを求める少女の身体は、全身に見られる内出血によって肌を斑に染め上げている。

腹部だけは他よりも内出血が少ないが、代わりに年齢不相応に膨らんでいて、この少女がすでに妊娠してしばらく経過している事を示していた。墮胎させないままなのは、この娼館を利用するエルヴィーの様に妊娠している女を犯すことに興奮する者が客の中にいて、この娼館にとつてはある種の希少価値があるからだ。

少女が暴力から身を守ろうと前に出した両腕のうち、右腕は腱を断たれているために指先を動かすことが出来ない。

泣きじやくり許しを請う少女の姿にエルヴィーは、この少女がどのような末路を迎えるのかを悦に浸りながら考える。

「愚かな小娘だ。お前が助けを求める父親への見せしめとして、母親諸共こんな所にまで身を落としているというのに。母親が相手している、私の部下であるスタッファン・ヘーウィッシュは、ボロボロになった女を犯すことに強い精的興奮を覚えるサディストだ。私がこの店を紹介してから既に何人もこの女を、性癖を満たす過程で殴り殺しては、その度にいくらかの処分料を支払っているくらいの常連で

もある。ああ……この小娘にこの事を伝えたら、いったいどれほどの絶望に顔を歪めるだろう。考えるだけで私も興奮してくるよ)」

「ひぎいいっ！ く、苦しい……もう、嫌あ」

「私が満足するまで終わらないんだよ！ そんなことも分からないから、貴様はガキなんだ！」

「あぐあっ！ ひぐうっ！」

エルヴィーはより愉しむ為に、少女の腰を掴んで前後に揺さぶるように腰をぐいぐいと動かし始める。

膣内を一突きする度に、少女の絶叫が室内に響く。

部屋の間防音が完璧であるために、隣の部屋の母親にこの声を届けられないことは少しばかり残念だ。もしも生きていたら、帰り際に小娘の具合がどうだったかを母親に教えてやろう。

このまま射精感を高めていき、少女の膣内に欲望の塊を吐き出そうとして――、

ドゴムツ!!!

突然、何かがぶつかつたような音が短い揺れと共に部屋に響いた。

聞こえてきた方向からして、音の出所はスタッファンがいる隣の部屋。防音がしっかりなされているこの部屋にまで響くという事は、相応な衝撃だったのだろう。

エルヴィーは少女を犯す腰の動きを止めて何事かと思案していると、カチリという音と共に、勢いよく扉が開いた。

「なー」

エルヴィーが慌てて開かれたドアの方を見ると、扉の前には角の生えた面頬付き兜を被り金と紫で縁取りされた漆黒の全身鎧フルプレートに身を包んだ人物がいた。

「だ……誰だ、貴様らはー」

絶頂の瞬間を邪魔されたエルヴィーの叫びを無視して、全身鎧フルプレートの人物は無造作に入ってくる。

「おい！ なんかつたらどうなんだ！ 私を誰だと思っているー！」

「五月蠅い」

エルヴィーの抗議を遮るように冷たく言うと、全身鎧フルプレートの人物は赤く

濡れた片手で彼の首を掴んで軽々と持ち上げる。

首を絞められて呼吸が苦しくなったエルヴィーは、宙に浮いている足をばたつかせるが、フルプレート全身鎧の人物の拘束を逃れることが出来ない。

突然の事態にエルヴィーに組み敷かれていた少女は頭が真っ白になる。そこにフルプレート全身鎧の人物がもう片腕を少女にかざした。

「ひいっ！」

恐怖で身を竦めて目を閉じる少女だが、やってきたのは痛みではなく全身が軽くなったような温かい感覚であった。

それと同時に全身の内出血と痛みが引いて、身体の倦怠感なども綺麗になくなっていく。

「痛く……ない？」

「もう大丈夫だよ。君を苛む者はもういなくなるから、少しの間だけお休み」

エルヴィーに対してとは違う、優しい声でかけられた言葉に少女は疑問を浮かべるが、急に睡魔がやってきて意識を手放した。

「き、貴様あ……き、貴族である私にこんな事をして、ただで済むと思っているのか!？」

「もう黙れ」

「あぎやつー！」

なおも暴れようとするエルヴィーの叫び声を無視し、フルプレート全身鎧の人物はエルヴィーの首を掴む力を込めて意識を刈り取る。

フルプレート全身鎧の人物——ルーシーという偽名を使ったラキスケは、影に潜ませていた影の悪魔に少女は優しく、客だった男はぞんざいに運ばせると、次の部屋へと向かう。

本当ならこの男はこのまま首をへし折ってしまいたかったのだが、従業員も客も全員殺しましたは、さすがに拙いだろうと考えた結果の彼なりの妥協だ。

特に一つ前の部屋で女性を殴り殺そうとしていた醜悪な男の時は、その頭を床に叩きつけて潰してしまったことも自制心を働かせる結果となっていた。

ツアレに地獄を経験させたこの施設は、本音を言えば痕跡すら残さ

ずに消し飛ばしたいくらいだ。しかしそんな事をすれば被害者である娼婦たちも巻き込むし、奴隷部門の長であるコツコドールの生死を確認することが出来なくなる。

コツコドールには地獄を味合わせなければ気が済まないが、後々の事を考えるとやり過ぎて殺してしまうのも拙い。

だから、生き残ったことを後悔するような絶望をぶつけてやるだけで済ませよう。

ラキスケは心の内に溜まっている暗い感情を燃やししながら、目的の相手を探すのであった。

「あぎやあああああああー！」

八本指における奴隷売買の長であるコツコドールは、経営する娼館の隠し通路を遮る漆黒の全身鎧フルプレートの戦士を前で苦悶の声を上げながら床に転がっていた。

コツコドールの右足は脛があり得ない方向に折れ曲がり、絶えず激痛を送り続けている。

彼の近くに護衛の類はいない。正確にはいたのだが、この娼館を襲撃した目の前の戦士によって客や従業員共々無力化あるいは殺害されてしまっているのだ。

漆黒の全身鎧フルプレートの戦士はそのままコツコドールに近づくと、彼の右足の踝を金属で覆われた踵で踏み砕いて破壊する。

「ひぎいあああああああー！」

あまりの激痛に叫ぶことしかできないコツコドールを、全身鎧フルプレートの戦士は片手で胸倉をつかんで持ち上げる。

「ああ……やつとこの時が来たよ。まだ始まったばかりなんだ。この程度で音を上げるなよ?」

「あぎいつ……あ、あんたは!」

片手で兜を外した戦士の素顔を見たコツコドールは、その正体に戦慄する。

それは大凡四か月前に警備部門と麻薬部門と共に八本指が抹殺対象に指定した帝国のワーカー、ラキスケだったのだから。

「なんで、生きて——」

「お前らが送ってきた刺客なら、全員工・ランテルの墓地に埋葬されたよ。……いや、エルダーリツチの奴は消滅しているか」

「——あ、ありえない」

「じゃあなんだ？ 目の前にいる俺は、刺客に殺された恨みでアンデッドになったとでもいうのか？」

六腕の全滅という全く想定していなかった事態に、コツコドールは恐怖で歯をカチカチと鳴らしながら震える。

「俺の恋人は、ツアレはここで地獄を味わった。お前だけは俺の手で落とし前をつけたかったんだ。安心しろよ、コツコドール。ツアレも命は助かったんだ。お前も命だけは残してやる」

ラキスケはコツコドールの生存を保障したが、それは彼にとって何も慰めにはならない。むしろ、死という救いが与えられない恐ろしさを、身をもつて味わうことになる。

十数分後、隠し通路の先で待ち構えていたレエブン候直属の兵士を率いた親衛隊の元オリハルコン級冒険者、ロックマイヤーの前に現れたのは、両腕と左足を喪い、傷口の断面が焼け焦げた状態のコツコドールと、彼の何か所も折れ曲がり骨が露出した右足を掴んで引きずってきたルーシーの姿であった。

失禁し恐怖で歪んだ表情で意識を手放している瀕死のコツコドールを、血に染まった全身鎧のルーシーから手渡されたロックマイヤーは、一歩間違えばこの力が王国に向かっていたかもしれない事に肝を冷やすのであった。

王都に存在する八本指の麻薬部門の本拠地になっている館ではその夜、まだ家を継いでいない貴族の嫡男たちを招いての乱痴気騒ぎが行われていた。

この館に招いたヒルマはその日は不在だったが、彼らがやる事は変わらない。

彼らがいずれ家を継いだ時に八本指に利用されることなどお構いなしに、宛がわれた酒や女、麻薬に耽っては自分たちと同じような立場の者たちと友好を深めていく。

彼らにとつていつもと変わらない享樂の夜になるはずだったが、その日は違った。ガゼフ・ストロノーフが率いる戦士団がこの館に踏み込んだのだ。

豪華な装飾で隠しているが分厚い金属板で補強された玄関扉が、さまざまな衝撃音と共に紙屑の様に吹き飛ばされ、がら空きになった扉から戦士たちが次々と乗り込んでいく。

司令塔ともいえるヒルマの不在もあって、突然の奇襲と信じられない光景に八本指の構成員たちは動揺を隠せない。わずか十秒足らずの空白だが、その隙を戦士たちは見逃さずに構成員たちを次々と無力化あるいは殺害していく。

これだけの規模の戦士たちの接近に、警備していた者たちはなぜ気がつくことが出来なかったのか？ それは、戦士団に同行していたあの存在が関係している。

それは、魔法の染料で体毛を闇色に染めた森の賢王、ハムスケである。

ハムスケが使用できる魔法は八つ。その中の《サイレンス静寂》と《カモフラージュ溶け込み》でガゼフや戦士団と共に気づかれないように接近し、警備の者たちの視界を《ブラインドネス盲目化》で奪って混乱している内に障害となる扉を尻尾の一突きで破壊したのだ。

「凄まじい威力だな、ハムスケ殿。俺ではあの扉を両断は出来ても、あそこまで吹き飛ばすことは難しそうだ」

「褒めてくれて嬉しいでござるよ。ささつ、ここから先はガゼフ殿たちの出番でござる」

ハムスケが外に残るのは、狭い屋内ではその力を発揮できないこともあるが、魔獣としての鋭い感覚で逃走を図る者たちを逃さないためでもある。

それに、ガゼフと戦士団が主体となって動いた方が良いという判断もあつたためだ。

「ああ、行つてくる。っはあああ！」

ハムスケの勧めもあつて、ガゼフも館へと乗り込んだ。後に戦士団の一人はこう語つた。

——最後に突入した戦士長が、一番多くの構成員を瞬く間に無力化したんですよ。しかも、貴族たちが立て籠もつた部屋の頑丈な扉だけでなく、隠されていたアダマントイト製の金庫もぶつた切つたんです。戦士長は森の賢王の方が凄いいみたいと言つていましたが、俺達からしたらどつちも凄いです。正直言つて、言葉じゃ語り尽くせませんよ。

招かれた貴族の嫡男たちはこの摘発でまとめて拘束され、実家の領地を継承する権利を実質的に失う事となつた。場合によつては貴族としての地位や領地そのものを失う事になる家もあるかもしれない。

さらに、これまでヒルマが築いてきた貴族とのコネクションも明るみになったのだが、その中に王国の大きく揺るがしかねない代物を見つけたガゼフは、頭を抱えることとなる。

王都における八本指の拠点が摘発されている頃、地下水路を走る複数に人影があつた。それはヒルマと彼女の護衛達だ。

エ・ランテルに潜伏させていた配下からの《伝言》^{メッセージ}で、ラキスケを始末するために向かつた六腕が全滅したことと、数日前にラキスケが白金級冒険者と共に王都方面に向かつたことを夕方頃に知つて、急ぎ自分とごく一部のみが知る隠し部屋を通じて拠点を脱出したのだ。

《伝言》^{メッセージ}による情報伝達は正確性に乏しいとして信頼されていなかったが、この時のヒルマは大きな危険を告げる第六感に従い、招いた貴族たちを返す時間も、情報の裏取りの時間すら惜しんだ。

その行動はヒルマが脱出してからの結果でもって正しいことが証明される。

連れてきた少数の部下たちに周囲を警戒させながら、ヒルマは考える。

絶対にバレてはいけない代物は持ち出すことが出来た。摘発に来た連中も、八本指とバルブロ第一王子の癒着の証拠と裏で進めていたあの計画という、普通ならば隠し通さなければならぬ代物が残されていたならば、そちらに目がいくはずだ。

今回の損失がかなりの痛手なのは間違いない。八本指の麻薬部門としての活動もかなり縮小せざるを得ないだろう。最悪の場合はあの組織を手放さないといけないかもしれない。

それでも、間接的にでもアレの存在が公に露見することによってあの男の怒りを買うよりははるかにましだ。

アンデッドさえも命ある存在へと変質させるというアレと比べたら、人間を巨人に変貌させる実験中の麻薬「シード」など子供だましの玩具みたいなものだ。

あんなものを持つているにもかかわらず、わざわざシードの様な劣化品を研究させるあの男の思惑は分からない。それでもリスクを承知の上で研究を続けていたのは、ただ損切りできる状況じゃなかっただけではないのかもしれない。

……そうだ。私はあの種子が持つ無限の可能性に心奪われたのだ。

「此処にいたか、ヒルマ・シユグネウス」

突如として聞こえてきた言葉が、ヒルマは思考を打ち切る。

つい先ほどまでいなかったはずなのに目の前に突如現れた、外套で頭から全身をすっぽり覆った人物——声からして恐らく男性に、部下は武器を抜き放つが、ヒルマはそれを制止する。

「なんだ、あんたかい。てっきり使いの者を寄こしてくると思ったよ。国の方は良いのかい？」

ヒルマは動揺する内心を隠しながら、何でもないような表情と声色で声の主に話しかける。

「ふん、お前に預けたアレの情報が洩れるわけにはいかないからな。いつまでたっても俺の半分すら満たない弱い個体しか産めないよ。うな、役立たずばかりの国を態々残しているのは、あの場所がアレの

発育に都合が良いからにすぎん」

「そうかい。それで、これからどうするつもりだい？ バルブロを焚きつけて進めていた計画は、今回の襲撃でバレて台無しだよ。八本指も、今回の件が切欠で終わりかもね」

「八本指もあの計画も、所詮は人類の守護者を気取る法国の連中への嫌がらせにすぎんさ。どうせ、あの国王に身内を処刑などできるはずもない。八本指への支援も、お前を此方に引き入れるならばもはや不要だ」

「あら、私の事を高く買ってくれているじゃないかい」

「お前は肉体こそ脆弱だが強かな女だ。それに、薬学の知識も豊富だ。強い個体を産む母体としてはともかく、俺の国の役立たず共よりはずっと評価するさ」

「はあ……。こういう時はもつと気の利いた事を言うもんじゃないかい？」

「上っ面の言葉で強い個体を産ませられるならば、いくらでも奏でてやるさ。とつとと行くぞ」

そう言うと、男の前にした半分を切り取った楕円形の闇が出現する。

男がその闇に入っていくのを見たヒルマの部下たちは顔を見合わせるが、ヒルマは躊躇うことなくその闇に向かって歩を進める。

「何しているんだい。いつ追手が掛かってもおかしくないんだから、早く行くよ！ ……狂王さまの国にね」

ヒルマが闇の中に入っていく、慌てて部下たちも恐る恐る入っていった数秒後、その闇は薄れて消えていった。

第十七話 ※エロ無し

八本指の一斉摘発が行われた夜から三日ほどたった明け方、その日はラキスケ達の出立を祝福するかのようになり、青々とした空がどこまでも広がっていた。

漆黒の鎧を纏って姿を隠しているラキスケに、ラキユースは問う。「もう帰ってしまうのね。もう少しなら、ゆっくりしていけるのに」「気持ち嬉しいですけども、俺の帰りを待っている恋人がおりますので。この節は、本当にお世話になりました」

「こちらこそ、色々世話になったわ」

ラキユースにとって同じ神官戦士であるラキスケは、出自が同じ四大暗黒剣を持つ者同士という事もあつて意識してしまう相手であった。作戦の後は時折、信仰系魔法や四大暗黒剣に関わる話題で華を咲かせたりした際には、ただ高位の信仰系魔法が使えるだけではない、高い教養もラキスケから垣間見ることとなった。

人格破綻者が多いワーカーという肩書からは信じられないくらいに理知的な言動や行動も、良い意味でイメージとのギャップとなつてラキユースに好感を与えている。

何より、神官戦士と暗黒神官という光と闇の相反する信仰を共存させている彼は、内なるラキユースであるダークラキユースと心の中で戦いを繰り広げている身（という設定）としては、目を離せない。趣味の執筆活動も捗るといふものだ。

帝国に拠点を置く立場である事は、今回の八本指の一斉摘発の情報が漏れる危険性はあるが、そもそも帝国のスパイが提供してきた情報なので今更だ。

「イビルアイちゃん。ラキスケは帝国に帰る予定だけれども、俺やモモンガさんはしばらくはエ・ランテルにいるから、機会があったら遊びに来てね」

「っはあ……。機会があつたら考えておく。尤も、エ・ランテルに転移の起点を作るついでになるだろうがな」

ひらひらと手を振るペロロンチーノに、イビルアイは本来ならば感

じるはずがない疲れ——おそらくは精神的な気疲れだろう——を感じながら含みを持たせた言い回しではぐらかす。最初の接触の際のペロロンチーノの言動で、若干だが苦手意識が芽生えているようだ。

イビルアイから見て彼らがプレイヤーであるかどうかの疑惑は、プレイヤーの血を引いた神人の可能性も否定はできないが、結構な確率でそうであろうという所だ。問題はその本質が善性なのか悪性なのかだ。その部分が未だ読み切れていない状態でツアーに話を持っていくのは、起こす必要のない問題を引き起こす可能性がある。

ラキスケが帝都へ帰るのに対して、モモンガ達はエ・ランテルに残るのは、この世界にやってきてからまだ日が浅い事からまずは生活基盤をしっかりと整えてからにした方が良くとラキスケに説得されたからだ。

モモンガとしても親しいとはいえ、恋人がいるギルドメンバーの所に我儘を言つて突撃しに行くほど非常識なつもりはない。だからエ・ランテルを自分たちの拠点として冒険の準備をすることは提案としては有りであった。それに、この世界の未知を切り開いてそれを彼に自慢したいという欲求もある。

「モモンガ、相手に困っていたら俺の所に来いよ。あの時の礼も兼ねてたっぷりと俺が抱いてやるからよ」

「あ、あはは……。謹んで遠慮させていただきます」

「おいおい、そんなつれないこと言うなよ」

豪快に笑い飛ばすガガーランに対して、モモンガは苦笑いをしながら断りを入れる。モモンガの好みのタイプが黒髪巨乳系だ。肉食ガテン系のガガーランはモモンガにとって、彼女いない歴〓年齢の童貞的に色々と相性が悪い。

ガゼフは朝から王宮勤めのため、この見送りには来ていない。尤も、そうなることは先に分かっていたので、モモンガ達も既に別れの挨拶は済ませている。

「それでは、そろそろ出発しましょうか。蒼の薔薇の皆さん、またいつか友好的に会える日を楽しみにしています」

「こちらこそ、次に会う時もこうして協力できることを願っています」

ラキユースとラキスケが互いに軽く頭を下げる。
そして、ラキスケ達は背中を見せて歩き出していった。

時を遡って、八本指の一斉摘発が行われた翌日の夜。ランポツサ国王は秘密裏に一斉摘発に関わったレエブン候とザナック、ラナーを自室に呼び寄せた。

ランポツサの懐刀であるガゼフとラナーの騎士であるクライムは部屋の外で警備にあたっている。

一斉摘発によって制圧した拠点から運び出された、証拠品となる資料や物品の目録をガゼフから渡された者たちの表情は一様に険しい。

貴族たちが八本指と癒着していた証拠品があまりに膨大だったことではない。確かに証拠品の多さは王国の腐敗を端的に表すものではあるが、それは覚悟の上であり、憤慨こそしてもここまで気持ちを沈ませるものではない。ならば何が彼の気持ちを沈ませているのか？

「バルブロ……、なぜこのようなことを」

ランポツサは悲痛な声で息子の名を零す。

それは、証拠品の中にバルブロ第一王子が八本指と癒着していた内容があったことだ。それも一つの部門だけではない。

奴隷売買の部門とは、バルブロが国王になった際に現在は廃止されている奴隷制を復活させる契約を、警備の部門とは王宮の警備や他国との戦争の際に六腕を含む戦力の提供を受ける契約を結んでいた。

この二つの契約については、長が捕縛ないし死亡したことで大打撃を受けて実質的に有名無実化している。ここまではザナックも兄を王位継承権の争いから引きずり落とすネタが入ったと内心喜んでいた。しかし、麻薬取引の部門から押収したバルブロに纏わる証拠品を確認した時、その笑みは凍り付いた。

それはバハルス帝国やスレイン法国などの近隣諸国へ新しい麻薬を蔓延させる計画が記された書類に、バルブロの直筆のサインが記さ

れていた事だ。

事細かに記された計画書の内容を読んだレエブン候は、目頭を押さえて何度も見返しては顔を引きつらせてため息をついている。ザナツクも、この情報は手放しに喜べないのか弛みがある顔が引きつっていた。

ラナーは口元を抑えて嗚咽が漏れそうになるのを堪えているのは、ランポツサにとつてもとつてもつらいものがある。

「レエブン候よ。念のために聞いておくが、この書類は八本指が偽造したものでないのかな？」

「はい、陛下。残念ながら、この計画書に記されているサインの筆跡はバルブロ第一王子のものと一致しましたし、使われているインクも特別な物です。まぎれもなく、バルブロ殿下が自らサインしたものでしょう」

「そうか……」

レエブン候の返答を聞いたランポツサの脳裏に、つい数日前の帝国の布告官の宣言文が思い出される。

——近隣諸国に広まっている麻薬に対して、リ・エステイーゼ王国がそれを黙認しているのは、人民を守る国家の義務を蔑ろにするものであり、近隣諸国に対する侵略行為でもある。

布告官が開戦の理由に挙げた内容は、正鵠を射た指摘であったことを痛感する。

しかし、これらの不祥事を無暗に公にすると、この証拠品の数々が王派閥と貴族派閥の争いの激化をもたらすことは目に見えている。

八本指の根はどちらの派閥にも相当根深く食い込んでおり、下手すれば帝国との戦争が迫っているのを前にして国が割れて内紛が起きかねない。そうなれば、帝国は王国に統治能力はなしとみて、戦火に晒される事となる民を守るためと言った方便で侵攻を開始するだろう。

だからといって下手に隠匿しようものならば、ただでさえ危うくなっている民からの王家や貴族への信頼は完全に失墜し、国が大きく荒れることになるだろう。

「陛下。此度の八本指の一斉摘発自体は、国の成果として公にするべきでしょう。ですが……」

「レエブン候、分かっている。少なくとも、この麻薬を蔓延させようとした計画に関してはバルブロの責任を追及することはできない」

「それは……兄上がこの計画で蔓延させようとしていたのが複数の国で禁止されている違法薬物ではなく、まだ認知されていない新薬だからですか、父上？」

「そうだ、ザナツク。バルブロが八本指を利用して蔓延させようとしていたのは、この国を含む周辺国で存在自体まだ認知されていない新薬だ。たとえば八本指の者たちやバルブロがどのような物なのかを知っていたとしても、この新薬を規制して取り締まる法律がまだどの国にもない以上、麻薬取引の罪で裁く事は出来ん。この一件でバルブロに釘をさすことが出来ればよいのだが……」

「兄上ならば今の状況で問い詰めても、むしろ『敵国を弱体化させる作戦を何故妨害したのか』と開き直るでしょう。貴族の中にも、その考えに同調する輩が出てくるかもしれません」

「このような無辜の民を苦しめる方法で戦っても、帝国に大義名分を与えてしまうだけなのに……」

ザナツクの発言は、バルブロを次の国王に推している六大貴族のボウロロープ候、リットン伯と貴族派閥の貴族を念頭に置いたものだろうとランポッサは考える。特に貴族派閥の中心人物であるボウロロープ候は娘をバルブロに嫁がせている事もあり、強く同調する可能性がある。

逆に同じ六大貴族のウロヴァーナ辺境伯もバルブロを推しているが、彼は王派閥であり、人間的な意味で魅力を持つ人物だから同調するとは考えにくい。

ラナーの言葉にも、ランポッサは意識を向ける。一応は王派閥とされている六大貴族のブルムラシュー候は、金のために王国を裏切って帝国に情報売り渡しているという噂がある。疑う余地のない決定的な証拠がない事から王国一の財力を持つ彼を処罰することが出来ないが、彼にこの情報を渡すわけにはいかない。

「今は八本指の力をできる限り削いでいく方策と、八本指に深く関わっていた貴族たちへの対応に注力するのがよろしいかと」

「そうだな。それと、協力してくれた者たちには何か謝礼を出してやりたいところだが……」

「冒険者は原則として、国の政に関わることに介入することは許されておりません。蒼の薔薇の方々は最高位のアダマント級だからこそ、限度を超えなければ黙認されているにすぎず、もう一組の方々も個人的な事情で八本指に敵対していたとの事ですので、そのお気持ちだけで今回は十分と謝礼は固辞していました」

「そうか……ガゼフが話していた、カルネ村と言う開拓村を救ってくれたモモンガとペロロンチーノという御仁だったな。人間ではないそうだが、機会があつたら王としてではなく個人として話をしてみたいものだ」

ランポツサはガゼフが話していた恩人たちが、結果論とはいえ再び王国のために動いてくれたことを嬉しく思うと共に、本来ならば自分達が解決しなければならぬ問題に彼らの手を煩わせてしまった事への罪悪感を抱く。

この埋め合わせは、この国を自分の代で少しでも健全な状態にした上でザナツク、或いはラナーに王位を継承させて民が安心して住みやすい国へと変えていくしかない。

今回の一件でランポツサの中では、国王をバルブロに継承させる考えは消えていた。今まではいつかは自分の気持ちを知ってくれると信じていたが、バルブロと八本指の深すぎる癒着は国をさらに衰退させ滅びへと向かわせる事だろう。これまでの自分の甘さがこの事態を招いたというのならば、自分が責任を取らなければならぬ。

バルブロを正しい道へ進ませてやれなかった後悔と共に、ランポツサはこれからどうしていくのかを話し合う。その様子を覗いている不可視化された小さな蟲に気が付くものは、誰もいなかった。

琥珀色の輝きを宿した液体が注がれたグラスを持ちながら、彼は魔法による投射映像——リ・エステイーゼ王国に忍び込ませた情報収集に特化した蟲から送られてきた映像——を眺めながら鼻で嗤う。

「ふん。此処まで分かっているから第一王子を始末する選択ができないか。ここまでくると凡庸を通り越して暗愚だな。親の情などというものに縛られているから、このようなことになるのだ」

そう呟きながら、彼はグラスに口をつける。

喉を焼くような熱が胃の腑から全身に広がっていく感覚は、この身体には心地よい。

「さすがは自国の女を戦力目的で孕ませてきた王様だね。言う事が違うよ」

「俺とて、力に目覚めたものがいれば少しは厚遇してやろうとは考えていたぞ。そう言う意味では、100年前のアレは実に惜しかった。あのインキュバスが狩りの邪魔をして余計な時間をかけさせなければ、奪われることもなかったというのに」

紫色の毒々しい煙を上げるキセルを持った色白の女——ヒルマ・シングネウスの言葉に、彼は現在の民たちの不甲斐なさを嘆くとともに、かつての記憶を思い出す。

争いを嫌う無能な王を滅ぼして王となって間もない頃、かつて法国の切り札だった女を騙して捕らえ、犯した時のことだ。

孕ませるところまでは上手くいったものの、子供が生まれる前に漆黒聖典に奪われた。その時はこの身体と同僚——確かビアンゴという名だった——が、エルフの王国の秘宝を持ち逃げして他の有象無象と共に脱走を図ったので、自分が直接始末しに出ていた。本来ならば時間をかけずに始末できるはずだったが、インキュバスの神官戦士が邪魔に入って逃げられただけでなく時間を浪費したことが拙かった。

あの忌々しいインキュバスを思い出し、彼は舌打ちした。裏切り者は始末できず、所有物である子供は奪われ、八本指を使って王国を腐らせることによる法国への嫌がらせも未遂に終わった。

「まあ、法国への嫌がらせという意味では、あの国はまだ利用価値があるか。そうなるか……」

「なんだい？ 何か面白そうな悪だくみでも、思いついたのかい？」
「いや、大したことではない。どうせ今年の合戦で滅びる連中ならば、
精々、俺の役に立ってから滅んでもらうだけだ。第一王子にも、リ・
エステイーゼ王国にもな」

「おお、怖い怖い。それで、あたしは何をすればいいんだい？ わざわざ私を手元に置いてこんな話をするんだ。私にやらせることがある
んだろう？」

「無論だ。王都の外でお前に作らせていた『ビースト』の過剰摂取による影響実験をあの国で行う。場所は貧民街辺りが良いな。騒ぎが起きたタイミングで王国の貴族や帝国に情報を流してやれば良い」
「なるほど、えげつない事を考えるものだねえ。『ビースト』の副作用はとつくに知っているくせにさ。でも、帝国はそれに食いつくかい？」

「そこは相手の出方次第だ。どうなっても問題ないように、考えられるパターンをいくつか用意して、その時々で選べばいい」

ヒルマは肉体こそ脆弱で母胎に相応しくないが、こちらの考えを汲む知恵と行動力に優れている所を彼は気に入っている。この数十年間滞っていた計画も、ヒルマとコネクションを作った2年前から順調に進むようになっていた点も、彼の機嫌を良くしている。

グラスに残っている液体を飲み干すと、彼はその場を後にした。長年の習慣となった自国の民に子を産ませるための作業があるからだ。折角スレイン法国との戦争という環境を用意したのに向上心を見せない民の事は、既に見限って方針を変えているのだから止めても良いのだが、急に止めてしまうと周囲から怪しまれてスレイン法国に気づかれる可能性があるため、なかなか止めることが出来ない。

「母体への着床率の改善と妊娠期間の短縮ができれば、無駄を減らせるのだが。ヒルマに開発させてみるのも面白いかもしれない……いや、優先度はアレの研究の方が上か。白金に気づかれないようにするには研究を行う人数を絞らなければならぬのが困りどころだな」

最強の竜王、ツアインドルクスⅡヴァイシオンに気づかれれば、スレイン法国を巻き込んで滅ぼしてでも止めようとするだろうと彼は

予想する。それだけの計画を彼は秘密裏に進めていて、ツアインドルクスⅡヴァイシオンの始原ワイルドマジックの魔法は強力なのだ。

この国そのものはどうでもいいが、計画の条件を満たせる環境を失うのは致命的だ。気づかれるにしても、もはや止める術がないところまで進んでから出ないと困る。

「わが父の願いは、私が引き継ぐのだ」

幕間「ツアレと漆黒の剣」

ツアレとセリーシアの再会からそれから数日が経ち、ラキスケ達は八本指への報復のために王都へ、「漆黒の剣」のメンバーは護衛として帝国へ向かう道中の馬車の中にいた。

家族水入らずと言う事でセリーシアはツアレと同じ馬車に乗っているが、乗り込む直前にセリーシアがツアレに提案したことが切欠で起きた、街中でのツアレとラキスケのディープキスのインパクトで、セリーシアは恥ずかしさから姉であるツアレの顔をまともに見ることが出来ないでいた。

(まさか姉さんがあんな積極的にあんなことをするなんて思わなかったよ！ ……でも考えてみたら、バレアレ薬品店で合流した時もラキスケさんとキスしようとしていたじゃん！ 思い出せよ、僕！ それに、このままずっと話さないままって言うのもいけないよなあ。何か、話題になるものとかないかなあ……)

気まずい空気——実際はセリーシアが一方的に感じているだけだが、それを何とかしようとセリーシアは話題になるものを必死に探す。

今までどんな生活をしてきたのか……これはアウト。ひよつとしたら、姉の心の古傷を抉ってしまうかもしれない。ならばラキスケと言う巫人について……これは安牌かもしれないが、街の往来であのような事をするくらい、姉は彼に惚れているのだ。しかし予想される惚気話の連続でこちらの気が滅入ってしまうことも考えられる。

「ねえ、セリー。漆黒の剣の人たちについて聞きたいことがあるけれども、良いかな？」

「な……なに、姉さん？」

ツアレの方から話題を振ってきた事に内心では感謝しながら、セリーシアは一体彼らの何を聞こうとしているのかを予想する。

「セリーは彼らの中ではどなたと付き合っているの？」

「……………ふえ？」

「しつかりしていそうなペテルさんと言う方？ それとも私たちと最

初に出会ったルクルトツトさん？ それともお父さんみたいな雰囲気
がするダインさん？」

「えっ、ちよっ……ちよつと待って！ なんでそういう話になるの！？
彼らは確かに大切な仲間だけれども、そういう関係ではないよ！」

「あら、そうだったの？」

「そうだよー！」

駄目だ、この姉さん。頭の中がまだピンク色のままだ。セリーシア
はそう呆れながら、こちらからも反撃^{質問}を試みる。

「そう言う姉さんは、ラキスケさんに助けられてから今まで、どうい
う生活をしてきたの？」

助けられる以前のこととはあえて聞かないのは、確実に姉にとって心
の古傷を開く事になると分かり切っているからだ。

「私は、ラキスケ様の拠点のお掃除をしたり、ラキスケ様と同じチー
ムのビアンゴ様と一緒に料理を作ったりさせてもらっているの」

「拠点の……って言う事は、どこかの宿屋とかに住み込みで働かせて
もらっているの？」

「住込みではあるけど、宿屋ではないわ。ラキスケ様が所有する地上
船に寝泊まりさせてもらっているの」

「ち、地上船？ 船って、あの海とか川とか湖とかで水上を移動するの
に使う乗り物だよな？ 帝国の船は陸上も移動したりできるの？」

「ラキスケ様の話だと、カツツエ平野の幽霊船を浄化して手に入れた
一点物だと言っていたわ。おかげで竜王国へ向かうためにカツ
ツエ平野を通る時も速くて安全よ」

「そ、そうなんだ……」

「ラキスケは帝国でも普及していない一点物の船を個人所有でき
る力と財力を持つ」セリーシアは心のメモにそう書き記す。

姉をこれからも守り養い続けてもらう事を考えると、ワーカーとい
う職業は不安要素だったが、あの鮮血帝によって実力主義の風潮があ
る帝国で、これだけ自由にできていなければ心配はないだろう。

こっそりとラキスケへの評価を査定しながら、二人の雑談は続いて
いく。

「——それと最近は信仰系というのだったかしら？ ラキスケ様と同じ系統の魔法を学ばせてもらっているわ。なんでも、ラキスケ様と一緒にいるうちに神官みたいな職業を獲得したみたい」

「へえ、姉さんは信仰系の魔法に適性があつたんだ。僕は魔力系の魔法詠唱者になつたけれども、元は農民だった僕たち姉妹が揃つて魔法に適性があるつて凄い事だよ」

「ええ、そうね。私はラキスケ様に教えてもらいながら学んでいるけれども、セリーシアはどういう風に学んできたの？」

「僕の場合は、四年前に村を出た後に魔法の師匠に拾われて、他の才能がある子供たちと一緒に教えてもらったんだ。『魔法適性』の生まれながらの異能のおかげで、今では第二位階の魔法を使うことが出来るようになったよ」

「第二位階……凄いじゃない！ 帝国の魔法学院でも卒業するまでに使えるようになるのが第一位階の人が多くて、貴族でも第二位階までばかりだつて、以前パラダイン様が仰っていたわ」

「姉さん。ひよつとして、帝国の首席魔術師と会つたことがあるの!？」
「ラキスケ様と一緒にだけれども、一度お会いしたことがあるわ。その時に私がどういう職業を持っているのかを魔法で見ても貰えたの」

「帝国では魔法でその人の適性を見る事ができるつて聞いたことがあるけど、本当だつたんだ」

「ラキスケは帝国の首席魔術師とコネクション有り」セリーシアは改めて心のメモに書き加えながら、王国では普及していない帝国の魔法技術に感心していた。

そこでふと、手元にある封蝋が施された封筒に視線を移す。

『もしも興味があつたら、魔法学院にこれを持っていくと良い』

ラキスケからそう言われて渡されたそれは、帝国の魔法学院への推薦状だ。その時は自分を帝国に移住させるための方便だと思つていた。しかしあのフルーダ・パラダインともコネがある人物が推薦するととなると、魔法学院側の対応も変わるであろうことは容易に想像できる。

元々は姉を助け出す為の手段として学んできた魔法だが、魔法につ

いてより深く学び新たな魔法を身に着けていくことに喜びがあったことも事実だ。当時はこれでまた一步、姉を助け出す道に近づけたからと思っていたが、今思えばあれは知識欲を満たすことが出来た喜びも含まれていたのだろう。

もつと魔法について学びたい。色々な事を知りたい。……でも、それでは漆黒の剣の皆と離れ離れになってしまうのでは？ セリーシアの脳裏に不安がよぎる。

冒険者という立場のままでは、国の機関である魔法学院に在学することは不可能と言って良いだろうし、当たり前前のことだが卒業後は帝国が管理する関係するところへの就職が望まれるのは想像に難くない。

名前も性別も偽っていた自分を受け入れてくれた彼らをまた裏切りたくはないという思いもある。

セリーシアとしての人生の目標であった姉を救い出す事が予想外の形で報われた今、漆黒の剣のニニヤとしての夢を追うべきか、魔法詠唱者のセリーシアとしての欲求を満たすべきか。

セリーシアは揺れ動く二つの思いの中で悩んでいた。

マリナラ達が乗る馬車の一団は、トラブルに会う事もなくエ・ランテルから街道沿いに進み、五日後の夕方頃にはバハルス帝国の帝都アーウインタールに到着した。

アーウインタールは人口こそリ・エステーゼ王国の王都に劣るものの、その規模は古いがらみに縛られた王都を既に超えている発展中の都市だ。帝都に來た者の大半が驚くような光景はいくつもあるが、真つ先に驚かされるものがある。それは、帝都のほぼすべての道路がレンガや石で覆われている事だ。

「すつげえ！ 大通りだけじゃなくてどこの道路もちゃんと舗装されている！ エ・ランテルとは大違いだ！」

「それに、道路と歩道が防護柵と段差でしっかりと分けられているの

である！ あれなら、歩行者も安全に歩くことができるのであるな！」

「ルクルト、ダイン。二人とも落ち着いて。まだ依頼の途中ですよ」
「そう言うペテルも、周囲をキョロキョロと見まわして興奮しているのが丸わかりだよ」

「姉と一緒に馬車にいるニヤもきつと、この光景に驚いているであろうな！」

王都に行ったことがない漆黒の剣のメンバーの場合、拠点になっている城塞都市エ・ランテルと比較することとなるが、彼らにとつて道路というのは大通りでない限りは轍のできた土の道路が当たり前であり、帝都のインフラがしっかりと整備されている事に大きな衝撃を受けていた。

漆黒の剣が乗る馬車に同乗し、彼らの様子を見ていたマリナラの部下である従業員が笑って答える。

「はっはっは。俺も初めて訪れた時は、今のおたくらみたいになっていたもんだ。特にこの数年は、皇帝陛下が主導する大改革のおかげでどんどん発展していつているんだぞ？　ここでそんなに驚いていたら、驚き過ぎて喉が枯れちまうよ」

「これがまだ序の口か……。本当に、王国とは大違いだ」

「——さて、そろそろ旦那様の商店に到着するぞ。おたくらも準備をしてみてください」

「「はー」」

程なくして、中央道路に近い通りに構えている立派な商店の裏手に馬車の一団が到着し、従業員に促されて準備していたペテル達は馬車を降りる。

荷物の積み出しは従業員たちの仕事で、ペテル達はその間の警備が仕事となっている。今回はオリハルコン級冒険者チーム「森妖」のメンバーもいるため、はつきり言うのとペテル達の出る幕は無いのだが、だからと言って手を抜くようなことはしない。消耗品一つでも自分達が普段使いするものよりはるかに高品質で高価な物ばかりとなればなおさらだ。

やがて、馬車に積み込まれていた全ての商品が商店内の適切な場所に収められる。緊張の汗をかいていた漆黒の剣のメンバーに、ツアレが声をかけた。

「この度は依頼を受けて下さり、ありがとうございます。依頼完了の報酬をお渡しするので帝都の冒険者組合までご案内しますね」

「それはありがたいです」

ツアレの提案にペテルが嬉しそうに声を上げた。他のメンバーも同意する様に頷く。土地勘がない場所では、目的の場所を探すのも一苦労だから、案内してくれる顔見知りがいるのは実際に助かる。

冒険者組合までたどり着けば、そこで自分達が宿泊できる宿屋を覚えてもらったり、しばらく帝都で活動するにあたっての準備も行いやすくなる。

冒険者組合までの道中で、ルクルットが口を開いた。

「それじゃあ、冒険者組合で依頼料を受け取った後はそれぞれどうする？」

「僕としては、姉さんが寝泊まりしている地上船を見に行きたいかな？ 実物の船は見たことないから興味があるんだ」

「地上船？ この国にはそんなものまであるのかよ。すげえなあ」

「ごめんね、セリー。今はビアンゴ様が用事で使っていて、まだ帝都には戻ってきていないの」

「そうだったんだ。……それじゃあ姉さんはその間、寝泊まりするところは どうするの？」

セリーシアとしては不安を抱えながらツアレに問いかける。

「その辺りは大丈夫よ。ラキスケ様がある方に前もって連絡してくれているから、ビアンゴ様が帰って来るまでの数日は、知り合いが運営している孤児院に泊めてもらう予定になっているの」

「ある方？ それってどういう——」

「——あら、ツアレ。こんなところで会うなんて奇遇ね」

あのラキスケが恋人を預けても良いと信用できる相手。一体どういふ人物なのだろうと気になったセリーシアがツアレに確認しようとした所で、曲がり角からツアレに声をかける者が現れた。

その人物は十代半ばから後半という所の少女は痩せぎすで、艶やかな金髪は肩口辺りでぎつくりと切られ、鼻立ちは非常に整っている。美人というよりは気品があるという雰囲気的美だが、人形のような無機質さをやや感じさせていた。

着ているローブはセリーシアが着ている物よりもずっと上質で、それでいて余計な装飾はないシンプルで動きやすいように改造が施されている。

その少女の隣には、聖印の描かれたサーコートを着た三十代くらいの男性が一人。顔の輪郭はがっしりとした無骨な形だが、刈り上げられた髪と丁寧到手入れされた短い髭は爽やかな印象を与える。

そんな二人が手に持つバスケットからは鼻と胃を刺激する美味しそうな香りが微かに漂ってきた。

「アルシエさん、ロバーデイクさん。お久しぶりです」

「久しぶり。ラクスケから《伝言》^{メッセージ}と手紙で話は聞いているわ。ロバーの孤児院に泊まっていくんでしょ？」

「はい。ロバーデイクさん、今回は急な申し出を引き受けてくださってありがとうございます」

「大丈夫ですよ。孤児院はまだまだ人手不足ですので、子供たちの世話もしてくれるツアレさんにはむしろ感謝しています」

「それに妹たちもあなたに懐いているから来てくれると喜ぶ。それで……後ろの人たちは？」

「こちらの方たちはエ・ランテルで冒険者をしている『漆黒の剣』の方たちでして、この子が私の妹のセリーよ」

「初めまして、セリーシア・ベイロンと言います。エ・ランテルでは彼らと『漆黒の剣』という冒険者チームを組んでいて、ニニヤという名で冒険者をしています」

セリーシアの自己紹介に続いて、ペテル達も各々に自己紹介を済ませていく。漆黒の剣のメンバーの自己紹介が終えたのを確認し、アルシエと呼ばれた少女とロバーと呼ばれた男性も自己紹介を始めた。

「私はロバーデイク。ロバーデイク・ゴルトロンと言います。この近くで孤児院を運営している者です」

「私はアルシエ。アルシエ・イーブ・リイル・フルト。帝国魔法省の職員をしているわ」

「貴族の方……ですか？」

「昔は貴族だったけれども、貴族位は鮮血帝に剥奪されているわ。今は両親から離れて妹たちと一緒に暮らしているの」

「そうだったんですか。すみません、不躰なことを聞いてしまつて」

称号持ちの貴族であることを示す四つの名前を持つアルシエに対して、セリーシアは訝しむように尋ねるが、アルシエの返答に慌てて謝罪する。貴族に対してドロドロとした暗い感情を持つセリーシアでも、謝るべき時は分かる。

「気にしていかないなら大丈夫。それにしても……私の生まれながらの異能で観させてもらったけれども、その年でもう第二位階に到達しているのね。魔法技術が遅れている王国だけじゃなく帝国の魔法学院でもこの若さで到達しているのは滅多にいないわ。才能と努力、それに優れた師匠と巡り合えた幸運がうまく噛み合ったのね」

「生まれながらの異能ってひよつとして、ニニヤの師匠と同じ、相手の魔法力を探知するやつか？」

「その人と感じ方は違うかもしれないけれども、私の場合、魔力系魔法詠唱者の魔力を行使できる最高位階も含めて見ることが出来る。……このまま立ち話もなんだし、暗くなる前に用事を済ませていかない？ 孤児院の子供や妹たちを待たせているの」

「それもそうですね。宿をとるにしても、早い方が良いですし」

アルシエの提案に漆黒の剣のリーダーであるペテルが頷くと、他のメンバーも同意して冒険者ギルドへの道を歩き始めた。

幕間「ツアレと漆黒の剣その2」

日が沈み、夜の顔を見せている帝都、中央通りから少し外れた場所にある建物——ロバーデイクが運営する孤児院では、誕生月である孤児たち——中にはいつ生まれたのかが分からないので孤児院に入所した日を誕生日としている孤児もいる——を祝う、月に一度のパーティが開かれていた。

孤児たちに出されているシチューは軟らかく煮られた野菜や根菜で具沢山、しかも普段とは違って孤児たちがお替りもできるだけの量が用意されている。大皿には小ぶりなハンバーグがたくさん積み重ねられていて、美味しそうなソースの香りが食堂を満たしている。

ワイワイと楽し気にお喋りする孤児たちの世話をロバーデイクに任せ、ツアレとアルシエは子供たちが食べ終わった料理の大皿を片付けとデザートの準備に追われていた。

「ツアレ、こつちのお皿に載せたデザートを運んで頂戴」
「はい」

デザートの盛り付けを終えたアルシエはデザートを載せたトレイをツアレに渡し、食後の飲み物の用意に取り掛かる。

デザートの内容は、余って硬くなってしまった残り物のパンを店から安値で譲ってもらい、卵液に浸して作ったパンプディング。食後の飲み物はかつての仲間が経営する店で仕入れた物を安く譲ってくれた柑橘類のジュース。

普段ならば特定の曜日にだけ素朴な味わいの絞りクッキーが添えられるだけなのだが、この日は誕生パーティ。小さいとはいえデザートとジュースが出されるのだ。

この孤児院でこのようなパーティが開けるのは、ロバーデイクがワーカー時代の稼ぎの多くを孤児院の運営に使っていることに加えて、帝国が優秀な人材になりうる子供を保護・確保する一環で行っている孤児院への支援制度を利用しているためだ。

育ち盛りの孤児たちの食欲は衰え知らずだ。ましてや普段はなかなか食べられないデザートとなればなおさらである。それでも孤児

たちで奪い合いにならないのは、ロバーデイクがしっかりと教育した賜物だ。

「みんな、食後のデザートが用意できましたよ」

「やったー！」

「おいしそう！」

「ツアレお姉ちゃん、はやくー！」

デザートを載せたトレイを手にツアレが孤児院の食堂まで運ぶと、孤児たちからは歓声上がる。

ツアレはロバーデイクと一緒に細かく刻んだナッツ類が振りかけられているパンプディングを孤児たちの前に並べていく。それから少し遅れてジュースの入った瓶をアルシエが運んできた。待ち遠しそうに席に座っている子供たちにジュースを注いだコップを配ろうとしたアルシエの前に、アルシエに似た二人の幼い少女がトテトと歩み寄ってきた。

「お姉さま、私も配るー」

「私もー」

「クーデ、ウレイ。二人ともありがとう」

二人はアルシエの妹であるウレイリカとクーデリカ。大好きな姉のお手伝いをしたくてアルシエからジュースを受け取り、席で待っている孤児たちに配っていく。

そうして忙しくも楽しい時間は過ぎていき、お腹を満たした孤児たちが寝静まった頃、後片付けを終えた三人はアルシエが入れたハーブティーで一息つきながら談笑していた。

「本当にありがとうございます、ツアレさん。帝国からの援助のおかげで資金面は大きな心配はないのですが、元ワーカーの院長というのがどうにも敬遠されて人手不足なもので」

「気にしなくて大丈夫ですよ、ロバーデイクさん。後片付けとかは年長組の子供たちも手伝ってくれましたし」

「ウレイとクーデも手伝ってくれたのは嬉しかった」

アルシエが顔を綻ばせているのは血の繋がった姉妹の成長についてだ。二人ともまだ5歳だが白い頬をほのかに赤らめた様はまるで

天使のようで、近い将来二人はとても美人さんになるとアルシエは思っている。

事実、ウレイリカとクーデリカの二人は孤児院でも人気者だ。仕事の傍らで孤児院の手伝いをしてくれるアルシエの妹という事もあるが、元々は貴族の生まれであることを感じさせる気品がありながら誰とでも分け隔てなく仲良くなれる人懐っこさは孤児たちにとっても好ましいようだ。

「本当にラキスケには感謝している。彼がいなかったら私たち家族は生きていなかったから」

「ええ。彼は私たちフォーサイトにとっても人生の恩人です」

フォーサイト。それはアルシエとロバーデイクを含む四人で構成されていたワーカーチームのチーム名だ。

チーム自体はリーダーの双剣士ヘツケランが相棒であるハーフェルフの野伏イミーナと結婚して解散しているが、今でもお土産を持ってきてくれたり商品を安く譲ってくれるなど良好な関係を築いている。

アルシエが思い出すのは、フォーサイト最後の戦いともいえる一年前の出来事。

二年前、フルト家は鮮血帝によって貴族位を剥奪された。アルシエは家族を養うために帝国魔法学院を出て、危険だが稼ぎの良いワーカーとなったが、当主である父親はいつか返り咲く日を夢見て散財しては借金を重ねていた。

ある日、依頼を終えて実家へと戻ったアルシエが目にしたのは、父親の散財の過程で集められた調度品が消えて空っぽになった応接室で大怪我を負って蹲る執事のジャイムスの姿であった。

そこにウレイリカとクーデリカ、そして両親の姿はない。

何が起きたのかアルシエがジャイムスを介抱して問いただと、父親が懇意にしている金貸しの商人とは違う男達が借金の取り立てに来て一方的に財産を根こそぎ差し押さえ、それでも足りないと家族を連れて行ってしまったのだという。

「今でもあれはよく生き残れたなって自分でも思う。連れていかれた

家族を救出するために、みんなにはとても迷惑をかけた」

「ズーラーノーンの十二高弟の一人、魔法を使いこなすトロール。あれは本当に恐ろしい相手でした」

ロバーデイクが思い出すのは、アルシエが自分たちに助けを求めてきた事だ。若くして自分と同じ第三位階まで修めているアルシエが、借金のかたに連れ去られた家族を助けてほしいと泣きじやくりながら懇願してきたときはとても驚いた。

ワーカーとしてのリスク管理で鑑みればこのようなリスクばかりの面倒事は断るのが妥当だ。しかしアルシエにとつて幸運だったのはフォーサイトのメンバーは彼女を妹のように可愛がっていた事。そして、アルシエの父親が借金していた商人が何者かに襲われて借金の証文を根こそぎ奪われていたという情報をヘツケランがたまたま耳に入れていたことだ。

だからこそ、フォーサイトはアルシエの家族を救出するために動いた。

その中で明らかになる秘密結社ズーラーノーンの暗躍。ズーラーノーンの構成員との死闘。そして立ちはだかるは十二高弟の一人にして、喰らった相手が習得している魔法を自らの物とする生まれながらの異能^トによつて、本来の法則を無視して多種多様な系統の魔法を操るメイジトロール。

アルシエが保有する生まれながらの異能^トである看破の魔眼によつて、使用可能な魔力系魔法の最大位階は第四位階と見抜いた時には絶望しかけたものだ。

そんな絶望的な状況を覆してくれたのが、帝国魔法学院を出ていったアルシエを訝しんだフルーダが依頼した調査を引き受けた帝国最強のワーカーであるラクスケであった。

フォーサイトが一丸になつても敵わなかつた相手を苦もなく倒し、儀式の生贄のために連れ去られたアルシエの家族を含む人々を無償で一緒に救出してくれた事は、ロバーデイクの脳裏に深き刻み付けられている。

この一件が切っ掛けとなつて、フォーサイトは円満に解散となつ

た。

ヘツケランとイミーナは結婚し、夫婦で雑貨店を営んでいる。

自分はズーラーノーンの被害を受けた孤児たちを保護するこの孤児院を運営している。

アルシエはフルーダが休学扱いにしていた帝国魔法学院に復学して無事に卒業。今は魔法省の職員として働いている。彼女の両親も恐ろしい経験をした上で娘が命を賭けて自分たちを救おうとしていたのを目の当たりにした事が良い方向に働いたのか、今では真面目に働いているようだ。

アルシエが両親と離れて暮らしているのは、両親なりのけじめらしい。それでも、そう遠くない未来にまた一緒に暮らすことができるだろうとロバーデイクは思う。

三人はその後もラキスケの武勇伝を交えた雑談に花を咲かせ、食後のひと時を楽しむのであった。

翌朝、冒険者組合を出た漆黒の剣のメンバーは、これからどうするかの話をしていた。

「朝早いっていうのに、エ・ランテルと比べて依頼があまり貼りだされていなかったな」

「帝国はモンスターの間引きなども帝国騎士が担っているから、王国と比べて冒険者の重要度が高くないとは組合の受付から聞いているのである！」

「需要が全くないわけではないけれども、この様子だと王国よりは冒険者への仕事の依頼も少ないみたいだね」

「滞在が長引く場合はある程度生活費を出してくれるっていう話ではあるけどなあ……」

「彼の〴〵厚意に甘えて何もしないのは、冒険者として……人として良くないですからね」

「だよなあ……」

極端な話をすれば、生活を切り詰めればラキスケが出してくる生活費の分で賄う事自体はできる。しかし、根本的に人が良い漆黒の剣のメンバーはそれを良しとせず、冒険者としての仕事の依頼を探していたのだが、王国のエ・ランテルと比べて帝国の帝都では仕事の依頼があまり多くないことにため息をついていた。

正確に言えば薬草採取などの依頼は一応あるのだが、帝都に来たばかりで土地勘がない彼らには不向きな依頼のため、確実にこなせるであろう他の依頼を探していたというべきだろう。

冒険者が必要とされる依頼が少ないことは、それだけ帝国の治安が良く冒険者に依存しなくても大丈夫であることの証左だ。しかしそれは同時に冒険者としては安定した稼ぎが少なくなる事に繋がる。

予想していたよりも帝国が繁栄していて、それでいて冒険者という職業が強く求められていない事実に一同は改めてため息をつく。

「まあ……悩んでいても仕方ないし、まずは予定通り装備の更新に行かないか？」

「そうですね。今日は地理の把握も兼ねて、市場や商店を見ていきましょうか」

「帝国の魔法技術は王国よりも進んでいるという話だから、どんなマジックアイテムがあるかも楽しみだね」

「新しい薬草なども補充したいところであるな！」

そういう事からペテル達が気持ちを切り替えて足を運んだのは帝都の中央市場だ。

イモ洗い状態に例えられる中央市場の人混みと活気は、エ・ランテルの中央広場と比べても負けていない。

ペテル達はどこにどのような露店や商店が並んでいるのかを確認し覚えていきながら、途中からは観光に近い気分で数時間ほど市場を見回っていた。

「さっきの所は”ではーと”って言ったか？ まさか一つのでかい建物にあんなに沢山の商店入っているなんて思わなかったぜ」

「高くて手を出せなかったけど、第三・第四位階スクロールの巻物やマジックアイテムも取り扱っているなんて凄いや！」

「ポーシヨンの質は流石にバレアレ薬品店の方が良かったのであるが、それ以外の店と比べても品質にムラがなかったのである！」

「それではあと一軒くらい見たら、そろそろ目星をつけた商品を買に行きましようか」

「そうだな。それじゃあ……つと。お、あの店なんかどうだ？」

もはや観光気分となつているルクルットが指さした店の外見は、豪華さや派手さはないが清潔感がある。建材に使われている素材の新しさからオープンしてからまだそれほど経つてはいない店なのだろう。近づいてみると店名と思しき“フォーサイト”と書かれてた看板には、およそ半年前にオープンした日用雑貨・食料雑貨を取り扱う店であることが併記されていた。

「生活用品系のマジックアイテムだけじゃなくて食用雑貨も取り扱っているみたいだし、小腹もすいてきたからこの店で何か食うもの買つていこうぜ」

そういってルクルットを先頭にしてペテル達が扉をくぐった先の店内はそれなりに広くしつかりとしていて、床もきれいに磨かれている。入り口側から見て右側は調理済みの食料品が、左側には生活用品系のマジックアイテムが並べられていた。

「いらつしやい！」

来店したペテル達に気が付いた従業員と思しき男の身長は170センチ台中ほどで、年齢は二十になるくらいだろうか。金髪碧眼と日に焼けた健康的な肌をした近隣諸国では珍しくない外見をしている。

美形ではなく大勢いればその中に埋没してしまいそうな容貌だが、その顔に浮かべている薄く朗らかな笑顔や自身に満ち溢れた堂々とした所作からは、どこことなく人を引き付ける魅力を放っていた。

「あれ？ あそこにいるのって……」

店内を見まわしたニニヤは、見覚えのある縁が青色のクロークを羽織ったエルフ——オリハルコン級冒険者のヴァージリツコを見つける。

その隣には仕立ての良い服を着た初老の男性もいて、何か説明をしているようだ。

ヴァージリッコの方も漆黒の剣の面々に気が付いたようで、軽く片手をあげて挨拶すると初老の男性を連れて近づいてきた。

「やあ、昨日ぶり」

「こんにちわ。初めて入ったお店でこうしてヴァージリッコさんとお会いするとは思いませんでした」

「自分は100年後を見据えて今からフラグを構築中」

「え、フラグ？」

意味の分からないことを話すヴァージリッコに対して困惑するニヤ。

反応したのは従業員の男の方だった。

「おーい、ヴァージリッコ。イミーナは俺の妻なんだからいい加減諦めろよ」

「諦めたら心が死んじゃうんだぞ、ヘツケラン。お前が大往生するまでは手は出さないから、それまではイミーナ嬢に貢がせて？　というわけでこれを頂戴」

「……つたく、お買い上げありがとうございます」

ヘツケランと呼ばれた従業員はヴァージリッコが差し出した数枚の金貨を受け取ると、彼が指さしている商品を持ってくる。

その商品は端的に言えば、金属製の瓶だ。高さは15センチほどで、幅は大体10センチほどといったところの円柱状の形をしている。

「ヴァージリッコさん、この商品、飲み物を注ぐ瓶にしてはかなり高くありませんか？」

「ふふ、これは水差しではない。というわけで烈火の旦那、この商品の説明を彼らにお願い」

どのような商品なのかを尋ねたニヤに対して、ヴァージリッコは烈火と呼ばれた初老の男性に説明を丸投げする。

「その二つ名はもう返上したんだけどなあ……わかった。これは俺が開発してこの店に卸した商品でな。名前はアイスクリームメーカー。砂糖・卵・牛乳の三種を混ぜて蓋をしてから起動させると、1時間もすればアイスクリームが出来上がる最新のマジックアイテムさ」

「アイスクリームって、作るのに料理人だけでなく氷の魔法を使える魔法詠唱者も必要な上に手間暇かけてようやく作れるっていう、王侯貴族とかしか食べられない菓子じゃありませんでしたっけ!？」

「それは一から手作業で作る場合の話だ。これは複数のマジックアイテムを組み合わせることでそれらを自動化している。流石に熟練の料理人と魔法詠唱者が合作で作るものには劣るが、材料があれば誰でも手軽に繰り返し作れるのは大きいぞ」

「ほええ、帝国ってこんなものまで売っているんだあ」

帝国の魔法技術の高さと発想力に、ニニヤは素直に関心する。

王国では魔術師組合がマジックアイテムの作成を一手に担っているが、魔法を軽視する傾向が王国貴族には根強く、国からの援助はほとんどない。そのため、庶民の生活の質を向上させるための新しいマジックアイテムの開発は滞っているのが現状だ。

昨日からこうも帝国と王国の差を見せつけ続けられると、このままでは王国に帰りたくなくなってしまいそうになる。今まで人生を捧げてきた姉の救出が叶い、更に別の人生の選択肢も提示されたことで王国に残る理由が薄れている事も影響しているのだろう。

「俺自身、数年前まではこっちの才能があるなんて思ってもみなかったんだぜ。戦争で1回死んで生き返った時は帝国騎士としての才能の限界を感じたもんだが、まさか余生の道楽で始めたマジックアイテムの開発がここまでうまくいくななんてなあ。世の中、何が起きるかわからないもんだ」

「才能の限界なんて言われたら、かなりの数の帝国騎士が自信喪失しちまうぞ? 元帝国四騎士の一人、“烈火”のゲオルグ・ヴィルヘルムの旦那」

ヘッケランが明かした初老の男性の意外な過去に、ペテル達は再び驚かされるのであった。

第十八話 ※エロ無し

ラキスケたちが王都を出率してから数日後、リ・エステイーゼ王国のヴァランシア宮殿における宮廷会議は荒れに荒れていた。

本来ならば八本指の一斉摘発を指揮した功績をザナツク第二王子に与え、押収した証拠品で切り捨てる貴族と懐柔する貴族に選り分けるための会議であり、バルブロ第一王子も新しい麻薬を他国に蔓延させようとした計画は秘したまま他の部門との癒着を糾弾して謹慎させるはずだった。

しかし、会議の前日になって王都の貧民街である問題が発生する。重度の薬物中毒者を摘発しようとしていた衛士が複数個所で殺害される事件が発生したのだ。

最初の1件目は野犬の類に襲われて食い殺されたのかと思われた。その数時間後の2件目は折れた槍スピアや欠けた鎧チェインシャツ着から、王都に魔獣が入り込んだのかもしれないと騒ぎになった。

真相が明らかになったのはそれから間もなく起きた3件目。3人で組んでいた衛士のうち逃げ延びた1人の衛士の証言によって魔狼ヴァルグや悪霊犬バークエストを従えた人狼ワウルフが貧民街に出没し、衛士を食い漁っている事が明らかになったのだ。

この情報によって冒険者組合に貧民街に出没したモンスター退治が依頼され、無事に討伐されてこの事件は終わりになる……はずだった。

モンスターを討伐した金等級冒険者が目撃したのは、息絶えたモンスターたちの姿が？せこけた人間に変わっていく様子だった。

冒険者組合が至急その遺体を調査した結果、正体は重度の麻薬中毒に陥った行方不明の貧民であった。

さらに魔術師組合の協力で遺体の血中から抽出された薬物は、これまで王国で確認されているどの薬物とも合致しない新しい薬物だという事も判明。その効能は非常に強い多幸福感と中毒性・凶暴性をもたらすのに加えて、過剰摂取によって人間を魔獣や獣人に変貌させてしまうという恐ろしくも悍ましいものであった。

そんな中、王都ではある噂がどこからか流れる。

——曰く、バルブロ第一王子は犯罪組織と結託して周辺諸国に新しい麻薬を蔓延させようとしている。

——曰く、その麻薬は人を化け物にしてしまう物だという。

——曰く、その犯罪組織が一斉摘発されたことで一部でその麻薬が横流しされている。

あまりにもできすぎた噂の出所はわからず、しかしその噂は驚くほどの速度で広まっていき、王城にもその噂は届いてしまった。

それによってバルブロ第一王子を廃嫡し断罪するべしと非難する貴族と、これはバルブロ第一王子を陥れるための謀略であり、冒険者組合と魔術師組合こそが元凶であると非難する貴族に分断されることとなる。

更には帝国が逆に流してきた麻薬であると言う者や、一斉摘発をした者達が行った自作自演ではないかと訝しむ者まで現れ、宮廷会議は混沌の様相を示していた。

明確な根拠もなく互いに相手の派閥を非難し中傷しあう不毛な会議。

「お前たち、静ま——！」

貴族たちの身勝手な発言の数々に耐えかねたランポツサ国王が、声を張って止めようとしたが、

「——ゴホッ！　ゴホッゴホッ！　——」

口を押さえて繰り返しせき込むランポツサ国王。

バルブロ第一王子を次期国王に据えようとしている者たちにとっては、ただの咳でも国王の健康不安を煽って譲位を迫る事も切っ掛けにできる。いまだバルブロ第一王子への沙汰が決まっていない状態ならば、無理やりでも王位に就かせることもできるだろう。そうなれば、八本指との癒着や不正などいくらでももみ消せると踏んでいるのだ。

ペスペア候を推薦している貴族たちも譲位を迫ろうとする動きは同じだ。

一方のザナツク第二王子を推薦しているレエブン候にとって、この

ような事態は想定外で非常に困る状況だ。八本指の一斉摘発の指揮という形で功績をあげたザナツク第二王子だが、バルブロ第一王子を追い落とす準備はまだ完了しているとは言い難い。そのような状況で貴族たちが国王に譲位を迫る動きを見せる切っ掛けを見せてしまったのはよろしくない。

しかし、この時点での貴族たちの楽観的な目論見や悩みは、すぐに覆されることとなる。

元より齢六十のランポツサ国王のほっそりとした体は以前から健康的とはいえず、顔色もよくはなかった。それに加えてスレイン王国と一部の王国貴族が画策したいくつもの村を巻き込んだガゼフ暗殺未遂や、八本指の一斉摘発で明らかになったバルブロ第一王子の不正の数々は、彼の心身をこの数日で急速に蝕んでいた。

「——ゲホッ！　ゴホゴホッ！　ゴヴォッ！」
「陛下——」

口を押さえている枯れ木のような手指の隙間から、暗褐色の血がこぼれ出る。見開いた瞳の焦点は定まらず、空気を求める呼吸は浅く、すぐにせき込んで血を伴って吐き出してしまう。

玉座から崩れ落ちそうになるランポツサ国王の体をガゼフが支えることができたのは、彼が国王の近くで不動の姿勢を保っていたからだ。

「誰か、神官を至急呼んでくれ！」

ガゼフの悲痛な叫びが宮殿に響き、ここにきて会議に参加していた貴族たちも、国王の容態が想像以上に深刻である事によく気が付いた。

このまま誰を次代の国王にするかを決めないままランポツサ国王に死なれてしまったら、バルブロ第一王子とザナツク第二王子、そして多くの貴族たちからの指示が厚いペスパア候の間で王位をめぐる権力闘争が発生することになってしまう。最悪の場合は三つの勢力に分かれての内戦だ。

しかし帝国との合戦を前にしてそのような事態になればどうなるか……。そこまで気が付いている者は少数だ。そういった者たちの

動きは素早かった。

「わ、私の親衛隊に神官がいる！　すぐにでも連れてこよう！」

「なっ！　レエブン候、抜け駆けするつもりか！」

「今はそんなことを言っている場合ではないだろう！　早くしなければ手遅れになってしまうぞ！」

他の貴族と言い合う時間さえも惜しいといわんばかりにレエブン候は走り出し、宮殿の外に控えさせている親衛隊を呼びに向かう。

「私もクライムにラクユースを呼んできてもらいます！」

ラナー第三王女も、アダマンタイト級冒険者であり友人でもある神官戦士のラクユースを連れてきてもらうために、宮殿の門前で警護に当たっているクライムのところへと向かう。

「お前たちが連れてきている配下の中に神官や薬師はいないか！　いるならば至急呼んできてくれ！」

「私の配下に薬師がいる！　至急呼び寄せよう！」

「助かる、ペスペア候！」

ザナツク第二王子は他の貴族たちにも治療に携われる部下がいな
いかを確認し、真つ先にペスペア候が手を挙げた。

少し遅れてボウロロープ候やウロヴァーナ辺境伯も争っている場
合ではないと判断してそれぞれの部下に命じ、リットン伯やブルムラ
シュー候さえも自らの目的のために国王を救うべく動いている。

今まで派閥に分かれていがみ合っていた者たちが、国王の危機を前
に一致団結しているのは皮肉なものであった。

……たつた一人を除いて。

ランポツサ国王が自室へと運ばれて駆け付けた神官や薬師たちによる治療を受けている中、中止となった宮廷会議で貴族たちによる非難の応酬の原因となっていた人物であるバルブロ第一王子は、自室で不機嫌になっていた。

「糞が。あいつらめ……」

バルブロは堪え切れずに自分を追い落とそうとする者たち——脳内で思い描いたザナツク第二王子やレエブン候への罵声を漏らす。

次期国王の座をめぐる政敵である弟によって、帝国に勝つために準備してきた八本指との協力関係を台無しにされただけでなく、功績となるはずだった行動を悪行であるかのように風潮されたと感じたからだ。

忌々しいといえば妹であるラナー第三王女もだ。顔は良いが頭の良くないあの女は、昔からわけのわからない綺麗事ばかりの思い付きをいくつも提案して会議を邪魔してきた。

大半は賢明な貴族たちが潰しているが、いくつかは愚か者の協力によって成立してしまっている。

国に属さない冒険者風情にモンスター討伐の報奨金を払うなどという無駄で無意味なことも、価値のない平民を少しでも有効利用するための奴隷制を廃止した事も、この国を衰えさせることにしかならないというのに。

あんなくだらない事に無駄な時間と金を費やしていなければ、自分ならばもつと有意義に活かすことができたのだ。

(それもこれも、あの死にぞこないの老い耄れが私に王位を譲らないからだ！)

流星にこの言葉は誰かに聞かれてしまったら拙いと判断して心の内で吐き出すに留めるが、バルブロの憎悪の矛先は父親であるランポツサ国王にも向けられる。

もはや宮廷会議に耐えることすらできないほど体は弱っているにもかかわらず、ザナツクとレエブン候によって演出された見せかけの功績に踊らされて、長子継承というあるべき王位継承を行うことも決断できない優柔不断な役立たず。

もはや正常な判断はできないほどに耄碌したと考えるのが妥当だろうとバルブロは結論づける。

(そうになると、王位を速やかにわが父から私へと譲らせなければならぬが、今の状況でそれが叶うか？ どうすればザナツクやレエブン候を筆頭とした邪魔者たち黙らせて貴族たちの支持を得られる?)

現状はバルブロにとって不利な状況だ。

考えられる範囲で支持を得るために理想的なのは、今年の帝国との合戦で華々しい活躍を見せることだ。それも例年のような狩るぶつかり合いでは得られないような大きな功績が望ましい。

どうしたものとバルブロが思案していると、扉からコン、コン、とノックする音が聞こえてきた。

思案していると、ところを邪魔されて不機嫌になるバルブロだが、ぐつと飲み込んで取り繕う。

「誰だ？」

「ブルムラシューにございます、バルブロ殿下。実は殿下と内々にご相談したいことがございまして、失礼ながらこうしてお伺いさせていただきます」

ブルムラシュー候と言えば六大貴族の中でも随一の財力を誇り、王位継承の話題では我関せずの態度を示していた人物だ。

確証はないが帝国との繋がりも噂されるような人物がこのタイミングであちらから接触しに来たのは何故か分からないが、誰かにこの場面を見られるわけにもいかないと考えたバルブロは、自室へと招き入れる。

「ふむ……入れ」

「ありがとうございます、殿下。内々の話が外に漏れ出てしまうのを防ぐために、防音のマジックアイテムを使わせていただきますね」

扉を開けて入ってきた男の服装は豪華で、それなりに整った顔立ちはまだぎれもなくブルムラシュー候だ。護衛を付けずにやってきたことは不用心としか言いようがないが護衛の者にも聞かせられないような話なのだろうか？

「それで、相談したい事とはなんだ？」

「はい、実は——」

八本指の今回の緊急会議もまた、ヴァランシア宮殿での宮廷会議と

同様に荒れていた。

まず、本来集結しなければならぬ全部門長が集まっていない。集まっていないメンバーは3人。

1人はコツコドール。彼は一斉摘発によつて各部門の拠点が襲撃された際に捕られてしまった事が明らかになっている。こちらは大きな問題にはなっていない。

もう1人はヒルマ。彼女の拠点も襲撃を受けたが逃げ延びたという情報はあるものの、その後の足取りが掴めていない。これは裏切りの可能性ありという事で肅清の対象となる問題だ。

しかし一番の問題は残る1人——八本指最強の男であり警備部門の長でもあるゼロだ。

奴隷売買部門・麻薬取引部門・警備部門が連携し、2年前に八本指にたてついた人物を六腕総出で始末する計画だったが、結果はまさかの返り討ち。六腕全員が死亡し、しかも秘密結社ズーラーノーンと結託していたなどというどの部門も身に覚えのない嫌疑までかけられる始末だ。

議論は紛糾する。

ゼロの死で空いた穴をどうするか。コツコドールやヒルマはどうするか。

どの部門も自分の手の者を据えようと行動し、牽制しあい、遅々として進まない。

もしもヴァランシア宮殿でランポツサ国王が倒れたという情報が入っていないければ、さらなる追撃を警戒するためにお互いに妥協して協力し合う可能性もあつただろう。しかし、国王が倒れたことによる混乱で八本指を摘発する勢いは削がれ、彼らに余裕が生まれたのだ。

五人の長と議長が話し合いという名の探り合いをしている中、会議室の扉が開かれた。

「あーら、遅れてしまつてごめんなさーい♪」

甲高い声を上げながら部屋に入ってきたのは、勾留されているはずのコツコドールだった。

首から下を完全に覆い隠すようにクロークを被っているが、この甲

高い声と特徴的なケツアゴはまぎれもなくコッコドールであることを証明している。

「コッコドール！ お前、釈放されたのか!？」

「いや、その前に……身体は大丈夫なのか?」

彼らのもとに集まった情報ではコッコドールは両腕と左足を失い、右足も複雑骨折していて再起不能のはずなのだ。しかし、目の前に姿を現したコッコドールは両足でしっかりと立ち、クローク越したが腕で扉を開けていた。部下を誰も連れてきていないのは不可解だが、失ったはずの手足が戻っていることと比べたら此事と言える。

「ヒルマが新しい手足を用意してくれたのよ。おかげでこうして元気よ〜♪」

「ヒルマのやつが！ それに、手足を用意……だと!？」

コッコドールの口から行方知れずになっているヒルマの名が挙がった事もそうだが、失った手足の代替品を用意するなどという伝手が彼女に有ったことに部門長たちと議長は驚かされた。

確かによく見ると、コッコドールの手足の動きはどこかぎこちないようにも見える。

「そうなると、お前を釈放させたのもヒルマが?」

「いいえ、この手足の具合を確かめるついでに貴方達にお披露目したくって……詰所の連中を皆殺しにして自主出所しちゃった♪」

「「「「……は?」」」」」

コッコドールの発言に部門長たちと議長は何を言っているのか理解できなかつた。自主出所という事は要するに脱走だ。だがいくら衛士の実力が一般人に毛が生えた程度しかないとはいえ、皆殺しなどコッコドール如きの実力でできるとは思えないからだ。それに、コッコドールはこんなに陽気な性格ではなかったはず。

困惑している彼らを余所にコッコドールは奴隷売買部門の席へと向かうと、全身を包んでいたクロークを脱ぎ捨てた。

「……なっ!」

「コッコドール……その身体は!？」

コッコドールの身体を目視した者たちの驚愕と恐怖を含んだ視線

が彼に集まる。

コツコドールの頭から下は人間の体からは程遠い、異形の肉体となっていた。

昆虫を彷彿とさせる褐色の外骨格で胴体と足は覆われていて、生半可な武器では容易く弾いてしまいそうな強固さを持つていそうだ。

左腕は蠅螂の腕部のような構造の鋭利な刃が生えており、右腕も人間の腕ではなく蚯蚓が肩から生えていた。背中には翅があることから、飛翔することも可能だろう。

数々の悍ましい所業を行い・行わせてきたと自覚している彼らですら、コツコドールの今の肉体には強い怖気を感じた。

「どう、この新しい身体は？ 以前のひよろつとした脆弱な身体とは比べ物にならないでしょう♪」

「あ……ああ。見るからに何もかも大違いだ……」

「あ・り・が・と♪ それでね、みんなに提案があるんだけども」

「な、なんだ……？」

本音では今のコツコドールには関わり合いになりたくないというのがこの場にいるほかの八本指のメンバーの総意なのだが、そのようなことを言った瞬間に彼に殺されてしまいそうな恐怖が勝っていて誰も口に出すことはできなかった。

故にコツコドールの提案が終わり次第この緊急会議を終わりにして帰ろうというのが、普段は足を引っ張りあっている彼らがアイコンタクトで通じ合って出した結論であった。

第十九話

ラキスケがリ・エステイヤーゼ王国の王都での用事を終えて、バハルス帝国の帝都に帰還してから一か月が過ぎた。

帰還してツアレを迎えに来たラキスケがまず行ったのは、帝都の逢引き宿で肌を重ね睦みあう事だった。

ラキスケはツアレと唇を重ね舌を絡ませあったり、彼女の豊満な乳房を揉みしだきしゃぶりついて母乳を飲んだり、臍に舌を這わせ愛液を啜って何度も絶頂させる。

ツアレもラキスケの角や耳に舌を這わせ、彼の逸物を啜えたり乳房で挟んで奉仕して何度も射精へと導いていく。

前戯を十分に楽しんでからは、お互いに相手を貪るように求めあい、夥しい量の精液と愛液が身体の内外を彩るほどに乱れあつていった。

一昼夜に及ぶ情交を終えてからも、ビアンゴがある人物を連れて竜王国から帰還するまでの間は、ラキスケはワーカーとしての仕事の合間を見つけては、ツアレとの情事に勤しむ日々を送っていた。

そして今、両国が例年よりも早い時期での合戦の準備に迫られる中、ラキスケはカツツエ平野にある山脈の麓に隠されている遺跡に足を踏み入れていた。

凡そ半年前の調査報告では、ラキスケが保有する地上船の能力で霧を張っている間だけこの遺跡に入ることが出来る事が分かっているが、内部に関する詳細が未だに明らかになっていない。その事から今回はより深い所まで調査することになっている。

ラキスケは一緒に探検しないかとモモンガとペロロンチーノも誘おうかと考えていたが、二人は他の冒険者チームと共同でトブの大森林の奥深くに出向いているらしく、タイミングが合わなかったために断念した。

昔聞いた話では、トブの大森林の奥地には万病に効くと言われる超希少な薬草が自生しているらしい。モモンガ達にとってはともかく他の冒険者にとっては非常に危険なトブの大森林の奥地に足を運ぶ

としたら、その採取が目的だろう。

《伝言^{メッセージ}》で連絡を取って頼めば二つ返事で冒険に参加してくれそうな気もしたが、冒険者として重要な依頼を遂行している最中の二人の邪魔をしたくはない。

二人と次に直接顔を合わせて会う機会があるとしたら、今年の王国と帝国の合戦が終わってからになるだろうとラキスケは考える。

今回の調査では、ツアレは安全のために地上船には乗せずに信頼できるある人物の家に預けている。そのため、現在地上船にいる乗員は自分を含めて三名。

ラキスケ以外のメンバーは一人は相棒のビアンゴ。そしてもう一人は――、

「ほう、ここがラキスケ殿の話していた、隠されていた遺跡か」

――今回の調査の依頼人であり、帝国主席魔術師のフルーダ・パラダインだ。

本来ならばこの時期に帝国を離れて良い人物ではないのだが、二か月以上もの間、毎日のようにジルクニフに遺跡調査に直接赴く重要性を説いて説得し続けた事で、王国との合戦や魔法の研究に支障をきたす可能性を考慮してジルクニフがいくつかの条件付きで許可したのだ。

「うむ。やはり直接訪れて正解であったな。カツツエ平野は王国と帝国の合戦の時期以外は大部分をアンデッドの反応を示す霧に覆われているが、この辺りにはそれがない。アンデッドが徘徊している様子もない以上、アンデッドが自然発生していない或いは自然発生しても速やかに排除される要因があると考えるのが妥当であろう。これはアンデッドがなぜ自然発生するのかの仕組みを紐解く重要な場所と言える。それに、十三英雄の時代以前から既に存在した遺跡としては、建造物の物理的な損壊に対して風化・劣化したような痕跡が見られないことも興味深い。他にも――」

「フルーダお爺ちゃん。考察は良いけれども、今は調査を優先しましょう。ここで分かったことや感じた事は、帝都に帰ってからお弟子さんに話してあげなさいな」

「——うむ、それもそうですね。それでラキスケ殿。確認だが前回の調査では地表部の調査にとどまり、地下内部やあそこに見える城と思しき建造物の調査は行っていないのであったな？」

「ああ、この遺跡を発見した時点で中途報告の期限が迫っていたのもあって、地表部と周辺の建造物を調査しただけだね。奥の城のような所は城門が倒壊して塞がっていたから内部は確認していないよ」

「ふむ……そうになると、今回調査するのは地下通路と城の内部という事になるか」

フルーダはその外見とは似つかわしくない若さの残る声で、そして興奮を隠しきれていない様子で確認を取ると、歴然たる英知を宿した瞳に活力を宿す。

100年前と比べて落ち着いたとはいえ、フルーダは本質的に魔導の深淵を追い求める探究者だ。目の前に広がる遺跡に、歴史のターニングポイントを築き上げてきた神々や英雄と同じ存在が遺したものがあると考えると、冒険者ではなくても興奮してしまうのも無理はない話だろう。

なにより第十位階魔法という、ラキスケ達と出会っていないければその存在を確認することは決してなかったであろう絶対の領域の修得方法を記した本が発見されたこの遺跡へのフルーダの関心は、冒険者が遺跡に憧れる気持ちをもはるかに凌駕する。

一人で独走してしまいたくなる欲求を抑え、フルーダは二人に語りかける。

「それでは、まずは地下通路の調査を始めるとしよう。ひよつとしたら城の内部に繋がるルートがあるやもしれん」

地下通路の調査が始まって半日が経過した。

通路内部の損壊は大きかったものの、崩落によって通路が埋まっているというような大きなトラブルはなく、道中にあつた分岐点もラキスケが呼び出した影シャドウ・デーモンの悪魔を先行させて確認することで迷うことな

く途中まで調査は順調に進んでいた。

しかし、ある分岐点で影の悪魔シャドウ・デーモンの帰還を待っていたラキスケがふと眉を顰める。

「……ん？」

「どうかしたのですかな、ラキスケ殿」

「先行させていた影の悪魔の内、分岐点を左に曲がった個体が階段を見つけたみたい」

「もう一方に送った方の影の悪魔シャドウ・デーモンはどうなの？」

「そっちの方は行き止まりの部屋だったから、今は戻ってくる最中だね」

「ふむ……魔法でマッピングした地図と地表部を照らし合わせると、左の道は城の直下に位置する場所になる。その影の悪魔シャドウ・デーモンは城の地下に繋がる場所を見つけた可能性がありますな」

「それじゃあ、影の悪魔シャドウ・デーモンに先行させながら俺たちも行こうか」

崩落によって入り口が塞がれていた城内への手掛かりになるかもしれない。プレイヤーの拠点だった可能性がある遺跡だから迎撃用の罠の類がまだ残っているかもしれない事から、ラキスケは先行させた影の悪魔シャドウ・デーモンを囮として利用しながら歩みを進めていく。

向かった先にある階段を注意深く警戒しながら上っていくと、その先は開かれた扉があった。影の悪魔シャドウ・デーモンはここから先へと侵入したようだ。

このままラキスケたちも扉をくぐると――

「――にやああほおおお！ 助けてくれにやああ！ その影の御仁、防衛用ゴーレムを目覚めさせたのは其方なのだから、何とかしてくれにやああ!!」

扉の先にあった広い部屋では、人間ほどの沖差はある猫型のゴーレムが飛び跳ねたりしながら影の悪魔シャドウ・デーモンと交戦しているのに加えて、何者かの叫び声が部屋中に響き渡った。

どうやら、影の悪魔シャドウ・デーモンが通った際に防衛用であろうゴーレムを起動させてしまったようだ。

それにしても、叫んでいるのは何者だろうか？ 猫の鳴き声を語尾

に付けている喋り方は、中々に個性的だ。

普段使っている方の盾を構えて声の出所を探っていると、部屋の天井にあるシャンデリアの上に何かがあるのを見つけた。

その姿は褐色の細かい縦縞が幾つも入った白い羽毛に覆われたお腹と褐色の翼、羽毛に覆われた趾からは鋭いかぎ状の爪を覗かせている。全長は大凡50センチといったところで、此処までならばラクスケ達を知る所のフクロウという生き物が喋っているように思えただろう。

しかし、この存在にはフクロウとは決定的に違う部分が一つあった。

「——あつ、お客様！ ネコさま大王国はただいま閉園中ですにや！ 防衛用ゴーレムの『量産型にゃんこビッグウオーマークⅢ』が暴れているから早く離れるにゃあほおお!!」

……そう、こちらに注意喚起しただしたその存在は、頭部がフクロウの頭ではなく猫の頭だったのだ。

「……どうしますかな、ラクスケ殿？」

「んー。とりあえずは……確保かな？」

「そんなところかしらねえ。あの叫んでいる相手が何者なのかも気になるし、別ルートからの侵入経路があるならば、そこも把握しておきたいところね」

「にゃほ!!」

プレイヤーの関係者と分かる内容を言葉にしたこのナマモノは、確保して情報を聞き出した方がいいだろう。

見たところ、防衛用ゴーレムは影の悪魔より若干強い程度。すぐに倒せる。

「それにしても……なんと叡智に満ちた瞳と声を持つ魔獣だ。これほどの知性を感じさせる魔獣には初めて出会いましたぞ！ やはり直接赴いて正解でしたな！」

「確かに賢者という表現が相応しい眼差しと雰囲気を用意しているわね」

「ええ……っ？」

それはそうと興奮するフルーダと感心しているビアンゴの言葉に、モモンガたちに同行している森の賢王ハムスケと遭遇した時のツアレとの認識の違いを思い出したラキスケはそれ以上は口を挟むことが出来なかった。

バハルス帝国の帝城にある皇帝執務室。普段は少ない人数しかないこの部屋には今、バハルス帝国皇帝たるジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスだけでなく、彼から深く信頼されている臣下達や帝国四騎士の一人である“雷光”バジウツド・ペシユメルなど、多くの者たちがいた。カツツエ平野の遺跡調査に赴いていなければ、フルーダ・パラダインもこの中に当然含まれていただろう。帝都へと帰還中のフルーダの代わりにフルーダの直弟子である“選ばれし三十人”を含む数名が代わりに参加していた。

彼らはみな好きな場所に腰掛け、王国との最後の合戦をどのような進めていくか、そして今後の帝国の方針についての討論を続けてきた。白熱した会議の様子はその周りに散らばった紙が物語っている。その中でジルクニフはしばらく眺めていた数枚の紙から目を離し、ふっ……と眉目秀麗と評するにふさわしいその顔に僅かな喜びの表情を見せながら鼻を鳴らした。

「陛下、如何しましたか？」

「ああ、じいが熱望していた遺跡調査に関する報告書だ」

それはフルーダからの《伝言》^{メッセージ}で齎された内容をまとめた概要資料だ。《伝言》^{メッセージ}の信頼性の都合でフルーダが帰還してから詳細を聞く必要があるが、調査に赴いたカツツエ平野の遺跡がプレイヤーの拠点であったことが確定した事が記載されている。

王国との合戦が迫っているにも関わらず、2か月以上にわたって毎日のようにカツツエ平野にある遺跡調査を強請られていた時は、表情にこそ出さなかったがストレスの蓄積で本気でキレるかのどうかの瀬戸際だったジルクニフ。しかしそこで感情に任せて否定しないで

調査を許したことで、スレイン法国が信仰する神と同質の存在であるプレイヤーの情報を手にすることができたと考えれば喜びの表情が顔に出るのも無理はない。

「じいが間もなく帝城に戻ってくる事も記載されている。この会議が終わる頃には、魔法省はまた一段と忙しくなっているぞ。いざという時にじいに頼りきりにならないよう、優秀な人材をより多く育てる必要もある。……なんだ、魔法省だけでなくどこも忙しくなるではないか」

苦笑しながら答えるジルクニフに、室内の皆が彼と同じ類の笑みを浮かべる。

ジルクニフが帝国の改革のために多くの無能な貴族を肅正した結果、改革による仕事量の増加に反して文官の数が減ってしまった。当然、1人当たりの仕事量は一気に膨れ上がっている。その影響はジルクニフ自身も受けており、過去にエルフの王国から亡命してきて以来、歴代の帝国皇帝に仕えている優秀なエルフの文官がいても落ち着いて休める暇がほとんどない。そしてこの忙しさは間接的にだが、ラキスケが引き受ける依頼の数が増える事にもつながっている。

「王国との戦争に終止符を打ち、戦後処理が終わる頃には一息付けるの良いのだが。そのためにも今は苦勞してでも文官たちをしつかりと育てる必要がある。息つく暇もないような忙しさが定着してしまつては、次代の皇帝や文官たちに恨まれてしまいかねん。歴代皇帝のように大雑把に命令するだけの役目に戻りたいものだ。勿論、帝国が過去に逆戻りするようなことがない事が前提だがな」

絶対者一人の国は酷く不安定で脆い事をジルクニフは知っている。そして、現在のリ・エステイーゼ王国のように統治者や文官などの育成を怠った国がどのような末路を迎えるかもだ。

必要なのは帝国をまとめることができる能力を持つものが統治者となること。そして自分のような卓越した才能を持っていなくても、ある程度の能力があれば問題なく帝国を運営できるような形を作ることだ。口にこそ出さないが、ジルクニフはそう考えている。

その時、執務室のドアがノックされた。入室者は帝城に戻ってきた

フルーダ・パラダインであった。

室内にいる者たちの視線がフルーダに——正確には彼に左肩に集まる。フルーダの左肩には、ネコの顔をした全長50センチ程のフクロウが留まっていた。その瞳は深淵を見通すような知性を感じさせる。

「陛下、失礼いたします」

「じい……肩に乗せている魔獣はいったいなんだ？」

「この者は今回の遺跡調査の際に遭遇した、プレイヤーの関係者の生き残りにございます」

「お初にお目にかかります、皇帝陛下。吾輩はネコさま大王国の案内役を務めさせていただいていた、梟猫のミネルヴァと申しますにや」

人語を介する魔獣。いや、プレイヤーの拠点であった遺跡に住む生き残りであることを考えれば神獣と呼ぶのが正しいか？ そうなると、先ほど魔獣と呼んでしまったのは拙かっただろうか？

ジルクニフの心配を気にしていない素振り、ミネルヴァは話を続ける。

「今は亡き主人、まじかる☆にゃんこマジシャン様の遺言により、かつてネコさま大王国と交友があったり、ヴァールス王国の関係者が興した貴殿の国に身を寄せさせていたのだきいたのですにや」

ミネルヴァの口から出てきたり、ヴァールス王国とは、およそ200年前にリ・エステイゼ王国とバハルス帝国が別々の国として別れる以前に存在したとされている一つの巨大国家だ。現在では当時を記した資料が散逸してしまい、国家が分裂した原因などの詳細が分からなくなっているが、かつてアゼルシリア山脈周辺を支配していたこの国はドワーフの国とも取引がされていて、現代でもバハルス帝国は彼の国と貿易を続けている。

「遠路はるばるご苦労、ミネルヴァ殿。私が皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスだ。バハルス帝国は貴殿を歓迎しよう」

ミネルヴァの言葉が真実である保証はない。しかし、フルーダがわざわざ連れてきたものを無碍にするわけにはいかないし言葉を否定する材料もないならば、目の前にいるプレイヤーの関係者を取り込

みにかかる方が良い。

実際、帝国は100年前もラキスケたちを迫害せずに迎え入れたことで、様々な危機を乗り越えながら大きな発展を遂げることができた。特にラキスケには皇太子時代から親しくしてもらっていたし、現在も立場がなければそうしたいと感じている位には特別な関係を築いている。

ジルクニフにとってフルーダが師でありもう一人の父親のような存在だとするならば、ラキスケは肉親以上に信頼できる兄のようであり親友のような存在だ。

血の繋がった親兄弟であっても血で血を洗うようなどす黒い感情が常に渦巻くのが貴族の世界だ。それも皇位が絡む周囲ともなれば、その悍ましさは桁違いにもなる。

実際、父親である前皇帝が母親である皇后によって毒殺されて即位した際には、自らも母型の貴族家を皇帝暗殺の容疑で断絶し、兄弟たちも処刑したり反対する貴族勢力を掃討したりと鮮血帝の二つ名を得るに足る血塗られた道を歩んできた。

あの時、ラキスケに継れば前皇帝を蘇生することはできたのだろう。しかしジルクニフはその選択をしなかった。

それはジルクニフが前皇帝から、もしも改革の過程で自身が死に至ることがあつたとしても、蘇生はせずに改革を推し進めることに利用するように強く言い含められていたからだ。

敬愛していた父の強い願いを、そして歴代皇帝たちが積み重ねてきた改革の灯を消さないに、ジルクニフは前皇帝^父の死を利用して最大の障害^{母方}だった前皇后の貴族家を排除した。

そんな環境で彼が心の一部が壊れながらも人間の精神のままにいられたのは、フルーダやラキスケの存在があるからだ。少なくともジルクニフ本人はそう考えている。

「格別の配慮、感謝いたしますにや」

「それでは、賓客である貴殿のための住居を至急用意させよう。何か要望はあるだろうか？」

「それでしたら、適度に飛べる大きさの部屋に幾つかの止まり木と、吾

輩が丁度入れるくらいの大きさの箱か袋を用意していただければ十分ですにや」

「ならばミネルヴァ殿の住居が用意できるまでは、私の住居に間借りしてもらおうこととしましょう。それではミネルヴァ殿を案内するので私はこれで……」

ミネルヴァの要望を反芻しながら、ジルクニフは執務室を出るフルーダを見送る。執務室の扉が閉まり、室内を包んだ静寂を破ったのは、バジウツドの一言だった。

「そーいや猫って、習性的に狭いところとかに入りたがるんですよね」

「……ああ、なるほど。それで袋を要望したわけか」

習性としては梟と猫のどちらを主眼に置いて対応するべきか悩んでいたジルクニフであった。

第二十話 ※エロなし

帝国の宣言から二ヶ月が経過し、茹だる様な暑さの真っ只中にある季節となった。

その中でも城塞都市エ・ランテルは、普段の活気だけではない喧騒と熱気に包まれていた。

熱気の発生源はエ・ランテルを囲む三重の城壁のうち、最外周部の城壁内。そこには無数の人がいた。ほとんどがぱつとしなない恰好をした者たちばかりで、大半が平民だろう。その数、およそ二十万。如何に三ヶ国の領土に面していて人や物資、金銭などが多く行きかうエ・ランテルでも、この区画に常時二十万もの人間はいない。

彼らが今ここにいるのは、迫っている帝国との合戦のために集められたからだ。

一部の若者たちが、木と藁で形を作ってべこべこに凹んだ鋼鉄の鎧を着せて盾を持たせた的めがけて、刃の付いていない槍で突く戦闘訓練をしている。

威勢の良い掛け声が飛び交うが、前向きな気持ちで声を出している者は少ない。ほとんどがこれから行われる命の奪い合いへの恐怖、訓練しなくては生きて帰れないという焦燥感などに突き動かされているだけだ。

しかし、真面目に訓練するものばかりではない。むしろ歳が上に行けば行くほど戦意はなく、生きて帰る事だけを望む兵士の割合は多くなっている。

それでも、例年に比べれば全体としての戦意はまだマシな方であった。

王国の各領地の村などでは、麦畑が収穫の時期に向けて先端を膨らませて金色に色づき始める時期だ。

例年ならば収穫の時期に合わせて帝国との合戦が行われていたために収穫に回せる人出が減って泣く泣く無駄にせざるを得ない麦も相当量あったが、今年は時期が早まって収穫前に合戦が行われる。巧く生き延びてすぐに故郷の村に帰る事ができれば、収穫の時期に間に

合うかもしれない。ひよつとしたら、例年ほど飢えに苦しまずに冬を越せるかもしれない。

そういった根拠の薄い希望的観測に縋りつくように、照りつける太陽による暑さで倒れないように祈りながら、集められた兵士たちは必死に訓練を続ける。

そんな兵士たちの横を、膨大な糧食を、物資を載せて膨れ上がった荷馬車が何台も走り抜けていく。

無気力なそぶりを見せていた者たちが、その荷馬車を恐怖の目で睨みつける。自らのすぐそばまで近寄ってきた死神が振り下ろさんとする鎌を凝視するような眼差し。

これから始まる事を理解している者たちは大抵そういう目をしていた。

食料の大規模輸送。

それは帝国との戦争の始まりが近い事を知らしめていた。

エ・ランテル。三重の城壁の最内周部の城壁内。

その中央に位置する場所にエ・ランテルの都市長であるパナソレイ・グルーゼ・テイル・レツテンマイの館がある。都市長という地位にふさわしいだけの立派な屋敷ではあるが、そのすぐ横に建築された建物と比べると幾分か見劣りしてしまう。

エ・ランテルで最も立派に作られたその館は貴賓館。国王やそれに準ずる地位の人間が来た場合にのみ、開かれる館だ。

そして現在、その館の一室にはザナツク第二王子と大貴族を中心とする男たちの姿があった。

例年ならば国王であるランポツサ三世が参加しているが、齢六十の高齢である事と二か月前に倒れてから未だに回復しきっていない事が重なって王都の城内で療養している。

バルブロ第一王子もこの場にはいない。宮廷会議での一件以来、自発的に謹慎すると言って城内に籠ってしまっているからだ。こうい

う時にこそ自ら前に出ようとする彼らしくない態度と行動に周囲は訝しんだが、目前に迫っている帝国との戦争への対処が先決だったこともあって放置されることとなった。

部屋の真ん中にある大きな机を、ガゼフを傍らに控えさせたザナツクと共に主だった貴族達が囲み、そこに広げられた大きな地図を睨みつけ、帝国との戦争に向けて派閥を超えての綿密な打ち合わせ、そして激論を交わしていた。

その激論も終わりが見え、皆の顔に濃い疲労の色を見せる中、レエブン候が口を開く。

「皆様、お疲れさまでした。これで、とりあえずは、ですが期日までに準備は終わりました。これより帝国との戦争に向けて計画を進行させます」

レエブン候は全員を見渡すと、羊皮紙をその場の皆に見えるように持ち上げる。

「このように数日前に帝国から合戦の場所を記載した宣言書が届きました。それで戦場は——」

「もったいぶるな、レエブン候。いつもの場所であろう？ というよりもあそこ以外にどこがあるというのか」

「そうです、ボウロロープ候がおっしゃる通り、例年の場所。呪われた霧のかかる地、カツツエ平野。その北西部すぐです」

「同じ場所をしてくるとは、帝国の侵攻も例年通りという事だろうか」
貴族の一人が安堵するように言った言葉に対し、レエブン候は頭を横に振った。

「残念ですが、そうはいかないでしょう。帝国は今回、かなりの兵力を動員してきたという報告が上がっております。私の配下の元オリハルコン級冒険者チームに調べさせましたが、兵力は不明なれど、紋章は計五軍団分あったとのこと」

「五つも!?!」

ざわめきが場を支配した。

帝国騎士団は一軍団で一万の騎士を総数で八軍団保有するが、今までの争いで参戦したのは最高で四軍団だ。去年は三軍団だったが、今

回はそれまでよりも多くの軍勢が動くという。

「帝国は本気……か？」

貴族の一人が不安げな顔のまま口にする。

今までの戦争は王国軍二十万対帝国軍四万で、帝国騎士に個々の力量で劣るのを圧倒的物量で拮抗させてきた。

……拮抗という言い方は正しくない。それまでの帝国の狙いは王国を徐々に疲弊させることであり、糧食を無駄に消費させることができれば合戦の目的は果たしたと果たしたことになる。

「例年よりも早い合戦と動員された数を考慮すると、今までのようなひと当たりで終わりというような軽いものでは終わらない事も考えらるべきでしょう」

「……今からでも、追加徴兵はできないのか？」

「それは無理でしょう。今から改めて徴兵してもエ・ランテルに集結させて戦闘訓練を受けさせる時間も、先ほどまでの打ち合わせをからやり直す時間もありません」

帝国が本気で王国を獲りに来ている可能性を察知していたレエブン候としては、本来ならばより多くの兵力を動員したかったところだ。しかし、あの宮廷会議でランポツサ三世が倒れてしまったためはその対処に追われ、更に本来ならば八本指の一斉検挙を機に拡大するはずだった王派閥の勢いが削がれてしまった。その結果、動員兵力は例年通りを維持するので精一杯であった。

ガゼフが進言しようとしていた、戦士団とともに戦う魔法詠唱者マジック・キャスターの部隊設立の話も、その煽りで立ち消えとなってしまうている。

「そうになると、戦士長殿と戦士団、そして私の精鋭兵団を早い段階で前線に投入すべきだろう。それにあたって殿下、一つ質問が」

ボウロロープ候は一拍おいて自分の言葉に耳朶を集めてから発言する。

「此度の戦争、誰が全軍指揮を？ 私であれば問題ありませんか？」
場の空気が変わった。

これは不穏な発言だ。質問の形でザナックに問いかけているが、実際の中身はまるで違う。そこにあるのは全軍の指揮権を寄越せとい

う不可視の圧力。

ボウロロープ候は軍隊の指揮官として優秀だ。彼が組織した專業兵士たちである総数五千の精銳兵団は戦士団の戦士よりは弱い、それでも帝国騎士と同等以上の実力がある。

ましてや彼が今回の戦争で準備した兵数は、王国軍二十万のうち約四分の一である四万五千と貴族たちの中でも首位だ。

ザナツクには指揮官として優れた才覚も、バルブロ第一王子のような恵まれた体格も、妹であるラナー第三王女のような智謀も、そして父であるランポッサ三世のような人望もない。そのような人物が指揮権を持っていたとしても、貴族派閥に所属する貴族たちがそれを素直に受け入れるはずがないだろう。

「……ボウロロープ候、戦士団以外の指揮を候に任せる。全軍を無事、カツツエ平野まで進軍させよ。そして軍の展開、および陣地の作成を任せる」

「はっ！ 畏まりました！」

ボウロロープ候は完全ではないが欲しかった地位を得ることができたことを内心喜びながら、ザナツクの命を受けて頭を下げる。

本音を言えば戦士団の指揮権も得たかったところだが、あれは国王直属の部隊だ。今のザナツクが国王の代理に近いとはいえ王子の一存で勝手にその指揮権を移すことはできないし、それを強く批判すれば国王に対して叛意ありと疑われてしまうかもしれない。だからこそ、ボウロロープ候もそれ以上は要求せずに引き下がった。

「他に何かあるものはいるか？」

ザナツクは暫し返答を待つが、質問に返すものはいなかった。

「……ならば出陣の準備を始めるぞ。明日にも出る。戦場まで二日はかかる見込みだ。準備は怠らないように。では、解散だ。ボウロロープ候、後はよろしく頼むぞ」

「畏まりました。殿下」

出立の準備を整えるべく、貴族たちは続々と部屋から出ていき、残ったのはザナツクとガゼフのみとなる。

ザナツクがゆつくりと首と肩を回すと、ゴリゴリという音がガゼフ

の耳にも届く。

「お疲れ様です、ザナツク殿下」

「ああ。本当に疲れた。父上はこんなことを毎年やっていたのか」

「はい。陛下もこの会議が終わった後は、決まってその動きをして身体を解していました」

「ほう……そうなのか」

王派閥と貴族派閥の縮図ともいえるこの会議をザナツクは何とか乗り切った。その疲労は半端なものではないだろう。親子で似通っている部分を発見したことにガゼフは苦笑を浮かべる。

「……すまんな、戦士長殿。全軍の指揮権をボウロロップ候に取られてしまった。父上であればレエブン候に任せる事ができたのだろうが、俺では率先して動くボウロロップ候を選ばない理由が咄嗟に思いつけなかった」

「いえ、殿下のおかげで私の戦士団は候の指揮権から外れております。もし戦士団の指揮権も候に握られていたら、私たちは使い潰されていただでしょう」

「そうか……、そう言ってくれると俺も少し心が楽になる。レエブン候にも後で謝罪しておかなくてはな。……それにしても、父上の体を癒すための万能薬、その材料となる極めて稀少な薬草を手に入れられなかった事が、このような形で響いてくるとはな……」

「殿下」

「ああ、いや。あいつらを責めているわけではないんだ。蒼の薔薇には何の責任もない」

ザナツクはガゼフに弁明しながら、ラキユースから沈痛な面持ちで報告された内容を思い出す。

三十年前、当時のアダマント級一チームと随伴のミスリル級二チームによる合同依頼の時さえ、非常に危険な任務だったといわれる、トブの大森林の奥地にあるといわれる超希少な薬草採取。今回依頼を引き受けた蒼の薔薇によれば、目的地周辺はあまりにも酷い惨状だったそうだ。

大地は悍ましい汚濁をその身に満たした粘性生物スライムの群体が這い回

り、森は枯れ果て、水は腐り濁り、空気は呼吸するだけでその身を蝕む。まさに地獄の一つが顕現したような環境。

その粘性生物スライムの推定難度は平均して六十。特に中心部にあった超巨大な樹人トレントの死骸に住み着いていた超大型個体は推定難度百二十という規格外の怪物で、別件でトブの大森林を訪れていたある冒険者チームやその依頼人であるトブの大森林の湖に住まう蜥蜴人リザードマン達の協力がなければ、その粘性生物スライム達は餌を求めてトブの大森林を南下してエ・ランテルまで到達していた可能性もあったという。

冒険者組合と魔術師組合に提出された粘性生物スライムの核の大きさと危険性から、その話は真実であったことも裏付けられている。

「……ままならないものだな」

眼前には赤茶けた大地が広がっていた。緑がほとんどない荒涼たる大地。血染めの大地と口さがない者たちが囁く、死の大地。

カツツエ平野——アンデッドやその他モンスターが蠢く場所であり、昼夜関係なく存在するアンデッド反応を示す薄霧によって危険な地として広く知られている。

帝国ではフルーダ・パラダインの研究とあるワーカーチームの活躍によって、隠された居城の存在などがごく一部には明らかになっているが、王国と帝国が合戦を行う時だけ何故その薄霧が引くのかは今なおわかっていない。

一本の線を引いたようにそんな大地と草原が隣り合っている様子も、カツツエ平野が呪われていると言われる所以でもあった。

大地におおよそ一年ぶりの太陽の慈悲が降り注ぎ始める中、祝福なき地を見下ろすかのように、線を引いた向こう側——生者の世界に建造された巨大な建物がその威容を現す。

周辺の草原では見当たらない大木を無数に使って造られた頑丈な扉の向こうでは、無数の旗が揺らめく。その中でも最も多いのは帝国旗——バハルス帝国の国章だ。

これほどの鎧は数えるほどしかない。

その鎧を着る者たちこそ、帝国最強の四騎士、“重爆”レイナース・ロックブルズ、そして“不動”ナザミ・エミック。

それだけではない。馬車の一団の上空には驚馬ヒボクリフに乗り、今は起動させていないが不可視化の魔法と同じ効果を発揮する超希少マジックアイテムを装備した皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードの精鋭達と、レイナースやナザミの鎧と同様の材質・処置が施された全身鎧フル・プレートを身に着けた帝国四騎士、“激風”ニンブル・アーク・デイル・アノック。

これほど厳重な警護を受けている馬車の一団の主人こそ、バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・フアーロード・エルニクスその人である。

更に馬車の一団の真ん中に乗るジルクニフとの相席が許されているのは二人。帝国四騎士筆頭、“雷光”バジウッド・ペシユメル、そして帝国最強の首席宮廷魔術師、“三重魔法詠唱者”トライアッド、“逸脱者”フルルーダ・パラダイン。これほど厳重な警備を突破することは、たとえ最強の生物と呼ばれる種族、竜種であっても不可能であろう。

驚馬ヒボクリフに乗って空を駆けるニンブルが先行して駐屯地に降り立ち、ジルクニフを乗せた馬車の一団が門前に到着すると、準備していた騎士マジック・キャスターや魔法詠唱者達が馬車へと集まる。

例え中に誰が乗つていようと、それこそ皇帝ジルクニフであったとしても駐屯地に確認なく入ることはできない。それも目視だけでなく魔法やマジックアイテムも使つて幻術などによる変装や不可視化が行われていない確認するのが基本だ。

これが王国であれば魔法を使用してまでの確認は行わないが、魔法技術を国家の柱とし魔法がどれだけ恐るべきものなのかを知っている帝国だからこそ、しっかりとルールとして確立し、魔法による警戒を強くしているのだ。

担当する騎士たちが検査を始める中、レイナースがそのうち数名を呼び止める。

「貴方達は待機を。あと一台、いえ……一隻が降りて来るのでそちらの検査をお願いしますわ」

「畏まりました。しかし一隻？ それに、降りてくるというのは一体？」

「ふふ……すぐにわかりますわ」

微笑んだレイナースが指さした上空に騎士たちが視線を向ける。太陽に照らされている空を飛翔する鷲馬ヒボクリフとそれに乗る皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードの精鋭達の姿が見える。

しかしよく見ると、その隊列は何かを囲むようになっていて。まるで、そこに見えない何か飛んでいるかのような。

そう思った騎士たちの予想は正解だった。鷲馬達ヒボクリフに囲まれている中央に今まで不可視化していたものが姿を現した。

それは一隻の双胴船カタマランだ。騎士たちの脳裏に、帝都に拠点を構えているというワーカーチームが保有する地上船の存在がよぎる。しかし記憶にある情報と比較すると、この船舶とは形状が異なり、大きさもだいぶ小さいことから、別物であると判断する。

そんな双胴船カタマランが馬車の一団から少し離れた場所にゆつくりと降り立った。全長は三十m程度と船舶としてはやや小型で、白く塗装された船体の全体に巧緻な金細工が施されている。

既に馬車を検査している者によって中央の馬車に皇帝ジルクニフがいる事が分かっていたいなければ、こちらに彼が乗っていると知られても納得してしまうだろう。

「理論上は問題ないとわかっておりましたが、帝都から此処まで“プロト・ヴィマーナ”を問題なく運用できた事は大きな成果ですぞ、陛下」

「素晴らしいな、じい。船そのものもそうだが、乗り手が優秀であることがよく分かる」

「ええ。彼女は若くしてこの大任を勝ち取った秀才ですからな。陛下が褒めていたと知れば、彼女も喜ぶでしょう」

「へ、陛下!？」

バジウツドとフルーダを護衛として、馬車から降りていたジルクニフの存在に気が付いた騎士たちが慌てて最敬礼を取ろうとするが、ジルクニフは手を前にかざしてそれを制する。

「ああ、最敬礼はよい。それより、速やかに規則に従って検査を進めてくれ」

「はっ！ 畏まりました！」

ジルクニフの命を受けて双胴船カタマランの検査を始めた丁度そのタイミン
グで、船橋から甲板へと二人の人影が姿を現した。

「着いたか……思っていたよりも早く到着したな。お疲れさん」

「お疲れ様。今回は陛下の馬車と速度を合わせていたけれども、単独
ならばもつと早くできる。それより、乗り心地はどうだった？」

「ああ、揺れは全くと言っていないほどなかったから、下手な馬車に乗る
よりもずつと快適だったぞ」

「そう、それはよかった。今後のためにもその意見は参考になる」

その二人のうち一人は少女だ。十代半ばから後半という所の少女
は痩せぎすで、艶やかな金髪は肩口辺りでぎっくりと切られ、鼻立ち
は非常に整っている。美人というよりは気品があるという雰囲気
の美だが、人形のような無機質さをやや感じさせていた。

一方、もう一人は青く染められた髪と茶色い瞳の男だ。ほっそりと
した体躯だが痩せてはおらず、むしろ実戦の中で鍛えられた引き締
まった肉体をしている。

装備は鎧チェインヤツ 着の他にはベルトに引っ掛けた皮のポーチとネックレ
スに指輪、そして腰に下げた二本の武器と、騎士の重装備と比べると
軽装だといえる。

「折角だ。カーベイン最高司令官より先にお前たちに紹介しておこ
う。彼女はアルシエ・イーブ・リイル・フルト。この試作魔導浮遊船
“プロト・ヴィマーナ”の魔導操舵手だ。そしてこちらの彼が……此
度の戦争でガゼフ・ストロノーフに対抗するために竜王国より臨時で
雇った、“爪斬り”のブレイン・アングラウスだ」

何者なのか？ という疑問を浮かべる騎士たちに答えるように、ジ
ルクニフはそう口にした。

第二十一話 「王国と帝国の戦争 前編」

カツツエ平野の赤茶けた大地にあるなだらかな丘を利用して王国軍と帝国軍の両軍は展開し、睨みあう。

王国軍の約二十万の大軍は右翼五万五千、左翼五万五千、中央九万と兵力を分け、三つの丘を巧く利用して陣地を作っている。尤も、その陣地は柵を巡らせたものではなく、徴兵した平民の兵士の数の暴力で形成されたものだ。

最前列から数列にわたって並んだ歩兵達が、長さ六mを超える両手持ちの長槍を構えることで槍衾を形成し、帝国騎士の主戦力である重装甲騎馬兵に対抗する陣地を構築している。

一方、対峙する帝国軍の軍勢は五万。

数の比率では王国軍：帝国軍Ⅱ四：一と、王国の軍勢と比べて圧倒的に少ない。

しかし、帝国軍騎士たちには敗北感など微塵もなく、太々しい面構えをしていた。彼らは個としての強さの違いを自覚するゆえの自信から、自分たちが負けるとは全く思っていない。

何よりも、今回の戦争は特別だ。帝国を生まれ変わらせて強国へと導いている稀代の名君、鮮血帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクスが中央本陣に構えている。

逸脱者フルーダ・パラダインの魔法によって帝国軍の上空に展開された、皇帝ジルクニフの立体映像と拡声音声を用いた大演説によって、帝国軍の士気は最高潮に達していた。

騎士達は敬愛する皇帝陛下に勝利を献上するために。ある指揮官は帝国の悲願であるかつて王国と帝国に分かたれた大国の姿を取り戻すために。そして、ある剣士は己の目標である王国最強の戦士を越えるために。

「それじゃ頼むぜ。ストロノーフが前線で暴れ始める前に見つけ出さなきゃならないからな」

「分かった。巡行防御膜展開。プロト・ヴィマーナ、浮上開始……目標高度到達、発進！」

帝国軍が展開する本陣では、不可視化していたプロト・ヴィマーナの船体が半透明の膜に包まれる。そしてプロト・ヴィマーナがゆつくりと浮かび上がって地上から凡そ十mほどの高度まで浮上すると、マジックアイテムによって同様に不可視化されたニンブルを筆頭とした驚馬ヒボグリフに騎乗する騎士たちに護衛されながら目標地点に向けて空中を滑るように移動を開始した。

船内には操舵手のアルシェの他に魔法省の職員である魔法詠唱者や信仰系魔法を修めた騎士が数名、ブレインに加えてバジウッドも同乗している。

「おお。馬車よりも速く走れるとは聞いていたが、こりやマジだな。言っちゃなんだが、この速度で王国軍に突っ込んで轢いていった方が早く終わるんじゃないのか？」

「馬鹿言わないでくださいよ、バジウッド隊長。そんな事したらプロト・ヴィマーナがバランスを崩して墜落してしまいます。この速度でそんなことになったら、隊長とアングラウスさん以外は全滅しかねませんよ？」

「わりいわりい、ちっと試しに行ってみただけだ。本気では思っちゃいねえよ」

揺れを感じさせない船内ではバジウッドの軽口に対して、魔法省の職員の一人が苦笑しながら注意すると、バジウッドも職員の態度を咎める事なく軽い口調で謝罪する。

ふと、何か気になったのかバジウッドはブレインに質問し始めた。

「そういや、アングラウスの旦那はどうして今回の仕事を請け負ったんだ？」

「ん？ ああ……この戦争でストロノーフと一騎打ちする件に関してか」

「確か四年前だったか？ あんたは王国で開かれた御前試合の決勝で惜敗したとはいえ、そのあとは竜王国で救国の傭兵なんて呼ばれるほどの活躍をした英雄だ。金銭や名誉には執着する様な男には見えねえし、それほどストロノーフに敗れたことが悔しかったのか？」

「確か俺が強くなりたいと願った切欠は、ストロノーフとの試合で敗

北したことだ。あの時の敗北を勝利で塗り替えたという思いは今も強く残っている。だが……それだけじゃない。俺は胸を張って前に進むために、過去との決着をつけるんだ」

「過去との決着？」

「ストロノーフに敗れた当時、俺はあいつに勝つためにどんな手を使っても自分を磨こうとした。それこそ、勝てるならば剣鬼になっても構わないと思うほどにな。だが、ある物好きなエルフに竜王国に行くことを勧められて、そこで戦い続けていくうちに気が付いたんだよ。かつての俺が目指そうとしていた剣鬼の道は、心の抛り所が自分だけしかない孤独で脆い強さしかないと道だつてな。一人で強くなるには限界の壁がある。一人じゃ折れちまったら立ちあがれなくなる。だが、一人では無理でも、他のやつらとならば壁は越えられる、支えあつて立ち上がることもできる。要するに、俺はそういう相手として選んでもいいくらいには竜王国の連中に愛着を抱いちゃまってるんだよ。だからこそ、俺はストロノーフとの決着をつけに行くんだ。自分だけのためじゃないって胸を張って竜王国の連中と一緒に前に向かって進むためにな」

「へえ、いい話じゃねえか」

「言つとくけどよ、行く機会があつたとしても竜王国の連中には言いふらすなよ？」

「はいはい、分かつてるよ」

自分の思いを言い終えたブレインは指先で頬を搔きながらバジウツドに釘をさす。こうやって口にする、恥ずかしく感じる部分はあるようだ。

そうしているうちに、マジックアイテムで戦場を索敵していた職員から報告が上がる。

「ガゼフ・ストロノーフ、発見しました！ 場所は王国軍中央本陣後方！」

「よし！ 頼むぜ、アングラウスの旦那！ 模擬戦とはいえ俺たち四騎士を一蹴したその実力、王国最強の戦士にぶつけてやれ！」

「ああ……任せろ！」

両国の使者による形式だけの交渉は物別れに終わり、戦争が始まった。

例年であれば帝国軍は王国軍の前を通り、撤退していく。それに対して王国は勝鬨を上げる。

当初、左翼の大將を大將を務めるブルムラシュー候を筆頭に多くの王国貴族は今年もそうなるだろうと楽観しながら、あるいはそうなつて欲しいと祈りながら帝国軍が動き始めるのを待ち構えていた。

それに対して、王国軍の総指揮官を務めているボウロロープ候が率いる王国軍中央本陣前方や、レエブン候が大將を務める右翼後方といった一部はそれらと異なる動きを見せていた。

どちらも皇帝が本陣に来てまであのような演説を行った以上、帝国軍が例年通りの一当てで済ませるはずがないという認識のもの行動だが、その内容はだいたい異なっていた。

レエブン候の陣地では右翼の側面を覆うように騎兵を展開し、歩兵を後ろに下げている。万が一の際には速やかに撤退できるようにするための布陣だ。

それに対し、ボウロロープ候の陣地では五千の精鋭兵団を含めた四万の軍勢が前進を開始した。こちらは積極的に打って出ること帝国軍の出鼻を挫こうとしている

これは王国軍が各々の貴族たちが自領の兵を連れてきている形であるために、部隊ごとにその貴族の考えや所属する派閥の意思を優先して動くことによる軍全体としてのまとまりのなさが露呈したものだ。

それでも中央が前線を押し上げる動きに合わせて両翼も追従して前進を開始しているのは、ボウロロープ候の総指揮官としての人望……ではなく陣形が大きく崩れるのを嫌って動きを合わせた結果である。

王国軍が攻めて帝国軍が迎え撃つという、例年とは逆の構図となつ

た

（よもや鮮血帝が再び本陣に出てこようとはな。よほど守りに自信があるようだが、この精銳兵団と四万の物量でもって討ち取ってくれる！ くくく……鮮血帝の首を討ち取ったとなれば、王国におけるわが派閥の地位は盤石のものとなる。そうなれば、バルブロ殿下も謹慎の必要はなくなり、国王の座に就くのも時間の問題だ！）

ボウロロープ候にとって、娘を嫁に出して義理の息子と父として仲良くやってきたバルブロ第一王子には利害関係を含めた上で王位に就いてほしいという思いがある。

そういう意味では、王国のために頑張ってきた行為を踏みにじられ否定され、失意の中で王城で自主的に謹慎を続けているここ最近のバルブロの様子をボウロロープ候は痛々しく感じていた。

かつての元気なバルブロに戻ってほしいという親心も、今回の戦争で武勲を上げようという行動に影響しているのだろう。

それ故に鮮血帝が戦場に出ているという事実が、ボウロロープ候に普段ならばとらない進軍という選択をさせた。それが誘導された結論であることに気が付かぬまま。

王国軍と帝国軍の距離が近づいていくにつれて、帝国軍の中央本陣の陣容が明らかになる。

前線の主な兵種は帝国軍の主力である重装甲騎馬兵ではなくて歩兵騎士。それも王国軍の歩兵が持つ物よりも洗練された長槍と、四つの角の意匠が施されたタワーシールドを装備した密集陣形だ。

その先頭には両手に二つの同様の盾を持つ騎士。帝国四騎士の一人、“不動”のナザミ・エミック。ここまでは鮮血帝がいつ中央本陣を死守するために守りを固めたと判断できる。

問題はその前衛の後ろに控えている者たちだ。その布陣はほとんどが弓兵や魔法詠唱者で構成されていた。

それも、針金で枠を作ってヘルムのように見せかけた帽子や全身鎧と似た色合いの服で揃えるなど、正規の騎士に紛れられたら遠目では判別しにくくなる様な偽装が施されている。

ここに来て、ボウロロープ候は己の失策と鮮血帝が本陣に出向いて

その存在をアピールした本当の理由を悟る。

それは自らを獲物をおびき寄せる餌に見立てて相手の行動を誘導し、有利な状況で戦端を開くため。

なだらかとはいえ丘から駆け降りる形で進軍していたため、最早止まることも難しい。ならば、鮮血帝の思惑に乗った上でそれを喰い破るしかない。

幸いなのは、それほど兵士の厚みがない事だ。王国軍の兵士であればこの程度で防げると高を括っているのだろうが、精鋭兵団の実力を思い知らせてやろう。

ボウロロープ候がそう決断し、両軍が接敵するまであとわずかに迫ったところで、ナザミが叫んだ。

「今こそ、咆哮せよ！」

「咆哮せよ！」

ナザミに追従するように前線の帝国軍騎士達も叫ぶ。すると、彼らが手に持つタワーシールドに変化が訪れた。それぞれのタワーシールドが叫びに応じるように咆哮し始めたのだ。

このタワーシールドの正体はオハン・レプリカ。“咆哮せよ”というキーワードに反応して低位の恐怖効果をもたらす金切声の咆哮を前方に向けて上げる魔法の盾。

本来は聴覚に優れた竜王国を襲撃するビーストマンに対抗する装備の一つとして研究・開発されていたものを転用したものだ。

思わず耳を塞ぎたくなる様な金切声が、ボウロロープ候が率いる軍勢に響き渡り、彼らの精神をかき乱す。

鍛え上げられた彼らでさえこうなのだ。徴兵された平民兵士には抵抗する術などない。

「ひ、ひいいいいいっ！ ぐぎやあ！」

「うわあああああ！ ぐぶおっ！」

「お、落ち着け！ や、やめろおお！ おぐおっ！」

最前線を走っていた一部の兵士の足が恐怖で纏れて倒れ、その体や長槍に足を盗られた後続の兵士たちが巻き込まれる。

恐怖で足が竦み、足を止めた兵士の後ろから、止まり切れなかった

兵士がぶつかって折り重なるように次々と倒れこむ。

一部の軍馬が運悪く抵抗に失敗したのか、恐慌状態に陥って兵士を振り落とし周囲の人を蹴り飛ばしながら暴走を開始する。

オハン・レプリカによる咆哮の範囲の外にいた者たちにも、前線の兵士達が絶叫を上げて続々と倒れていく様子に恐怖し、倒れた人や馬が障害となつてその進軍速度は明らかに鈍くなつていった。

王国軍の足並みが崩れたこの好機を見逃すほど帝国軍は甘くない。後ろに控えていた弓兵や魔法詠唱者たちによって放たれた矢や魔法が王国軍に降り注ぐ。

出鼻を挫かれたでは済まない甚大な被害を前に、ボウロロップ候の頭の中では、どこか冷静な部分が何故ここまで正確な攻撃が行えたのか？ という疑問がよぎる。

弓矢や魔法による攻撃は、目前の兵だけでなくその後方にいる現場の指揮官を務める貴族に対しても正確に行われているからだ。騎兵に乗る指揮官は目立つとはいえ、軍馬を用意できずに歩兵と同様に走っていた指揮官もそれなりにはいたはずだ。

「二体、なぜ……ぬおっ!」

ボウロロップ候の少し前で炸裂した魔法の熱気と衝撃に思わず後退った事で、飛来する矢を運よくギリギリで躲す。考えている場合ではないことを思い出したボウロロップ候は、ザナック第二王子がいる後衛の陣地まで撤退するために残っている精鋭兵团とともに踵を返そうとした。

すると、振り返ったボウロロップ候の視界に幾つかの点滅する光が映った。

それは上空を飛び交う鷲馬ヒボグリップに騎乗した帝国騎士達が手に握る道具や、ザナック第二王子のいる陣地の上空で滞空している船から放たれる光であった。

空を飛ぶ船という不条理に思考停止するよりも先に、ボウロロップ候は理解した。

帝国軍は鷲馬ヒボグリップに騎乗した帝国騎士を観測役スポッターにすることで、弓兵や魔法詠唱者の視界の外にいる相手の位置を正確に把握しているのだ

と。

そしてそれは遅きに逸した理解であった。

ボウロロープ候の頭上を光が照らす。先ほどの魔法を遥かに超える灼ける様な熱量を持った強い光だ。

ボウロロープ候が頭上を見上げると、まるで太陽のような灼熱の劫火がボウロロープ候めがけて落ちてきていた。

その数瞬後、ボウロロープ候の周辺を巻き込みながら火柱が天空めがけて吹きあがる。

数秒後に火柱が消えた後には、幾つかの人型の炭屑が纏う半端に熔け落ちた鎧と焼け焦げた大地が遺されているだけであった。

時はボウロロープ候の軍勢が進軍を開始し始めた所まで遡る。

ザナツクはボウロロープ候の陣営が進軍し始めていることに対してぼやいていた。

「ボウロロープ候のやつ、あの鮮血帝の首を取ろうと先走っているのではないのか？」

「かもしれません、殿下。実際、鮮血帝の首を取ることに成功すれば状況を逆転できる一手ではあります。しかし……」

「言わなくてもわかるぞ、戦士長。あの鮮血帝がそんな甘い結果を許すはずがない、だろう？」

「はい。最悪の場合に備えて、いつでも私一人で一騎掛けする準備をしておくべきでしょう」

「ああ、いざとなったら頼むぞ」

ザナツクの視線がガゼフの上から下まで動く。

今のガゼフが身に着けているのは、いずれも王国に伝わる四つの秘宝だ。

疲労しなくなる活ガントレット・オブ・ヴァイタリティ力の小手。

常時、癒しを得る不滅アミュレット・オブ・イモータルの護符。

最高位硬度の金属アダマントで出来た、致命的な一撃を避ける魔化が施された

と言われる守護の鎧。ガーディアン

そしてただ鋭利さのみを追求し、魔化された鎧さえもバターのように切り裂く魔法の剣、レイザー・エッジ 剃刀の刃。

全ての秘宝を身に着けたその力はまさに一騎当千。帝国騎士団の中にガゼフを凌駕する騎士はおらず、帝国最強の四騎士がまとめて相手になっても勝利するだろう。

帝国最強の魔法詠唱者である“逸脱者”フルーダ・パラダインを相手にしても、接近戦に持ち込むことができればガゼフならば勝てるのでは？ という思いがザナックにはあった。

一方のガゼフはこの戦場に立ってから言いようのない不安を感じていた。

何か重要な事を見落としていないか、忘れていないか、思いつけぬことはないか……。しかし不鮮明でバラバラなピースは一向に噛み合わず、不安の根源を見つけ出せないままだ。

「戦士長、どうかしたか？」

「い、いえ……大丈夫で——」

ザナックの心配を払拭するようにガゼフが返事をしようとしたその時、ガゼフは上空から自分に向けられた殺意を僅かに感じ取った。

この殺気には覚えがあった。それはかつて王国の御前試合の決勝で感じた接戦を演じたあの男の気配。

声を出してザナックに呼びかけていたら間に合わない。ガゼフは咄嗟にザナックに背を向けるようにしながらレイザー・エッジ 剃刀の刃を抜剣。

その瞬間、激しい金属音が響く。

「なっ！ 戦士長!？」

「ますます腕を磨いたようだな、ガゼフ・ストロノーフ！」

「アングラウス！ ブレイン・アングラウスか！」

激しい鏖迫り合いを演じながら、ガゼフは眼前の男が自分にとって戦士として最強の敵対者であり、一方的かもしれないがライバルだと思っている人物であることを確信する。

己が剣に対する自信に満ち満ちており、燃え上がるような激しい戦意に包まれていた剣の才人。真の天才とは、彼のような人物の事を言

うのだろう。

今の一撃は限りなく完璧な奇襲だった。カルネ村での六色聖典との戦いで限界の殻を破っていなければ、ガゼフであっても対応できずに首を落とされていたと確信できるほどの。

「ひゆう、お互いに凄いもんだ。アングラウスの旦那がいなかったらと思うとぞつとするぜ」

「戦士長は昨年よりも明らかに腕に磨きがかかっています。以前が英雄の領域に片足だけ踏み込んでいたとするならば、今は完全に英雄の領域に至っているでしょう」

ザナツク第二王子を守るためにブレインを押し退けようとするガゼフに対して、押し込まれる前にバックステップで距離を取って手に持つ刀を構えるブレイン。その背後につくように、バジウッドと鷲馬ヒボクリフに騎乗したニンブルが大地に降り立つ。

一体どこから現れたのかとザナツクが見上げると、上空には先ほどまでいなかったはずの鷲馬ヒボクリフに騎乗した帝国騎士たちと、存在するはずがない白い双胴船カタマランが浮かんでいた。

「まさか不可視化してここまで……それに、ブレイン・アングラウス!?

あの竜王国を守る最強の傭兵、“爪斬り”か!」

ザナツクの言葉に、ガゼフはようやく無関係に思えた記憶のピースが噛み合った事に気が付いた。

それは一か月前の宮廷会議において、帝国が竜王国救援のために軍を派遣するという情報を掴んだという内容が出た事。

そして、それ以前から近隣諸国最強の戦士は誰かという話題で、自分とともに必ず挙げられる竜王国の英雄剣士の事。

そう……あの鮮血帝がブレインのような強者を見逃すはずがないのだ。一度は戦場で自分を勧誘しようとしたほどの豪胆さを持つあの男ならば、ブレインのスカウトを試みるのは明らかだ。

「アングラウス。まさか、お前が帝国軍に所属したとはな」

「勘違いするな、ストロノーフ。帝国との契約はこの戦争に限ったものだ。俺はお前との決着をつけるために、そして胸を張って前に進むためにここに来た」

「なに？」

「ガゼフ・ストロノーフ！ 俺はお前に、一騎打ちを申し込む！」

ブレインは刀をガゼフに突きつけながら、高らかにそう宣言した。

第二十二話 「王国と帝国の戦争 後編」

ザナツク第二王子がいる王国軍中央後方では、表舞台最高峰の決闘が繰り広げられていた。

二人の一騎打ちを邪魔するものはいない。なぜならばどちらかが一騎打ちを邪魔した時点で戦いは乱戦となり、そうなれば王国軍は戦う力を持たないザナツクを高い確率で喪う。一方の帝国軍もガゼフによつて帝国四騎士を二人喪う事となるだろう。

それは両軍にとつてあまりにも手痛い喪失だ。だからこそ、お互いに警戒は解かないままガゼフとブレインの一騎打ちを観戦していた。

四年前の王国の御膳試合決勝を観戦した者、そして武器を手に戦う者たちならば必ずと言っていいほど話題にしたことがあるであろう、人間で最強の戦士は誰か？ という問答。

王国の国宝を身にまとった近隣諸国最強の戦士と名高い王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。

そのライバルにして竜王国を守る最強の傭兵ブレイン・アングラス。

他にも様々な条件で挙げられる強者はいるが、この二人は知っている者ならば最有力候補から決して外さない。

ガゼフの斬撃の軌道を、ブレインは《領域》で正確に読み取り、紙一重で躲して反撃する。

そのブレインの斬撃を、ガゼフは《即応反射》で無理やり体勢を戻して守護の鎧ガーディアンの表面を滑らせるようにしながら、《流水加速》で加速した斬撃を放つことでブレインの追撃を妨げる。

「《四光連斬》――」

ガゼフとブレインが同時に同じ武技を放つ。四光連斬は元々はガゼフが生み出したオリジナルの武技だ。そして四年前に開催された王国の御膳試合決勝でも、ブレインから勝利をもぎ取った武技でもある。

ブレインはその武技を修練と実戦の果てに自らの物としたが、一度経験したことを参考にしてそのような芸当ができるのは彼が天武の

才を持っているからに他ならない。

二つの同時四連撃がぶつかり合う。ガゼフが放った四光連斬の方がパワーは上だったようで、ブレインの四光連斬では相殺しきれない。しかしガゼフの四光連斬による四つの斬撃は本来の軌道から外れ、どれ一つとしてブレインを捉えずに空振りで終わる。

ブレインはこれまでの戦いから膂力ではガゼフに分があることは分かり切っていた。まともにぶつけ合えば押し切られるのは明らかだからこそ、ガゼフの四光連斬をいなすようにブレインは四光連斬を当ててその軌道をずらしたのだ。

そのまま僅かにできたガゼフの隙を逃さないとばかりにブレインは肉薄して刀を斬り上げようとするが、ガゼフがブレインの軸足を鎧で覆われた足で蹴り碎きに來たため、跳びのいて躲す。

ガゼフは蹴りの勢いを殺さずにそのまま武技《回転斬》に繋げる事で、ブレインに攻撃させる間を潰しながら距離を取った。

帝国四騎士であつても十手と保たずに敗れる様な、互いに武技を駆使した剣劇が、二人の間で数十手を超えて繰り返される。それでもなお、決着が付く様子はまだ見られない。

ブレインは僅かに汗をかいているのに対してガゼフが汗一つかいていないのは、王国の至宝の一つ活ガントレット・オブ・ヴァイタリテイ力の小手による疲労無効化の影響が大きい。

今はまだ影響しなくても、このまま戦いが長引けばいつかはブレインは疲労が溜まってその能力を十全には発揮できなくなるだろう。

ならばこの一騎打ちはガゼフが有利なのかと言われたら、それは否だ。むしろ総合的にはガゼフの方が不利だと言える。

実際、ガゼフには精神的な余裕はなかった。ほんの僅かな読み違いでそのまま死につながる極限状況は、いくら肉体的な疲労がないとはいえ武技の乱用も相まって集中力を大きく擦り減らしている。

ブレインもガゼフと同様に武技を繰り返し使用しているのだが、彼には生まれながらの異能トによって集中力のキャパシティが同格の戦士よりも増えているために精神的な余裕という点ではガゼフよりもあつた。

ガゼフがブレインに圧されている要素はそれだけではない。

それは装備差からくるガゼフ本人も無自覚なほんの僅かな驕り。最高峰の攻撃力と防御力に加えて疲労無効化・自動治癒・致死ダメージ回避を備えた防具に身を包んだ状態なのだから、どれほど警戒しても無意識の領域に緩みが出来てしまう。普段ならばそれは戦いを俯瞰する心の余裕となって有利に働くが、ガゼフの目の前にいるブレイン相手では不利に働いていた。

それは二人の戦闘スタイルの違い。ガゼフの戦い方や武技は軍勢相手に無双するために多対一を中心としている。それに対してブレインは一对一の戦いに秀でた戦い方や武技を中心としている。

それはブレインとの戦いの後も帝国軍相手に戦わなくてはならないガゼフと、ガゼフとの一騎打ちにすべてを費やせるブレインの、この一騎打ちに注ぐことができる集中力などのリソース配分の差。

そして最も大きいのは、この四年間の実戦経験の差。ガゼフは王国戦士長となつてからも研鑽は磨き続けてきた。カルネ村での陽光聖典との戦いでは限界の殻を破る快拳も成し遂げた。しかし四年間の殆どを竜王国で過ごし、人間よりも強靱なビーストマンとの戦いに明け暮れていたブレインの戦闘密度は、この世界の人間としては異常と言つてもいい領域に達している。

これらの幾つもの要素が複雑に絡み合った結果、身体能力と装備で勝るガゼフに対し、剣士としての才能と戦闘経験で勝るブレインの戦いは、ブレインが僅かながら有利な状態で拮抗していた。

そんな精神的な余裕がないはず状況でガゼフは……笑っていた。

「どうした、ガゼフ？」

「ブレイン……俺にとつて最強のライバルであるお前が、ここまで強くなつている事が嬉しくてな。王国戦士長としては不謹慎甚だしいのだが……この一騎打ち、楽しくて仕方ないのだ」

「そりゃ良かったぜ。俺もここまで強くなつたお前に勝てると思うと、気分が高揚しちまつているさ」

「奇遇だな。俺もお前に勝つことを考えていた」

この一騎打ちの中で、二人はいつの間にか自然に姓ではなくて名で

呼び合っていた。互いにとって超えるべき最強のライバルであり親友。そう表現するのが最もふさわしいだろう。

「ブレイン！——」

「ガゼフ！——」

「——勝つのは……俺だ！」

まるで示し合わせたかのように互いに距離を取っている状況。二人の間の距離はおおよそ六m、次の一撃で互いに決着をつけるつもりのようなのだ。

「俺の全てを……絞りつくそう」

ここに来て集中力の出し渋りなどは考えない。

ガゼフが正眼の構えを取る。これより放つのは今の己が使える最強の武技《閃光烈斬》。

かつて王国のアダマント級冒険者であった老剣士ヴェスチャー・クロフ・デイ・ローファンによって無理やり弟子入りさせられ、伝授された個にして究極の武技。

「望むところだ。お前の首を……貰い受ける」

それに対してブレインは刀を納刀し、居合の構えを取った。迎え撃つブレインが選んだ武技は自らの二つ名にもなっている複合武技《爪斬り》……ではなく、その上を行く《真・爪斬り》

絶対必中の《領域》と神速の一刀《神閃》を併用し、さらに《六光連斬》を放つ、絶対命中にして超高速の同時六斬撃。

「ガゼフ……どうか勝ってくれ」

「アングラウスの旦那……負けるんじゃないぞ」

一騎打ちを観戦していたザナック第二王子やバジウツド、戦士団の者たちやニンブルも固唾を飲んでその結末を見守っていた。

「王国軍総指揮官ボウロロープ侯の死亡及びその軍勢の敗走を確認！
突出した中央布陣の分断・無力化も完了しました！」

「王国軍左翼の分断も恙無く進んでおります！ブルムラシユー侯の

陣営が後方で孤立状態にあることも確認！」

「王国軍右翼は分断前に軍勢を維持したまま後退を開始！」

上がってくる戦況の報告に、帝国軍第二軍指揮官ナテル・イニエム・デイル・カーベインはつい数日前の胃痛——駐屯地への突然のジルクニフ皇帝の来訪が原因のストレス——などどこかに消え去ったかのように笑みを浮かべていた。

あの時は方が一、いや億が一にも陛下の身に危険が及ぶような事が起きたらという不安があったが、結果は皇帝陛下の存在そのものを生餌とした策が見事に嵌り帝国軍の圧倒的優勢だ。

懸案であった王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの一騎掛けによる中央本陣の突破も、英雄級の傭兵と評される剣士ブレイン・アングラウスによって抑え込まれている。

当初の予定では弓兵と魔法詠唱者による攻撃の後は重装甲騎馬兵による突撃を行うはずだった。しかし、その前に王国軍の前線が崩壊したために温存され、「俺たちの出番、無くなりましたね……」というぼやきが聞こえてきて警戒を怠らないように注意する場面があった位に余裕がある。

気になるのは、王国軍右翼が大きな消耗のない状態で後退を開始している事だ。事前に入手していた王国軍の配置では、王国軍右翼の指揮官は後方がレエブン候だったはず。レエブン候本人の才覚か、はたまた彼の部下に優秀な指揮官がいるのだろうか。

本陣に配置した簡易玉座に腰かけている陛下も同じようなことを考えていたのか、余裕を含んだ笑みで呟いていた。

「王国軍の右翼を担っている指揮官は油断できないな。確かレエブン候だったか。王国の無能な貴族どもの大半はいらぬが、できるならばあの男はこちら側に引き込みたいものだ」

陛下は王国戦士長に就任したばかりながら当時の帝国四騎士のうち二人、“烈火”と“疾駆”を討ち取ったガゼフ・ストロノーフを相手に、戦場で勧誘しようとした人物だ。

これは陛下が優秀な人材であれば産まれや育ちの貴賤そして忠誠心の有無を問わずに重用する能力主義である事もそうだが、そもそも

それまで政を仕切っていた無能な貴族たちを肅清・処分した事で人材が慢性的に不足しているという問題も理由にある。

「だがその前に……ブルムラシュー候がいる王国軍後方左翼への攻撃を準備しろ」

ブルムラシュー候は、王国で最も裕福な六大貴族でありながら金目当てに帝国に情報を買っていた売国奴だ。これまでは有意義に活用していたが、薄っぺらな私利私欲で祖国を裏切るような人物は帝国にはいない。

そしてブルムラシュー候が今回指揮する軍勢はおよそ一万。四万を指揮していたボウロロープ候を筆頭とした他の六大貴族と比べてその数は遥かに少ない。

此処が切り捨て時と判断した陛下の指示で、騎士たちはマジックアイテムを用いて戦場を飛び交う皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードに速やかな情報伝達を行う。

ほどなくして皇室空護兵団から王国軍後方左翼の座標な配置などの情報が返ってきた。それらの情報を基に攻撃準備を進めていく中、ブルムラシュー候について気になる動きがあった。

——ブルムラシュー候が率いていた一万の軍勢が王国軍後方中央方面へ進軍を開始。

王国軍の現状はまだ左翼を見捨ててまで中央本陣の救援に向かう程末期ではない。なによりあのブルムラシュー候がこの状況で動くとなれば……、

「王族を確保するつもりか。ブルムラシュー候が中央本陣に到着する前に殲滅するぞ」

「はっ！」

帝国軍の中央本陣によって守られている後方では、軍馬によって引かれた車体に据え付けられた大型の牽引式バリスタが並んでいた。バリスタには投擲能力を強化する魔化などの強化が施されており、射程距離に不足はない。

「鍊金瓶の装填完了！ 照準補正完了！ 投擲開始！」

中身に液体の詰まった瓶がバリスタから次々と放たれる。投射さ

れた瓶は正確にブルムラシュー候が率いる軍勢に降り注ぎ、着弾と同時に燃え広がる。

瓶に満たされていた液体は錬金油で、所謂火炎瓶だ。瓶の外側には錬金油と反応して発火する性質の物質が塗布されていて、火のついた布で栓をしている物と比べて安全性が高いのが特徴だ。

「目標に着弾を確認！ 進軍は……止まりません！」

「なに？ 直撃していなかったのか？」

「それが……中には全身が燃えたまま進軍を継続している兵士もいる模様です！」

「なんだと!？」

燃え盛る炎は生き物の原初の恐怖心を刺激する。仲間が火達磨になっっている状態ならばその恐怖心はなおさら増幅されるはずで、徴兵されてきた只の農民だった兵士が容易く耐えられるようなものではない。

それに、火だるまになっている状態にもかかわらず進軍し続けているのも異常だ。炎に対する耐性を持たせる装備など貴族にすら持たせていない王国軍が兵士に用意するはずもないし、生まれながらの異能^トか何かで炎への耐性を持っていても、本能的な恐怖とは別問題のはず。

カーベインがブルムラシュー候が率いる軍勢の異常性に驚いている中、ジルクニフはふとこの数か月の間に王国に起きた状況を振り返っていた。

八本指の一斉摘発からほどなくして起きた新型の麻薬によって人間が怪物に変ずる騒動。その怪物の戦闘能力は金級冒険者でやつと倒せるほどだったという。

ランポツサ三世は体調不良が改善せず、バルブロ第一王子も自主的な王城での謹慎の結果、王族として戦場に出ることとなったザナツク第二位王子。

王位継承権の有力候補はバルブロ第一王子、ザナツク第二王子、そして国王の娘を娶った六大貴族の一角であるペスペア候の三人。

ペスペア候は前方左翼を指揮していて帝国軍に圧されている状況

で、ザナツク第二王子はプロト・ヴィマーナで送り出したバジウツドとニンブル、そしてブレイン・アングラウスによって動くことができない状況だ。

仮にこの戦場でザナツク第二王子とペスピア候が戦死すれば、古い先短いランポツサ三世の後継は、王城で謹慎していたバルブロ第一王子の元に転がり込むこととなる。

自分はこの合戦で王国に引導を渡すために準備を進めてきた。しかし、もしもこの状況を利用しようとしている者がいたとしたら？

これは仮定に仮定を重ねた推論でしかない。しかし理屈ではない直感が警笛を上げている。

——もしも、人間を怪物に変貌させる新型の麻薬がまだ大量に残っているとしたら？

——もしも、バルブロ第一王子の自主的な謹慎が、王城に残るための方便だったとしたら？

——もしも、ブルムラシユ候の今回の行動が、ザナツク第二王子を助けるためではないとしたら？

——もしも、ブルムラシユ候が王国を売っている相手が帝国以外にもいるとしたら？ 帝国はそれを隠すためのカモフラージュだったとしたら？

それらの可能性が重なり合い、一つの道筋をジルクニフは導き出した。

ガゼフとブレインの一騎打ちは、両軍が予想していなかった形で終わりを迎えた。

王国軍の後方左翼を任されていたブルムラシユ候の率いる一万の軍勢が、ザナツク第二王子がいる後方中央の陣地に進軍し、王国軍に攻撃を開始したのだ。

友軍それも六大貴族の一つの突然の裏切りに、中央に布陣していた貴族や兵士たちは混乱し瞬く間に押し込まれていく。

ザナツクは当初、帝国軍と内通していたブルムラシュー候がこの場で反旗を翻したのかと考えた。一騎打ちもそのための囮だと思っ

た。
ブルムラシュー候の軍勢から途中で折られて短くなった燃え盛る槍が次々と投擲され、戦士団の戦士たちがザナツクを庇う。

徴兵された兵士では出ることが不可能な勢いの投げ槍は、戦士たちが構えた盾だけでなく身体にも突き刺さっていく。戦士団はその痛みに呻きながらも、ザナツクを逃がすためにその身を盾とし続けた。

「ザナツク殿下！ 早くエ・ランテルまで撤退を！ ここは我々が抑え込んで見せます！」

「わ……分かった！」

戦士団の献身を無駄にしないためにも、ザナツクは鍛えておらずやや肥満体の体に鞭打って軍馬にのってエ・ランテルへの撤退を始める。しかし、彼の視界に移った光景にその表情が凍り付いた。

それはブルムラシュー候の軍勢が、武器を使わず腕一本で王国軍の兵士の胴体を鎧ごと貫いている様子。そして全身が燃えたまま叫び声一つあげることなく全力疾走で追いかけてくる兵士達の姿だ。

王族としての矜持から叫びはしなかったが、ザナツクは恐怖で表情を歪ませていた。

「殿下！ すまん、ブレイン！」

ガゼフは《閃光烈斬》を放つ態勢を解除すると、ブレインに詫びを入れながら背を向けてザナツクの救援に向かう。

ガゼフの背後はから空きで隙だらけの状態だが、ブレインはガゼフを後ろから攻撃しないで見送った。

ガゼフを遮るようにブルムラシュー候の兵士たちが立ちはだかった。徴兵された兵士たちが瞳に宿すはずの怯えは含まれておらず、感情のない無機質な瞳は怖気を感じさせる。

「邪魔だあ！！」

レイザー・エツジ

ガゼフは剃刀の刃を振るい、兵士たちを切り伏せる。この時、ガゼフはいくつもの異常に気が付いた。

まず切り伏せられた兵士から吹き出たのは鮮血ではなく、透明な液

体であった事。そして両断した時の感覚が肉を切るものではなくむしろ植物を断つときの様な抵抗だった事。そして――

「なに!?!」

――切り伏せられた兵士たちはまだ動いていて、上半身だけが這つてガゼフの足を掴んでいた事だ

足を掴む兵士の姿をしたナニカを蹴り払うが、その間に同じようなナニカがガゼフに集まってくる。まるでアンデッドが生者を求めて集まってくるかのようだ。

《六光連斬》で周囲のナニカたちを薙ぎ払った事で、拘束されたのは精々が合計数秒だ。しかし今はその数秒がガゼフにとってはあまりにも長く感じる。

「うわあああ!」

苦痛を伴った軍馬の嘶きが響き、それに遅れてザナツクが悲鳴を上げる。

ザナツクが乗る軍馬の横腹にブルムラシュー候の兵士の腕が深々と突き刺さっていて、ザナツクは馬上から放り出されていた。

身体を大地に打ち付けて蹲るザナツクに、燃え盛るナニカ達が襲いかかろうとしていた。この距離ではガゼフでは間に合わない。他の負傷した戦士団もナニカ達に取り囲まれ、ザナツクの救援に向かえない。

「やめろおおお!!」

最悪の未来を予見し、ガゼフの絶叫が戦場に木霊する。

その時、雷鳴が鳴り響いて燃え盛るナニカが爆散した。

「つつう……。な、何が?」

「大丈夫ですかい、ザナツク第二王子殿」

散らばったナニカの破片を呆然と見ているザナツクに、ブルムラシュー候の兵士を切り捨てたバジウツドが声をかける。その手に持つグレートソードはバチバチと音を立てて帯電していた。

「な……。なぜ? 敵国のお前たちが、私の事を……?」

「俺たちはついさつき陛下から『ザナツク第二王子を守れ』って命令が

来たんで守っただけですよ」

「ザナツク第二王子殿、最早大勢は決しました。御決断を」

ニンブルが指さした方を見ると、帝国軍の重装甲騎馬兵がブルムラシュー候の軍勢に向かって突撃していた。他の王国軍兵士を守りながら戦う様子は、王国の寄せ集めの兵士とは装備だけでなく練度も比べ物にならない。

ニンブルが促しているのは、降伏宣言だろう。この様子では総指揮官であるボウロロップ候はきつと既に死んでいる。ボウロロップ候や兄上だったら自分の面子を優先して拒絶しただろうが、この状態に至ってはそれが正しいとは思えない。

「……分かった、降伏しよう。その代わり、ブルムラシュー候の軍勢以外の者たちを守ってほしい」

一国の王子には相応しくない判断だろうから、やはり自分には上に立つ才能はなかったという事だ。

カツツエ平野の合戦が終わり、翌朝には再び薄霧で覆われるであろう鮮血を吸った赤茶けた大地を夕日が照らす。

王国軍はブルムラシュー候の裏切りもあつて歴史的な大敗を喫した。途中で王国軍を裏切ったブルムラシュー候の軍勢一万を省略した十九万の内、四分の一を超える五万近い死者は、中央に布陣していた兵士と貴族に集中している。

ボウロロップ候が指揮していた前方では貴族や指揮官を中心に壊滅的な打撃を受けたのに対して、後方ではブルムラシュー候の軍勢によつて徴兵された兵士に相応の死傷者が出た事に起因している。

一方のブルムラシュー候の軍勢はというと……全滅。それも軍の定義としての全滅ではなく、誰一人として生き残るものがない文字通りの全滅だ。

帝国軍の被害は王国軍による死者は皆無だったものの、ブルムラシュー候の軍勢を殲滅する過程で二百三十一名の死者、三千五百四十

九名の負傷者を出す事となった。

王国軍の残された前方左翼を指揮していたペスペア候、そして被害が軽微だったレエブン候は残存兵力をまとめてエ・ランテルへ撤退。その一団の中に、ザナツク第二王子とガゼフ戦士長及び戦士団の姿はなかった。

彼らは帝国の対カツツエ平野駐屯基地にある天幕の一つの中にいた。

「殿下、よくぞご無事で！」

「戦士長！ お前こそ大丈夫なのか？」

「はい。幸い、奴らの体液には毒性はなかったようです。ですが、申し訳ございません。国王陛下より託されていた王国の至宝は取り上げられてしまいました……」

人間に擬態した未知の怪物であったブルムラシュー候の軍勢を数多く切り伏せその返り血ならぬ返り水を大量に浴びていたガゼフは、この駐屯基地で武装解除させられた後に全身に異常が出ていないかをデータ取りを兼ねてくまなく調べられていた。

その過程で普段から身に着けている切り札の指輪を魔法で調べたフルーダ・パラダインの態度が豹変し、その指輪の出所を問いただされたが、リグリット・ベルスー・カウラウから送られた物である事以外はその出自は分からない事を告げると、何やらぶつぶつと思考に耽っていた様子は、賢者のような印象を持っていた彼のイメージを大きく変えるほどガゼフにとっては衝撃だった。

戦士団の者たちや共に投降した一部の王国貴族も、帝国軍に所属する信仰系魔法を習得した騎士たちや魔法詠唱者の治療を受けている。彼らが別々の天幕に所属も分けてバラバラに隔離されている中、第二王子と同じ天幕に置かれたのは、帝国の配慮か余裕か。

「それについては良い。いや、本来は良くないのだが責めるつもりはない。責められるべきは降伏した俺なのだから」

「心遣い、感謝します」

「……」

この事で会話を重ねても不毛な謝罪合戦になりかねないと判断し

た二人は、新たな話題を探そうとする。しかし、つい最近まで接点の多くなかった二人では、互いに理解できる話題というのが咄嗟に思い浮かばないのか、しばしの間、緊張した空気が続く。

この沈黙を破ったのは天幕に入ってきたブレインとニンブルだ。ザナツクは驚いているが、ガゼフは殺気を感じさせずに気配は出していたブレインに既に気が付いていた。ブレインの性格的にこの段階で襲うなどという事はしないという確信もある。

「歓談中にお邪魔します、ザナツク殿下、ストロノーフ戦士長」

「邪魔するぞ、ガゼフ。それとザナツク第二王子……殿下」

「ああ、大丈夫だ。丁度、何を話せばいいか困っていたところだ」

「ガゼフ……仮にも宮仕えの立場なんだから、貴族連中ほどじゃなくても口は動くようにしておけよ」

「うぐつ……、そういうお前はどうかのだ、ブレイン？ 竜王国では救国の英雄と言われているそうではないか。あちらの国でも貴族と会う機会は多いのだろうか？」

「俺は雇われの傭兵だから、最低限のマナーさえできてれば良いんだよ」

「ふふ、仲がよろしいですね」

「まあ、こういう実直な男だから父上も信頼しているだ。あまり苛めないでやってくれ。……そういうえば、お前たちに聞きたいことがあるんだが——」

幾分か緊張した空気が和らいだのを確認したザナツクは、一呼吸間をおいてから問いかける。

「——ブルムラシュー候が指揮していた化け物共の正体は、一体何だったんだ？」

「殿下、戦ってみての感想ですが、奴らは人間どころか動物系のモンスターですらない。アンデッドかあるいは——」

「——あれは樹人の派生種だ」

「——知っているのか、ブレイン」

「ぶった切った連中の断面を確認したが、中身は部位ごとに空洞で外側は頑丈かつしなやかな管状の物体が密集してできていた。そんで

ふと思い出したんだよ。昔、刀を取り扱う南方の商人から聞いた話だが、砂漠を超えた先にある一部の地域では、麦のように分蘖ぶんげつして繁殖するにもかかわらず樹木のように固くなり、最盛期には一日に1m以上成長する植物があるそう。恐らく、あいつらはそういう類の植物の性質を持った樹人トレントだ」

「魔法省の職員による調査でも、あれらの亡骸を腑分けして確認した結果、似た様な見解を示しています」

「まさかブルムラシユー候が人間ではなくて樹人トレントだったとは……今まで気が付くことができなかった。しかも株分けで増えるとなると、カツツエ平野にいた個体が本物のブルムラシユー候とは限らなくなる」

「ええ。その事も含めて、伝えなくてはならないことがいくつあります」

「まだあるのかと、ザナツクはげんりしながらニンブルの話に耳を傾ける。

「良い方の話と、最悪な話。どちらからお話ししましょうか？」

「それならば先に良いほうの話からにしてくれ。続けて悪い話を聞いたら気が滅入ってしまう」

「畏まりました。今回の一件で、帝国は王国と共同で対応する方向で話を進める事が決まりました。明日にもエ・ランテルに使者を送り、王国側にアプローチするとの事です」

「ほう、それは確かに帝国にとって良い話だ。それで、最悪な話というのは？」

「はい、王国に潜入している複数の諜報員からの情報で明らかになったことですが、気を強く持つてください。本日正午ごろ、リ・エステーゼ王国王都リ・エステーゼで、貧民街より多数の魔獣及び亜人が出現し、王都内を無差別に襲撃。それに乗じてバルブロ第一王子がブルムラシユー候とともにクーデターを起こしました」

「……っは？」

「そして三つの顔と三対の腕を持つ巨人によって王城は破壊されて崩落。その後、その巨人が王都内を破壊して回っているという報告を最

後に、王都内の諜報員からの報告は途絶えました」

王国に諜報員が複数個所にいるという話をされて既に気落ちしていたザナツクだったが、そこから続いた予想外の話の連続に、思考が止まる。

「バルブロ殿下がクーデターだと!? それにその巨人、モモンガ殿たちが話していた巨人と特徴が一致する! だが、それよりも——」

「——そ、そうだ! 陛下とラナーの安否はどうなっている!? ……まさか、二人共!!?」

ガゼフの焦燥感に駆られた言葉で止まっていた思考が戻ってきたザナツクは、家族の身を案じた。しかし、王城を破壊するような無法を行ったバルブロが二人をそのまま生かしておくとは到底思えない。

ランポツサ三世はまず間違いなく殺害されているだろう。ラナーの方はひよつとしたら生かされているかもしれないが、その場合、配下の者たちから凄惨な凌辱を受けていてもおかしくない。いくらクライムは王国の騎士の中では腕が立つ方とはいえ、多勢に無勢名のは目に見えている。

「ラナー第三王女については、意識は目覚めていないようですが生存は確認できました。クライムという騎士とともに、蒼の薔薇に連れられてエ・ランテルまで転移で逃げ込んできたことが、エ・ランテルの諜報員からの報告で明らかになっています。ランポツサ三世については……生死不明です」

モモンガとペロロンチーノのこれまでの旅路編 第一話「終わりと始まり」

ユグドラシル。それは、西暦2126年にサービスを開始したDMO—RPGだ。

その最大の特徴は当時の他のDMMO—RPGと比較して圧倒的なまでにプレイヤーの自由度が高いことにある。

九つから成る広大な世界に2000を超える膨大な職業、別売りのクリエイトツールを使うことで様々に弄ることができ^{ビジュアル}る外装。

これらの要素が日本人に大きくウケて、爆発的な人気を生み出した。

しかし、どのようなものにも終わりは見えてくる。長い歳月の中で当時は斬新だった要素も技術発展に伴って陳腐化し、後続のより洗練されたDMMO—RPGの登場などもあってアクティブユーザーは次第に減少し、2138年にサービスを終了することとなった。

「ペロロンチーノさん、急いでください！ もう時間がありませんよ！」

「分かっていますよ、モモンガさん！ これで間に合わなかったら、初回限定版の付属品が付いてくるエロゲを目の前でギリ買い逃すくらい悔いが残る！」

「妙に現実味のある表現止めてくれませんか!? 予約しておきましょうよ！」

「エロゲの購入はできる限り直接買うのが俺のジャスティス！」

霧が立ち込める沼地を二つの異形が低空で飛ぶ。ユグドラシルに実装されている技術レベルの都合で表情は動かないが、二人とも焦りを含んだ声を出していた。

一つは金と紫で縁取られた、豪華な漆黒のアカデミックガウンを羽

織り、ヘルメス神の杖をモチーフにしてそれぞれ異なる色の宝石を啜えた七匹の蛇が絡み合ったスタツフを握る骸骨——死者の大魔法使いの最上位種族である死の支配者のモモンガ。

もう一つは猛禽類の頭に翼を持ち、そして肘から先と膝から先を鳥の爪へ変えたバードマンのペロロンチーノ。手に蛇の巻き付いた黄金色の杯を大切そうに抱え、キラキラ輝く金色の派手な鎧を着用し、鎧から金色の粉のような粒子が散っては消えていく様子は他に見るものがいればある種幻想的とも神々しいとも言えただろう。

異形種かつ社会人のみで構成されたギルド「アインズ・ウール・ゴウン」のギルドマスターとメンバーである二人は、ユグドラシルのサービス終了間際にある場所に向かっていた。

霧の中には影のようにモンスターが存在するが、ユグドラシル最終日である今日は、全てのワールドでアクティブモンスターもノンアクティブ化されており、こちらから攻撃しない限りは襲われることはない。

やがて目的地となる沼地に浮かぶ、円筒形の筒のような物が隙間なく並べられている島に到着する。

モモンガが左腕に嵌めた時計を見れば——

23:57:19

——どうやら急いでおかげで、少しだけ余裕をもって間に合ったようだ。

「ふう、間に合った……。すみません、モモンガさん。直前になってヒュギエイアの杯を持っていきたくないなんて我儘を言ってしまった」

「いえ……こうして間に合ったわけですし、最後ですから構いませんよ。それに、理由も理由ですからね」

謝罪するペロロンチーノに対し、モモンガは空間から一つだけボタンのついた棒のようなものを取り出しながら答える。

この数年ずっと一人でギルドを維持し続けていたモモンガにとつては、親しいギルドメンバーが最終日の少し前からログインしてくれただけでなく、こうして最後までいてくれるのが嬉しかった。

そう考えると、こうしてドタバタするのも楽しい思い出になる。

「ありがとうございます。もういないあいつと一緒に入手したこのワールドアイテムに、ユグドラシルの最期を見せてあげたかったんです」

ペロロンチーノの言葉は、引退したメンバーに向けてのものではない。

ペロロンチーノにはモモンガと同様に親しく、偶々住んでいる家も近かったギルドメンバーがいた。

その名はラキスケ。42人在籍していたアインズ・ウール・ゴウンの中では後から入った後発組だが、ペロロンチーノとよくエロ談義してはペロロンチーノの姉であるぶくぶく茶釜と一緒にどつかれていたインキュバスの神官戦士だ。

ユグドラシルの衰退が始まり、ぶくぶく茶釜とペロロンチーノが引退してしばらくしてから彼も姿を消した。しかし彼は突然引退したのではない。ユグドラシルをプレイ中に脳内の動脈が破裂したことによる突然死だった。

親しかったメンバーの死をメールで知ったペロロンチーノは後悔していた。もしも自分がユグドラシルを続けたままだったら、彼の異常に気が付いて助けを呼んで一命をとりとめていたかもしれないのだと。

実際は助からない可能性の方が大きい。それでも、ひよつとしたらという思いがペロロンチーノの頭を掠めて放さなかった。

「ラキスケさん……」

モモンガも同じ思いだったのだろう。ギルドマスターとしてログインしていたにもかかわらず、彼の異常に気が付けなかったことは、彼の心を締め上げていた。

「ああ……ごめん、湿っぽい話になっちゃって。さて、最後は派手に終わらせようか。あいつもその方が喜んでくれるだろうし」

「そうですね……そうしましょう。……よし、いくぜ！」

気持ちを切り替えたモモンガが、普段の彼らしからぬ強い口調で叫びながらボタンを強く押し込む。

その瞬間、下の島にみつしりと並べられた筒から、一斉に光弾――

製作が安く販売していた花火が上空目掛けて打ち上げられた。

今頃大量に打ち上げられているであろうそれをモモンガとペロロンチーノは五千発ずつの計一万発買い込み、この島に並べていたのだ。

あまりに密集して配置されたそれは、まるで一つの光の塊であるかのようにも見えた。

「たくまや〜」「か〜ぎや〜！」

上空に登って行くまるで白い柱のような光弾を、二人はそれぞれ異なる掛け声を叫びながら眺める。

そして、上空で巨大な爆発が起こった。その輝きは花火という範疇を超え、超位魔法である《失墜する天空》フォールンダウンのようでもあった。

眩しくて目も明けられないような光の塊が二人を覆う。

「あははは！ 凄いですモモンガさん、まるで光の雨だ！」

「そうですね！ ちょっと買い込みすぎたかもしれませんね、ペロロンチーノさん！」

二人はあまりに派手な花火の輝きに笑いあう。

もう少ししたらサービスが終了する。そうになったら、どのような終わり方をするのだろうか？ モモンガはユグドラシルしかゲームを遊んでいないのでわからなかったが、そんなことは大した問題ではなかった。

ユグドラシルとの別れは既に拠点であるナザリック地下大墳墓の玉座の間で魔王ロールも含めて済ませている。他に最後まで残ってくれるギルドメンバーがいなかったら、そのまま玉座の間で最期を迎えることも考えていた。

現実の世界を突き付けられるような情緒のない終わり方であったとしても、この一瞬は確かにモモンガの……鈴木悟の楽しみを具現化したようなものだから。

どうやら余りの眩しさに思わず目を閉じていたようだ。モモンガは恐る恐る目を開けたところでふと違和感を思える。

脳とメガコンをコードで接続しているはずなのに、目を開けることができるのはおかしい話なのだ。それに、ユグドラシルにはない風が

吹いている感触も伝わってくる。

まさか失明でもした上に窓も開いているのではないのかとモモンガは慌てるが、そこには予想外の光景が広がっていた。

まず目の前にはペロロンチーノがいる。これはずつといたのだから問題ない。

次にモモンガたちが空に浮かんでいるのもわかる。先ほどまで《浮遊^{フライ}》の魔法や種族特性で空を飛んでいたのだから。

しかし、周りの風景が全く違った。

ナザリック地下大墳墓やグレンデラ沼地があるヘルヘイムならば、常闇と冷気の世界で常時夜の世界は陰惨な風景であり、天空を重く厚い黒雲が覆っているはずである。しかしそこには素晴らしい夜空があった。生まれて一度も見たことがない、ナザリック地下大墳墓の第六階層に再現された夜空にも勝る透き通った夜空だ。

「……なにこれ？」

モモンガはぼつりと眩きながら下を見る。そこには猛毒の沼地ではなく一面に広がる青々とした草原が風で揺れていた。

「はっ。」

「眩しすぎて目を瞑っちゃったよ、モモンガさん。もうそろそろユグドラシルも終わっちゃいますね……つてあれ、風景が違う？」

ペロロンチーノのユグドラシルが終わるとい言葉に、モモンガは不思議なぐらい冷静に左腕に嵌めた時計で時間をチェックする。

00:03:44、45、46……

モモンガはもう一度周囲を確認する。一面に透き通った夜空が広がり、足元には青々とした草原が風に揺られている。

「な、なんだこれ？」

サービスが終了する日付は既に過ぎている。時計のシステム上、表示されている時間が狂っていることも考えられない。

「ひょっとして……サーバーダウンが延期した？」

もしそうならばGMから何か発表がある可能性がある。そう考えたモモンガは今まで切っていた通信回線をオンにしようとして——手が止まった。

コンソールが浮かび上がらないのだ。

「何が……？」

「初心者がやりがちなミスをするなんて、珍しいねモモンガさん。代わりに俺が……あれ？ こっちも出ない」

自分だけでなくペロロンチーノもコンソールが出ないことにモモンガは焦燥と困惑を微かに感じながら他の機能も呼び出そうとするが、どれも一切の感触がない。

「ここにきて大規模エラーって……いくらクソ運営でもこれは駄目だろうが」

ペロロンチーノが頭をクシャクシャとかきながら悪態をつく。

「ペ、ペロロンチーノさん……今、何やりました？」

「何って、クソ運営に悪態ついて……頭搔いて……って、俺……なんの違和感もなくこの腕で搔いてたよな？」

「ええ、ついでに言うと、髪の毛も一本一本別々に動いています。ユグドラシルにそこまでの細かさはありませんでしたよ」

「それに俺、どうやって翼を羽ばたかせているんだ？ 自然にやっていて怖いんだけど」

その様子を見たモモンガがペロロンチーノに確認を取ると、ペロロンチーノも気が付いたのか頭を搔いていた手を止めてじつと腕を見つめる。

それに、実際に翼を持つ訳がない人間だったのに、自身が翼を羽ばたかせることに違和感がなかったことに恐怖を覚える

「ひとまず降りましょう。えつと降り方は……こんな感じか」「そ、そうですね……」

モモンガたちはゆっくりと高度を下げ、難なく地面につく。

降り立った草原も鋭く凍っていたり歩く度に突き刺さるということもない、普通の草原だ。

ふとペロロンチーノが近くの草を千切ると、匂いを嗅ぐような動きを見せてから言った。

「モモンガさん……変な臭いがする。確か、電腦法でユグドラシルのようなゲームは嗅覚や味覚が制限されていたよね？」

「そうですね、ペロロンチーノさん。一応言っておきますけど、食べないで下さいよ。何かあるか分からないんですから」

「さすがに食べはしないよ。それよりも、これからどうしよう、モモンガさん」

ペロロンチーノの問いかけにモモンガは頭を抱える。ユグドラシルではあり得ない状況の連続に必死に頭を捻り、混乱がピークに達しようとしたとき、唐突に感情が抑圧されるかのように鎮静化していく。

それに伴ってギルドメンバーの一人が良く言っていた言葉を思い出す

——焦りは失敗の種であり、冷静な論理思考こそ常に必要なもの。心を鎮め、視野を広く。考えに囚われることなく、回転させるべきだよ、モモンガさん。

アインズ・ウール・ゴウンの諸葛孔明と呼ばれた男——ぷにと萌えにモモンガは感謝の念を送る。

「そうですね、ひとまずは運営と連絡する手段を探りながら出来る事と出来ない事、変わった所とそのままな所を検証していきましょう」

——二人は一通りの検証を終えて一息つく。

まずはそれぞれの身体の事。モモンガの肉体は完全に骨だけになっており、死の支配者そのものといえる肉体を違和感なく動かすことができる。ペロロンチーノの方も鳥の鉤爪状になった手足を苦もなく動かし、空を飛ぶこと今までやってきたかのように問題なく行える。

次にコンソールが開けない代わりに運営と連絡できるかもしれない可能性がある魔法。

《伝言》^{メッセージ}の発動自体は問題なくできたが、目の前にいるペロロンチーノ以外には運営も含めて自分たち以外の他の39人のギルドメンバーにも繋がらなかった。対象がないのか、効果範囲などの理由で

届いていないのかは分からない。

アイテムボックスを開く事に關しても、その時の事をイメージしながら中空に手を伸ばすことで、問題なく取り出したりすることも確認できた。

アイテムの効果の起動も、手に握ったままだったギルド武器であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンにはめ込まれた宝石の一つである神器級アーティファクトである「月の宝玉」に宿る召喚魔法——《月光の狼の召喚》が無事発動したことを確認した。なお、モモンガとモンスターの間に支配者と被支配者の明確な関係を示すような、奇妙な繋がりを感じ取ったのも収穫である。

そして右手薬指にはめてある指輪、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。拠点であるナザリック地下大墳墓の名前がついている部屋であれば、回数無制限に自在に転移することが可能で、外から内部へ転移することもできて宝物殿に行くには必須のアイテムだが、他のアイテムを起動させようとした時のように念じても、その効果を發揮することはなかった。

これも《伝言》と同様に効果範囲の外なのかナザリック地下大墳墓自体が存在しないのかは分からない。

この時、肩を落とすモモンガを慰めようとペロロンチーノが触れた時に負の接触ネガティブ・タッチによって極微小ながらダメージを受けたことで、ユグドラシルでは味方同士では同フレンドリー・ファイユア士討ちを受けない設定が変わっていることにも気が付くこととなる。

ペロロンチーノにワールドアイテムであるヒュギエアの杯をアイテムボックスにしまわせて、モモンガはこれまでの結果からここがユグドラシルではない可能性を伝える。

そして自分がユグドラシルの最終日に一緒に遊ばないかと誘ったせいで巻き込んでしまったことを謝罪する。

仕事とユグドラシルしかなく、現実世界リアリアルに友人や恋人・家族もいない自分と違って、血のつながった家族がいるペロロンチーノはその社交性の高さから現実世界リアルでも友人がいたという。そんな彼を帰る当てがない状況にしてしまった罪悪感からであった。

それに対してペロロンチーノは、

「謝らなくて良いよ、モモンガさん。モモンガさんだつてこの状況に巻き込まれた被害者な訳だし。むしろ、俺が最後まで残らないでログアウトしていたら、また友人を失うかもしれないなかつたわけだから」

「ペロロンチーノさん……」

「それに意外と現実世界リアルの方の俺たちはピンピンしていて、明日の朝が早いから寝ないといけないってぼやいているかもしれないよ。どうなっているか分からない彼方よりも、今確かにいる此方の事を考えようぜ」

ペロロンチーノの励ましにモモンガはなくなったはずの胸の内から熱いものが込み上げてくる。

「ありがとうございます。それじゃ、ずっとここにいても始まりませんし、とりあえず、向こうに見える森に向かって歩きましようか。そういうえば、俺はアンデッドですから食事・睡眠が不要で疲労は無効化されますけど、ペロロンチーノさんは大丈夫ですか」

「飛んでいく方が早いけど、こんだけ何もないと見つけてくれて言っているようなもんだしね。一応装備でその辺りは対策してあるけど、何もなのまま歩き続けるのは飽きそう」

「あはは……俺としては目的地になりそうなどころを見つけるまでは無暗にトラブルには巻き込まれたくないですけど、アイテムボックスの中身を確認するために時折休むことにしましょうか」

そう言つて、二人は遠くに見える森へと向かつて歩き始めた。

第二話 「カルネ村」

カルネ村は帝国と王国の境界線となっている山脈——アゼルリシア山脈の南端の麓に広がる森林——トブの大森林の外れに位置する小さな村だ。

人口は大凡120人の25世帯から成る村の主な収入源は森林でとれる森の恵みと農作物だ。薬師が薬草を得るために来ること以外では徴税吏が年に一度来るだけの、外から人がやってくることはほとんどない、時が止まったままといい表現がぴったりくる村だ。

そんな村のある日大きな出来事が起きた。深夜であるにもかかわらず闇を全て消し去ってしまうかのような大きな輝きと大地を揺るがすような爆音がトブの大森林の上空に確認されたのだ。この輝きと爆音を確認したのはこの村だけではなく、トブの大森林の南側から東側にかけての広範囲、さらには王国の城塞都市エ・ランテルや王国との国境近くにある帝国の都市でも確認された。

木造の家の壁にある隙間や窓の薄いカーテンから入り込む強烈な光と、窓ガラスが割れてしまいそうになるような大きな音に、眠っていた周辺の村民たちは無理矢理起こされて騒然となる。

すぐに光と音は消えたが、村民たちはいつまたあのような事が起こるのか、何か災いごとの予兆ではないのかと床に就く処ではなくなっていた。

眠れない夜であろうとも村の朝は早い。太陽の出る時刻に村民は起き出すと、重い瞼を擦りながらしなくてはならない仕事を始める。血を流しながら森の中を走る、カルネ村の猟師のラッチモンもその一人だ。

獲物を求めて狩りに出かけたラッチモンだが、普段よりもよく眠れていないことが災いして若干集中が欠けた状態で普段より深く森に入ってしまったため、気が立っている悪霊犬ハーゲストの接近に気が付けずに襲われてしまったのだ。

森の賢王と呼ばれる大魔獣の縄張りだったこともあり、気が抜けてしまっていたのもあったのかもしれない。

(クソっ！　なんて厄日だ！)

体力の余計な消耗を抑えるために心の中で叫ぶに留めているラッチモンだが、余裕など殆どない。悪霊犬バীগエストに対して対抗できるだけの力を持たない彼がこうして走って逃げるのができているのにしても、悪霊犬バীগエストが嗜虐性を満たすためにわざと獲物を甚振っているためか、あるいは狩獵スポーツハンティング遊戯の真最中だからだろう。

ラッチモンは森の中で悪霊犬バীগエストに襲われた時点で自分が生きて帰れる可能性は低いと考えていた。無論、生き残るために抵抗はするが、下手に真っ直ぐ村まで逃げてしまうと追ってきた悪霊犬バীগエストによって村人たち——特に老人や子供たちにどれだけの犠牲者が出るかもわからない。

そうなるくらいならば……と考えながら走っていると、前の茂みはずか揺れる。考えるよりも先にラッチモンが横に飛びのくと、茂みから悪霊犬バীগエストが飛び出して頭にある前に突き出した二本の角で突き刺しにかかっていた。

「うおおおおっ！」

悪霊犬バীগエストの角はラッチモンのすぐ脇を通り過ぎ、木に突き刺さる。

先回りされていたのかとラッチモンは考えたが、それは後ろからも一匹の悪霊犬バীগエストが合流してきたことで最悪の形で否定される。

一匹でさえ手に余る魔獣だというのにそれが二匹。ラッチモンの胸中では諦めが広がっていた。

木から角を抜いた悪霊犬バীগエストがもう一匹と共にラッチモンににじり寄ると、ラッチモンも同じだけ後ずさる。それを数回繰り返すうちに、ラッチモンは背中を木に抑えられてこれ以上後ろに下がることができなくなる。

自分ほどのようにこの悪霊犬バীগエストたちに殺されるのか。すぐに死ぬるならばまだいい。ひよつとしたら、此処からさらに甚振って動けなくしてから生きたまま貪り食われるのかもしれないと考えると、ラッチモンの膝は恐怖で震えてきた。

その様子を見た悪霊犬バীগエスト達がただの獣にはできない邪悪な笑みを浮かべる。そしてラッチモンに向けてとびかかろうとした時、頭上から

飛来した一本の矢が一匹の悪霊犬バীগエストの頭蓋を突き破った。

「ギャツ!!」

突然のことに驚く悪霊犬バীগエストとラッチモン。そこに茂みから草木をかき分ける音が聞こえてくる。

ラッチモンがその方向に目を向けると、そこには一つの死そのものが存在した。

「あつ……、ああああ……」

ラッチモンは弱弱しい悲鳴を上げる。

細やかな装飾の入った漆黒のローブを纏い、白骨化した頭蓋骨の空虚な眼窩には、濁った炎のような赤い揺らめきがある。それがラッチモンに向けられ、次いで悪霊犬バীগエストに向けられると、肉も皮もない骨の手を悪霊犬バীগエストに向けて――

《魔法の矢》

死を体現した存在から放たれる10の光弾が悪霊犬バীগエストに殺到し、

悪霊犬は糸が切れたように崩れ落ちた。

「悪霊犬程度であれば第一位階の魔法でも一撃で仕留められるのは、ユグドラシルと変わらないのか」

「モモンガさん、周囲にはほかに悪霊犬バীগエストとかはいないよ。って、おっさんの怪我やばいじゃん。はい、ポーション」

モモンガと呼ばれたアンデッドの隣に降り立つように、キラキラ輝く金色の派手な鎧を着用した鳥の頭をした亜人が上空から降りてくる。こちらの様子を見た亜人は此方に駆け寄ると、懐から赤い液体の入った瓶を取り出す。

「そ……それは一体？」

「何って、治癒のポーションだけど。……ひよつとして、この辺りではこういうの無かったりする？」

「あつ……いい、いや。俺が知っているポーションはどれも青あざかったから」

「ああ、そうだったんだ。とりあえず、危ないものじゃないから飲んで」

ラッチモンは人懐っこそうな亜人に言われるままに受け取ると、一

息でそれを飲み干す。そして驚きの表情を浮かべた。

「そんな、嘘だろ……。傷が……」

自らの体を触り、信じられないかのように繰り返して体を捻ったり屈伸したりする。

「痛みはなくなつたか。《記憶操作》」

いつの間にか仮面を被り、無骨なガントレットを腕にしたアンデッドが何かを唱えると、ラッチモンは不思議な感覚に見舞われた。

俺はなんで助けてくれた魔法詠唱者に怯えたんだ？ 怪しい仮面はしているし、ガントレットも魔法詠唱者らしくないけど、それにしただって命の恩人に失礼だろう。

二人は何か話しているが、先ほどまでの自分について考え事をしていたラッチモンには聞こえなかった。助けられたからにはお礼をするべきだろうと考え、ラッチモンは二人に話しかけた。

普段ならば日が沈み始める時間には獲れた獲物を持ち帰ってきている猟師のラッチモンがまだ帰ってきていないことに、昨夜起きた眩しい光の一件もあつて村人たちは不安を覚える。

この狭くて人口も少ない村では住人は皆親戚のようなものだ。

大人たちで探しに行くべきかという話が出て道具を持った村人たちが森に繋がる村の入り口に集まったところで、ラッチモンが奇妙な二人組を連れて森から戻ってきた。

一人は顔をすっぱり覆う、泣いているような、怒っているような形容しがたい表情が彫られた仮面を被った人物だ。無骨なガントレットを両手にしており、吸い込まれるような漆黒のローブを纏った姿は絵本に出てくるような悪い魔法詠唱者マジック・キャスターに似ているような気がした。

もう一人はキラキラ輝く金色の派手な鎧を着用したおそらく……亜人だ。姿は人の形をしているが、猛禽類のような鳥の頭をしていて背中には二対の翼が生えている。それに、肘と膝から先も鳥の鉤爪になつていて、立派な鎧を着ていなかったらモンスターと言われても納

得してしまうかもしれない。

「聞いてくれ、みんな。彼らは俺が悪霊犬バীগエストに襲われていたところを助けてくれた恩人だ。それだけじゃない、ポーションも使ってくれたおかげで、大怪我も治してくれたんだ」

ラッチモンの言葉に集まっていた村人たちは騒めく。

治療のポーションと言えばそれ一本を買うだけで金貨が必要になるような高級品だ。

そのような高価な物を使って治療してくれたことに感謝するともにも、態々そうしたからには何か大きな対価が求められるのではないかと不安になったからだ。

「お騒がせしてしまつて申し訳ない。私はモモンガ、そして此方は友人のペロロンチーノと申します」

「バードマンのペロロンチーノです。よろしく」

頭を軽く下げて自己紹介をする二人組に、村人たちはどうすべきか小声で話し合う。

——バードマンという種族は聞いたことがないぞ。

——こんな村に何のために来たのだろうか？

——昨夜の出来事と関係があるのだろうか？

村人たちが疑問に思う中、村長が人だから一歩前に出て話を聞く。

「村長ですが、この度はラッチモンを助けていただきありがとうございます。それで、どのようなご用件で村を訪れたのでしょうか？」

「実は、この村に少しの間泊めていただきたいのです。もちろん、対価はお支払いします」

そう言つてモモンガと名乗つた魔法詠唱者風マジック・キャスターの男はローブから二枚の金貨を取り出した。一枚が男性の横顔が、もう一枚は女性の横顔が彫られた立派な金貨だ。

「……これでお支払いしたいと言つた場合、どの程度の間、滞在できますか？」

「見たことがない金貨ですので、おそらく使えるとは思いますが交金貨と比べてどの程度価値があるのかを確かめてからになってしま

ます。それに、この村では基本的に銅貨や銀貨を使っていて金貨は基本的に使用していないので、ラッチモンを助けていただいたお礼も含めてお釣りの貨幣をお支払いできるか……」

「これは非常に、非常に遠い地で使われていた硬貨です。確かめていただいても構いませんよ。それと、先の御礼を含めて貨幣が足りないようでしたら、代わりに数日ほどの村の宿に泊めさせていただくのを報酬とさせていただいて構いません」

「おお……、ありがとうございます。ですがよろしいのですか？」

「ええ。自分で言うのもなんですが、私たちのような怪しい者たちをいきなり追い払おうとせずに話を聞いていただけ、少しばかりのお礼です」

自分達よりもいかにも強そうな亜人を連れた魔法詠唱者マジック・キャスターを追い払おうだなんて怖くて言えなかった。村人たちは一同に心の中で思うが、それを口にしないだけの常識はあった。

それに、ラッチモンを助けてもらった恩があるのにそのような恥知らずなこともしたくない。

「それではその金貨の価値を調べるために、お二人ともひとまず私の家に来ていただけませんか？」

「ええ、私は構いませんよ。ペロロンチーノさんも構いませんよね」

「ええ、俺も構いません」

「ありがとうございます。それでは案内しますので……こちらです」

この場での交渉がまとまり、村長はラッチモンと共に二人を連れて自宅へと歩き出す。

村長の自宅に二人とも入って玄関が閉まるのを確認した村人達は、思い思いに自分の感想や考えを小声で話しながらそれぞれの自宅に戻っていく。

エンリ・エモットも畑仕事から帰る途中でその場面に出くわし、一部始終を見ていた。

家に戻ったエンリは、夕食の席で両親と妹のネム・エモットにその内容を話す。

「まあ、そんなことがあったの。ラッチモンさんが無事に戻ってきて

本当に良かったわ」

「旅人さん、どんなお話聞かせてくれるかな。お姉ちゃん？」

「ネム。旅の方は吟遊詩人ではないと思うから、そういうのは駄目よ」
「えー」

村人が無事戻ってきたことを嬉しそうに話す母親に対して、ネムはやってきた者たちから面白そうな話を聞かせてもらえるかもとワクワクしているようだ。

娯楽のほとんどないこの村では、薬師の人の護衛として訪れるような冒険者の話も貴重な娯楽となる。

妹の気持ちもわからなくはないが、旅人たちから無理に聞き出すとするのは失礼だろうとエンリは妹を窘める。

それに、まだ幼いネムはともかくエンリや両親には毎日の畑仕事や薪拾いがあるのだ。昨夜あったようなことが今夜も起きたら、寝不足で仕事に差し支えてしまう。

そうならないことを祈りながら夕食をとるエンリ達であった。

旅人を泊める際に使う家屋の中で、モモンガが粗末なつくりの椅子にもたれかかると、椅子はモモンガの体重に鋭敏に反応してミシリミシリと嫌な音を立てる。

ペロロンチーノは木製の壁に体を預けて寄りかかっている状態だ。

「いやあ、無事に泊めて貰えてよかったですね、モモンガさん」

「そうですね、ペロロンチーノさん。昔たっちさんから教えてもらった、『情けは人の為ならず』の正しい意味を実感しましたよ。今は骨ですけど」

「それを行ったら俺は鳥人間ですよ」

笑い合いながら二人は集まった情報を整理し始める。

「俺たちがこの村を訪れて分かったことは、まずはこの世界はユグドラシルではない事です」

「ええ。リ・エステイーズ王国やバルス帝国、スレイン法国といった

名前は、ユグドラシルや元ネタの北欧神話には無かったはず」

「その辺りは、遠い所から旅をしているのでこの近辺の国名が正確に伝わっていないかったということにして誤魔化せましたけど、今後は気を付けないといけませんね」

二人が周辺地理の名前を確認すると、モモンガはローブから幾つかの異なる貨幣を取り出す。

「次に、貨幣についてです。この周辺の国では大別して4種類の単位の貨幣が使われていて、下から順番に銅貨・銀貨・金貨・白金貨に分かれています」

「確か、ユグドラシル金貨がコウキンカ2枚分の重さだったね。村ではほとんど銅貨と銀貨が使われていて、金貨は殆ど使わないし、白金貨になると使ったこともない」と

「ええ。ユグドラシル金貨はまだ十分な量がありますが、今後生活していくことを考えると小規模な買い物に使う銅貨や銀貨も必要になってきます。白金貨はなくても当面は大丈夫でしょう」

そう言つて、モモンガは取り出した貨幣をローブに仕舞い直して話を続ける。

「それに、この世界にも魔法詠唱者マジック・キャスターが存在することも分かりました」

「ラッチモンさんの話では、近くの都市に住む薬師が魔法詠唱者マジック・キャスターで、ポーションを作っているみたいだけど色は青色だつて言つた。ユグドラシルのポーションのような赤色の物は見たことがないってさ」

「ポーションの素材が違うのか……それとも作る工程が違うのか」
情報を集めるほど新たな謎が湧いてくる状況に、頭を悩ませる二人。しかし、それよりも頭を悩ませる自体があつた。

「そして、森で発生したという謎の現象についてですけど……」

「ええ……闇夜をかき消すような光と大地を揺るがすような爆音。これって……」

「俺たちが最期に打ち上げていた花火ですよね」だよね」

自分達がユグドラシルで最後に行った行動でこの村に迷惑をかけたしまったことに、二人は罪悪感を覚える。

いち早く復帰したのはモモンガの方だ。アンデッドの種族的特殊

能力である精神作用効果無効による強制的な精神の安定化によるものだ。

「ラッチモンさんが悪霊犬バーゲストに襲われたのって、夜に花火で起こされたことで気が荒くなっていたからですよね……」

「助けたお礼を言われたけど、原因がこつちにあるから良心が痛む……」

「この村、すぐ近くの森が『森の賢王』という魔獣の縄張りだった影響で、村ができてからずっと村をモンスターに襲われたことがないそうです。その影響もあって村を覆う柵もなかったとか」

「モモンガさん。提案なんですけど、少しの間この村に滞在して森を見回ししません？ 森の賢王とかもイライラして村を襲ってくる可能性もゼロではなくなっていますし、こうして泊めてくれた村が滅びましたとか後味が悪すぎるよ」

ペロロンチーノの提案にモモンガは腕を組んで考える。小鬼ゴラリンや悪霊犬バーゲストは大したことないから問題ない。問題があるとしたら伝説の魔獣と言われている森の賢王がどの程度の強さなのかだ。もしもレベル100プレイヤーでも危険な相手だった場合、後衛二人組では不意の一撃が怖い。かと言って、放置してカルネ村に問題が起きるのも訪れたばかりというタイミング的に良くない。

それに、この体になってから人間に対する同族意識が薄くなっているが、助けた人間がいる村に害が及ぶのはなんか嫌だし、ペロロンチーノが嫌がっているのを無視して放置することでもない。

「うーん……、そうですね。いつまでもという訳にはいきませんが、2〜3日くらいは見回りしておきましょうか。それから先は村の自己責任ということで」

「ありがとうございます、モモンガさん」

その後、二人は他にもわかった事や今後の予定を確認していく。

途中でペロロンチーノが「この村の女性達って昔は綺麗そうだったり、これから綺麗になりそうな子たちばかりだと思いませんか？」と喋ってモモンガにドン引きされたりしたが、この日は特にこれ以上の騒動はなく夜を迎えるのであった。

第三話 「トブの大森林 前編」

モモンガ達がカルネ村に到着した翌朝のこと、大人の村人たちが畑仕事に出た村の中央にある広場として使われているその場所に、村の子供たちが楽しげな声を出して集まっていた。

子供たちの視線の先にある、村の行事等で使用されるちよつとだけ高くなった木製の質素な台座に、ペロロンチーノが子供の一人を肩車して立っていた。

「よし、しっかり掴まってるんだぞ」

「わかったー」

「そーれ！」

ペロロンチーノが翼を羽ばたかせて少しだけ宙に浮くと、立っていた台座から周囲の子供たちに見えるように小さく円を描きながら地表スレスレをゆっくりと飛び始める。

「すげー！」「ほんとに飛んでる！」

子供たちの歓声にペロロンチーノは再び台座に戻ると、肩車をしていた子供を台座に降ろす。

「ありがとう、ペロロンチーノおにいちゃん」

「よしよし、今度はどの子が飛んでみたいかな？」

降りた子供に代わって次にペロロンチーノに乗ろうと子供たちが手を上げる。

「こんどはおれがのりたい！」「つぎはあたしー」

「それじゃあ次は……」「ここに居ましたか、ペロロンチーノさん……っあ、モモンガさん」

「森に異常がないか見に行こうって言ったのはペロロンチーノさんじゃないですか。もう時間ですよ」

「おっと、もうそんな時間だったか。みんな、ごめんな。おにいちゃん、これから魔法使いのお兄ちゃんと一緒に森の様子を見に行ってくる約束をしていたんだ」

子供たちと遊ぶのに夢中になっていたペロロンチーノは、子供たちに謝りながら台座から降りる。

「えー、もうおわりー?」「まだ肩車してもらってないのにー」

「大丈夫。いい子にしていたら、またやってあげるから」

「やくそくだよー」「気をつけてねー」

「ああ、約束だ。危なくなる前に戻って来るから大丈夫だよ。それじゃ、行ってくるね」

手を振る子供たちを背中にペロロンチーノはモモンガと合流する。

二人は森へ向かって歩きながら小声で話し出す。

「それにしてもペロロンチーノさん、もう子供たちに懐かれていますね」

「これでも俺、現実世界では保育士をしていたんですよ」

「えっ、ペロロンチーノさんって保育士だったんですか?」

「ええ、現実世界の子供と違ってこの世界の子供たちは凄く素直ですからやりがいがあつて楽しいです」

「なるほど……その割には自作NPCには割とエグイ設定をこれでもかと詰め込んでいましたよね」

「言っておくけど、エロゲー・イズ・マイライフは二次元だからこそ公言しているものだからね。性癖の対象は愛であるものであつて辱めるものじゃありませんから。特に現実世界に性癖を持ち込んで一方的にぶつけるのはNGです」

もしもどこかに居たら今頃くしゃみをしていそうな某吸血鬼に突き刺さる話だ。

そんな雑談をしながら森の手前に到着する。

「さて、ここからは真面目にやらないとな」

「森の異変が俺達で対処できる範疇で済んでくれていると良いんですけどねえ」

そう言つて、二人は鬱蒼と茂る森の中へと入っていった。

人類が認識しているわけではないが、トブの大森林は東・南・西の三つに勢力が分かれている

カルネ村が近い南側を森の賢王が、そこから西側を西の魔蛇が、そしてバハルス帝国側に張り出した東側を東の巨人と呼ばれるモンスタールが縄張りとしているのだ。

本来ならば互いの存在が抑止力となって均衡が保たれるのだが、あることが原因でその均衡は崩れさった。

そしてその日カルネ村に比較的近い、しかし人が立ち入ることが滅多にない所で人知を超えた戦いが繰り広げられていた。

「ぐおおおおおおお！！！」

トロールの亜種であるウオー・トロールにして、東の巨人と呼ばれるグによって、人間が扱うそれよりも巨大な三メートル近い大きさのグレートソードが振り下ろされる。その一撃は直撃すれば優秀な戦士でも一撃で屠りかねないほどの重さを備えたものだ。

振り下ろされた先にいるのは、森の賢王と呼ばれる白銀の毛皮と蛇の尻尾を持つ四足獣だ。

「なんのおおおー！」

森の賢王はその巨体に見合わぬ俊敏な動きでグの振り下ろしを躲すと、硬質な蛇様な鱗の生えた尻尾をグの頭部に叩きつけてグの頭部を一撃で陥没させる。

普通の生物ならば既に絶命している致命傷のはずだが、異常な再生力を誇るトロール種の中でも突出した筋力と再生力を誇るグにとつては一時的に視界がつぶれる程度にしかならない。実際、潰れた頭部は見る見るうちに元に戻っていく。

「頭を潰してもダメでござるか。ならば全身をバラバラにして……つとおう！」

再生中のグに追撃を仕掛けようとする森の賢王だが、周囲にいる他の三体のトロールたちが手に持った棍棒で殴りかかってきてそれを許さない。

「ふああふあああ！ 哀れだな、森の賢王よ！ お前には手下もない、名前もない。そんなお前よりも、どっちもあるこの俺様、グの方が強いという事だ！」

「ならばこれでどうでしょうー！」

フラインドネス
《盲目化》

嘲笑するグに対し、森の賢王は身体にある紋様の一つを発光させて魔法を発動させる。

「ぐわああ！ 目が見えん！ どこだ！ どこにいる！」

視界を闇に閉ざされたグは、でたらめに剣を振り回す。彼が冷静であればトロール種の鋭い嗅覚である程度は獲物の位置を割り出すこともできるが、自尊心の高さから怒りが先立ってしまったている。

そうしている内に森の賢王はグの様子が暴れ始めて慌ててばらに離れる他のトロールを先に仕留めにかかる。

他の二体から離れた一体に狙いを定め、まずは尻尾による一撃を加える。パアンと弾ける音と共にトロールの頭部が吹き飛ぶ。吹き飛んだ頭部が再生する前に接近し、前足で頭部があったところを抑えつげながらトロールの腹部に噛みつき、引きずりながらその場を離れた。

暴れるグが邪魔になって他のトロールがすぐには此方に来られないのを確認すると、森の賢王は鋭い爪がある前足で胸部から腹部を引き裂いて生物の生命維持に必要な内臓器官を次々と抉り出し、バラバラにぶちまけていく。

再生しようとする箇所をその都度潰し、再生力の限界を超えて動かなくなつたトロールの肉片を簡単な毛繕いで落としながら森の賢王は考える。

「(まずは一体。そろそろ^{フラインドネス}《盲目化》の効果も切れる頃でござるな。このまま一旦逃げるにしても、このままではあのグという亜人がさばって落ち着いて眠ることもできないでござる。せめて追い出さねば……。もし同じ手が通じるならば残る二体の手下も同様に屠つて一対一に持ち込むことができるが、さすがにそんなに簡単にはいかないで——) ゲボウ！」

グをどうにかする算段を考えていると、森の賢王の横つ腹に巨大な何かが勢いよくぶつかってきた。怒り狂つたグが木を薙ぎ倒してそれを投げつけてきたのだ。

金属のように固くしなやかな毛皮のおかげで見た目は大きな怪我はないが、呼吸が若干苦しくなっている。

「見つけたぞ！ 臆病者の分際で俺を煩わせるな！ 黙って喰われろ、森の賢王！」

「ゲホッゲホッ！ 命の奪い合いをしている時に考え事とは、某もこやつを甘く考えていたでござるか！ ゲホッ！」

咳込みながら森の賢王はグの方に向き直ると、グの取り巻きである他の亜人の姿が見えないことに気づく。

配下がやってこないことを不審に思ったのかグが振り向くと、グの背後から配下のトロールたちの悲鳴と、それとは違う殺気を撒き散らすような空気をびりびりと振動させる咆哮が聞こえた。

程なくしてトロールの叫び声が聞こえなくなり、茂みをかき分けて現れたのは、血に染まった剣を握るアンデッドの騎士であった。

森の主たちの激闘から時間を少々遡り……。

モモンガとペロロンチーノは歩きながら、今日トブの大森林で遭遇したモンスターについて会話する。

「なんだか昨日と比べて、森の動物たちが騒がしいですね」

「ええ。今の所は俺たちに危害を加えられるモンスターとは出会っていませんけど、昨日よりも明らかにモンスターと出会う頻度が増えていきます」

「今日だけで狼ウルフに悪霊犬バীগエスト、ボガードにバグベア。そしてついさっき遭遇した人食い大鬼オウガとトロール。俺たちにとつてはなんてことないけど、カルネ村に来ていたら大惨事でしたよ」

カルネ村に到着するまでと比べても、今日になって森の中でモンスターと出会う頻度も質も変わっている。

ラッチモンと出会うまでカルネ村に到着するまでに森を彷徨っていた時は、ラッチモンを襲っていた悪霊犬バীগエストの他には小鬼ゴブリンやそれが使役している狼ウルフに時たま現れる中型の昆虫系モンスター等が精々だった。

しかし、今日になって遭遇したモンスターはペロロンチーノが言ったような亜人種のモンスターが多い。

カルネ村の無防備具合を考えると、これが普通とは思えない。殺したトロールの口ぶりではどうやら、森の東側を支配する王と共にやってきたようだが、この辺りを縄張りに行っているという森の賢王に何かあったのだろうか？

「もし東の王と戦いになった時のために、デス・ナイト 両兼盾役として死の騎士は一体作っておきましたけど……まさか殺したトロールを取り込んで召喚されるとは思いませんでしたよ」

そう言うモモンガの視線の先にいるのは、身長2・3mほどの左手に巨大なタワーシールドを持ち右手にフランベルジュを握る、血管のような紋様があちこちに走っている漆黒の全身鎧を纏ったアンデツドの騎士だ。

「モモンガさん、この先にトロールが四体いますね。うち一体は他よりも大きくて棍棒じゃなくて大剣を持っています」

ペロロンチーノの鳥人間バードマンとしての優れた視力ではるか先にいる存在を確認する。本来ならば鬱蒼と生い茂る木々が視認を邪魔するが、《透視化》の特ス殊キル技術でそれらを見たい対象を見ることができるのだ。ちなみにR18行為に対して厳しかったユグドラシルでは、これを応用しても女性キャラや女性型モンスターの裸を覗くなんてことは出来なかったりする。

「他と違う個体という事は、トロールたちが言っていた東側を支配する王でしょうか？ その周囲には他に何かいますか、ペロロンチーノさん」

「ちよつと待つて……つて、ええ……トロールたちと対峙する様に馬ぐらいの大きさのハムスターが戦っています」

ペロロンチーノの言葉にモモンガは首を傾げた。

ハムスターって大人でも掌サイズじゃなかったか？ そういえば、ギルドメンバーの一人がハムスターを飼っていて、ハムスターが死んだショックでしばらくログインしなかったこともあったっけ。

モモンガはここにはいないギルドメンバーの事を思い出しながら、気を取り直してどうするか考える。

「……とりあえず、トロールはカルネ村のために仕留めましょう。あ

いつら、俺達を初見で食料と見なして襲ってきたから村人も見つけたら襲うでしょうし」

「そうだね。あの様子だとハムスターがトロールに襲われているっぽい。戦っている様子を見る限りでは大剣を持っているトロールとハムスターの強さは同じくらいだね」

「ハムスターとトロールが同格って、この世界のパワーバランスはどうなっているんだ……。まあいい、死の騎士よ、この先にいるトロールを襲え。ハムスターの方は攻撃してこなければ放置だ」

「オオオアアアアアアアアアアアア——!!」

モモンガは死の騎士にトロールへの攻撃を指示すると、死の騎士は効く者の肌があわ立つような叫び声をあげて駆けだした。視界の悪い森の中を迷いなく走る様子から、アンデッド特有の生に対する憎悪という知覚能力が働いているようだ。

瞬く間に小さくなっていく死の騎士の後姿に二人は呆然とする。

「いなくなっちゃったよ……。盾が守るべきものを置いて行ってしまうよ。いや命令したのは俺だけだよ……。」

「まさかこんな形でユグドラシルとの違いを再発見するとはなあ……。それでどうします？　もう一体作っておきますか？」

「ええ、一日の使用回数に制限がある特殊技術はできるだけ温存したいところですが、盾役がないよりはましですからね」

口の中でモゴモゴと己の失敗を零したモモンガは、改めて中位アンデッド作成の特殊技術でもう一体の死の騎士を生み出す。

今度は周囲に死体が無かったが、無事に生み出すことができた。見た感じでは戦闘能力に差異はないようだが、死体の有無にかかわらずこの特殊技術を使えるとなると、どういった違いがあるのだろうか？　調べる必要があるが、それは時間ができた時にやっておこう。

実験の方に傾きかけた思考を戻しながら、モモンガ達は先に向かった死の騎士を追いかけ始めた。

第四話 「トブの大森林 後編」

「オオオオアアアアア!!」

死の騎士がグに対してフランベルジュで切りかかる。グはそれを手に持つグレートソードで打ち払う。

ぶつかり合う両者の剣。弾かれたのは死の騎士の方だった。

しかし、グの追撃の振り下ろしを死の騎士はタワーシールドで受け流し、すかさず引き戻したフランベルジュをグの脇腹に突き刺す。

フランベルジュがグの皮膚を引き裂くが、みつしりと詰まった筋肉に遮られて奥までは届かない。

「グオオオオー!」

グレートソードから片手を放したグは、死の騎士を思いつきり殴りつける。

死の騎士はそれをタワーシールドで受け止めるが、今度は受け流せずに数歩後ずさった。

その間にグの腹部は瞬く間に再生して傷が塞がっている。

その後の数度、死の騎士とグは切り結ぶが、互いに決定打を与えられない。

(新手……にしては、某ではなくてあの亜人ばかりを襲っているでござるな。かと言って、あのアンデッドの騎士が某を襲わない保証がない以上、無暗に協力するのも危険でござる)

「何をしに来た、アンデッド! 邪魔をするなら、お前も森の賢王諸共頭からバリバリと食ってやる!」

「クウオオオオ!」

状況の変化に対して静観する森の賢王と、グを狙う死の騎士。そして諸共に糧にしようとするグ。

三者のにらみ合いによって状況が停滞する。

「ふむ、あの東の王と推察されるトロールは俺の作った死の騎士とほぼ互角か。力は彼方が上で防御力は此方が勝るが、攻撃力に劣る死の騎士では再生力の突破は困難だな……」

「ひよっとして、あのトロールの話しぶりからして森の賢王ってあの

ござる口調のハムスター？ あつちは警戒しているけど、横合いから攻撃しないだけの理性はあるようだね」

その様子をモモンガとペロロンチーノは観察して戦力を推察していたが、特殊技能ス・キルによる囷兼盾として使うつもりで生み出した死デス・ナイトの騎士と拮抗した強さという事から、他に自分たちが知らない何かが無い限りは問題ないことを確認できた。

（とりあえず一当てしてみるか。やまいこさんも「どの程度の難易度なのか殴ってから考えても良いじゃない？」ってユグドラシルではよく言っていたつけ）

基本的にかなり慎重派なモモンガだが、ギルドホームであったダンジョンであるナザリツク地下大墳墓を初見攻略しようと、クランからギルドに変わったばかりの当時のアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーに提案したりと、理由次第でははっちゃけることがある。

それに、ここまで実力差がありすぎるのが分かっってしまうとペロロンチーノが村の子供たちを待たせているのもあって、さっさと問題を片付けてカルネ村に戻りたいという気持ちもあった。

「じゃあ、そろそろ行きましようか」

「ええ」

モモンガとペロロンチーノは軽い口調で森の支配者たちの戦いの場に乗り込む。

相手に侮られないようにするためにもう一体デス・ナイトの死の騎士を連れて上で、ある程度ロールプレイすることも忘れない。

「死デス・ナイトの騎士よ、そこまでだ」

臨戦態勢であった死デス・ナイトの騎士の動きがピタリと止まる。

「このアンデッドの主のようでござるが、一体何をしに——」

「——何をしに来た、人間！」

森の賢王がモモンガ達に問いかけようとするのを遮ってグが進み出た。

「食われたくて来たのか！ だったらお前たちは運が良い！ 東の地を統べる王である、グ、の腹に納まることを光榮に思うがいい！」

「——グ？」

「どうやらこの亜人の名前のようでごござるよ。ゲホツ」

教えてくれたのは、森の賢王と思しきハムスターだった。先ほど木をぶつけられたのが痛むのか、時折咳込んでいる。

「ああ、そう言う名前なのか。この森の東側を支配しているグとやらがどうして南側のこの辺りに来ているんだ？」

「少し前にこの森の近くで起きた凄い光と音を、某が起こしたものと勘違いして襲ってきたのでござるよ。げふっ、尤も、ただ攻め入る口実にしたかっただけだとは思うでござるが……」

「ああ、あれかあ……ここでもやつぱり影響していたかあ。やつぱ調べに来て正解だったわ」

ペロロンチーノはユグドラシルで自分たちの行った行動による影響が、予想よりも大きく出ている事に頭を抱える。

「俺を無視するとはいい度胸だ！ お前たちは生きてまま頭からバリバリと食ってやるー！」

無視される形となったグがモモンガ達を掴もうとするが、二体の死デス・ナイトの騎士がそれを阻む。

「うわー、如何にも頭悪そうな言葉だなあ」

「このまま時間をかけるのもばからしいですし、あつちはさっさと終わらせるか。――《死デス》」

モモンガが魔法を唱えたのと同時に、大きな爆発も身を溶かし切るような酸もなしにグが崩れ落ちた。

森の賢王は尻尾で恐る恐るグをつつくが、大地に付したグはピクリとも動かない。体温を残しながら、命という炎がかき消されたのは明白であった。

「な、何をしたで、ごござるか？」

「モモンガさんは即死魔法を使ったんだ。トロールは火属性か酸属性がない限りは再生し続けるけど、即死耐性が完璧な訳じゃないからね。俺の弓で燃やしても良かったんだけど、そうすると森が焼け野原になりかねなかったから、トロールの相手はモモンガさんをお願いしていたんだよ」

森が焼け野原になりかねないという言葉聞いた森の賢王は、全身

の毛を逆立ててその柔らかな銀の体毛に包まれた腹部を曝け出す。

「こ、降伏でござる！ 某の負けにござるから、燃やさないで欲しいでござる！ ゲホツゲホツ！」

「え、ええ……。まあ、敵対しないなら殺す理由もないからいいけどさあ」

「何脅かしているんですか、ペロロンチーノさん。森の賢王よ、ひとま
ずこれを飲んで傷を癒したほうが良い」

モモンガは下級治癒薬を取り出してハムスケの口元に近づける。

「これは血でござるか？ それにしてはそう言う匂いがしないよう
な」

「これは治癒の薬だ。完治するかは分からないが、マシにはなるだろ
う」

「かたじけないでござる」

森の賢王が口を開けたので、モモンガは下級治癒薬の中身を
注ぎ込む。そして森の賢王は驚きの表情を浮かべて姿勢を直した。

「おお！ 先ほどまでの痛みが綺麗になくなったでござる！ 正直な
ところ、あの巫人——確かトロールと言ったでござるか？ あれから
受けた一撃が痛くて困っていたでござる。殿は恩人でござる！」

「と、殿？ まあ、それは良かった。代わりと言ってはなんだか幾つか
聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「勿論でござる！ この森の賢王、殿のお役に立つ所存でござる！」

森の賢王はモモンガに顔を擦りつけながら質問を了承する。その
様子を見ている二体の死の騎士はうなり声を上げているが、彼らと繋
がっているパスから嫉妬のようなものを感じ取る。多分気のせいだ
ろう……。そうであって欲しい。

「それじゃあ、まずはそこでコソコソと不可視化して様子を見ている
奴に覚えはないか？」

「??? ああ、確かによそ者の匂いが微かにするでござるな。某はこの
辺りから出たことがないゆえ、その外にいる者の事は分からないでご
ざる……」

「確かにいますね。微妙な音や匂いまでは消せてないから完全不可視化ではないみたいですけど」

既に気づかれているのを指摘されたからか、不可視化を解除して現われたのは蛇の胴体を持つ上半身は人間の老人の姿をした異形であった。

「東の巨人を屠り、儂の透明化を見破るとは、おぬしはただの人間ではないな？」

「ナーガか。お前もこの近辺を狙ってやってきたのか？」

「東の巨人に大きな動きがあると知って駆けつけてきたんじや。状況次第では選択肢にあったが、それはもうなくなったわ。ああ、儂の名はリユラリユース・スペニア・アイ・インダルンじやよ。この森から見ても西側を支配しておる」

リユラリユースと名乗ったナーガは自己紹介を交えながら自分が来た理由を伝える。

平然としているように見えるリユラリユースだが、その内心はいつ東の巨人を屠った即死魔法を自分に向けられないか気が気でなかった。

「西側にこのようなものがいたとは、某は知らなかったでござる」
「……なあ、お前。森の賢王って呼ばれているんだよな？」

「昔、某の縄張りに入ってきた人間の戦士が某の事をそう呼んだでござるよ。そういうえば、中々カッコいい名前だったからその戦士だけ生かして返してやったでござる。懐かしいでござるな」

「人間から見たら、獣の姿をしたモンスターが人の言葉を介して魔法を使えば賢き者と思っても仕方がないじやろう。特にこやつ以外に同種を見たことが無ければなおさらのう。ちなみに儂は西の魔蛇と呼ばれておる」

森の賢王と呼ばれる由来にモモンガはがつくりと肩を落とす。

「なるほどなあ。森の賢王というよりは、森のジャイアントハムスターの方がしっくりくるな」

「そのジャイアントハムスターというのは、某の種族の事でござるか？」

「ああいや。昔仲間が飼っていたペットにお前を掌サイズにしたようなのがハムスターっていう種族だったから、そこから勝手に考えただけ」

「なんと！ 某に似たものをペットにしていた御仁がいたとは！……でもその大きさでは子孫を残すのは無理そうでござるな……。他に某と番になれそうな同族は知らないでござるか？」

「ごめん、俺が知ってる範囲だと大きくても数十センチがやっとだから、お前とは厳しそうだよ」

「そうでござるか……。ではやはり某は一人なのでござるかなあ……。子孫を作れなくては生物として失格でござる……。どこかに同族がいるならば、会いたいでござる……」

ペロロンチーノの言葉で髭が力なく垂れる森の賢王に、モモンガはかつて独りぼっちでギルドを維持し続けていた自分を思い出す。

かつて仲間がいたかどうかという過去の違いはある。現在ペロロンチーノがいるという違いもある。

しかし、この森の賢王は独りぼっちだった頃の自分をどうしても思い出してしまい、放置することはできなかった。

「森の賢王、リユラリユース。提案があるんだけど、いいか？」

夕方過ぎ、モモンガ達はカルネ村へ戻ると、村の村長や村人たちと出会った。

「おお、モモンガ殿。ご無事で何よりです。森の方から聞いたことがない咆哮が聞こえてきたので、心配しておりましたぞ」

モモンガ達の無事を安堵する村長に対して、村人たちの中にいたラッチモンは顔が引き攣ったままだ。

「なあ、モモンガさんたち。俺も野伏レンジャーのはしくれだから分かるんだけどよ……。後ろに何を連れてきたんだ？」

「森を調べていたら、森の賢王がここからずっと東を支配しているトロールのリーダーに襲われています。助けたら懐いたので連れて

きたんです。来てくれ」

モモンガに呼ばれ、ゆっくりと物陰からパールホワイトの毛を持つ、森の賢王が姿を見せる。村人たちは驚愕の表情で数歩後ずさった。

「まあ、この凶体ならば普通は初見だとビビるよね」

「ラッチモンさん、安心してください。森の賢王もといハムスケには、私たちの方から村の人たちを襲わないようにしっかりと言い聞かせてあります」

「ハム……スケ？」

「ええ、森の賢王という通り名では堅苦しいと思ひまして、親近感を抱きやすいようにと名前を付けさせていただきました」

モモンガが危険性がないことをアピールするように、ハムスケに近づくとわざとらしく体を撫でまわした。

「まさに殿の仰る通りでございます。このハムスケ、殿たちに誓って、皆々様にはご迷惑をおかけしたりはせぬでございますよ！」

モモンガを主と仰いで宣言するハムスケ。

モモンガ達としては、初めはこの巨体から警戒心を抱くのは仕方ないが、見慣れてしまえば元々の外見は可愛いハムスターなのだから警戒心も薄れるだろうと考えていた。むしろ、森の賢王を騙っていると思われる可能性の方を心配していた。

しかし、その予想は大きく外れることになる。

「……凄え、これが森の賢王！　なんて立派な魔獣なんだ！」

「……えっ？」

「今まで森の賢王の縄張りのおかげでカルネ村は無事だったが、こんな立派な魔獣ならば村ができて100年たっても危険なモンスターに襲われなかったのも頷ける！」

「なんと深い英知を秘めた瞳なのでしょう。ありがたやありがたや……」

村人は口々に森の賢王を称賛し、村長などその場で感謝の祈りを捧げ始める。

長年、森の賢王の恩恵を受けてきた村の住人だからありがたがるの

は分かるが、いささか過大評価しすぎではないだろうか？

「こいつの瞳とか、可愛いと思うんだけどなあ……」

ペロロンチーノのぼやきに、その場にいた村人手たちは大きく目を見開いた。

「ペロロンチーノ殿、貴方はこの魔獣を可愛らしいと思うのですか！」

「人間と亜人だと、見え方や感じ方も大分違うのか……！」

「モモンガ殿もこれほどの魔獣に名前を付けるくらいに親しみを覚えているし、さすがとしか言いようがありません」

「ええ……!?!」

村人たちの驚きの言葉に、モモンガとペロロンチーノは自分達との美的センスの違いに戸惑う。

モモンガもペロロンチーノも、異形種となったことで自分たちの美的センスが変わってしまったのかと悩んでいると、何かに気が付いた村長が不安そうに問いかけてきた。

「それで、モモンガ殿は森の賢王を連れてきて如何するおつもりなのでしょう？ もし森から連れ出すとしたら、森の賢王の縄張りが無くなることでこの村にモンスターが襲い掛かったりしないでしょうか？」

村長の不安に対して、ハムスケは話し始める。

「その事についてでござるが、実は東の巨人を討ち取った後にやってきた西の魔蛇と呼ばれるナーガと相談して、森に近い村や比較的森の浅い所にやってきた人間を襲わない事などの幾つかの条件を呑ませる代わりに、某や東の巨人が支配していた縄張りを譲ったのでござる」

「その取り決めには私たちも立ち会っています。討伐した東の巨人と違って西の魔蛇は理性的でしたので、約束を破ったりはしないでしよう」

実際はモモンガがハムスケとリユラリユースに提案した内容なのだ、村に来たばかりの魔法詠唱者マジック・キャスターよりも、結果的にだが長い間カルネ村に平穏をもたらしていたハムスケから話させた方が契約の信頼性は高く感じるだろうと考え、ハムスケに話させたのだ。

この契約を結ぶ際にモモンガは自分が人間ではなくてオーバーロードであることをハムスケとリュラリユースに伝えて素顔を晒し、ハムスケが腹を見せてひっくり返ったりしたが割愛する。

ハムスケにとってはどこかにいるかもしれない同族を探しに行けて、リュラリユースにとっても森の強者と敵対することなくトブの大森林を支配下に置ける。モモンガ達から見てもトブの大森林の生き物たちにかけて迷惑を有耶無耶にしながら騒ぎを終息できるし、村人にとっても森の浅い所安全を以前より楽に確保できると様々な方面で得をする契約になったのではとモモンガは考えている。

ちなみに2体いた死の騎士デス・ナイトの内1体は制限時間を過ぎて消滅したが、死体を取り込んで召喚されたもう1体は残ったままだったので、監視と護衛を兼ねてリュラリユースに付き従わせている。

「それと、ハムスケを連れて如何するつもりかという事についてですが、あと数日程村で宿泊させていただいた後は準備が整い次第、旅を続けようかと思っています」

「村の子供たちと遊ぶのも楽しいけれど、俺もモモンガさんも色々な所を見て回りたくて旅をしているからね」

「某も殿たちの旅のお供をさせていただくでござるー!」

モモンガ達の言葉に、村長やラツチモンを含む村人たちがザワザワと相談をし始めて、やがて村長がモモンガ達に向き直った。

「分かりました。皆様の言葉を信じさせていただきます」

「ありがとうございます。出発するまでの間はハムスケも村に置かせていただきますが、その間の食事は森の中で採らせますので大丈夫です」

村長の言葉にモモンガは内心でガッツポーズをとりながら、平静を装う。

ハムスケを森から連れ出すのは、言ってしまうえば自分の我儘なのだ。

ハムスケを連れていくことにペロロンチーノが難色を示していたならば諦めていたが、彼も結構乗り気だったことも後押ししていた。

孤独だったハムスケに同情したのもあるし、現地で有名な存在を引

き連れていけば他にもいるかもしれない他のユグドラシルプレイヤ―、正確に言えばギルドメンバーの耳に入るかもしれないという打算もある。

こうして、トブの大森林で起きた出来事を解決したモモンガ達はハムスケを連れて宿泊している家に戻っていった。

第五話 「騎士の襲撃」

「ふわあ〜。あれ？　ここは……ああ、思い出したでござる。昨夜は村で一晩過ごしたのでござった」

早朝、ハムスケはカルネ村で目を覚ました。

簡単に身繕いをしてから朝食のために森へ向かおうとする途中、井戸で水を汲んでいる胸元位の長さに伸ばした栗毛色の髪を三つ編みにしている少女——エンリ・エモットと出会った。

「おはようでござる、村人殿」

「おはようございます……っへ？　きやつー！」

声を掛けられたエンリがハムスケの方に振り向くと、驚いて甕に汲もうとしていた水桶を井戸に落としてしまう。

「す、すみません。森の賢王様、驚いてしまって」

「こちらこそ仕事を邪魔してしまって申し訳ないでござる」

「いえ、森の賢王様が謝る事ではありません。それで、何か御用でしょうか？」

「朝食を採りに森へ向かう途中で村人殿を見かけたので、一声かけておこうと思った次第でござる。この時期は瑞々しい果実が実る頃でござるから、ついでに幾つか村人たちの分も持ち帰ってくるのでござるよー！」

「そんな、良いんですか!？」

「構わないでござる。短い間とはいえ殿たちや某の寢床を用意してくれているささやかな御礼でござる」

「あ、ありがとうございます。森の賢王様」

ハムスケの心遣いにエンリは恐縮しながら感謝の言葉を述べる。

村で果物を食べる場合、大抵は保存性を良くするために干し果実にしてから食べるので、瑞々しい果実を食べる機会というのは意外と少ないのだ。

「そういえば、名前は何といたのでござるか？　某は殿たちからハムスケという名前を頂いたのでござるが」

「私ですか？　私はエンリ、エンリ・エモットと言います」

「エンリ殿でござるか。……うむ、村人殿と呼ぶよりもずっと親しくなれたような気がして良いでござる。某の事は気軽にハムスケと呼んで欲しいでござるよ」

「分かりました。ハムスケ様」

「それではエンリ殿もお仕事頑張つて……ん？」

お互いに名前で呼ぶのを確認したハムスケは満足そうにしながら森へ向かおうとするが、途中で足を止めて耳と鼻をひくつかせ始める。

「ど、どうかしましたか？ ハムスケ様」

「エンリ殿。この村に馬に乗った集団が近づいているのでござる」

「一体、何でしょうか？」

「某が様子を見てくるから、エンリ殿は殿たちにこの事を伝えて欲しいでござる」

ハムスケはエンリに言伝を頼むと、来訪者の集団を感じ取った方向へ走り出す。

エンリは漠然とした不安を抱きながら、ハムスケに言われた通りモモンガ達が宿泊している家屋へと向かうのであった。

モモンガとペロロンチーノは宿泊している家屋の中で、交代で正面に据えられた鏡の前で何やら珍妙な動きをしていた。

直径1メートルほどの鏡の中に映っている像は、二人の姿ではなくて草原で、二人が手を動かす度にその光景も様々に動く。

二人の目の前にある鏡の名は遠隔視の鏡。指定したポイントを映し出すマジックアイテムで、一見すると便利そうだが低位の対情報系魔法で簡単に隠蔽されるうえに、さらには攻勢防壁による反撃を受けやすい欠点があることから微妙系に数えられるアイテムだ。

手持ちのアイテムを確認するついでに整理していたら出てきたこれを見たペロロンチーノが、その場のノリで使ってみようと言いだしたのが始まりである。

「この動きだと……画面をスクロールして、こうやると視点変更して同じ場所を観察するののか」

「うーん。いくつかの動作は分かっただけど、もうちょつと俯瞰した画面じゃないと見られる範囲が狭いな」

「ユグドラシル時代ならばコンソールで簡単に操作できたんですけどねえ」

モモンガが言うように、使い始めてみるとこれもこの世界に来てから使い方が変わったアイテムだったようで、それまでは表示されたコンソールで操作していたのが手の動きに反応して操作することが分かり、現在その操作方法を検証中である。

正直に言うとは既に鏡の操作に飽き始めているが、あともう少しで使い方が一通り分かるまで来ているのにそれを投げだすのもなかなかと思い、せめて俯瞰の高さを調整するやり方が分かるまではと惰性で続けていた。

モモンガが虚ろな面持ちで適当に手を動かしていると、鏡に映る光景の視点が大きく変わった。

「おっ！」

「おおっ！ 一気に映る範囲が広がりましたね、モモンガさん。どんなふうに動かししました？」

「えつと……確かこんな風だった気がするから。よしよし、そうなる」と反対に動かせば……やった！」

何度か似たような行動を繰り返して俯瞰の高さ調節の方法を特定すると、モモンガは一旦鏡の操作を手放して背伸びする。アンデッドの肉体なので疲労はしないが、気分的な疲れはじわじわと溜まっていつているような気がしたからだ。

「お疲れ様、モモンガさん」

「いやー、中々結果が出ない間はいつまで続けるんだって思っちゃいますけど、こうやってひと段落すると達成感がありますね」

「そうですね。それにしても、麦畑ってこうやって見ると綺麗だね。昔の小説なんかでは黄金のカーペットとか表現していて本当かよって思っていたけど、ブルー・プラネットさんはこういう光景を見た

かったのかもしれないよ」

「ブルー・プラネットさんがこの世界に来ていたら、どれだけ興奮していたかなあ」

アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーにして現実世界ではほとんど失われてしまった自然をこよなく愛した男の事を二人は思い出す。

すると、玄関の扉がノックされる音が響いてきた。

「ん、誰だ？ ……はい、どちら様ですか」

ギルドメンバーとの思い出を思い返すことを邪魔されたことにモモンガは少し苛立つが、気を取り直して遠隔視の鏡をしまう。建物の中などは見れないにしても、村人たちを観察できるアイテムを出したままにしておくのはあまり良くないだろうと考えての事だ。

「失礼します、モモンガさんとペロロンチーノさんですね。ハムスケ様から伝言を預かってきました」

「君は……ネムちゃんのお姉ちゃんのエンリちゃんだね。どうしたんだい？」

入ってきた少女は、昨日ペロロンチーノと一緒に遊んでいた子供たちの姉のようだ。自分達にはさん付けでハムスケに対して様付けなのは、やはり森の賢王として結果的に村を守ってきた100年間の違いだろう。

それにしてもハムスケからの伝言とは、一体何があったのだろうか。

「ハムスケ様が馬に乗った集団を感じ取ったと言って様子を見に行ったので、モモンガさんたちにもそのことを伝えて欲しいとの事です」
「馬に乗った集団？ 一体何だろう？」

「トブの大森林で発生した現象の調査隊とかでしょうか？ とりあえず、ハムスケの所に行くからペロロンチーノさんは村の周辺を一応見張ってくださいませんか？」

「分かったよ。モモンガさんも気を付けて」

カルネ村に近い草原に隠されているような街道に、十人を超える複数の人影がそれぞれ馬に騎乗して歩を進めていた。

全員が面頬クロースド・ヘルムつき兜を被り金属製の全身鎧を着こんでいて、胸元にはバハルス帝国の紋章が刻まれている。

「ふわあ……、次はこの先の村だ。とつとと始めるぞ」

隊長と思しき男が、欠伸をしながら部隊に命令を下す。その男からは緊張を感じさせる雰囲気は皆無であった。

隊長の不真面目な態度に、部下の一人であるロンデス・デイ・グランプは面頬クロースド・ヘルムつき兜で相手に表情が見えないことに感謝しながら顔を顰める。

隊長の名はベリユース。祖国であるスレイン王国ではある程度の資産家で、戦士としての力量も心構えも素人にもかかわらず箔を付けるために今回の作戦に参加している。

実際、この男はある目的のためにバハルス帝国の騎士に偽装してリ・エステーゼ王国の城塞都市エ・ランテル周辺の村々を襲撃する今回の作戦で、村娘に襲い掛かって己の下衆な欲望を発散しては部下に殺害させるような、品性を疑わざるを得ない行動を度々行っている。

「ああ、そうそう。若い女がいたらすぐには殺さずに連れて来い。お前たちにも少しは役得を与えてやる」

にやついた顔でそんなことを指示するのだから、今回も同じようなことをするつもりなのだろう。

この言葉に対する反応は侮蔑と歓喜の二つに綺麗に分かれている。侮蔑は元々祖国の部隊に所属する正規の軍人たち、そして歓喜は今回の作戦に当たってベリユースが部隊に加えた子飼いの連中だ。

上官でさえなければ叩き切りたいし、子飼いの連中がいなければ事故死に見せかけて始末したいところだ。しかし、どちらもできない以上は不平不満を飲み込んで本来の命令を淡々とこなすしかない。

せめて自分たちの様な正規の軍人が見つけたならば、下衆な連中に貞操を汚されずに殺してやることもできるから、そうなることを祈る

くらいだろう。

ロンデスがそんなことを考えていると、何かに見られているような違和感を覚えた。降りた馬たちもどこか不安そうにして周囲を見回している。

他の正規の軍人たちも同じような違和感を覚えているようだが、ベリユースとその子飼いの連中の多くは気が付いた様子が無い。

「おいお前ら、何をしている。とつとつこの村の人間を殺しに行くぞ」
それどころか子飼いの連中の一人であるベランジェはロンデス達に対して怒鳴りつける。

この男は人間を殺しても咎められないことを理由に今回の作戦に参加した危険人物だ。ベリユースに取り入り、率先して村人を惨たらしく殺して回っている。

最近ではバハルス帝国の戦力が増している一方でリ・エステイーゼ王国の衰退が進み、王国に巢食っている裏組織が密造している麻薬などと一緒にこのような人物が王国から流出することが各国で問題になっている。

ロンデスが苛立ちながら従おうとしたとき、何処からか深みのある静かな声が響いた。

「聞き捨てならない言葉が聞こえたでござる。そなたらはこの先の村の者たちに害をなすつもりでござるか」

「だ、誰だ！」

ベリユース達は一部を除いて声の主を探そうと左右を見渡し、ロンデス達は咄嗟に息の合った動きで外向きの円陣を組んで警戒する。

「某は森の賢王。この村を諦めて早々に立ち去るならば、某は追わないでおくが……、どうするでござるか？」

森の賢王という名前に多くの者が驚愕し息を飲む。トブの大森林を支配する、数百年の時を生きると言われている伝説の魔獣の名だ。

目撃情報は極端に乏しいが、魔法を操り蛇の尻尾を持つ白銀の四足獣だと言われている。

もしも本物ならばとても自分たちが敵う存在ではない。そうであってもこの人数の騎士に気づかれることなく接近する技量の持ち主

を相手にしては無用な犠牲が出ることになりかねない。

しかしそのことに全く気が付いていない愚か者がいた。ベリユースだ。

「はんっ！ 森の賢王だか何だか知らないが、所詮は寂れた村でイキがっている程度の奴が何を言う。隠れている奴を始末したら、そのまま向かうぞ！」

「それがそなたらの選択でござるか。それでは命の奪い合いをするでござる！」

その時、空気がしなったような気がした。そして金属が悲鳴を上げて凹む音が響き、ベリユースの身体が横方向に馬から離れて地面に倒れる。

被っていた面頬クロイズド・ヘルムつき兜は無残にも半分以上上げ、曲がってはいけな方向へと折れ曲がっているベリユースの頭部をぐちゃぐちゃに潰して地面に血だまりを作っていた。

驚いた馬がパニックを起こし、倒れたベリユースを勢いよく蹴り飛ばすと、カルネ村とは反対の方向へと走り去っていく。

「はて？ あれだけ啖呵を切ったのだから、見た感じ弱すぎても何かあると思っていたでござるが……もう終わりでござるか？」

蛇の様な鱗に覆われた尻尾が街道の脇の茂みへとゆつくりと戻ると、声の主は困ったような声を出して困惑しながら茂みを掻き分けて、その姿をロンデス達に晒す。

「なっ！ こ、これが……森の賢王！」

「や、やべえ。俺たちの手に負える相手じゃねえ！ なんてことしてくれたんだよ、ベリユース隊長！」

「抵抗できない連中を殺すだけの簡単な任務じゃなかったのかよ！」

森の賢王の姿を見た騎士たちは大きく目を見開き、先ほど死んだベリユース隊長の愚かな行為を口々に非難する。

「ど、どうしてこんな巨大な魔獣の接近に誰も気がつかなかったんだ！」

「それは某が隠れながら近づいたからでござるよ。丁度このように！」

「っへ？」

誰かの叫びに対して、森の賢王は白銀の体毛に包まれた体に浮かんでいる奇怪な文字にも似た文様を輝かせると、ベランジエに急接近して鋭い爪の生えた前足でその首を刈り取る。

刈り飛ばされた頭部はぽかんとした表情のままクルクルと宙を舞って地面に落ち、頭を失った体が崩れ落ちると、すかさず尻尾による突きがロンデスの隣にいた騎士の頭を打ち抜いた。

瞬く間に二人の命が奪われたが驚くのはそこではない。驚くべきなのは爪が肉を裂き骨を断つ音も、ベリユースを屠った時の様な尻尾クロースド・ヘルムと面頬つき兜がぶつかり合う金属音もないままにこれらの行為が行われたことだ。

よく見ると森の賢王の輪郭がぼやけ、姿を把握しにくくなっている。

「《静寂》サイレンスと《溶け込み》カモフラージュの同時併用……！」

ロンデスは森の賢王が伝承通りの存在であったことに戦慄しながら呟く。

魔法詠唱者の多くは肉体的には脆弱であることが多い。しかし、目の前にいる森の賢王は複数の魔法を同時にこなした上で騎士たちを一撃で屠る優れた身体能力を保有している。しかも、森の賢王に刻まれている紋様は複数あり、まだまだ使える魔法がある可能性も高い。

それらからロンデスが導き出した結論は、

「——総員撤退だ！ 展開済みの弓騎兵を呼び戻せ！ 残りの人間は、笛を吹くまでの時間を俺と共に稼ぐぞ！ なんととしても、この情報を本国に持ち帰るんだ！」

ベリユース隊長が死亡した事で生まれた指揮系統の空白を、自分で代替しての撤退命令であった。

その判断自体は間違っていない。しかし、そう判断するには遅すぎた。

「今更逃げる気でござるか？ 警告を無視しておきながら、某が黙って見過ぐすでもっ！」

「そうだな。話を聞くにこのまま逃げられるのは面倒だから、まとめ

て捕まえるとするか。《マス・ホールド・スピーンズ集団全種族捕縛》」

森の賢王とはまた別の声が空から聞こえた。

ロンデス達が上空に目をやると、漆黒のローブを身にまとい無骨なガントレットを両腕に嵌めて奇妙な仮面を被った魔法詠唱者と思しき者が浮遊しており、何かを唱えるとその場にいた騎士たちがその場に固定されたかのように動けなくなる。

自身の身体なのに指一本動かせない事に騎士たちが狼狽する中、地面に降り立った魔法詠唱者はこめかみの所辺りに指をあてて新たに魔法を唱えてぼそぼそと話すと、程なくして黄金の鎧を纏った鳥の巫人がやってきた。

「言われた通り、村の周囲を囲んでいた騎士たちは無力化しておいたよ。モモンガさん」

「お疲れ様です、ペロロンチーノさん。ハムスケも良くやったな」

「いやあ、それほどでもないでござるよ。それで、この者たちはこのまま殺すのでござるか？」

「いや、皆殺しにするのは容易いが、それではどうしてこの村を襲おうとしてきたのか分からないままになるからな。こいつらから情報を引きずり出すつもりだ。ハムスケ、生きている騎士たちの中で偉そうなのは誰だ？」

「それならば、この男でござる。もつと偉そうにしていたのは某が殺してしまったでござるが、先ほど他の者たちに命令していたからきつと他の騎士たちよりは偉い筈でござるよ」

そう言つてハムスケと呼ばれた森の賢王が指さしたのは、ロンデスであった。

「そうか、色々話を聞かせてもらおうとしようか。《ドミニオン支配》」

モモンガが唱えた精神魔法によって、ロンデスの意識を完全に支配する。瞳から光が失われ、自由意志を喪失したロンデスはもはやモモンガの完全な支配下にある。

「さて、まずは——」

モモンガはロンデスに対してどの国の所属なのか、この場にいる騎士たちは何名いるかを問いかける。

意識を支配されたロンデスは澱みなく自分たちがスレイン王国の所属であること、そして散開済みでこの場にいない騎士たちの人数を答え、ペロロンチーノが屠った人数と一致することをモモンガは確認する。

そしてモモンガが三回目の質問として、どうしてカルネ村を襲うつもりだったのかを問いかけ、バハルス帝国の騎士に偽装してリ・エステイーゼ王国の王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフをおびき寄せたためだを答えた後、ロンデスは突然吐血して息絶えた。

「……っえ？　なんで死んだの？」

突然の情報源の死にモモンガも思わず間抜けな声をあげるしかなかった。

「……はあ、思ったより面倒ごとが舞い込んでくるな、この村は」

モモンガは、カルネ村で宿泊している家屋の中でため息をつく。

村長には事情を話して王国戦士長との縁はあるのかを確認したが、困惑した表情で村長は心当たりがないと言っていた。

ペロロンチーノは不安がっている村の子供たちを落ち着かせるために、彼らと遊んでいる。

その後、他に生きている騎士にも同様に《支配》ドミニオンをかけて尋問したが、何故王国戦士長をおびき寄せる必要があるのかの詳細を知る者はおらず、三回目の問いかけに答えると一様に吐血して息絶えたので、ペロロンチーノが無力化した数人を村から持ってきてもらった縄で拘束して広場でハムスケに監視させている。

騎士たちを全員始末することも考えたが、この後来る可能性がある王国戦士長なる人物に引き渡した方が恩を売ることができるだろうという打算があつてのことだ。

それにしても、昨日ハムスケを森から連れ出したことがこのような結果を生むとは思ってもみなかった。ハムスケがいなかったら、なんだかんだ気が緩んでいた自分達では騎士たちが近づいてくるのが遅

れて村に犠牲者が出ていたかもしれない。

その分ハムスケは朝食を採りに森に行けなかったが、村人たちから感謝と共に収穫された野菜を貰えてご満悦のようだったから、気にしてはいないだろう。

それに、エンリという少女がハムスケからの言伝を頼まれて自分たちの所に来てくれたから、ペロロンチーノが散開済みだった騎士たちに対処できたし、捕らえた騎士たちから不十分ではあるが情報を得ることができた。

そう考えると、後味の悪い結果にはならず済んだのではないだろうか、モモンガはそう思うことにする。

……実は騎士たちから引き出した情報の中で、村長に伝えていない事が幾つかある。現場とは別に騎士たち全体に指示を下している部隊の存在だ。

王国戦士長を始末するために動員されている特殊部隊のようで、本来ならばその戦力も明らかにしたかったところだが、信仰系魔法詠唱者の集団である以外は騎士たちも知らなかった。把握しきれないところが多いため、不安がらせないようにするために伝えなかったのだ。

(最悪の場合、王国戦士長を囚にして村の人たちを逃がす必要もあるな)

そう考えたところでモモンガはふと自分がカルネ村の人たちを死なせない方向で考えている事に気がつく。

初対面の時には蟲に向ける程度の親しみしかなかったが、話してみたりすると小動物に対して向ける程度には愛着が湧くし、寝泊まりしてみると割と親しみを覚えているのだ。

「ははっ、ペロロンチーノさんのことを言えないや。俺も大分絆されているじゃないか」

モモンガは自嘲するように言うが、この感覚は嫌ではなかった。

恐らくはペロロンチーノも一緒だからこそ、アンデッドの肉体と違って強い精神の起伏を抑え込まれるようになってもお、感情を残すことができているのかもしれない。

これが独りぼっちだったらば、どうだっただろうか。もつと自由気ままな旅をしていたかもしれないが、何も思わずにこの村を見捨てたりしていたかもしれない。

そう考えると、巻き込んでしまったペロロンチーノには申し訳ないが、彼がいてくれることはとても心強く感じた。

「ここまで愛着が湧いているんだ。ペロロンチーノさんとは相談する必要があるけど、この村がもうちよつと安全で豊かに暮らせるように何かしてやっても良さそうだな」

モモンガは独り言を言いながら宿泊している家屋を出ると、村長を探し始める。こういうのは相手の話を聞いてどういったものが好ましいかを聞かないと、相手が喜ばない贈り物をしてしまうから気を付けるようにとギルドメンバーの誰かが言っていた気がするからだ。

村長はすぐに見つかった。広場のすぐ隣でハムスケや数人の村人たちと真剣な表情で話をしている。

また厄介ごとだろうか……モモンガは村長の元まで近づくと、村長もモモンガに気がついたようで緊迫感を浮かべていた表情が幾分か和らいでいるのが見える。

「……どうかされましたか、村長殿」

「おお、モモンガ殿。実は森の賢王がこの村に馬に乗った集団が再び近づいてきていると仰っていました。ラッチモンが確認したところ、戦士風の者たちが近づいているとのことなのです」

「なるほど。王国戦士長の容姿やどういった装備をしているのかは分かりますか？」

「いえ、王直属の精鋭兵士達を指揮する方だとは以前訪れた商人たちが話しておりましたが、どのような姿をしているかなどは……」

「そうですか……任せてください。村人たちを村長殿の家の近くに至急集めてください。俺はこれから魔法でペロロンチーノさんにも連絡を取るので、村長殿は俺達と一緒に広場に」

鐘を鳴らして村人を集める一方で、モモンガから《伝言》^{メッセージ}を受け取ったペロロンチーノは村長の家の近辺に、ハムスケは拘束した騎士たちが逃げられないように配置する。

やがて村の広場へと隊列を組んだ複数の騎兵の姿が静々と進んでくる。

「武装に統一性がないし、各々にアレンジされているね……。正規軍じゃなくて傭兵なのかな？」

ペロロンチーノの呟きに、モモンガも同じような感想を抱く。

今朝方この村を襲おうとした騎士たちは完全に統一された重装備であったのに対し、今度来た騎兵たちは各々が使いやすいようにアレンジが施されていて一人として同じ装備の者はいない。

よく言えば歴戦の戦士集団だが、悪く言えば武装にまとまりがない傭兵集団だ。

そして数にして二十人の騎兵一行が馬に乗ったまま広場に乗り込んできた。ペロロンチーノとハムスケに警戒しつつ、村長とモモンガの前に見事な整列を見せる。その中から騎兵一行の中でもリーダーと思しき最も目を引く屈強な一人の男が馬に乗ったまま進み出た。

「——私は、リ・エステイーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしまわっている帝国の騎士たちを討伐するために王の御命令を受け、村々を回っているものである」

静かで深い声が響き渡り、モモンガの後ろの村長の家からもざわめきが聞こえてきた。

「この村の村長だな。横にいる者と、後ろにいる亜人について教えてもらいたい」

「王国戦士長殿。この方たちは数日前からこの村に宿泊している旅人たちで、この村がこの騎士たちに襲われそうだった所を未然に防いでくださった方たちです」

「初めまして、王国戦士長殿。私はモモンガ。ここから遠い所からこちらにいる友人のペロロンチーノと共に旅をしている魔法詠唱者です」

村長からの紹介に合わせてモモンガは軽く一礼して自己紹介を始めた。

それに対してガゼフは馬から飛び降り、重々しく頭を下げた。

「この村を救って頂き、感謝の言葉もない」

王国戦士長という特別な地位に就く人物が、身分が明らかでないモモンガと亜人のペロロンチーノに敬意を示して礼を述べることに周囲の空気がざわりと揺らいだ。

明らかにガゼフの方が上の立場であるにもかかわらず、態々馬から降りてモモンガに頭を下げることは、彼の人柄を雄弁に物語っている。

「……いえいえ、実際はこちらの森の賢王が騎士たちの接近に気がついてくれたから未然に防ぐことができたのです。礼は此方にお願います」

「なんと！ 森の賢王の噂は聞いたことがあったが、これほど立派な魔獣であったとは！ 森の賢王殿、この村を救って頂き、重ねて感謝する」

言葉が通じないことが多い魔獣に対しても実直に礼を示すガゼフに対し、モモンガ達は好感を抱く。

「某もこの村には殿と共に寝床を用意してくれた恩があったでござる。だから気にしないで良いでござるよ」

「森の賢王殿は喋れるのか！ 確かによく見れば、深みある英知を感じさせる瞳をしておられる」

ハムスケが喋れることにガゼフ一同は驚きの表情を見せるが、その上で本心から称賛する。

「……それでモモンガ殿、旅人のお時間を奪うのは少々心苦しいが、村を襲った不快な輩について詳しい説明を聞かせていただきたい」

「勿論喜んでお話させていただきます、戦士長殿。それと、こちらに捕らえている騎士達がその生き残りですので、後ほどそちらで引き取っていただけないでしょうか？」

「この者たちが……分かった。この者たちは此方で引き取ろう」

「二つ注意をしていたのですが、この者たちはどうやら無理に話を聞き出そうとすると、何らかの条件を満たして本人の意思に関わらず自害させられる呪いのようなものを受けているようです。その所為で、この村を襲おうとした理由を問いただす過程で幾人が死なせてしまいました。どうかご容赦ください」

「なんと！　そのようなものが……」

モモンガから伝えられた機密保持の呪いの内容を聞いたガゼフは、その悪辣さに言葉を失う。ちなみに一定回数答えさせると呪いが発動することを言わなかったのは、無事な回数範囲で聞き出せば死者は減らせたのではないのかと問いただされるのを防ぐためだ。

「さて、このまま立ち話も何ですし、モモンガ殿と戦士長殿を交えて私の家で詳しいお話をいたしませんか？」

「それはありがたい。それと、もし構わなければ時間も時間なので、この村で一晩休ませてもらいたいとも思っているのだが……」

村長の提案にガゼフが答え、村長の家に行こうとしたときだった。一人の騎兵が息を大きく乱して広場に駆け込んできた。

「戦士長！　周囲に複数の人影。村を囲むような形で接近しつつありますー！」

第六話 「陽光聖典 前編」

「なるほど……確かにいるな」

家の影からガゼフは報告された人影を窺う。

見える範囲にいる者たちは手に武器を持たず重厚な装備をしていないが、その一糸乱れぬ動きから相当訓練された者たちで、横に飛ぶように浮かんでいる光輝く翼の生えたもの——天使の存在が、彼らが魔法詠唱者であることを物語っている。

「あれが、騎士たちのバックについていた者たちですか。戦士長殿には心当たりはありませんか？」

「天使を召喚する魔法詠唱者がこれだけ揃えられるところを見ると、相手は恐らくスレイン法国の中でも噂に聞く六色聖典のいずれかだろうか」

「六色聖典？」

「ええ、噂ではあるが、スレイン法国の特殊工作部隊群としてそう呼ばれる存在があるらしい。こうしてみると、数にしても質にしてもあちらの方が上だな」

厄介だと言わんばかりに肩を竦める。態度こそ非常に落ち着いていたのだが、その内心は強い焦りと怒りを覚えていた。

ガゼフは短い時間だがモモンガと会話した中で、理由は不明だが騎士たちは戦士長をおびき寄せるためにこの村を襲おうとしていたことは聞かされている。

つまり、自分を始末するために村々は襲われて無辜の民が殺されていたことになる。

「戦士長という地位についている以上、貴族たちから疎まれるのは仕方がないことだが、それにしてもまさかスレイン法国にまで狙われるとは思ってもいなかったぞ」

鼻で笑うが、この状況をどうにかするにはあまりにも何もかもが足りなすぎる。

しかし、この状況でなお切札になりうる可能性があった。

「モモンガさん、あれって炎の上位天使ですよアークエンジェル・フレイムね？」

「そうですね。外見も非常に似ているけど、あの様子だと脇にいる魔法詠唱者が呼び出したモンスターでしょうか？ そうなると……」

ペロロンチーノと呼ばれた巫人の問いかけにぶつぶつと呟くモモンガに、ガゼフは僅かな希望を抱いて問いかける。

「モモンガ殿、ペロロンチーノ殿……良ければ雇われませんか？」

「うーん。俺は——」申し訳ありませんが、雇われること自体はともかく、直接戦うのはお断りさせていただきますでしょう——モモンガさん？」

悩んでいるペロロンチーノの言葉を遮るようにモモンガが断る。

「……理由を聞かせていただいても、構わないだろうか？」

「いくつか理由はありますが、あの特殊部隊と戦うために戦士長も私たちも村を出てしまうと、この村を守る戦力がなくなってしまうのが大きな理由ですね。村をがら空きにして人質にされてしまった場合、戦士長はいかがなさいますか」

「それは……」

「王国にとつての価値の大小で見れば村を見捨てるべきでしょうが、戦士長にはそれができないのでは？ その選択ができる人物ならば、今回の謀が判明した時点で早々に調査を打ち切っていたでしょう。だからこそ、人質という手段は戦士長である貴方相手には通用するものではありませんか？」

「……そうだ、大局的には愚かな選択であることは理解している。全体的ために一部を犠牲にしなければならないこともある。しかし、それを庇護すべき民に押し付けていいものではない」

モモンガの返答に対して、ガゼフは直接の協力は得られないことを理解する。

その上で、ガゼフは曲げることができない自分の考えを口に出した。

「それ自体は正しい事だと思いますよ。問題は、今回の相手はその部分を実いて戦士長を亡き者にしようとしている事ですから。それと、直接戦うことができない別の理由として、スレイン法国の国是との関係があります。あの国は、人間以外の他種族に対して敵対的な考えを

していると聞きました。そうになると、人間種ではない上に部外者である私たちが戦士長と共に戦う場合、後々の禍根を断つためにもあの特殊部隊は一人たりとも逃がすわけにはいかなくなります。しかし、相手の手の内が分からない段階で一人も逃がさないというのはとても難しいですし、できれば今後の旅に支障が出ないようにしたいのです」

「すまない、襲われた村々やあなた方にこのような迷惑をかけてしまったって」

「お気になさらず。それに、最悪の場合は私たちが護衛となつて村人を連れて、近くの都市に避難するように村長に説得するつもりです」

しばしの沈黙が流れる。モモンガは言い過ぎたかと不安になったが、ガゼフの表情と行動は良い意味で予想から外れたものだった。

「……本当に、本当に感謝する。無辜の民を暴虐の嵐から守ってくれただけでなく、再び村の者たちを守ってくださることに！」

表れた感情は感謝。予想外の思いを吐露されたモモンガ達は呆気にとられ、ガゼフの方からガントレットを外して差し出された手を思わず握る。

「もし王都に來られることがあれば、お望みの物をお渡しすると約束しようガゼフ・ストロノーフの名にかけて」

「え、ええ……分かりました。村人は必ず守りましょう。このモモンガの名にかけて」

「俺も村人たちを守りますよ。この、ペロロンチーノの名にかけて」

三人の名を挙げての誓いに、ガゼフの心はスウツと軽くなる。

「感謝するモモンガ殿、ペロロンチーノ殿。ならばもはや後顧の憂いなし。私は前のみを見て——」

「——ちよつと待つて欲しいでござるよ」

覚悟を決めて死地へ赴こうとするガゼフの言葉をハムスケが遮った。

「ハムスケ、どうした？」

「殿、某をガゼフ殿と共に戦わせて欲しいでござる」

「なっ！」

ハムスケの提案にガゼフは驚きの声をあげる。

「森の賢王殿……お気持ち嬉しいが——」

「——ガゼフ殿は某に対して恐怖も侮蔑の眼差しを見せずに純粹に感謝を告げてくれた御仁でござるから、某としては手助けしてあげたいでござるよ。それに……」

「それに？」

言い淀むハムスケに対してモモンガは続きを促す。

「殿たちがガゼフ殿と話している時、言葉とは裏腹になんとか楽しそうな気配がしていたでござる。まるで、殿たち同士で話している時みたいだったでござる！ そのような御仁をこのような形で喪いたくないでござるよ……」

しよんぼりと項垂れるハムスケの言葉に、モモンガはしばし放心する。

——こいつは何を言っているんだ？ 戦士長と話している時の俺が、ペロロンチーノさんと話している時見たいってどういうことだ？ ただ事務的に話していただけのはずなのに、何処にそんな部分があつたんだ？

混乱する思考を止めたのは、ペロロンチーノの言葉だった。

「……あーっ！ 戦士長の雰囲気はだれかと似ていると思ったら、たっちさんだ！ たっちさんと似ているんだ！」

「たっち……さん」

「ペロロンチーノ殿？ そのたっち殿という人物は、どのような御仁なのか教えてもらえないだろうか？」

「たっちさんはね、昔モモンガさんが酷い目に遭っていた時に助けてくれた聖騎士で、『誰かが困っていたら助けるのは当たり前』ってよく言っていたんだよ。懐かしいなあ」

「そのような立派な御仁とも知り合いだとは、御二人が羨ましい限りだ。私も、それを堂々とさえればよかったのだが……」

「そんな悲観することないって。戦士長だって自分の身が危ないって分かっていても村人たちを助けようとしていたんでしょ？ だってら十分立派だよ」

「お気遣い、感謝する。しかしそれならばあなた方にもその精神は受け継がれているようだな」

ユグドラシルでの自分^{モモンガ}を形作っていると言っても過言ではない恩人の台詞を聞いたモモンガは、息を吐き出すと笑みをこぼす。

この記憶を呼び覚まされたら、見捨てるなんてできるわけがないじゃないか。と。

人間の肉体を失い、生物ですらなくなり、その精神が変質しても、変わらない思いがあつたことを確認したモモンガはガゼフに向き直る。

これから行う行為ははつきり言えば無駄な行為なのだろう。むしろ、戦士長達も敵に回る危険性さえある愚かな行為だ。しかし、ペロロンチーノがたっち・ミーに似ているといった彼ならばあるいはと、希望を持って被っている仮面に手を伸ばす

「戦士長殿、私……いや、俺はあなたに隠していたことがあります」

「モモンガ殿が隠していた事？」

「えっ……モモンガさん、見せちゃうの!？」

「こんなタイミングで言うのも卑怯かもしれませんが……俺はペロロンチーノさんと違って、生物ですらないんです」

仮面を外して骸骨の素顔を晒す。ガゼフには驚愕こそあつたものの、騒いだり忌避したりするような様子はない。

その事を確認したモモンガは、再び仮面を被って逸る気持ちを抑えてガゼフに尋ねた。

「……何か思う所は、ありますか？」

「ただの旅人ではないとは思っていたが、まさかアンデッドだったとは……。しかし何故、私に正体を明かしたのだ？」

「ペロロンチーノさんがあなたの事をたっちさんに似ていると言った時、ハムスケの言ったことの意味が納得できて、貴方ならば頭ごなしに否定しないで見てくれるんじゃないかって思ってたんです」

「それは、モモンガ殿が仮面を外して素顔を晒した時、穏やかな表情に思えたからだ。通常のアンデッドは生者を憎み引きずり込もうとすると言われているが、モモンガ殿からはその様子は一切感じられなかった。稀に生者と取引を行う理性的なアンデッドがいるとは聞く

が、モモンガ殿はそう言った利害関係だけの繋がりとは違う、そんな気がしたのだ」

「やはり、貴方には正体を明かしてよかった。ちなみに、この村の人たちは俺がアンデッドであることは知らないはずです」

「そうか……分かった」

アンデッドという色眼鏡を通さずに自分を見てくれたガゼフにモモンガは安堵を覚えながら、これからどうするかの話を変えて切り出す。

「直接手助けすることはできませんが、代わりに魔法詠唱者らしく出来る支援をさせていただきます」

「というと？」

「戦士長とハムスケに対してできる限り補助魔法を掛けますので、その効果が残っている内に二人で相手を攪乱させてください。相手の力量がどこまであるのかは未知数ですが、どうやら第三位階の天使召喚魔法を主力としているようなので、相手がこちら側の實力を見誤っている内に一気に食い破りましょう」

「一騎当千という訳か」

「ええ、全体に薄く広く掛けるよりも少数に徹底して掛けた方が、効果は大きくなりますし効果時間も長くできます。それに、部下の騎兵を村に控えさせておくことで、相手にいつ奇襲を仕掛けてくるかを考えさせてプレッシャーを与えることにもなるでしょう。部隊全体に掛ける案も悪くはありませんが、戦士長の部下は物理耐性を持つ天使たちに単独で立ち向かえるほど精強ですか？」

「それは……おそらく難しいだろうな」

「であれば、防御魔法を多重に掛けた上で狙いを戦士長かハムスケに絞らせることで一騎当千の戦いに持ち込む方が有効でしょう。それと、饑別の品があるので少しお待ちを」

モモンガがそう言って家屋の中に入り、少しして出てくると、その手にはグレートソードが握られていた。それもただの武器ではないようで、中央を走る溝からはぬらぬらとした液体が刃へと伝わっている。

「その武器は……？」

「これはこの村の近くにあるトブの大森林、その東側を支配していたと豪語していたグというトロールが使っていた武器です。魔法の武器なので戦士長殿が持てば最適なサイズに変化してくれます。特殊能力そのものは格下相手にしか効果がないので大したものではないですが、それでもただのロングソードよりは物理攻撃に耐性がある天使たちに有効なはずですよ。どのみち俺達では扱えない武器なので、いざとなったら使い潰しても構いませんよ」

「しかしこれほどの武器を……いや、かたじけない。ありがたく借りさせていただく」

「ふふ……律儀な人だ。それでしたら一つだけ約束を。何としてもハムスケと共に生き延びてください。でないと、王都に来た時の楽しみが減ってしまいますからね」

「ああ。その約束、何としても果たして見せよう」

「さて、あまり時間はありませんが、戦士長の部下と村長たちにも手短かに説明して行きましょう」

そう言つて、三人と一匹は村の広場に向かって歩き出す。

絶望的な状況のはずなのにガゼフは先ほどまでの後を託して死地に赴く気持ちとは違う、絶対に生き延びるとい意志が沸き上がり、不思議と負ける気がしなかった。

「遅いな。奴の性格ならば村には立て籠らないと踏んでいたが、どうやら見込み違いだったようだな」

陽光聖典隊長であるニグン・グリッド・ルーインは、静かで平坦な声で呟く。

既に部隊の展開は完了し、獲物であるガゼフ・ストロノーフが出てくるのを待つだけになるが、なかなか出てくる様子が無い。

——所詮、腐った王国の戦士長も腐っていたという事か。

少しの失望感を抱いて村への攻撃を開始しようとした時、部下から

の報告が入る。

「隊長、獲物が村から出てきました。しかし、これは……」

「どうした……なんだあれは？」

ガゼフを発見した部下の困惑する様子を見たニグンが標的を確認すると、その容貌が歪む。

ニグンにとつて想定外であったことはいくつかあった。

一つは村から出てきた人間はガゼフのみであったことだ。最後に確認した時点では二十人近い部下とともに集団で行動していたにもかかわらず、部下を連れずに向かってくることで。村の守りに宛てているのか、あるいはガゼフに目が向いたところで強襲をかけさせるつもりなのか。

もう一つは標的であるガゼフが手に持つ武器。王国に存在する伝説の五宝物はもちろん、魔法の武具やミスリルやオリハルコンの様な上質な武具だって王派閥の力を削ぎたい貴族の横やりで取り上げられているはずだった。しかし、防具こそ普通だが奴が今手に持っている武器は明らかに通常の武器ではない、魔法の武器だ。

さらに、ガゼフ自身の様子もおかしい。元々ガゼフ・ストロノーフは表向き近隣諸国最強の戦士と言われているが、それでも英雄の領域を超える逸脱者ではなかったはずだ。しかし、今のガゼフは今にもはち切れんばかりの闘気と筋肉を内包した、伝説に描かれていそうな戦士となっている。

そして最後はガゼフが騎乗している存在。彼らは馬で移動を行っていたはずで、当然馬による突撃を想定していた。しかし、そのガゼフが騎乗している存在というのが――

「何だ？　あの白銀の魔獣は」

「あのような魔獣は見たことが無いぞ」

部下の言葉を聞き、自らも魔獣の姿を確認したニグンはその容貌が伝承に伝わるある存在に酷似していることに気がついた。

リ・エステイーゼ王国の王直轄領にある村々を襲わせていた部隊からの連絡が途絶えていた事と合わせると、ある可能性が思い浮かぶ。それを裏付けるように、ガゼフは戦いの口火を切るため雄叫びを上

げる

「行くぞ、森の賢王よ！　ともに奴らを打ち破り、この森と村に平穩を取り戻すぞ！　うおおおー!!!」

「承知でござる、ガゼフ殿！」

森の賢王と呼ばれた魔獣はガゼフを乗せたままさらに加速して向かってくる。

恐らくは、村を襲わせていた騎士たちはあの魔獣と鉢合わせして全滅したのだろう。それをガゼフは何らかの方法で魔獣の敵意を此方に向けさせて共闘に持ち込んだのかもしれない。

伝説の魔獣と名高い森の賢王がガゼフと共闘して牙を剥いてくる事態に、ニグンは舌打ちしながら隊員に命令する。

「散開している部隊を集結させ、天使たちを前面に出して壁にせよ。足を止めさせた後に魔法による飽和攻撃を行う。最悪、ガゼフを始末するだけでも構わん」

ガゼフと森の賢王の前に立ちはだかる天使たちの数は四十を超える。普段のガゼフならばこれだけの数の天使に塞がればその足を止めてしまう所だが、今の彼は違った。

「邪魔だあああー！」

森の賢王が天使たちの目前で右側に、ガゼフは飛び降りて反対側に向かうと、目前に迫る天使を一太刀で両断していく。

ガゼフが使用できる武技の中には、武器を一時的に魔法の武器化させる《戦気梱封》というものがあることはニグンも既に知っている。しかし、その武技を使用している間は武器に微光が宿るのだがその様子は見られない。つまり、ガゼフは今、手に持っている武器の切れ味と己の膂力のみで天使を両断したことになる。

森の賢王の方も蛇の様な鱗を持つ尻尾で天使たちを複数まとめて薙ぎ払い、鋭利な爪を持つ前足で引き裂いていく。

構成体を破壊されて、天使が続々と溶けるように消えていく。その光景は幻想的だが、陽光聖典の隊員たちにとっては悪夢にも思えた。

「つくー！　総員、魔法を放て！」

本来はガゼフ達を完全に止めてから魔法の一斉掃射に踏み切りた

かったニグンだが、天使たちがほとんど壁にならない以上、これ以上近づかれる前に開始しなければ接近されてしまう。

しかし、そうして放たれた数々の魔法はガゼフと森の賢王に届くことなく、直前で霧散した。

「つなあー！」

まさかの事態にさすがのニグンも狼狽の色を見せる。

第三位階魔法も含めた魔法の一斉掃射を防げるような方法は非常に限られてくる。それこそ魔法詠唱者殺しとして名高い骨スケリトル・ドラゴンの魔法耐性や、或いは六色聖典最強の部隊である漆黒聖典に与えられるような対魔のアミュレットぐらいだ。

王国にそのような希少な装備があるとは考えにくいし、有ったとしても貴族派閥の連中が取り上げているはずだ。

しかしガゼフと森の賢王に部隊の者たちの魔法が通用していないのが現実だ。

隊員の内何名かは、魔法の効果が無いと見るやスリングを取り出して礮を放つ。人間の骨ならば容易く砕くだけの破壊力を持つ、鉄製のずっしりした重みがあるスリング弾は狂いなくガゼフ目掛けて飛んでいく。

「ふんっ！」

数発のスリング弾をガゼフは最低限の動きで躲し、森の賢王に向かいそうな流れ弾はグレートソードで礮を放った部下にはじき返す。

「ぐああああー！ か、肩があああー！」

はじき返された礮を受けた部下が悲鳴を上げて倒れた。飛び道具対策の防御魔法を突き破ったそれを受けた部下は、威力が減衰していたおかげで生きてこそいるが、肩が砕かれて呻いている。体に走る激痛で治癒魔法を唱えられないためか、近くの同僚に治療してもらっている。

陽光聖典隊員の魔法は無力化され、スリングも下手な攻撃ではこちらに被害が出る。それに対してガゼフと森の賢王は相当数の天使を薙ぎ払いながら疲れの色は全く見せていない。

(このままでは拙い！ この状況を打破するには……………！)

こうしている間にも天使たちは再召喚されるそばから前線に出ている個体が次々と打ち倒されて消滅していく。その間隔は感覚は徐々に狭まっていき、隊員たちが再召喚に割かれる時間が伸びていくのに対応する様に、ガゼフ達の接近を許していつている。

ニグンは決断し懐から今回の任務の切り札として神官長から渡された、スレイン法国の秘宝の一つであるクリスタルを取り出す。このクリスタルの中に封印されているのは、二百年前に魔神と呼ばれる存在が大陸中を荒らしまわった際に、その内の一体を単騎で滅ぼしたと言われるスレイン法国最強の天使を召喚する魔法だ。

「最高位天使を召喚する！ 総員、時間を稼げ！」

ニグンの言葉に対し、隊員たちは天使をさらに召喚しながら魔法やスリング弾による濃密な弾幕を形成する。

ガゼフ達は召喚を阻止するために天使たちを切り伏せながら、防げる隊員の攻撃を無視して最短距離でニグンの下へ突き進んでいく。

瞬く間にガゼフは数多くの天使たちを切り捨て、ニグンが召喚していた上位天使——プリンパリティ・オウザベーション監視の権天使も森の賢王が仕留めてあと数十メートルにも満たない距離まで詰められる。

このままでは最高位天使の召喚に間に合わない。ニグンが戦慄した時、

「ニグン隊長、掴まってください！」

天使を再召喚した隊員の一人が炎のアークエンジェル・フレイム上位天使とは別の天使をニグンの下に向かわせる。その天使の直接戦闘能力自体は炎のアークエンジェル・フレイム上位天使と比べて劣るが、機動力に優れているので斥候や伝令などに利用されている。

部下の狙いを察知したニグンが向かってくる天使の腕に掴まると、天使はニグンを伴って戦場の後方へと空高く飛んでいく。

森の賢王は尻尾で天使を叩き落そうとするが、それをほかの天使たちが我が身を犠牲にして盾となり遮った。

「ははは！ 惜しかったな、ガゼフ！ 森の賢王！ この戦い、我々の勝利だ！」

そして、勝利を確信したニグンの手の中でクリスタルが規定の使用

方法に従って破壊され、光輝いた。

第七話 「陽光聖典 後編」

（魔法っていう奴は本当に何でもありだな。モモンガ殿には感謝するばかりだ）

天使たちを次々と切り伏せながら、ガゼフは笑みを浮かべる。

自分と森の賢王のみで行う作戦を部下に伝えた時には、反対の声が多く説き伏せるのに苦労したが、それに見合うだけの……いや、それ以上効果を発揮している。

息切れ一つ起こさず普段よりも力に満ち溢れ、身体も羽根のように軽い。そして本来ならば知覚できないような範囲と精度で相手を感じ取れている。

相手の攻撃は尽く意味を成さず、こちらの攻撃は一撃が致命のものとなる。まさに英雄譚に描かれるような無双の戦いをしているのだ。

これらは己の武技や切札による強化ではない。モモンガが自分と森の賢王に施した無数の魔法の恩恵だ。

これまでガゼフは魔法の凄さというものに対してピンとこなかったところがある。

王国と毎年戦争している帝国にはフルーダ・パラダインという第七位階、あるいは第八位階といった英雄譚や伝説にのみ残っている位階魔法を使える大魔法詠唱者が存在し、その存在は近隣諸国に轟いているが、その実力がどれほどのものなのかは、彼が王国との戦争に出たことが無いために知らないのだ。

モモンガが彼のフルーダ・パラダインと肩を並べるほどの魔法詠唱者なのかは分からないが、少なく見積もってもアダマンタイト級冒険者の実力を凌駕している技量の持ち主であることは明白だとガゼフは直感していた。

「最高位天使を召喚する！ 総員、時間を稼げ！」

敵の指揮官と思しき男の声が聞こえ、懐から虹色に輝くクリスタルを取り出す。

最高位天使という者がどれほどの力を有しているかは分からないが、だからこそ召喚を許すわけにはいかない。

ガゼフは密度が濃くなった天使の軍勢に加え、魔法とスリング弾の弾幕を切り伏せ、いなしながら、森の賢王と共に敵陣を最短ルートで突っ切っていく。

ガゼフの前を遮っていた天使たちを薙ぎ払い、メイスと円形の盾を持つ他よりも大きい天使を森の賢王が仕留めてあともう少しという所で、指揮官を天使が空高くへと連れて行ってしまう。

「ははは！ 惜しかったな、ガゼフ！ 森の賢王！ この戦い、我々の勝利だ！」

指揮官は勝ち誇った表情のままクリスタルが砕かれ、そこから光が輝く。

それは、隠れようとする太陽が地上に出現したかのようだった。草原は爆発的に白く染め上げられ、微かな芳香が鼻腔をくすぐる。

「見よ！ 最高位天使の尊き姿を！ 威光の主天使！」

トミニオン・オーソリテイ

それは光輝く翼の集合体だ。翼の塊の中から、王権の象徴である笏を持つ手こそ生えているものの、それ以外の足や頭の類は一切見られない。外見こそ異様だが、その姿を見せた瞬間から、周囲の空気が清浄なものへと変化していったために、誰もが聖なるものであることは感じ取れた。

「これが、スレイン法国の切り札……！」

「そうだ！ これこそが最高位天使の姿だ。本来であれば魔神との決戦の様な戦いでこそ使うべき代物だが、ガゼフ・ストロノーフ。今のお前たちにはそれだけの価値があると判断させてもらった。誇れ！」

お前たちの力は魔神にも匹敵することに！ 今回受けた任務さえなければ、本国が見限るほどにまで王国が腐り落ちていなければ……個人的にはお前たちを同胞として迎え入れたかったぐらいだ。だからこそ、せめてこのニグン・グリッド・ルーインはお前たちの事を覚えておくぞ。ガゼフ・ストロノーフ、森の賢王！」

上空からのニグンの称賛の声に対して帰ってきたのは、冷静に戦況を見極めてどうやって打破するかを考える言葉であった。

「森の賢王よ……いけるか？」

「今ならば、限界の壁を超えられれば勝てるでござるよ」

ガゼフは森の賢王と意見が一致したことに笑みを浮かべる。

普段の自分では王国の五宝物を装備していてもかなり困難な相手であろう。モモンガの魔法による強化が無ければ森の賢王と共闘していても不可能だ。しかし、今この時だけは、あの存在に勝てる可能性が僅かにだけがある。

単独での都市規模での破壊すら可能な最高位天使を前にしてもなお勝つことを諦めていない反応は、ニグンにとっても予想外であった。

「何？ 最高位天使を前にして、人の身で勝てるでも思っているのか！」

「ああ、やってみなければわからないだろう？」「そうでござるよ？」

希望と可能性に満ちた返答に、ニグンの思考は加熱していく。

「最高位天使よ！ この愚か者たちに《ホーリースマイト聖なる極撃》を放て！」

極めて一部の例外を除いて人間では到達不可能と言われる領域が魔法には存在する。それは第七位階以上の魔法である。

スレイン法国では大掛かりな儀式を行うことで、バハルス帝国では「逸脱者」とも「超越者」とも呼ばれる生きた伝説であるフールー

ダ・パラダインのみが達することができているが、最高位天使である

ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使は単独でその位階の魔法である《ホーリースマイト聖なる極撃》が使うことができるのだ。

「ガゼフ殿！」

「ああー！」

最高位天使による魔法の発動を前にして、ガゼフ達の動きは素早かった。ガゼフは森の賢王に騎乗すると、最高位天使に向かって走り出す。

今までよりもさらに早くなったことにニグンは焦りの色を浮かべ

ドミニオン・オーソリテイて 威光の主天使に指示を下す。

「早く放て！ 最高位天使！」

早急な魔法の発動を求める召喚者の思いに呼応して、

ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使は手に持つ笏を利用した特殊能力の使用を中断して無詠唱化した魔法を行使する

——
《聖なる極撃》
——

魔法の発動と同時に、光の柱が落ちてきた。

無詠唱化によって威力が下がっていても、悪しき存在ならば絶対なる清浄の力の前に跡形もなく消滅する。たとえ善なる存在でも一部分くらいは残るだろうが同じことだ。

そうでなければオカシイ筈の一撃を、ガゼフを乗せた森の賢王はさらに加速することで上空から落下してきた清浄な青白い光の柱をギリギリで躲して突き進む。

「躲した……だとお！ ならば最高位天使よ、《聖なる爆裂》を使い！」

ニグンが 威光の主天使に命じた《聖なる爆裂》は第六位階魔法。第七位階である《聖なる極撃》と比較すると威力は大分落ちるが、代わりに広範囲をまとめて攻撃することができる。

召喚者の命を受けて 威光の主天使が放った《聖なる爆裂》は、直撃こそ躲されたもののガゼフと森の賢王を巻き込む様に聖なる爆発を引き起こした。

「やったかー！」

《聖なる極撃》に威力で劣るとはいえ、それでも片手で数えるほどしか到達したものがいない第六位階の魔法を受けて生きていられる人間など居るはずがない。

それにもかかわらず、爆風によって巻き上げられた土埃からガゼフを乗せたままの森の賢王が跳び出してきた。

勿論無傷という訳ではない。《聖なる爆裂》によってガゼフの身体は所々が焼けて、森の賢王も白銀の毛皮が燃えて煙を上げている。

しかし彼らの戦意も速度も衰えることなく 威光の主天使目掛けで突き進み、森の賢王が跳びかかった。

威光の主天使は手に持つ笏で森の賢王を叩き落とそうとするが、叩き落とされる直前にガゼフが森の賢王から 威光の主天使へ飛び移って駆けあがっていく。

「な、何をするつもりだー！」

「この最高位天使とやらを、超えさせて貰う！」

ガゼフはそう言うと、大技である《六光連斬》を 威光の主天使の

胴体部にある赤い宝玉のようなもの目掛けて叩き込む。

本来ならば一撃を振るう刹那に、周囲の敵に六度の斬撃を叩き込む神速の武技で、攻撃がばらける命中率の低い剣閃という弱点があるので周囲を包囲された時などに使うべきである。

しかし、モモンガが自分たちに施した数々の強化魔法の恩恵を受け、さらには切札の指輪を解放して戦士としての能力が引き上げられた今の自分であれば、この六つの斬撃を完全に制御できるという確信がガゼフにはあった。

同時に放たれる六つの斬撃は寸分の狂いもなく一点に集約され、ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使の身体に僅かだが亀裂を入れていく。

それを二度、三度と《流水加速》と《即応反射》で無理矢理体勢を立て直しては、《六光連斬》に繋げて亀裂を広げていく。

だがそれだけでは致命傷には至らない。ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使がガゼフを振り払い、手に持つ笏が砕け始めるとその破片が周囲をゆっくりと旋回し始める。

ガゼフの戦士としての直観が、次の一撃を許せば危ういことを悟る。一撃で死に至る可能性もあるし、仮にそうでないとしても全力で戦うことができなくなるのは明白だ。そうなれば、ただでさえ細かい勝ち筋が途絶えてしまう。

その前に仕留めるためにさらなる一撃を放とうと空中で体勢を立て直し、森の賢王の螺旋を描く様に丸めた尻尾の先端に着地して、そのしなりと合わせて再びドミニオン・オーソリテイ威光の主天使に突貫する。事前に打ち合わせをしたわけではない、その場で何が必要かを互いに感じ取った行動だ。

一点に集約した連撃では突破できなかつた。ならば次に放つべきは確実にその生命活動を刈り取る一撃。

イメージするのはかつて王国で開催された御前試合の決勝戦で戦った戦士、ブレイン・アングラウス。汎用性を切り捨てて一点特化を突き詰めた、相手の急所に致命的な一撃を叩き込む彼のオリジナル武技《瞬間》。

模倣することができるとかという不安はない。もとよりただ模倣

するだけではこの最高位天使を仕留めることができないのは承知の上だ。

ガゼフが求めるのはそこからさらに昇華した究極の一撃。無意識の中で叫んだそれは、奇しくもある最強の攻撃と似通っていた。

「《次元斬》！」

それは、ユグドラシルに置いて最強の近接職と言われた職業であるワールドチャンピオンの切り札、ワールドブレイク次元断切。

本来ならば高い物理耐性を誇る ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使の身体を熱したナイフでバタを切るかのようにグレートソードが切り裂き、先に入っていた亀裂が広がっていく。

周囲を旋回していた笏の破片はその動きを止めて地面に散らばり、身体に走る亀裂が一周して繋がった時、最高位天使は左右に割れた。切断面から光の粒があふれ出し、翼の塊も光の粒に分解されながらバラバラになって周囲にまき散らかされる。

ガゼフは最高位天使が倒れたことで眩しさに眩みながら空中に投げ出されるが、地面に激突する前に森の賢王が自らの背中で受け止める。

「やったでござるな、ガゼフ殿！」

「ああ、森の賢王が協力してくれたおかげだ。俺一人ではどうしようもなかっただろう」

本当はここでモモンガの功績も讃えたいところだが、彼に迷惑をかけてしまうからそこはぐっと堪える。

断面から噴き出していた輝きが勢いを無くし、ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使という光輝の存在を失ったことで、周囲の光量が一気に落ち込んだ。

もはや、この戦いの勝敗は誰が見ても明らかなものとなっていた。

カルネ村の倉庫では、ガゼフと ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使の戦いをモモンガとペロロンチーノが遠隔視の鏡と幾つかの情報系魔法のスクロールを使つて映し出した画面と音声で観察していた。

敵部隊の隊長が最高位天使を召喚すると発言した時には、その手に持つ魔法封じの水晶——それも超位魔法以外は封じられる代物を見て熾天使セラフクラス級が出張ってくる可能性を考えて、ガゼフとハムスケをいつでも村に転移させてペロロンチーノが敵部隊に対して遠隔爆撃した後に、村人たちや戦士団と共に逃走する準備を進めていた。

結果ははるかに格下のドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使だったが、様々な強化魔法をかけられている二人でも魔法の時間制限もあつて厳しい相手のはずであった。

しかし結果はまさかの勝利。アルティメット・デイスターフ《究極の妨害》によつて二人の魔法耐性をかなり引き上げていたので ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使が行使できる魔法は1〜2回ならば耐えられる算段だったとはいえ、予想していなかった武技で大物狩りジャイアントキリングを果たしたガゼフに、戦士団や村人からは歓声が上がリ、モモンガは精神安定化が何度も発動しながら興奮しきりであつた。

「見、見、見……見ましたか！ ペロロンチーノさん！ ……ふう。……あれつて規模こそ小さいですけど次元断切ですよ！ ……ふう」
「つちよ、モモンガさん、何度も賢者モードになつてるよ!? どんだけ興奮しているんですか!」

「つとと、すいません。最後の武技の名前も次元断切ワールドブレイクと似ていましたし、何か関連性があるのかもしれないね。後で詳しく話を聞きたいです」
「ちやんとポジションとかで彼らの治療をしてからにしてくださいよ。それにしても、スレイン法国の敵部隊がユグドラシル由来の魔法やアイテムを使つてくるとは思わなかつたな」
「そうですね。ひよつとしたら、他のプレイヤーなんかもこの世界にやってきていたのかもしれない」

精神安定化の影響で落ち着きを取り戻したモモンガがペロロンチーノと相談していると、画面から敵部隊の隊長の叫び声が聞こえる。

『あ……ありえん。ありえん！ ありえん！ ありえん！ 最高位天使が人類に敗れるなどお！ こんな事はあつてはならない!』

スレイン王国の最高位天使がまさかの敗北する事態に、特殊部隊の隊長はもはや己の感情を制御することができなくなっているようだ。

彼——ニグンにとっての不幸は、最高位天使を討ち取った相手が、直属の部下以外は孤立無援であると思ひ込んでしまったことである。

王国では元々魔法が軽視されていて優秀な魔法詠唱者が非常に少ないことに加えて、ガゼフはそう言った支援を受けられないと思ひ込んでその可能性を考えもしなかったために、ガゼフ達が幾つもの強化魔法によって大きく底上げされていた可能性が頭から抜け落ちてしまったのだ。

狼狽するニグンに対して、ハムスケから降りたガゼフは罅が入ったグレートソードを地面に突き刺して叫ぶ。

『俺は王国戦士長！ この国を愛し、守護する者！ この国を汚す貴様らには負けん！』

普段のニグンであれば夢物語だと嘲笑し、命の価値の違いを語っていたであろう。しかし最高位天使を滅ぼされ、精神の均衡を大きく乱している状態では違う言葉が溢れ出した。

『この国を愛し、守護する者……だと。ふざけるな！ この腐りきった国を守る価値などあるものか！ 人類の未来を見据えずに己の欲だけを満たす強欲で無能な貴族ども、現状を嘆き憂いながら自ら変わろうとしない怠惰な民、そして意志を貫き通す力のない只々流されるだけの無力な国王！ そのような層共がどれほど諸国を、人類を脅かしているのか分かっていいのか!?!』

それは王国の全てに対する怨嗟の言葉。ニグンは血走った眼を見開いて絶叫する様に語る。

『我が国はこの国が誕生した時から陰ながら尽力してきた。安全で肥沃な大地は多くの者を生み、その中の優秀な者たちから異種族の侵攻と戦う勇者たちが育つことを信じて！ しかしこの国は多くの民を育むべき肥沃な土地を無意味に枯らし、心身を破壊する麻薬を内外にばらまき、守るべき道徳を冒瀆する墮落した者たちで溢れかえらせた。貴様らは、我らの信頼を裏切ったのだ！』

「うわあ、随分な言われようだな……」

「この国の状況がどうなっているのか知らないのだからどうこう言える立場じゃありませんけど、ここまで言われるほどこの国は酷い有様なんですか？」

モモンガの質問に対し、その場にいた戦士団の者たちや村長は顔を曇らせながら答える。

「本来は立場的に言うべきではありませんが、正直に言うのと貴族の大半に関しては大部分が当てはまります。国王も民を慮る方ではありませんが、貴族たちの妨害の所為で状況を改善できていないのは事実です」

「数年前にラナー第三王女が撤廃させるまで奴隷売買が合法だったしな……俺も戦士長に拾われていなかったらと思うと」

「だが、最近でも借金のカタに連れていかれるケースもかなりあるぞうだぞ」

「近年は帝国と毎年行われる戦争で働き手を徴兵されるので、収穫期に作物の収穫に手が回らなくなって税を治めるのにも一苦労です。この村はトブの大森林の近くの森の恵みのおかげでまだどうか凌いでいますが、商人から聞いた話だと村を維持できなくて廃村になった村もあるとか」

腐敗貴族に形を変えて残る奴隷制度、明らかに狙われている収穫期に合わせた戦争……。予想以上に未来が暗い情報がどんどん出てくる事態にモモンガは頭を痛める。

（なんだよ、この絵に描いたような末期の封建国家は。陰ながら支援して出来上がったのがこんな有様なら、確かに見限りもするよ）

カルネ村の人々やガゼフを害そうとした連中には微塵も容赦するつもりがないモモンガだが、さすがに王国がここまで酷いとスレイン法国にもちよつとだけだが同情したくもなる。

「あつ、モモンガさん。奴らが撤退していきますよ」
「予想よりも相手に人的被害は出ませんでした。これでひとまずは安心でしょう」

もしも自分たちの正体がスレイン法国に露見していたならば、あの特殊部隊は生かしてはおけなかった。だが正体どころか存在にも気

づかれていないならば下手に追撃する必要もないだろうとモモンガは考える。

此方としても追い払えばいいわけで、全滅させることが必須ではないからだ。むしろ全滅させることによって生じる様々な不利益の方が大きいかもしれない。

「それでは、戦士長とハムスケを……この村を救った英雄たちを迎えに行きましようか」

村に戻ったガゼフとハムスケがカルネ村に戻ると、戦士団や村人たちが取り囲む。

彼らからの無数の賛辞や感謝の言葉を受けている中、ガゼフの視線にモモンガ達の姿が見えた。

「戦士長殿、ご無事で何よりです。戦況はマジックアイテムで確認させていただいておりましたが、見事な活躍でしたね」

「いや、モモンガ殿、ペロロンチーノ殿、それに森の賢王殿に感謝する。私が助かったのもあなたの方のおかげだ。この気持ちをどのように表せばよいのか。王都に來られた時には必ずや私の館に寄って欲しい。歓迎させていただきたい」

「それは大変名誉なことです。ではその時はよろしくお願いします」

「いやあ、照れるでござるよ。ガゼフ殿の歓待を楽しみにしているでござるよ」

「はは、森の賢王殿を満足させる食事を作ってもらうためにも、料理人たちには頑張って貰わないといけないな」

「某とガゼフ殿はもう戦友と言っても差し支えないでござる。だから、森の賢王と畏まった呼び名ではなくて、殿から与えられたハムスケと呼んで欲しいでござる」

「そうか……わかった。ハムスケ殿。この度は本当に助けられた。重ねて礼を言う」

ハムスケとの信頼関係を築いたガゼフは、改めて礼を重ねると微笑

みながらガントレットを外してハムスケの前足を握る。

すると、ペロロンチーノはガゼフの左手薬指に指輪がはまっているのを目ざとく見つけた。

「いやー、戦士長も奥さんを泣かさないで良かったじゃん」

「??? 私は独身だが、ペロロンチーノ殿はどういった理由でそのような勘違いを?」

「あれっ違うの? 左手薬指に指輪をはめていたからってつきりさ」

「戦士長殿。私たちがかつていた所では、既婚者はペアの結婚指輪をそれぞれ左手薬指に嵌める風習があります。それでペロロンチーノさんは勘違いしてしまったようです」

「ああ、そういうことであつたか」

「某も同族を見つけ出して番になりたいでござるなあ」

「大丈夫ですよ。ハムスケ様ならば、きっと立派な相手が見つかります」

ハムスケが寂しそうに言うと、村娘の一人——エンリが励ます。

「……さて、モモンガ殿達はこれからどうされるのかな? 私はこの後部下たちと共にこの村で一晩休ませてもらうつもりなのだが」

「我々はあと数日程この村に滞在するつもりです。そのあとは、また旅に出ようかと考えています」

「そうか……。であれば、出発前に明日にも私からの紹介状を一筆認めさせてはもらえないだろうか。王国内を完全に自由とまではいかないが、亜人であることを理由に番兵に門前払いされることは無くなるだろう」

「おお、それはありがたい」

「戦士長、ありがとう。凄く助かるよ」

ガゼフからの提案に、モモンガ達は感謝を告げる。実際、自分は幻術などで騙せば都市にどうにか入れるかもしれないが、ペロロンチーノやハムスケは幻術で隠しきれないその容貌からかなりハードルが高いだろうとモモンガは考えていた。どうするか頭を悩ませていた問題がガゼフのおかげである程度解決したのだ。

目立ってしまうデメリットはあるが、それに関しては亜人だと思わ

れているペロロンチーノや魔獣であるハムスケを連れている以上、どちらにしろ目立つのだから悪い意味でなければいいか。モモンガはここに来てある種の開き直りに入っていた。

「何という事だ……まさか最高位天使が敗れるとは」

スレイン法国の首都である神都にある六大神殿。その内、土神殿で、土の神官長——レイモン・ザーク・ローランサンは神都最大聖域に一つである『土神の目』と呼ばれる場所で土の巫女姫が映し出していた魔法の投射映像の報告を見て、信じられないものを見たような表情をしていた。

その光景は、リ・エステイーゼ王国の王直轄領の村で起きた陽光聖典と抹殺対象となった王国戦士長ガゼフ・ストロノーフとの戦いだ。

陽光聖典隊長であるニグン・グリッド・ルーインに切り札として持たせた、最高位天使を召喚するスレイン法国の秘宝が使用されたのを受けて、土の巫女姫による《魔法上昇》オーバーマジックを用いた大儀式魔法である第八位階魔法《次元の目》フレイナース・アイによる占術を試みたところ、映し出されたのはガゼフを乗せた白銀の魔獣に相対する最高位天使の姿であった。

その時点のレイモンは白銀の魔獣の存在こそ想定外であったが、最高位天使によってガゼフの抹殺は滞りなく行われると予想していた。

ガゼフ・ストロノーフは表舞台に立つ戦士としては近隣諸国最強と呼ばれているが、それでも英雄の壁を超える存在ではない。過去に行われた風花聖典の調査ではそのような結論に至っていたはずだった。

しかし、魔神さえも屠る最高位天使が行使する魔法を受けながらガゼフも魔獣も生き残り、逆に最高位天使を討ち取ったことでその予想は大きく裏切られることになる。

「まさか力を隠していたのか？ 風花聖典を欺けるほどに？ いや、それはありえん。第一、それほどの力を以前から持っていたならば毎年行われている帝国との戦争でその力を振るわない理由がない。だとすると、風花聖典の調査の後に何らかの理由で力を得たのか？ 魔

法やマジックアイテムによる強化？ いや、王国は魔法を軽視しているからその線は無い。そもそも最高位天使はその程度で倒せるような柔な存在ではない。仮にそれが可能となるならば、それは神の御業としか言いようがない。ならば、あの白銀の魔獣が関与している可能性は……」

鋭い視線で報告書を見ながらレイモンはあり得る可能性を列挙していく。やがて、レイモンはある仮説に行き当たると。

「よもや、ガゼフ・ストロノーフは神人だったというのか？ 奴の容貌は近隣諸国では珍しい黒髪黒目。あの忌々しい八欲王の拠点であった南方の国の民の特徴と似ている。それが陽光聖典との戦いが切欠で血に目覚めた？ 待て、結論を急ぐな。どちらにしろ、陽光聖典を退けた時点でこの案件はもはや私だけで処理して良いものではなくなっている。他の可能性も含めて最高執行機関の者たちにも意見を聞かねばならんな」

自分一人では結論を出せないと判断したレイモンは、ため息をついてぼそりと呟いた。

「まったく……あの国にも昔から裏切られてばかりだ」

第八話 「天才薬師の来訪」

陽光聖典をガゼフとハムスケが撃退した翌日、モモンガが提供したポーシヨンで傷を癒しカルネ村で身体を休めたガゼフは、モモンガ達が捕縛した騎士たちを移送するために戦士団と共にカルネ村を出発した。

ガゼフ達が出発するまでにモモンガは最高位天使との戦いで最後に放った武技はどういったものなのかを尋ねていたが、ガゼフにとつてライバルともいえるところある剣士のオリジナル武技とあの時の自分の全身全霊の一撃を組み合わせた際に無意識に叫んでいた新しいオリジナル武技で、ガゼフ自身もどういった武技なのか把握しきれていないという。

ただ一つ感じ取ったことは、モモンガの幾つもの強化魔法による恩恵を受けた状態でないと発動することができないほど発動のための難易度が高い武技だという事だ。

モモンガ達も近い内に出発する予定だがそれまでの間、モモンガ達は村人からの歓待を受けながら思い思いに過ごしていた。

「次はあのポイントにこの丸太を持っていくのだ」

「ウオオオオ……」

この数日、死者の大魔法使いが指示を出し、死の騎士が森から切り出した丸太を屍収集家が担いで運んでいく光景がカルネ村の周囲で幾つも見受けられた。

運んだ先では別の死者の大魔法使いが図面を引いて、それを基に建材として使えるように加工している。

不可視化した集眼の屍が上空から作業の進捗状況を確認し、逐一現場の死者の大魔法使いたちに伝達することで、効率的にアンデッドを投入して作業を進めていた。

「死者の大魔法使いーゼロヨンよ、作業の進捗はどうだ？」

「はい、モモンガ様。カルネ村を柵で覆う作業工程は殆ど完了し、明日にでも完成します。物見櫓も我らが必要な作業は全て完了しました。残りは村人だけで翌日の昼頃までには出来上がる見通しです」

「そうか、それは良かった。お前たちの働きには感謝しているぞ」

「ありがたき幸せでございます。その言葉だけで、我ら一同にとつては至上の喜びとなります」

モモンガは、今回の一件で自衛の必要性を痛感した村長と相談し、村を囲む柵などを作っていた。

木を切り出して村まで運んだり、柵がより丈夫になる様な設計を行う為に、モモンガが様々なアンデッドを召喚した時には、村人たちも驚いて腰を抜かした者もいた。

しかし村人たちも逞しいもので、これまでのモモンガの人柄や行動のおかげで召喚されたアンデッドが完全にモモンガの支配下にあることを信じてくれているのもあって、この数日でアンデッドに慣れて共に作業を進めている。

モモンガとしてはアンデッドたちを農作業に利用する農法も臆気ながら思いついていたが、あまり手を貸し過ぎて頼られっぱなしになってしまつては旅に出られなくなってしまうので、このくらいが丁度良いだろうというのが村長と相談した上での結論である。

村人の感情を考えて死体などの触媒無しに召喚・創造した個体なので時間制限があり、ずっと作業させ続けることはできないが、それでも村人だけで作業するよりもずっと早く作業が進んでいた。

創造した死者の大魔法使いの聡明さを見て、モモンガはふと思う。(それにしても、この死者の大魔法使いたちが俺よりも遥かに知識量が豊富で賢いのはどういった理屈なのだろうか？ 死体を触媒にしているならばその死体が持っていた知識という事で分かる気もするが、触媒無しだからそういったこともないし……)

モモンガがアンデッドの不思議について考えながら村を開拓している中、一方のペロロンチーノは子供たちと遊ぶ傍らで、ラッチモンや志願した人たちに求められて我流であるという前置きをした上で弓の扱い方を教えていた。

村人たちは素人だし、使う弓矢も木から掘り出した粗悪な品ながら、彼らは真面目に練習して短い距離ながらちゃんと矢を飛ばせるようになってきているのは大きな成長だ。

ユグドラシルを一度引退してブランクがあつたので、モモンガが残したままにしてくれていたマニユアル本を所持したままだった事が、こんなところで役に立つとはペロロンチーノも思つてはいなかった。ユグドラシルの頃はカーソル操作の仕方などで表記されていたマニユアル本も、この世界に来てからは弓の扱い方などが日本語で事細かに表記されていたのも大きい。

村人たちは日本語を読めないので、ペロロンチーノが読んで現地の文字を書ける村人に書き写してもらいながら教えている。

「ペロロンチーノ殿、今日採れた果物を持つてきたでござるよ」

「おつ、サンキュー。みんな、ハムスケが御裾分けを持つてきてくれたから、いったん手を休めて休憩にしようか」

「分かりました。森の賢王様からの大地の恵みに感謝いたします」

ハムスケは村人から貰った大きな風呂敷——本来は家具などを運ぶ際に使う物——を背負つて早朝に森に入つては、人が足を踏み入れないような森の奥地にある果物を風呂敷に包んで持ち帰り、村人たちに分けたりしている。

如何に体が大きいハムスケでも、村人全員分を一度に持つてくることはできないため、何日かに分けて配っているようだ。ちなみにハムスケ的には村人一人当たり大きな果物1個と考えているようで、実は村人たちが考えていたよりもずっと多くの果物を持つてきていたりしている。

やつていることが完全に旅人のそれではないが、モモンガ達は特に気にしていない。

そんな日々を過ごして出発が翌日に迫つたある日の昼前、アイポール・コープス集眼の屍から一台の馬車を中心とした一団が村に近づいてきているという報告が届いた。

向かう馬車の一団は特にモンスターと遭遇することなくカルネ村に近づいていた。

馬車を護衛しているのはリ・エステイーズ王国の城塞都市エ・ラントルに拠点を置く冒険者チーム「クラルグラ」。馬車の前を歩くフォレストストーカーのイグヴァルジをリーダーとしたチームで、結成から今までチームメンバーを一人も失わずにミスリル級まで上り詰めた実力者だ。

馬車の御者をしている少年はインファイレア・バレアレという都市では有名な薬師の孫で、今回カルネ村に行くにあたっての護衛と薬草採取の依頼をクラルグラが引き受けた形になっている。

本来ならばこの近辺への護衛依頼はミスリル級よりもずっと下の階級——高くても金級あたりまで——が引き受ける依頼なのだが、ある理由によってトブの大森林に近づける冒険者は白金級以上に限られていた。

その理由というのも、数日前の深夜にトブの大森林の上空を中心とした闇を完全に消し去るかのような謎の発光現象である。大地を揺るがすような爆音が連続して鳴り響いたかと思ったら、その音と光は瞬く間に消えていったという。

エ・ラントルからも観測されたこの異常事態を受けて、冒険者組合はトブの大森林近辺へ赴くことは正式な調査が行われるまで自粛するように金級以下の冒険者や依頼人に要請している。

そんな中で貼りだされたのが、バレアレ薬品店からの依頼である。本来ならば自粛するように要請する立場の冒険者組合も、エ・ラントルでも大きな力を持つ名士であり、優れたポジションによって冒険者たちも大きな恩恵を与えているバレアレ氏からの依頼は、さすがに受けられる階級は白金級以上でそれに見合った報酬に増額はされているが、拒否しにくかったようだ。

エ・ラントルを出発して特にモンスターと遭遇することなく一夜を野営して過ごし、朝に出発した彼らは、草原に隠されているような街道を歩む。

ンファイレーアの胸中にはある不安がよぎっていた。

それは依頼を出すきっかけになった出来事。エ・ランテルを出發した王国戦士団が戻ってきた時に聞こえた内容であった。

それは周辺の村々を襲っていた、帝国騎士に偽装した者たちを捕らえたというもの。

その話を聞いた時、ンファイレーアにはある不安が生まれた。カルネ村は無事なのだろうか、と。

カルネ村にはンファイレーアにとって初恋の少女がいる。騎士に扮した者たちが襲った村々の中にカルネ村が含まれていたら、その少女が無事なのかが不安でいっぱいだった。

さすがに戦士団に直接訪ねる勇気は無かったので、それを確かめるために祖母を説得して今回の依頼を貼りだしてもらったのだ。そんなことを知らずに依頼を引き受けた冒険者たちに対する罪悪感も含まれている。

「――なあに。このミスリル級冒険者チームのクラルグラ、さらに言えばそのリーダーの俺がいるんだ。心配なんかしなくても大丈夫だぜ」

「あっはい……ありがとうございます」

表情が固いンファイレーアの様子を見たイグヴァルジの自信満々な言葉に、ンファイレーアはぎこちなく答える。

「カルネ村はそろそろ……」

努めて明るい口調で言いかけたンファイレーアが急に口を閉ざした。

クラルグラの全員が前方に姿を見せつつあった村へと移る。それは森のすぐそばに広がる質素な村で、ンファイレーアの口を閉ざさせるような雰囲気は無い筈だ。

……いや、フォレストストーリーカーとして鋭敏な感覚を持っているイグヴァルジには、言葉では表現することが難しい違和感があった。「何か気になる事でもあったのか?」

「あ、いえ。あんな頑丈そうな柵、前は無かったんですけど……」

「そうか? 辺境の村でこんな森の近くにあることを考えたら、当たり前じゃないのか?」

「うーん、そうかもしれないんですけど……カルネ村は森の賢王と呼ばれる存在のおかげでこれほどの柵は作ってなかったんですよ……」

再び全員で村を眺めると、見える範囲ではあるが、村の周囲を折れにくそうな太い木を使った柵でしっかりと囲んでいる。

「おかしいなあ……やっぱり、何かあったのかなあ……」

不安げなファイレアの声を耳にして、イグヴァルジは彼に質問する。

「なあ……聞きたいんだけどよ、あんたが最期にこの村に来たのはいつ頃だ？」

「えっと……大体一か月ぐらい前です。その時にはこんな立派な柵はありませんでした」

「それじゃあよ、森の賢王ってのは、この村にやってきたりはしていたのか？」

「いえ、森の賢王の住処は森の奥地だと聞きますし、カルネ村の人たちからもそう言った存在がやってきたという話を聞きません」

「おい、イグヴァルジ。どうしたんだ？」

「……村の中に、何かやばい気配をしているのが居やがる。それが森の賢王なのかは分からねえがな」

「「なっ！」」

イグヴァルジの言葉に、一同は固まった。

「そんな！ エ……カルネ村は無事なんですか！」

「少なくとも、悲鳴や血の匂いとかはしねえが、それ以上は村に入ってみねえと分からねえ。俺としては依頼人であるあんたの安全を優先して一旦エ・ランテルに引き返してから、他の冒険者と一緒に調査したほうが良いと判断するぜ」

「それは……そうですけど。……けど——」

ファイレアが理性と感情の狭間で迷っていると、村の家屋の影から何かが姿を現す。

それは、蛇の様な鱗を持つ長い尻尾の生えた白銀の四足獣であった。

イグヴァルジはもちろん、他のメンバーもその魔獣を一目見た瞬間

間、自分達では太刀打ちできない、それこそアダマントイト級の冒険者でようやく相手になるような存在であることを悟った。

魔獣は此方を見ると、後ろ足で立ち上がり、前足を左右に振り始めた。

「——つち！ 悩んでいる暇はないぞ！ でかいのがこつちに気づいた！ 下手すると仲間を呼ぼうとしてやがる！ お前ら、逃げる準備をしろ！」

「わ、分かりました！」

各々が慌てて武器を抜き放ちながら馬車に掴まり、ンファイレアは馬車を急いで反転させる。

本音を言えば初恋の少女の安否を確認したいところだが、エ・ランテルにいる冒険者の中でも最高クラスの冒険者であるミスリル級冒険者が撤退を指示した以上、これ以上迷惑はかけられない。

悔しい思いを胸の内に必死にしまい込んで、逃げるために馬車を走らせ始めたところで、村の方から深みのある声が聞こえてきた。

「待つて欲しいでござるよ〜！ 某はエンリ殿の御友人であるそなたの敵ではないでござるよ！ 村も安全でござる！ だから帰らないで欲しいでござるよ〜！」

「エンリ！ どうして彼女の名前が!？」

「おいつ急に馬車を止めるな！ ったく！」

魔獣が初恋の少女の名前を出してきたことでンファイレアは思わず馬車を止めてしまう。

イグヴァルジは依頼人の行動に毒づくが、そもそも走ってくる魔獣の速度は馬車に繋がれた馬の全力疾走よりも速く、このまま逃げ切るのとは不可能と言ってもいい。

勝ち目はない、逃げることも困難。だとすれば、後はあの魔獣が話している事が間違っていないと信じるしか生き残る道はない。

やがて魔獣は馬車の前で速度を落として止まるが、イグヴァルジは武器を魔獣に向けて警戒しながら問いかける。

「おい。さっき言ったこと、本当なのか？」

「この森の賢王ことハムスケ、殿に連れられて村に降りてきたのはつ

い数日前なれど、誓って嘘は言わないでござるよ」

森の賢王、そして殿という言葉にクラルグラの面々とンフィーレアは、伝説の大魔獣を使役している存在がこの村に居ることを察する。「森の賢王。あなたはエンリの名前を出していたけど、どうして彼女を知っているんですか？」

「エンリ殿は某がこの村で初めて名前を覚えた村人でござるよ。っあ、ちょうどエンリ殿が来たでござる」

相手を刺激しないよう逸る気持ちを抑えてンフィーレアが尋ねると、森の賢王はそう言つて、顔を村の方角へと向ける。

街道沿いに走ってきたのは確かに初恋の少女——エンリ・エモットであつた。

思つていたよりも村から離れていたようで、少し息を切らしながらこちらに向かつてくる。

「はあはあ……すうはあ。ハムスケ様、知らない方がハムスケ様の姿を見たら驚くから、私も一緒に行くつて言つたじゃないですか」

「面目ないでござる」

呼吸を整えたエンリが森の賢王に注意すると、森の賢王は申し訳なさそうな表情をしてエンリに謝る。

その様子を見たクラルグラの面々は、こう思った。——女傑だ。

「エンリ！」

姿を見せたエンリに対し、ンフィーレアは力強く名前を叫ぶ。

その声に応えて、エンリも親しい友人の名を呼ぶ様な優しく好意に溢れた声で名前を呼ぶ。

「二か月ぶりね、ンフィーレア」

ここまできればクラルグラの面々も今回の依頼の目的が理解できた。

「今回の依頼、女絡みかよ……」

第九話 「告白と冒険者」

「そんなことがあったんだ……」

ンファイレーアは村に亜人を含めた二人組が宿泊していて、カルネ村の土木工事に協力している事に驚いたが、エモット家の家に向かいながらこの数日間にカルネ村で起きた出来事を聞いて、茫然としながら言葉を紡ぐ。

エ・ランテルでも話題に上がっている森での発光現象を切欠としたトブの大森林の勢力図の大きな変化や、数日前に起きた帝国の騎士に成りすました者たちによる襲撃未遂。そしてその背後にいた魔法詠唱者の集団を王国戦士長が森の賢王と協力して追い払った話と、他にも驚かされることが多い。

村に犠牲者がいなかったのは奇跡としか言いようがなく、ほんの少し違っただけでこの村は滅んでいたかもしれないと思うと、ンファイレーアはこの奇跡に感謝するとともに安堵する。

「うん。それでね、王国戦士長とハムスケ様の雄姿を見て、村の人たちもこのままじゃいけないって思うようになったの。今はモモンガさんたちの力を借りて村の周囲に柵を作ったり、自衛のために弓の練習をしたりしているのよ。あの方たちには本当に感謝してばかりだわ。どんなお礼をすればいいんだろうってみんなが悩んでしまうくらいよ」

「そ、そうなんだ……。み、みんな無事でよかったよ」

「心配してくれてありがとう！ ……本当にンファイレーアは私には勿体ないぐらいの友人だわ」

ンファイレーアは相槌を打ちながら、こみあげていた言葉を心の内にしまう。ここで「君が無事でよかった」なんて言ったら、エンリ的事しか見ていないような薄情な男と思われてしまうかもしれない。

エンリに異性として見られていないのは少々悲しいが、それでも満面の笑みを浮かべている彼女を見ると、やっぱりエンリは可愛いなあ、とささくくれた心が癒される。

近況を語り合った後は幼い頃の話になって、その話も一段落着いた

頃、ンファイレーアは近況の中で出てきた話について、ある質問を投げかけた。

「そういえば、モモンガさんとペロロンチーノさんだったっけ？ 赤いポーシヨンを使ってくれたっていう旅人は。薬師だからそう言うのに興味があるんだ」

薬師でありポーシヨンの製造にも携わっている身としては、癒しのポーシヨンの色は青色が当たり前の知識である。しかし、話題に出てきたモモンガが戦士長に使用したというポーシヨンの色は赤かつたという。

赤いポーシヨンというと、薬師の間で言い伝えとして「真なる癒しのポーシヨンは神の血を示す」と言われる劣化しない完成されたポーシヨンを指す。

さすがにそれのものではないとは思いますが、その手掛かりになり得る情報に、ンファイレーアはエンリへの思いとは別に内心興奮していた。

「そうよ。綺麗な色をしていて体中怪我をしていた戦士長とハムスケ様が、そのポーシヨンのおかげで怪我も無くなってすぐに元気になったの。それに、私は直接見た訳じゃないけど、森で大怪我を負ったラッチモンさんもそのポーシヨンのおかげで治ったんだって」

「なるほど、沈殿物が無くてすぐに効果が表れたという事は、魔法で生成したポーシヨンかな……。でも普通の製法だと癒しのポーシヨンは青色になる。という事は制作過程が従来のものと全く違う？ もしそうだとしたら、今の治癒薬の精製技術を根本から変えるかもしれない。時間経過とかによる効能の劣化はどうなんだろう？ それに……。ひよつとしたら……」

赤いポーシヨンについてぶつぶつと言葉に出しながら思考に耽りだすンファイレーアに対して、エンリは幼馴染のポーシヨンに対する熱意を知っているので、しょうがないなと思いつながら口を挟まないで見守っている。

やがて、考えがまとまらないのかンファイレーアは頭を掻きながら呟いた。

「——うーん、駄目だ。情報が少なすぎる。でも初対面で本人に赤いポーシオンを見せて欲しいなんて言うのは失礼だもんなあ。おぼあちやんだつたら気にしないで聞き出そうとするのかもしれないけど……」

「あはは……、確かにリイジーおぼさんはンファイレアよりもポーシオンに対する熱意は凄いなね。でも、だからって無理矢理とか盗んだりとかは駄目よ。ンファイレアが悪い人になるのは見たくないもの。私にとってンファイレアは大切な友人なんだから」

「エ、エンリ……」

エンリの微笑みにンファイレアは自分の心臓が高鳴っているのが容易にわかった。そして自分はそんなエンリだから心惹かれたのだと再認識する。

本当ならばエンリに対して初めて村に来た時から抱き続けている思いを口にしたい。

——好きだ、愛している。

しかしその言葉を言い出せないでいるのは、ゴメンナサイと言われるのが怖いから。もしそうなってしまったら、今の関係にも戻れなくなってしまうから。

ンファイレアが長年の思いに悩んでいると、前方からハムスケが器用に前足で大きな果物を抱えてやってきた。

「エンリ殿。今日の弓の練習をしていた村人たちに分ける分の果物が余ったから、御裾分けに持ってきたでござるよ」

「ありがとうございます、ハムスケ様。ンファイレア、折角だからハムスケ様が持つてきてくれた果物、一緒に食べない？ 瑞々しくてとても美味しいのよ」

「え……あ、ありがとうございます、エンリ」

エンリからの誘いにンファイレアはドギマギしながら答える。

その様子を見ていたハムスケが、ふと尋ねた内容はンファイレアにとって爆弾発言だった。

「そういえばエンリ殿、ンファイレア殿は御友人と言っていたでござるが、人間は異性の友人から番になる生き物なのでござるか？」

「つ、つがい!? ハ、ハムスケ様! な、何をおっしやっているんですか!?!」

「おや、違ったでござるか? ンファイレア殿はエンリ殿に求愛したがっている様子でござったから、てつきりそう言うものかと」

「きゅ、きゅ、きゅ、求愛!?!」

エンリはハムスケの生々しい表現にパニックになりながら、ンファイレアの顔をしばしじっと見る。

顔を真っ赤にして慌てた様子のエンリにじっと見つめられて、先の言葉で冷静さを失っているンファイレアは、挙動不審になりながらも自らの震える手でエンリの両手を握る。

これはエンリに自分の思いを伝える千載一遇の機会であり、最後のチャンスだ。ここを逃したら、自分は一生エンリに自分の思いを告げることができなくなる。

エンリに断られたらどうしようとか、エンリが断りにくいような言い方は何だろうかと悩む余裕はもうない。ンファイレアは、茹で上がった思考でただ思いをぶつける。

「ン、ンファイレア……?」

「エ、エンリ……。ぼ、僕は……。き、君の事が……。す、好きゆだ!」

……。肝心な所で噛んだ。ンファイレアはそう自覚した瞬間、数秒前の自分に自分が使える攻撃魔法を可能な限り叩き込みたい衝動にかられる。

震えて崩れ落ちそうな膝を意志力で支えてエンリによる審判の時を待つ。

「ね……。ねえ、ンファイレア。一つ聞いても……。良いかな」

「う、うん」

「ンファイレアは有名人だから、私なんかよりもっと綺麗な人とか偉い人とか、私よりもンファイレアにぴったりの人があると思うの。それなのに、どうして私なの?」

「ぼ、僕は……。エンリに初めて会った時から、ずっと好きだった。一目惚れ……。だったんだ」

「……。そっか。ずっと私の事想ってくれていたんだ。ずっと、気づか

なくでごめんね」

「ごめんねとは言われたが、それは拒絶の言葉ではなかった。

「大丈夫だよ、こうして言えたから。……それで、返事を聞かせてもらえるかな？」

「うん。ンファイレア……不束者ですが、よろしくお願いします」

顔を赤く染めながらのエンリの返答に、ンファイレアは長年の思いが成就した喜びを噛み締めて嬉し涙を流してエンリを抱きしめる。

そしてエンリと結ばれるきっかけを与えてくれたハムスケに、ンファイレアはお礼を言う。

「森の賢王様、ありがとうございます！ あなたが後押ししてくれていなかったら、僕はずつと踏ん切りがつけられなかったと思います」
「いや、それほどでもないでござるよ」

なお、エモツト家の家族に二人の交際を伝えたところ、エンリの妹のネムから「やつとお姉ちゃんに言えただね」と言われ、ンファイレアは自分のエンリへの恋心がエンリ以外の周囲にバレていたことを知って膝から崩れ落ちたりしている。

ンファイレアがエンリに一世一代の告白を行っている頃、モモンガ達はンファイレアを護衛していたクラルグラの面々に冒険者について様々な質問をしていた。

クラルグラの面々は^{ンファイレア}依頼人が惚れている村の少女であるエンリから、この村には亜人を連れた二人組が数日前から宿泊していることは事前に聞かされていたので、警戒こそしているが武器は取り出していない。

モモンガとペロロンチーノが身にまとっている装備が一目見ただけで分かるすさまじい逸品であることに、嫉妬心を煽らせているイグヴァルジを他のメンバーがフォローしながら、彼らの目的を探るために注意深く観察しながら質問に答えていく。

やがて、一通り聞きたいことを聞き終えたのかモモンガは一息つく

と、残念そうに答える。

「冒険者って……思ったより夢のない職業なんですネ」

「おい、散々人を質問攻めにしといてその反応はねえだろ。まあ、俺も子供ガキの頃に詩人の英雄譚ガで英雄に憧れて冒険者になった口だから、気持ちは分からなくはないけどよ」

「おお！ イグヴァアルジさんは立派な夢を持っていますね。羨ましいなあ……」

モモンガの感心しているような声色と反応に、イグヴァアルジは先ほどもまでの不機嫌な気持ちが幾分か薄れて上機嫌に語る。

「大抵の奴らは現実に打ちのめされて諦めちゃうもんだが、俺達は違う。今はまだエ・ランテルに三組いるミスリル級だがいずれはオリハルコン、最高位冒険者の証であるアダマンタイト。そして世界を救ったと言われる十三英雄と同等になるんだからな」

「つまり、イグヴァアルジさんは伝説の再臨を目指しているってことか。……だったらさ、俺達は俺達でこっちでも自分が思い描く冒険者になつてみるのも良さそうじゃないかな、モモンガさん？」

「あん？ お前らはどんな冒険者を思い描いているんだ？」

「そうだねえ……例えば世界中の分からない事、知らない事。つまりは未知を見つけ出して既知に変えて、世界を狭めていくことかな？」

ユグドラシルでもそういう冒険をして楽しんでいたし」

「……ああ、それ良いですね。あそこでは未知を楽しむことを目的とした冒険を奨励していましたっけ。私達がこれこそが冒険者だつていう感じの冒険をして、そうした旅の思い出を冒険譚として広めていく。……うん、おもしろそうだ」

「ユグドラシル？ 聞いたことがないが、何処なんだそりゃ？」

聞いたことが無い言葉に、話の流れから国か何かの名前だと当たりをつけながらイグヴァアルジはモモンガ達に説明を求める。

「うーん、なんて言えばいいかなあ。今はもう無くなってしまった国、いや……組織が近いのかなあ」

「大雑把に言えば、ある神話にある9つの世界になぞらえた地名を持つ領域を管理・運営していた組織が、その領域をまとめた総称です。

以前は私やペロロンチーノさん、それに他の仲間と一緒にそこで冒険とかしていたんですよ」

モモンガ達の返答に、イグヴァルジは直感で富や名声の気配を感じ取った。

モモンガ達の装備はこの辺りでは一度も見たことが無いような、それこそ神話や伝説に語られるような圧倒的な存在感を放っている。もし、これらの装備に話に出たユグドラシルという場所が関わっているとしたら、自分が英雄となるためにも是非ともその地に行ってみたい。

気がかりなのは、ペロロンチーノの無くなってしまったという言葉だ。強大なモンスターに滅ぼされたりしたのが原因だとしたら、相当危険な旅路になるからだ。

「そんな場所があったなんてな。無くなったって言っていたが、何があったんだ？」

「探せる未知が枯渇して参加者が減った事で運営が維持できなくなつて解散したんです。ユグドラシル自体がずっとずっと遠い所ですし、最後は誰も彼も持ち出せるだけ持ち出していたので目ぼしい物ももう残っていないと思います」

「マジかよ、世知辛いなあ……」

破産した商人のような幕切れにイグヴァルジは肩を落とす。嫉妬深く目先の利益に釣られがちなイグヴァルジにも好奇心や童心は残っているのだ。

その様子を見た他のメンバーが、「あの様子だと何か一儲けしようとしてたな」「こういう所が治れば、リーダーとしては優秀なんだけだな」と苦笑している。

「それで、クラルグラの皆さんは薬草採取と護衛の依頼でこの村を訪れたと聞きましたが、村を出発するのはいつ頃になりますか？」

「なんでそんなこと聞くんだよ」

「実は私たちも近々この村を出発する予定なのですが、次の町や都市まで同行させて頂くようになって思っています。この辺りの土地勘がある方と一緒に心強いですし」

「そこは俺達じゃ判断できないから依頼人に聞いてくれ。つていうか、エ・ランテルに着いたとしてもお前らは入れるとは限らないぞ」
イグヴァルジが指摘しているのは、ペロロンチーノについてだ。明らかに人間ではない、おそらくは亜人の彼を門番が快く迎え入れるとは思えないからだ。

「そこはまあ当てがありますので大丈夫なはずです。ダメだったらその時はその時で考えます」

「出来れば普通に入れるといいな〜」

「当てが何なのかは分からねえが、俺達や依頼人には迷惑をかけるなよ」

「ええ、そちらには迷惑はかけないようにします。それでは私たちはこれで。色々とお話を聞かせて下さってありがとうございます」

「それじゃ〜ね〜」

話を聞き終えたモモンガ達はクラルグラに会釈すると、その場を後にするのであった。

クラルグラとの会話を終えてモモンガとペロロンチーノは宿泊している家屋に戻ると、緊張をほぐすようにしながら椅子に座る。

「……ふう。危なかった」

「ペロロンチーノさんがユグドラシルの名前を出した時にはびっくりしましたよ」

「ごめんね。また冒険したいなっていう思いでついポロリと口走っちゃった」

「まあ、ユグドラシルについての設定を事前に決めておいたおかげで問題なかったから良いですけど」

モモンガとペロロンチーノは旅人という設定を補強するためのアムダーカバーとしてユグドラシルを利用することにした。

ユグドラシルからこの世界に来たこと自体は間違っではないし、おそらくだが既に存在していないのも嘘ではない。

周囲と比べて装備や常識が異なる部分も、はるか遠い地にいたからという事にすればある程度は緩和されるだろう。

問題があるとしたらユグドラシルのアイテムを使用していたスレイン法国のように、プレイヤーの存在が疑われる勢力には見破られる可能性があることだが、それはそれでプレイヤーの存在を炙り出すことに利用できる。

「……それで、モモンガさんはこの世界でも冒険者をやります?」

「ええ。話では旅人のように定住しないで国々を回る冒険者もいるそうですね。話ではそういう意味では俺たちにぴったりかなって思います」

「そうと決まれば、クラルグラの依頼人の少年にカルネ村を出発する時に一緒について行って良いか確認をしてくるね。エンリちゃんの話だとンファイレア君っていう幼馴染で有名な薬師の孫だつていうから、俺達が持っているポーションで話題の取っ掛かりは作れるし」
「それなら俺も一緒に行きますよ。現実世界では営業職でしたからそういう交渉は多少なら出来ますし」

ペロンチーノはそう言うと、ンファイレアの所に向かうためにアイテムボックスからポーションを取り出すと布袋に入れてからモモンガと共に外に出た。

二人は知らない。自分たちが持っているユグドラシル製のポーションが、この世界の薬師の間では「真なる癒しのポーションは神の血を示す」と言われる劣化しない完成されたポーションを指している事に。落ち着いた雰囲気だったンファイレアがそのポーションを一目見た瞬間、強く興奮し始めた事にモモンガ達は驚かされるが、後日、彼の祖母の反応によってさらに驚かされることになるのは知る由もなかった。

第十話 「城塞都市エ・ランテル」

トブの大森林でバレアレ薬品店の依頼である薬草採取を終えたクラルグラは、翌日の早朝、カルネ村の入り口で馬車の御者台に乗るンファイレアと共にエ・ランテルへと帰る準備を進めていた。

「しかしまあ、昨日の薬草採取は大収穫だったな」

「ええ、モモンガさんたちが西の魔蛇と交渉してくれていたおかげで、普段よりも安全に作業ができました。それに、森の賢王様のおかげで……」

クラルグラのメンバーの一人の言葉に、ンファイレアは馬車の荷台に積まれた大量の薬草や希少な素材を一瞥した後、自分の脇に座っている少女、エンリ・エモツトの方を見る。

エ・ランテルへ帰る準備をしている馬車に彼女と一緒にいるのは、ンファイレアの祖母であるリイジー・バレアレにンファイレアと交際することを伝えるためである。

ンファイレアにとって、エンリと晴れて恋仲になれた事が、前日の薬草採取で大量に採れた成果物にも勝る何よりの宝だった。

「? どうしたの、ンファイ?」

「ああ、エンリと一緒に居られて、本当に嬉しいなって思っているんだ」

「私も嬉しい……えへへ」

昨日までこの二人は、自力では初恋の少女に自分の思いを伝えられなかった少年と、少年の好意に気がついていなかった少女だった。しかし、森の賢王の一言が切欠で結ばれた事で吹っ切れたのか、今では他人の目を気にせずにイチチャついている。尤も、互いの手を握ってみたり、特に理由は無くても見つめ合って微笑んだり、周囲からしたら甘ずっぱくて微笑ましい光景であるが。

「……あー、あの位だったらまあ良いか」

イグヴァルジは昨日までと様変わりした二人に呆れながら、実害は特にないのでそのまましておく。出発してからも二人がああ調子のままだった場合に注意すれば良いだろう。

それよりも、自分達と一緒に村を出発する予定のモモンガとペロロ
ンチーノ、そして森の賢王がまだ来ていないことが気になる。

「お待ちせでござる〜」

少しして背中に大きく膨らんだ風呂敷を背負ったハムスケが姿を
現す。おそらくは果物などが入っているのだろうか、風呂敷からはほ
のかに甘い香りが漂っている。

「おい、あの二人はどうしたんだ？」

「殿たちであれば——」

「ハムスケの後ろにちゃんといいますよ」

「いや〜、ごめんね〜。出発前に村の子供たちに挨拶しに行っていて
遅れちゃったんだ」

ハムスケに問いかけたクラルグラの面々に対して、ハムスケが答え
る前にそう言つて後ろから姿を現したのは、漆黒に輝き、金と紫色の
紋様が入った絢爛華麗な全身鎧フルプレートに身を包んだ二人組であった。

「えっ……？ その声は……ペロロンチーノさん!? ええっ!?!」

「おお〜、エンリちゃん。良い感じに驚いているね〜。それと
ンフィーレア君との交際おめでとう」

「あ、ありがとうございます……。……そうなるも、もう一人はひよっ
として……」

「ええ、モモンガです。魔法で作った全身鎧フルプレートですけど、どうです？ こ
れなら立派な戦士に見えて怪しまれないでしょう？ 武器もこの通
り、《上位道具創造》クリエイト・クレイター・アイテム」

驚くエンリに対して、モモンガはそう言つて何も無い空中から地面
に突き立てるようにグレートソードを二本作り出す。

これに驚かされたのはクラルグラの面々とンフィーレアだ。

ミスリル級冒険者の彼らから見て、モモンガが魔法で作り出したと
いう鎧と武器の出来栄は、名工の逸品と言われたら納得してしま
いそうになるほどだ。

一方、ンフィーレアは他の面々とは別の視点で驚いている。位階魔
法には物を作り出すクリエイト系の魔法は確かに存在する。しかし、
その大半は調味料や水などの日常の消耗品として使う生活魔法だ。

武器を魔法で作り出すという発想は、少なくともンファイアには無かった。

「モモンガさんは使える魔法の種類が減っちゃうけど、俺は弓を引く分には問題ないから安心してね〜」

「見た限りでは背中の翼は鎧の中みたいだが、どうやってしまったんだ?」

「ん〜……なんでなのかは分からないけど、翼は引つかからずに装備できたよ。……どうなってんだろう?」

「いや! 本当にどうなってんだよ!? すげえな、その鎧!」

ペロロンチーノとクラルグラの面々がわいわい騒いでいる中、イグヴァルジはモモンガに問いかける。

「……なあ、確認したいことがあるんだが、いいか?」

「はい。おかしな点があったらドンドン言ってください。その都度作り直して修正しますので」

「作り直せるのかよ、それ……。聞きたいことは山ほどあるが、エ・ランテルの検閲所で顔を見せるときはどうするんだ? お前はともかく、ペロロンチーノの奴は顔を見せたらアウトじゃねえのか? 馴染みの奴ならばともかく、明らかに質が良すぎる装備をした全身鎧フルプレートの戦士が初めて来たら、呼び止めて確認とかするだろう?」

「……っえ、顔見せ? ……っあ」

「お前らなあ……エ・ランテルは帝国との戦争の最前線にもなる城塞都市だ。他の町や村と違ってそういう所はしっかりしているんだぞ」

モモンガの考えていなかった風の仕草に、イグヴァルジは頭を抱える。モモンガの変な所で抜けている所もそうだが、管理が疎かな部分がある地方の村や町ならば、この方法で入ることができたんだろうなと思いついたからだ。心なしか、依頼人のンファイアも苦笑いしているように見える。

「モモンガさん、そういえば、ガゼフ戦士長が認めしたたてくれた紹介状があったよね? 考えてみれば、あれがあれば見た目を隠さなくても入られて貰えるんじゃないかな?」

「……かっこいい鎧と違って、着てみたくなることはありません? あ

とは軍服とかも」

「ああ……、分かる」

「なんで持っているかはこの際置いてくが、それがあるなら素直にそれを使えよ……」

モモンガ達とクラルグラの面々、ンファイレアにエンリがカルネ村を出発し、エ・ランテルに到着したのは日が落ち始める夕方ごろであつた。

結局、フルプレート全身鎧を脱いで普段の装備にしたモモンガとペロロンチーノ、ハムスケを見た検閲所の兵士たちに取り囲まれるトラブルこそあつたが、モモンガが見せたガゼフからの紹介状によつて都市に入る事ができた。

街に入つてからはンファイレアとエンリ、クラルグラの面々は収穫した薬草や希少な素材を保管場所に運ぶために別行動をしており、イグヴァルジはモモンガ達が変わなことをやらかさないかの監視を兼ねた案内役を任されることとなつた。

冒険者登録を済ませたモモンガとペロロンチーノ、同じく魔獣登録を済ませたハムスケは、通行人の隣の人とヒソヒソと話している脇を通り過ぎながら合流するためにイグヴァルジと共にバレアレ薬品店に向かつていた。モモンガとペロロンチーノの首には、最下級冒険者であることを示す銅のプレートがかけられている。

「しかしまあ……お前らが文字を書けないのは意外だつたな」

「言葉は通じていたので、使っている文字もてつきり同じだと思ひ込んでいました。ああ……この年になつて文字の勉強を一からやり直さないといけないなんて。これなら文字読解の魔法を修得しておくべきだつたか……」

イグヴァルジが意外そうな声で言うのに対して、モモンガは頭をがっくりとしながらトボトボと歩いている。よくよく考えてみれば、カルネ村に居た時点で気がつく要素はいくつもあつたのだ。それな

のに、対策を怠っていたのは愚かとしか言いようがない。

「まあ……俺達がいたところだと、古代文字とかの解読の時ぐらいいか使わないから、その時に巻物スクロールを用意すればいいやって思っちゃいますもんね」

「その点、ペロロンチーノさんは凄いですね。文字を書けないのは同じなのに、女性職員を口説くようなノリで自然に代筆してもらっていいたんですから」

「こういう時は下手に隠すよりも、それを切欠に話題を作る感じで伝えた方が良いと思っただからね」

「おかげで自分の名前をどうやって書けばいいか分かりましたので、署名だけなら何とかあります」

ペロロンチーノの機転のおかげで難局を乗り切ったことに安堵しながら、モモンガは今後の予定を思い出す。

バレアレ薬品店でポジションに関する取引を行った後は、冒険者向けの宿屋の宿泊し、明日から冒険者としての仕事・依頼を受ける。

気がかりなのは、検閲所での兵士たちの反応からペロロンチーノが宿泊させてもらえるかだ。ハムスケは馬小屋辺りを貸してもらおうことにしよう。

（営業職で培った経験を活かしてペロロンチーノが泊まれるように交渉も必要になるかもなあ……。さすがに、ンフィーレアの家泊めてくれなんて図々しい頼み事はできないし）

「殿、その先の横道から人が来るからぶつからないように気を付けるでござるよ」

「……ん？ すまんな、ハムスケ」

モモンガは恋人ができたばかりのンフィーレアに配慮しながらどうするかを考えていると、ハムスケが耳をパタパタと動かしながら注意を促してきた。

程なくして横道から出てきたのは、一人の男であった。

熊の魔獣の毛皮を被せた兜の隙間からはやや短めに切られた茶髪と藍色の瞳が覗かせており尖った耳が森妖精エルフであることを示している。ダークブルーの全身鎧フルプレートを身にまとい、金属質な鳥の羽根でできた

マントを羽織って背中には戦士が両手で扱うような大斧を背負っていた。これらの重装備から、森妖精^{エルフ}としては珍しいパワーファイター型の戦士だという事が窺えた。

更に注意深く観察すると、目の前の男の首にオリハルコンの輝きを放つプレートが下げられている事に気がつく。

モモンガは、ンファイレアやイグヴァルジの話で、エ・ランテルに
いる冒険者の最高等級はミスリル級であることは聞いていた。クラ
ルグラがいない間に昇格したと言った理由がなければ、高い確率で
エ・ランテルの外からやってきた冒険者だろうとも当たりを付けてい
た。

男の視線はまずイグヴァルジを軽く流し、モモンガ、ペロロンチー
ノの順に留まり、ハムスケに動く。それから巻き戻すように視線を動
かしていたが、ふと何かに気がついたのかペロロンチーノ、正確には
ペロロンチーノの指先で視線が止まり、口を開いた。

「……へえ、魔獣と鳥の巫人をバレアレ薬品店の孫が街に連れてきた
とかいう話を聞いたから興味本位で会いに来てみたら、予想以上じゃ
ねえか。特にそっちの銅^{カッパ}級のバードマンの方……、あんたが右薬指
に嵌めている指輪について聞きたいことができた」

「!?!」

目の前の男が示した指輪は、ギルドメンバーの証であるリング・オ
ブ・アインズ・ウール・ゴウンだった。モモンガも右薬指に嵌めてい
るが、骸骨の姿を隠すためにイルアン・グライベルという籠手を装備
していたので気がつかなかったのだろうが、そんなことは関係ない。

問題なのは、この指輪の存在を目の前の男が知っているという事実
だ。

「おい、ペロロンチーノ。その指輪……まさか盗品だったりしねえだ
ろうな?」

「はあ!? イグヴァルジさん、いくら何でも言って良い事と悪いこと
があるでしょうが!」

イグヴァルジの疑いの言葉に、精神安定化が働いたモモンガが怒る
よりも先にペロロンチーノが憤慨する。

「この指輪は俺達がユグドラシルで一緒だったギルドメンバーの証だ！ 謝ってくださいよー！」

「あっ……わ、悪かった。すまん」

「って……ペロロンチーノさん、気持ちは凄く分かりますけど、目的が分からない相手の前で情報をしゃべり過ぎですよ」

「っえ……あっ！ ぐ、ごめん」

ペロロンチーノが思わず口走ってしまった情報に、モモンガは頭を痛めながらどう対処するかを考える。

イグヴァルジもいる以上、この場で始末するのはリスクがある。ならば、麻痺させて動けなくしてから尋問すべきか……。

モモンガはそう結論付けて行動に移そうとしたところで、目の前の男は納得がいったようなそぶりで話す内容によって、遮られることになる。

「ペロロンチーノ……それにギルドメンバーの証。……なるほど、ラキスケの旦那が言っていた親友のバードマンってあなたの事か。確かに話に聞いていた見た目の特徴も合致しているな」

「……はい？」

ラキスケさん？ なんで現実世界では死んでしまった彼の名前が出てくるの？ というかますます目の前の男は何者なんだよ。なんか親しそうな雰囲気を出しているけど、どういう関係なんだ？ e t c……。

モモンガの脳内に予想外の状況が入り込んだことで、何度も思考が混乱しては強制的に安定化するのを繰り返す。

先に動けたのは、精神安定化を持たないペロロンチーノであった。

「ちよ、ちよっと待って！ すう……はあ……よし！ さつき……ラキスケって言ったよね？ ひよっとして、職業は神官戦士じゃなかった？ ……ええと、君の名前はなんていうの？」

「俺はアラビータだ。ラキスケの旦那の話では、あんたとよく猥談してはあんたの姉によくどつき倒されていたって懐かしそうに言っていたな」

「おうふ。……一応確認するけど、俺の姉貴の名前とか、聞いたりして

た？」

「ああ、確か……ぶくぶく茶釜だったか？」

「……正解。……それじゃあ——」

ペロロンチーノがラキスケについて尋ねる度に、アラビータは時にはスラスラと、時には頭の奥から思い出しながら答えていく。そのいずれもが、ユグドラシル時代に共に遊んでいたギルドメンバーであるラキスケの存在を補強するものであった。

そうしている内に思考の混乱が落ち着いたモモンガは溢れそうになる感情を抑えながらアラビータに尋ねる。

「ラキスケさんは……彼は今、何処で何をしているんですか？」

「ラキスケの旦那なら、この街で人探しをしているぞ」

「……教えてくれて、ありがとうございます。……イグヴァルジさん、すみませんが急用ができました」

「状況が突然すぎて、何が何やらさっぱりなんだが……ってお前、それだけの数の巻物スクロールをどこから出したんだよ！」

素直に答えてくれたアラビータにモモンガは頭を下げると、イグヴァルジに一言告げてから無限インフィニティの背負い袋から十本を超える本数の巻物スクロールを取り出すと、ユグドラシルにおける模倣による情報収集の際のセオリー通り、防御対策の魔法が込められた巻物スクロールから順番に発動していく。

第一位階の魔法でも金貨一枚と銀貨十枚もする高価な巻物スクロールを惜しげもなく使う光景を目の当たりにしたイグヴァルジは、開いた口が塞がらない。

最後に発動した《物体発見ロケート・オブジェクト》と《千里眼クレアボヤンス》及び《水晶の画面クリスタル・モニター》が込められた巻物スクロールを発動すると、空間に映像が浮かび上がる。そこには一人の男に先導されて歩く二人組。一人は見たことがない女性だったが、もう一人は装備こそ違おうが紛れもなくモモンガやペロロンチーノの知るギルドメンバー、淫魔の神官戦士であるラキスケであった。

「ふふ……はは、はははっ！」

もう会えないとさえ思っていたギルドメンバーの姿を確認したモモンガは、狂ったように笑い始める。精神安定化は先ほどからは繰り返し発動しているが、そんなこと関係ないとばかりに感情は昂っていた。目の前の男もイグヴァルジも、ハムスケさえもモモンガの変わりようにドン引きしている。

「モモンガさん、気持ちは凄く分かりますけど近所迷惑だから声量落として！」

「はあっはあっはあっ……。……ふう、すいません。嬉しきで舞い上がりすぎてテンションがおかしくなっていました」

「ああ……。見りやわかる」「気でも触れたかと思っただぞ」「正直に言えば怖かったでござる」

「あの……。本当にすいません」

三者三様の返答に、モモンガは謝るしかなかった。

「それにしても、なんでこいつらはわざわざ墓地に向かっているんだ？」

「探していた人がすでに亡くなっていたとか？」

「だとしたらマジかよ……。ラキスケの旦那はこの二年間、ずっと探していたんだぞ。それがこんな結末って」

「あれ、ちょっと待ってください？ 向かう先に誰かいます」

モモンガは映し出した画面をラキスケ達が向かう先へ移動させてみると、墓地の最奥にある霊廟近くに複数の人がいる事に気がついた。

人数にして7人。うち一人は倒れており、もう一人は――、

「おい……。こいつは死者の大魔法使い!? しかも装備が普通の個体じゃねえ！」

「しかもあつちで倒れているのは裸に剥かれて縛られている女の子だ！ 明らかに犯罪の気配がビンビンしてくるんだけど！」

イグヴァルジは高位アンデッドである死者の大魔法使いの特異個体がいる事に驚愕し、ペロロンチーノは少女が拘束されている事に憤

慨する。

そんな中、モモンガは冷静に観察して状況を判断していた。

「ひよつとして……あの少女がラキスケさんの探し人だったりしませんか？」

「もしそうだとすると、ラキスケは人質を取られているってこと!？」

早く助けに行きましょうよ!」

「いや、此処から墓地までは大分距離があるんだぞ。今から行っても間に合わねえ!」

「私が転移魔法を使えますので、この映像を基に近くに転移すれば問題ありません」

「お前、本当に何でもありだな!」

常識的な判断で手遅れであることを告げるイグヴァルジに、モモンガは問題がないことを告げる。

イグヴァルジはキレ気味にツツコミながら、しかしこいつらなら実際にできるんだろうなという嫉妬交じりの信頼を向けていた。

「イグヴァルジさんとは冒険者ギルドに向かつて墓地に死者の大魔法使いを従えている集団がいることを伝えに行ってください。今日冒険者になったばかりの俺達が言うよりも、この街を拠点にしているミスリル級冒険者のイグヴァルジさんが伝えた方が、積み重ねてきた信頼と実績の分だけ冒険者組合も迅速に動いてくれると思います」

「つちい! 分かったよ! あいつらがどう動くにしろ、死者の大魔法使いを野放しにするわけにはいかねえ」

「俺は仲間の所に戻ってから冒険者組合に行く。ラキスケの旦那が負ける訳がないが、人質を取られて犯罪の片棒なんかを担がされたりしたらその分やばいことになるからな」

「ハムスケは俺とペロロンチーノさんと共に来てくれ。これから少し離れた場所の死角になる所に《転移門》を繋ぐ」

「分かったでござるよ!」

「それじゃあモモンガさん、行きませうか!」

「ええ。イグヴァルジさん、アラビータさん。吉報を待っていてくだ

さいね！」

各々がやるべきことを確認すると、モモンガは最上位級の転移魔法
を行使する。

《転移門》

モモンガの目の前に、下半分を切り取ったような楕円の形をした漆
黒の闇が浮かび上がる。モモンガとペロロンチーノは躊躇いなくそ
の中に入っていく、ハムスケも一瞬躊躇しながらも、二人が入って
いったのだからと急いで入っていった。

幕間

外伝「ツアレとの」はじめての情事」

夢の中でラキスケはツアレと出会い、情を交わした日のことを思い出す。

バハルス帝国皇帝のジルクニフから非公式で、王国から帝国に流れてくる麻薬の調査・妨害依頼を受けていたラキスケが一通り調査した締めとして麻薬の集積・加工拠点の一つを潰してから帰ろうとしていた時のことだ。

非合法組織である八本指の警備部門における幹部級の六人、六腕の一人、「鬼蜘蛛」のパウークと名乗る男と交戦して殺害したが、その男が出てきた部屋に彼女はいた。

虫の息であった彼女を見た時、ラキスケは考えるよりも先に駆け寄って彼女の症状を魔法で確認して治療を施し、八本指の拠点に火を放って連れ帰っていた。

王都を離れ仲間のエルフたちと合流したラキスケは、帝国にある自身が所有する地上船で彼女を看病することにする。幸い仲間たちからは大きな反対はなく、ラキスケが看病を直接することを条件に賛成する者もいた。

そこでラキスケはある問題に直面する。ツアレと名乗った彼女を見てみると、情欲が湧いてしまうのだ。

今まで彼女よりも美しいものを見ても情欲には結びつかなかったのに、彼女に対してはそれが湧いてしまう。インキュバスなのに性欲が枯れていると思っていたラキスケにとっては予想外の事態であり、自身が彼女を連れ帰った理由に行きついた瞬間であった。

しかし、それはラキスケにとっては好ましくない事態でもあった。彼女を抱きたくないわけではない。むしろ本能は彼女を犯し、快楽を刻み込み、自分のモノにしると叫んでいる。しかし、彼女の惨状を目の当たりにしていたラキスケにはそれはできなかった。

彼女の病状を魔法で知っているラキスケは、彼女が八本指に置いて

性奴隷同然の扱いで使い捨てられる立場にあつたことを察していた。そんな経験をした彼女に差し伸べられた手が情欲にまみれているなど知られれば、彼女の心は二度と立ち直れなくなる恐れがある。

それを想像すると、ラキスケは心が張り裂けそうになる痛みを覚える。ラキスケは、彼女に対して情欲だけでなく恋慕も覚えていた。所謂一目惚れをしていたのである。

自身が胸に秘めている二つの思いに蓋をして、彼女を光が届く世界へ帰そうとするラキスケ。しかし、彼女はラキスケから離れることを拒絶した。

「俺は見ての通り人間じゃない。女を惑わし、その肉体を貪る淫魔だ。お前を助けたのだって、慰み者にするためだったって思わないのか？」

「ラキスケ様がいなかったら、わたしはあそこで殺されていました。あなた様にでしたら私は慰み者とされても、殺されても構いません」

ラキスケは自身が怪物であることを明かし、淫魔としての在り方を説いても、ツアレはラキスケが望むならば自らの死さえも許容するといった。

「わたしは、たくさんの人たちに穢されてきました。見世物として、犬や豚の相手をさせられたこともあります。そんなわたしを、ラキスケ様は、抱いて下さるのですか？」

「ツアレ、俺は君を治療する前の惨状も見た。症状の中には人間以外からのモノも含まれていたから、そういうこともされてきたことは察していた。それでも、俺は君が欲しいと思ったんだ」

ツアレは自身が受けてきた仕打ちを語り、穢れた体であることを説いても、ラキスケはツアレを欲した。

もうお互いに、自己否定の言葉は意味を成さない。お互いが互いを必要とし、求めているのだから。

それはツアレが助け出されてから、初めてラキスケに抱かれる夜の話。

ツアレを看病するために使われていた部屋で、ベッドに腰掛けているラキスケとツアレ。白いネグリジエを着たツアレは腕を巻き付けるようにラキスケの首に回し、唇を重ねていた。

その時間はほんのわずか。唇を離れたツアレは、頬を染めながら自分の唇を両手で抑える。

「幸せなキスは初めてです」

「うれしいな、ツアレのファーストキスを貰えるのは」

ラキスケの返答にツアレは意味が分からずに首をかしげる。この唇は既に自分を妾として攫った領主や娼館の客たちによつて貪られている。男たちの欲望が詰まった肉棒を啜えさせられたことも数えきれないほどあるのに、女として夢見ていた幸せな初めてのキスと形容してくれるのだろうか。

「幸せじゃない口づけはキスじゃないよ、ツアレ。俺のファーストキスも君にあげたけど、今度は俺からのキスを受け取ってほしい」

ラキスケはそう言つて、ツアレ優しく抱きしめて唇を重ねる。

先ほどとは違つて唇をしばらく重ね合う。ラキスケの唇が、ツアレの上唇を軽く啜えるように食んで舌でゆっくりとなぞる。上唇を味わつたら次は下唇を同じように食んでなぞり、再び上唇を……。

それを数分の間繰り返していると、ラキスケの治療によつて元に戻つたツアレの歯で閉じられていた口内が小さく開いて、おずおずとツアレの舌がラキスケの唇に触れる。

ラキスケは、ツアレが舌で自分の唇を味わうのをしばらく待つてから、口内から出てきたツアレの舌を唇で捕まえて自身の舌と触れ合わせる。

「んっ!? ん……」

ツアレは心地よさに閉じていた目を開く。びっくりはしてしまつたが、嫌ではない。ラキスケの唇に攫われた自身の舌を引き戻すことはせずに唇を重ねたままにする。

ラキスケは自身の口内へ連れ去つたツアレの舌全体を確かめるように舐めてみたり、これまでのキスで口内に溜まつた唾液をツアレの

舌に塗したかと思えば味わうようにしゃぶってみたりする。そしてツアレの前歯を舌でなぞって拒絶されないことを確認してから、ツアレの口内に自身の舌を侵入させた。

ツアレの口内を味わうように舌を絡めて唾液を嚙ってみたり、逆に唾液を送り込んでツアレに飲ませてみる。ツアレの方もぎこちないながらも舌を絡めてラキスケの口内を味わっている。

「んんっ、ラキスケ……様、んちゅっ」

くぐもった声で自身の名を呼ぶツアレに、ラキスケは愛おしさが一層こみあげてくる。

絡めていた舌は離すが唇は繋がったまま、ツアレの背中に回していた腕で彼女の全身をまさぐり始める。頭を優しくなでてから頬、首筋、肩へとなぞりながら反応を確かめる。

「んっ……、んんっ、んひっ！ んん……」

ツアレの首筋に触れた時に反応があったが、それは気持ち良さからは程遠い反射的な怯えを滲ませたものだった。看病していた時にツアレが告白してくれた話で、ラキスケが八本指の麻薬拠点に突入した際、彼女は六腕の一人に真綿で首を絞められながら犯され殺されそうだったというから、トラウマになっていても無理もないだろう。それでも反射的に拒絶したりしないのは、それだけラキスケを愛しているからだ。

「ごめん……なさい」

「ごっちこそごめんね、ツアレ。辛いことを思い出させちゃって。首は触れないように気を付けるから、続けてもいいかな？」

「はい。その、ありがとうございます。んっ……」

唇を離して謝罪するツアレに、ラキスケも自身の無神経な行動への謝罪で返す。

ツアレに了解をとってから、片腕を彼女の少し膨らんでいる胸に手を当てて、ネグリジエ越しにふにふにと触り始める。

その柔らかさにツアレを押し倒し、思う存分揉みだきたくなる欲求が頭をもたげるが、ラキスケはそれを振り払ってツアレが痛い思いをしないように慎重に愛撫する。

ラキスケは現実^{リアル}世界ではAV男優を勤めていた。しかし、ツアレと出会うまで性欲が枯れていたために、この世界に来てから100年近くの間その技量を活かす機会が無く、かつての技量は錆びついていることも自覚している。

それでも、ポリシーであつた『一方的に快楽を貪るのではなくて、お互いに快楽を高め合うようなセックスを楽しむこと』という思いまで風化していなかったことにラキスケは安堵する。

ツアレの胸を愛撫するたびに彼女の口から声漏れるが、それは気持ち良さというよりはくすぐったさで声を出しているような反応であつた。

ラキスケはもう片腕でツアレの太ももを撫でる。抵抗こそ無いものの、ツアレの身体は強張つていた。驚いているとかの一過性のものではない、潜在的な恐怖によるものだろう。

(そっか。ツアレが経験してきたのは一方的に貪られるだけのレイプばかりで、気持ちいいセックスの経験がないのか)

ラキスケは口には出さずにツアレが置かれていた境遇を再認識する。ツアレにとって性行為とは、快楽が伴うものではなくて苦痛が大半を占める、拷問のようなものだったのだろう。助けた時の彼女の症状に薬物中毒があつたことから、僅かな快楽も薬物で無理矢理植え付けられたものかもしれない。

ラキスケが考えていると、ツアレはポロポロと涙を探しながら謝りだした。

「ごめんなさい。ラキスケ様を気持ち良くしないといけないのにつ……、悲しい顔をさせてしまつて」

「えっあつ、違うんだ、ツアレ。ツアレが悪いんじゃないよ、つその、ツアレを気持ちよくできない自分が不甲斐なく感じてしまつて」

「わたしは、ラキスケ様にたくさんキスしていただけただけで、十分幸せです」

ツアレは涙を流しながらぎこちなく笑顔を作る。キスだけで幸せであるという言葉は嘘ではないだろう。ツアレにとってはラキスケに気持ち良くなつてもらつたことこそが一番であり、自分の快楽は考え

てもいないのかもしれない。

だからこそ、ラキスケはツアレにその先の快樂と幸福を知ってほしいのだ。

「俺は、自分だけが気持ち良くなるんじや満足できないんだ。俺の手でツアレにも気持ち良くできないと、俺の心が満たされないんだ」

「ラキスケ様は、我儘なのですな」

「ああ、そうだよ。ツアレ、俺のために君を気持ちよくさせて欲しいんだ」

「はい。ラキスケ様、私を……、気持ちよくさせてください」

ラキスケはツアレの涙を拭うと、彼女をベッドに横にして愛撫を再開する。

ラキスケは片腕でネグリジエ越しに胸を触り、もう片方に顔を埋める。残った片腕はネグリジエの内側に潜り込ませ、太もものすべすべとした肌触りを楽しみながらゆつくりと撫でまわす。

「んっ……ふう、はう」

情事を始めてから二十分以上はたっただろうか。ツアレの身体の強張りも抜けて吐息にもいくらか熱を帯び始めている。

ラキスケはツアレの身体から一旦両手を離し、胸に埋めていた顔をツアレの顔まで動かして唇を軽く啄みながら、両腕をネグリジエの肩口までツアレの身体をなぞるようにして移動させる。

そして、ネグリジエの肩口に指を引っかけると、ラキスケはネグリジエをずり下ろしてツアレの胸を露わにし、その柔肌を直接愛撫し始めた。

大きくはないが確かにある乳房、その頂点にある小さな桜色の乳首を片方は摘まんでコリコリと刺激し、もう片方を唇で含んで舐めていく。

「あっ……あふう、んんっ！」

ツアレも少しずつだが感じてきているのだろう。声に艶が入り始め、吐息が荒くなってきた。

ラキスケは乳首から唇を放して、今度は指で愛撫していた方の乳首を口に含んで舐め始める。唇から放した方の乳首は空いていた方の

手で愛撫されている。何気なく口に含んだ乳首を吸ってみると、乳首からほんのりと甘味を感じた。

「あれ？・甘い？」

何だろうか？ラキスケは乳首から口を放して呟くと、ツアレが答える。

「ラキスケ様。多分、私の生まれながらの異能です」

「生まれながらの異能？」

「私、その……気持ち良くなると母乳が出るんです。ラキスケ様は嫌ですか？」

「そんなことないよ。そういう生まれながらの異能もあるんだとは思ったけどね」

「はい。今までは沢山犯されても出なくて、お薬で無理矢理気持ち良くさせられた時だけでした」

「それは、俺がツアレを気持ちよくできたっていう事で良いのかな？」

「だとしたら、嬉しいな」

「はい」

顔を赤くしながら肯定するツアレだが、慰み者にされていた頃は発揮されることがほとんどなかったという言葉には、この生まれながらの異能に対する嫌悪感を滲ませていた。

「私は今までこんな生まれながらの異能無ければ良かったと思っています。けれども、ラキスケ様が喜んで下さるならば」

「ありがとう、ツアレ。続けるけれども、良いかい？」

「はい。ラキスケ様は私に知らなかった世界を教えてください。セツクスってこんなに気持ち良くて嬉しいものなのですね」

「これからもっと気持ち良くしてあげるから、ツアレも我慢しないでいいんだよ」

ラキスケはそう言って、再びツアレの乳首を吸い始め愛撫を再開する。

乳房の柔らかさにほんのりと甘い母乳を味わいながら、ラキスケは両方の胸を順番に吸い続ける。

「あつ、んんっ！ はあはあ……、あうっ！」

ツアレの口からは、吐息だけでなく熱を帯びた喘ぎ声も混ざるようになっていた。

ラキスケは空いている腕でツアレが着るネグリジエをたくし上げ、露わになった彼女の太股を撫でていく。

「はあっ……ふあ、んうんん！」

ツアレの太股を撫で続けながら、徐々に付け根にある彼女の秘部へと手を近づけていく。そして、下着の上からツアレの秘部に手が触れると、彼女は身をよじって堪えるようにラキスケの頭をかき抱いた。

「ひゃんっ！ ラキスケ様っ……あん！ ひいうん」

予想よりも反応が大きいなとラキスケは思う。これが自身の愛撫によって昂った結果ならば素直に喜べるが、もしも本来のツアレは感じやすい体質だった場合、そんな彼女が感じることでできなかったほど彼女が置かれていた環境が酷かったことを物語る。

彼女にトラウマを刻み込んだ者たちに対する負の感情を努めて隠しながら、それが行動に現れないように気を付けてツアレの下着に指を差し込んで、彼女の秘部にある肉筋に指を這わす。

「はうっ、あああっ！ ラキスケ様あっ、ひやう！ んうっ！」

「気持ちいいのかい、ツアレ？ 大切な所だから、もう少しほぐしておくよ」

これまでより明らかに大きな反応を見せるツアレ。ラキスケはその反応を確かめながら、這わしている指に力を入れて肉筋への愛撫を続けていく。

繰り返し愛撫していくうちに膣口を閉じていた肉筋が緩んで濡れ始めているのを感じ、ラキスケはツアレの胸に埋めていた顔を離して胸を愛撫していた腕で、ツアレの下着を結んでいた紐を解いて脱がす。

両腕でツアレの太ももの付け根を掴んで脚を開き、露わになった秘部にラキスケは顔を近づける。

親指で肉筋を開いて膣口の様子を確認するラキスケに、ツアレは羞恥心を感じていた。

「あうっ……ラキスケ様、その……そんなにまじまじと見られると、恥

ずかしいです」

「おっと、ごめんよツアレ。俺の治療魔法で外傷や病気は治したけれども、内側の炎症とかも治っているのかは確証が持てなくなっただけ。それを確かめていたんだ」

「そうだったのですか。それで、いかがでしたか?」

「うん。膣内の炎症もちゃんと治っていたよ。それと、予想外だったけれども処女膜も元に戻っている。そうになると、このまま挿入するときにはツアレが痛い思いをするから、もうちょっとほぐしておくね」

「ラキスケ様、このまま……私を抱いていただけませんか」

ラキスケも予想外と言った処女膜の再生。ツアレに苦痛を与えないために愛撫を継続しようとするラキスケをツアレは止める。

「ツアレ。さつきも言ったけれども、このままだとツアレが痛いんだよ。良いのかい?」

「はい。これでも、痛い人には慣れていきます。それに、失ったはずの処女をラキスケ様に捧げられるならば、初めての痛みも捧げたいんです」

「ツアレ……分かった。できるだけ優しくはするけど、もし耐えられないくらい痛かったらすぐに言っただけね」

「ありがとうございます、ラキスケ様」

ツアレの思いを受け取ったラキスケがいったん体を離し、履いているズボンを脱ぐといきり立った肉棒が露わになる。先走りの汁が鈴口から零れているそれは、様々な男たちの肉棒に犯され啜えさせられてきたツアレにとっても初めての大きさだった。

ラキスケはツアレに覆い被さり、肉棒の先端をツアレの膣口の周辺に擦りつける。

「んっ、ああん! 早く……下さい、んんっ、ああっ!」

愛液を肉棒に塗って滑りをよくするための準備だが、ツアレにとっては焦らされているように感じ、喘ぎ声を上げながらその先を求め

る。肉棒が十分に愛液に塗れたのを確認し、ラキスケはツアレを抱きしめながら膣口に肉棒をあてがう。

「ツアレ、挿入するよ」

ラキスケは耳元でそう言ってツアレが小さく頷いたのを確認すると、肉棒を徐々に膣口に埋めていく。

ツアレの心はラキスケに気を許していても、性行為が苦痛を与えるものと覚え込まされている身体の方は、膣内へ入ってこようとする肉棒を拒絶しようときちぎちに締め付けてくる。

「はあうっ、……くっ」

先ほどまでの喘ぎ声とは違い、苦しそうに顔を歪めるツアレ。ラキスケは不安になりながらも、少しでも緊張がほぐれてくれればと彼女の唇に啄む様に口づけし、少しずつ肉棒を膣内へと埋めていく。

そして、肉棒の先端が膜のようなもの——処女膜に触れたのを感じ、ラキスケは一旦腰を進めるのを止める。

「ツアレ……、君の処女を貫うよ」

「ラキスケ様……、はい」

グシャグシャにシーツを掴んでいたツアレの腕を、ラキスケは自身の背中と首に回させると、一息に肉棒を根元までツアレの膣内へ押し込んだ。

「んあああああ！ ひぐっ、はっ……ああっ！」

ツアレは引き裂かれるような処女喪失の痛みに叫び、身体をびくびくと痙攣させる。それでも痛いと言わないのは、ツアレなりのラキスケへの気遣いなのだろう。

一方のラキスケも、100年近く経験しなかった快楽に流されないように必死になっていた。肉棒を根元まで啜え込んだツアレの膣内は熱く、入り口は追い出そうときつく締めつけているのに、膣奥は痛みを覚えるほどに絡みついて蠢いている。

「はあっ、はあっ……、んちゅ」

ツアレは破瓜の痛みに、ラキスケは久しぶりの快楽に、中身は違うがお互いに落ち着くまで動かずに唇を重ねる。

互いの舌を絡め合い、唾液を混ぜ合い、飲み干す。しばらくそれを繰り返していくうちにお互いに落ち着きを取り戻し、唇を放す。

「ツアレ。すごく痛かっただろうに頑張ったな」

「ラキスケ様。痛いには慣れていていると言ったのに叫んでしまって、御見苦しい所をお見せしました」

「そんなことないさ。それを行ったら俺だって、ツアレの膣内が気持ち良すぎて自分の事で一杯一杯になっちゃったしさ、お互い様っていうことで良いかな?」

「分かりました。それでしたら、私は大丈夫ですからラキスケ様の好きに動き始めていいですよ」

「ありがとう、ツアレ。俺の好きなように、ツアレが気持ちよくなれるように動かさせてもらおうよ」

「ラキスケ様……、ありがとうございます」

ラキスケはゆっくりとツアレの膣内から肉棒を引き抜いていく。肉棒に絡みついてくる膣壁にカリの部分が擦れ、強い抵抗と共にラキスケに快楽をもたらす。

ある程度引き抜いたところで、再びゆっくりと膣内へと肉棒を押し込んでいく。ツアレの処女膜を貫いた時と比べると、幾分かはスムーズにツアレの膣奥に到達した。

「ううっ、あつ、あんっ! ラキスケ様のが……ああっ、奥に来てっ!」
ツアレの膣内への注挿を繰り返していくうちに、ツアレのあげる声は痛みよりも快感が勝り始めていた。本来は性的に感じやすい娘なのだなど思いながら、ラキスケは徐々に肉棒の注挿を速めていく。

始めは肉棒の侵入を拒絶していた膣口の入り口も、繰り返し快楽を与えていくうちにその締めりは追い出そうとするものから逃がさないものへと変わっていった。

室内には肉同士がぶつかる音に、肉棒が膣内を掻きまわしている水音、ツアレの喘ぎ声が響く。

「んひゃあ! あつ、ああっ! ラキスケっ、様……。なんか……。ふわふわした、真っ白になりそう……。感覚がっ、来そうです!」

「もうすぐイクんだね、ツアレ。俺ももうすぐだから、ツアレもイって良いんだよ」

「ああん、んふうっ! 私の膣内に、射精出して、ください……。ラキスケ様!」

自らの絶頂に近いことを教えられたツアレは、腰を打ち付けているラキスケに膣内射精だしを求めてラキスケの腰に足を絡める

ラキスケもそれに応えるべく、ツアレの背中に回していた両腕で腰をしつかりと掴み、肉棒でツアレの膣奥を何度も突く。

「ラキスケ様……私っ、いつちやう……もういつちやいます……！」

あああああっ、あああああ！」

「俺も……っ、出る！」

ラキスケが膣奥に肉棒を一際強くぶつけた瞬間、膣壁が一気に肉棒全体を締め付け、ツアレは背筋を弓なりに反らしてビクビクツと痙攣させて絶頂した。

ツアレの絶頂に誘発されるように、ラキスケもツアレの膣奥に向けて大量の白濁液をぶちまける。

「んんっ！ ラキスケ様の……熱いのが、沢山私の中に……！」

「やばい、気持ち良すぎて止まらない」

ドクドクと膣奥に注がれていく精液を、恍惚とした表情でツアレは受け止める。

今なお膣内で脈打って精液を吐き出し続けている肉棒の主であるラキスケが恋しくて、ツアレの方から唇を重ねて舌を入れる。

ラキスケは未だに射精し続ける肉棒から齎される快楽を味わいながら、腰を掴んでいた腕をツアレの背中に回して抱きしめて、ツアレとの繋がりをより深くしていった。

「んっ……、じゆる……ちゅば」

やがてツアレへの膣内射精が収まり、どちらからともなく唇を放す。それでもラキスケの肉棒は未だ萎えておらず、ツアレの膣内での存在感を主張している、

ラキスケとしてはこのまま続きたい欲求があるが、結果的にとはいえ二度目の処女喪失で体力を失っているツアレを思うならばここで止めるべきだろうと考えて、肉棒をツアレの膣内から引き抜こうとする。しかし、ラキスケの腰に絡めたままのツアレの脚がそれを遮る。

「もう……終わりにしちゃうんですか？ ラキスケ様の……お、おちんちん、まだこんなに大きいままなのに」

ツアレが羞恥に顔を染めながら紡いだ言葉に、ラキスケは衝動的に襲ってしまいそうになるのを堪えながらも強い興奮を覚える。それに呼応するように、肉棒がツアレの膣内で小さく跳ねる。

「あんっ……」

「ツアレ……、良いのかい？」

肉棒に膣壁を擦られて喘ぐツアレに、ラキスケは問いかける。このままセックスを続けてしまってもとは聞かなくても察することはできる。

「はい。ラキスケ様が満足するまで、何度でも」

「……分かった。途中で無理だと思ったらすぐに言ってね。止めるように善処するから」

ツアレの返答にラキスケはそう言って、ツアレの膣内に根元まで埋めたままの肉棒を動かし始めた。

一夜明けて、部屋の中ではツアレとラキスケが緩慢な動きで抱き合っていた。

水分を補給したりといった小休止は時折あったものの、それ以外の時は常にツアレを抱き続けていたラキスケ。

肉棒は未だに萎える様子を見せていないが、精神的に満ち足りたために途中から激しい行為は控えて胸やクリトリスへの愛撫と合わせ、ツアレに快樂を刻み込んでいた。

破瓜の証は幾度となく膣内に注がれた精液に埋もれ、膣内に収まりきらなかった精液が溢れて精液だまりをベッドに作っている。

ツアレは疲労と与えられ続ける快樂に意識が朦朧となりつつも、止めて欲しいとは言わずに喘ぎ声を上げてラキスケの行為を受け止めていた。

「ラキ……スケ……様あ、あう」

「ツアレ、射精するよ」

ぐりぐりと膣奥を擦るように腰を動かしていたラキスケが絶頂に

達し、ツアレの膣内に精液を放つ。

「ひいう……はふう」

ツアレの反応は小さく、それでいて確かに快楽を感じていることをラキスケは確認すると、既に腰の拘束が緩み切ったツアレの脚を解いて肉棒を引き抜く。肉棒が引き抜かれた膣口からは、夥しい量の精液が愛液と共に零れ落ち、精液だまりを広げていた。

恍惚とした表情で半開きになっているツアレの唇を自身の唇と重ね合わせ、触れるだけのキスをする。

すぐに唇は離れ、ラキスケはツアレを優しく抱きしめると、耳元で囁く。

「ありがとう、ツアレ。こんなに気持ちいいセックスをさせてくれて」「ラキスケ様……、ありがとうございます……ごじます。こんなに……幸せな……気持ちに……させて……くれて」

息も絶え絶えになりながらツアレはラキスケに感謝する。

両親を早くに亡くして妹と二人でひもじい思いをしながら生きてきた幼少期。貴族に目をつけられて攫われ、妾という名の性奴隷として純潔を奪われ弄ばれた六年間。その貴族に飽きられて売り飛ばされた、地獄そのものであった娼館の二年間。

そんな世界から救い上げてくれたラキスケとの情事はツアレの人生で一番優しく、気持ち良くて、幸福なものだった。

ツアレが呼吸を整えるのを待って、ラキスケは口を開いた。

「ツアレ。俺たちが今、帝国にいることは伝えたよね？」

「はい」

「帝国に居れば王国の八本指だって簡単には手をだせないはずだけど、王国でやり残したことや、会いたい人はいないかい？」

「……生き別れた妹と会いたいという気持ちや、貴族たちに対する恨みはあります。でも、もう辛い思い出ばかりの王国に居たくないという気持ちの方が強いので……」

「……分かった。ツアレをこの船に置いてもらえるように、みんなには俺から頼んでみるよ」

「ありがとうございます、ラキスケ様。……落ち着いたら……、なんだ

か……眠く……」

「安心して眠っていいんだよ。お休み」

一夜丸々セツクスし続けていたツアレは疲労の限界だったのだろう。ラキスケとこれからも居られるかもしれないことを知って、安心したことで急に睡魔が来たようだ。

瞼を閉じて静かに寝息を立てるツアレを起こさないように、ラキスケは《清潔^{クリーン}》の魔法が込められたマジックアイテムをアイテムボックスから取り出す。それでツアレと自分、それと部屋を綺麗にしてから布団を掛けて添い寝することにする。

ツアレの話を聞いたラキスケはある決意をしながら、今はツアレの寝顔を眺めて心を安らがせることにするのであった。

外伝「ツアレの前戯」

ラキスケ様に初めて抱かれてから一週間がたちました。

あれからも毎日ではありませんが夜になると口づけを交わし、肌を重ねています。

ラキスケ様とのセックスは私を性欲処理の道具として扱う娼館の客たちとは違う、優しくて気持ちいいものです。

濡れていない膣やお尻の穴に無理矢理突き込まれることも、喉奥に無理矢理咥えさせられることも、暴力を振るわれることもありません。

だからこそ、私はラキスケ様に何をしてあげられるのか不安になってしまいます。私と肌を重ねた後もラキスケ様のそそり立ったままのおちんちんを見ると、ラキスケ様が本当はまだ満足していないのに、私の事を慮って抑えてしまっていないかと考えてしまうのです。

力がなく、頭も良くない私ではラキスケ様のお手伝いをする事は叶いません。

かつていた娼館で客たちの欲望をぶつけられるだけだった私は、真つ当な娼館の娼婦たちと比べて相手を気持ちよくさせる技量に乏しいことも分かっています。

それでも、あの地獄のような場所から救い上げてくれたラキスケ様に恩返しができるとしたら、この身体でラキスケ様の劣情を受け止めることくらいしか私には思いつきませんでした。

ツアレと何度目かのセックスをした夜が明けた朝、俺は下半身からの温かくてムズムズとした心地よい感覚で意識が覚醒した。

「んちゅっ……んんっ、くちゅ……ちゅば、じゅるっ、レロ……ちゅるっ」

目を開けると、朝勃ちした愚息に顔を埋め咥えているツアレの姿があった。亀頭をしゃぶり、肉竿を握って扱っていた彼女は俺が目覚め

たことに気が付く。

「ちゅぱっ、じゆる……ラキスケひやま、じゅぶじゅぶ、おひやほーほはいます。んちゅ……レロレロ」

ツアレは愚息を啜えたまま朝の挨拶をして、しゃぶるのを再開する。

「おはよう、ツアレ。それで、これはどういう状態なのかな。口を放して教えてくれるかい？」

「んちゅっ……朝、目を覚ましたらラキスケ様のおちんちんが元気でしたので。昨夜のはまだご満足いただけに思いないと思い、ご奉仕させていた দিয়ে いました。それでは、続けさせていただきますね……はむっ」

俺が理由を尋ねると、ツアレは一度愚息から口を放して答えた後に再び啜えて再開する。

本来ならば朝早くから性欲処理をさせるのは止めるべきなのだろうが、初めてツアレの方から奉仕してくれている嬉しさと愚息からくる心地よさに負けて俺は彼女の奉仕に身を委ねていた。

「うっ……ツアレ、そろそろ射精そうだから口を……はう」

「じゅぶっ……じゆるじゆる、レロレロ……ちゅぶ」

俺は高まってきた射精感を告げて口を放すように伝えようとするが、ツアレは愚息から口を放さずにむしろ龟头をしゃぶる動きを激しくしていく。

愚息から伝わってくる強い快樂に呻き、俺はツアレの口内に白濁液を解き放ってしまう。

「ご……ごめん、ツアレ。早く吐き出して！」

「じゆるっ！ んんっ！ んぐうっ、んぐっ、んぐう……」

慌てた俺の言葉を無視する様にツアレは解き放たれた精液を口内で受け止めて、喉をならして飲み下していった。

「んぐっ、んぐっ、ごくごく……じゆるじゆる。ぷはあ……、れろ」

長い射精を終えて精管に残る精液も吸い出してからツアレは口を放し、飲み切れずに唇の端から零れていた精液を指で拭って舌で舐め取る。

「ツアレ、飲んじやったけれども大丈夫かい？ 不味くなかった？」
「はい、大丈夫です。ラキスケ様がこんなに出してくれて嬉しいですよ」
俺は本来なら飲むものではない精液を飲ませてしまったことに罪悪感を覚えて心配するが、ツアレは大量に射精したことに喜んでるようだ。

確かに前戯やプレイの一環として口淫や精飲は存在するし、俺もいつかはツアレにしてももらえたら嬉しいなと思ってた。実際にツアレがしてくれた口淫は気持ち良かったし、口内射精した時にはツアレを自分のものにしたような錯覚を覚えて征服欲が満たされた。

しかし、俺とセックスする様になって間もないツアレからの口淫は、何か焦っているような雰囲気も感じていた。

「ツアレ……気持ち良かったし嬉しいけれども、どうして今日はしてくれただい？」

「……私は、ラキスケ様に色々なものを貰ってばかりでまだ何も返せていません。住む場所をくれて、温かい食事をくれて、私を愛してくれているラキスケ様に少しでも恩返しをしたかったです。でも、ラキスケ様のお仕事を手伝えるような強さも頭もない私には、こうやって御奉仕することしか思いつかなくて。……迷惑……だったでしょうか」

ツアレの思いを聞いて、俺はストンと心の中で合点がいった。ツアレは自分が受け取ったものに対して対価を払いたかったのだ。

それなのに俺はツアレが嫌がるかもしれない、無理をさせられないと自分だけで考えて彼女からその機会を奪ってしまった。

「そんなことないよ、ツアレ。それとごめんね。君がそんなに思い詰めていたのに気が付いてやれなくて」

「そんな、ラキスケ様が謝ることでは……」

「いや、本当ならば俺は君に何ができるのか、何をしたいのかを確認するべきだったんだ。それなのに俺は自分勝手に気を使って君を閉じ込めていた」

「ラキスケ様……」

俺はツアレを抱きしめて、自分の過ちを告白する。そして、俺はツ

アレに唇を啄むような軽い口づけをした。

「ラキスケ様……あ、まだ口を濯いでないのに」

「俺が吐き出してって言った時にツアレはそのまま飲み込んだらどう？ 君が飲んでも良いと思ったものを拒絶するほど、俺は心が狭いつもりはないよ」

「それでしたら、もう一度キスしていただいけませんか？」

「良いよ、何度でもしてあげる」

そう言っただけで俺は再び口づけし、ビアンゴが朝食のために呼びに来るまでツアレと舌を絡め合った。

ラキスケ様に想いを伝えたその日、ビアンゴ様も交えた話し合いで私は三つの役目が与えられました。

一つはこの地上船の掃除。元々はお二方が仕事の合間に汚れを綺麗にする魔法のアイテムで掃除をしていたのを、私にも任せられるものになりました。妾という体裁で貴族に連れてこられた頃でも聞いたことがない高価な道具を渡された時には、落としてしまったり無くしてしまったりないようにと手が震えたものです。

もう一つはビアンゴ様が作る昼食と夕食の調理の手伝い。なぜか料理が全くできないラキスケ様の代わりにビアンゴ様の料理の手伝いをして欲しいとのこと。朝食の手伝いが含まれていないのは、最後の役目に関わってきません。

最後の一つは、ラキスケ様の夜伽のお相手。夜伽の相手をするかの決定権は私にあり、嫌な時は断っても構わないと言われました。けれども私は、ラキスケ様と愛を育むのがとても嬉しいからどうしようもないとき以外は断ろうとは思いません。

この三つの役目を与えられた時、私はとても嬉しかった。私を道具としてではなく一人の人間として見てくれるお二方の優しさに触れたような気がしたからでした。

住む場所を与えてくれて、温かい食事を与えてくれて、仕事を与え

てくれて、優しい愛を与えてくれる。

今はまだラキスケ様に支えられている私だけれども、いつかラキスケ様を支える側になって寄り添っていききたい。

その想いを胸に、今夜もラキスケ様との夜伽でその立派なおちんちんを啜えてご奉仕していきます。……あう、ラキスケ様。おマンコをそんなに舐められると上手く御奉仕ができません。舌が……、おマンコの中に入ってきて！ おちんちんとはまた違うウネウネした触感がああ！

外伝 「ツアレのアナル開発」

普段ツアレとの夜伽をするときに使っているラキスケの自室で、寝間着を脱いで産まれたままの姿となった二人は向かい合っていた。

「ツアレ、準備は済ませたかい」

「はい。言われたとおり、お腹の中を綺麗にしてみました」

「もう一度聞くけど、本当に良いんだね？」

「はい。ラキスケ様にお尻の方も抱いてほしいという我儘を言ったのは私です」

「……分かった。それじゃあ、今回はツアレのアナルを抱かせてもらうよ」

事の発端はある日、二人の夜伽後のピロートークでツアレは羞恥で顔を赤くしながら、

「次の夜伽では、私のお尻を抱いていただけませんか」

とラキスケに頼み込んできたのだ。

面食らったラキスケが理由を聞いてみると、ツアレはラキスケと肌を重ねるようになってからは膣と口は既に経験しているがアナルだけは未だに手付かずのまま、他の者たちに穢された経験を塗り替えて欲しいのだという。

そうなるとアナルセックスの気持ち良さを教えるために準備が相応に必要な。そう判断したラキスケはツアレに、

「次の夜伽では間に合わない。急いでも却って辛い思い出しかならないから、時間をかけて少しずつ慣らしてからアナルセックスをしよう」

と答えたのだった。

そしてその翌日から、ラキスケによるツアレのアナル開発が始まった。

いきなりアナルに指先を挿入するようなことはせずには肛門周辺のマッサージから始まり、それによって濡れてきたヴァギナの愛液を指に塗しての菊門のマッサージを行う。

数日かけて菊門のマッサージでツアレが気持ち良くなっているの

を確認したら、次はその間に用意した動物の腸や魚の浮袋から作られたコンドームを小指にはめ、特製のローションを塗して肛門に軽く指を入れてほぐす作業に移る。

この特性ローションはラキスケがこの世界に転移してから100年の間に偶発的に発見し、現在では帝国魔法省で飼育・管理されている特殊なローパー——絡め捕った相手を治療してその代価として餌となる老廃物を得る習性がある個体——の触手から分泌する粘液が基となっている。このローションには殺菌作用と微弱な治療効果があり、本番やその過程で痛みを伴いやすいアナルセックスでは潤滑剤として有用とラキスケは判断した。本来の医療用薬品の開発研究を行っている研究者たちは泣いてもいいかもしれない。

小指の挿入に肛門が慣れてきたら次は薬指、その次は中指……と少しずつ太い指へと数日かけて慣らしていき、それからさらに数日かけて肛門の拡張に勤しんでいく。

アナル開発を行っている間も夜伽はしており、むしろ時間こそいつもよりは短いがほぼ毎日のようにラキスケはアナル開発と並行してツアレを抱いていた。

それを夜な夜な行っていく、アナル開発の開始から一か月でツアレのお尻の準備は整ったのであった。

「まずは緊張を解いて身体をほぐそうか」

ラキスケはそう言うと、ツアレと口づけを交わす。

ラキスケがツアレと優しく舌を絡ませながら互いの唾液を混ぜ合わせている間に、セックスするようになってから少し成長した胸に手を這わせていく。

乳首にはまだ触れずに乳房の縁の辺りをマッサージする様に入念に揉みながらツアレの性感を徐々に高めていくラキスケに、ツアレはじれったさを感じながらその行為を受け入れる。

始めは胸を愛撫していたラキスケの指がツアレのお腹へと移動し、

そのまま腰を揉みしだく。さらに指は降りていって太股を一通り愛撫してから脹脛もマッサージしていく。そして、足裏まで到達したところでそれまで下ろしていた腕をツアレの股間の所まで戻してそれぞれの手指でクリトリスと菊門の愛撫を開始した。

「んちゅ……あん、あう、ちゅぱっ……ラキスケ様、ひうん、まだ……挿入しないのですか？」

「もうちよつとかな。アナルの拡張は十分にしているけれども、いきなり挿入するよりも気持ち良くなってから挿入する方が痛くないからね。ツアレには気持ちの良いアナルセックスを経験してほしいから」

唇を放してそう言うと、ラキスケはツアレの乳首に吸い付いた。セックスの度に揉まれ母乳を吸われている乳首はツアレの性感帯となつている。それに加えてクリトリスを愛撫していた手が親指による愛撫はそのままに人差し指によるヴァギナへの挿入をし始め、菊門を愛撫していた指もアナルに指を沈ませていくのもあつてツアレは喘ぎ声を挙げる。

「ひあー！ラキスケ様あ……そんなこと、ひいん！ されたら……すぐについてしまいますう、ああん！」

「じゅぶじゅぶ、ゴクン。いつて良いんだよ、ツアレ。何度でもイかせてあげるから」

「はあっ、んう……はいっ……ああああっ！ おっぱい吸われていくっ……いつちやいますうっ、あああっ……ああああっ！」

ツアレが悲鳴にも似た喘ぎ声を上げながら背筋を弓なりに反らしたかと思うと、それに合わせてヴァギナとアナルに挿入していた指がキュウつと締められてビクツビクツと彼女の身体が震える。

数秒の後、くたりと俺に身体を預けるようにツアレがラキスケにのしかかる。後ろに倒れかかった時のために翼を広げてツアレをいつでも支えられるように準備していたが大丈夫なようだ。

締め付けが緩んだ二つの穴から指を抜き取ると、ヴァギナに挿入していた方の指でアイテムボックスから《清掃》^{クリン}が込められたマジックアイテムを取り出して、アナルに挿入していた方の指を一度綺麗にし

てからツアレが倒れないように背中にも手を回して支える。

ちゅぽんと母乳を吸っていた唇を放すとそのまま放心しているツアレの唇に重ね、口内に溜めておいた母乳を流し込む。

「んぐっ……ぐく、ぷはっ……私の母乳を私に飲ませるなんて、ラキスケ様はエッチです」

「うん、自覚はあるよ。嫌だったかい」

「……ラキスケ様からされることは、嫌ではありません」

「良かった。それじゃあ、本番のアナルセックスを始めようか」

ラキスケはツアレを四つん這い——その中でも特に屈んでいる屈曲後背位の体勢にしてお尻を突き出させると、お尻の穴を広げるように両手で掴んで肉棒を入り口にあてがう。

「行くよ、ツアレ」

「はい……くうう！ あう……！」

滑りをよくするために人肌に温めた特性ローションを肉棒と菊門に塗ってから肉棒がゆつくりとツアレのアナルへ侵入を始めるが、ツアレは苦悶の声を上げる。やはり過去のつらい記憶を思い出してしまうのだろうか。

ラキスケは亀頭がアナルに埋まった所で一旦動きを止め、優しくムニムニとお尻を揉んで解していく。

「大丈夫だよツアレ、力を抜いて」

「あ……はい、ふうー……すうー」

ツアレの呼吸に合わせてラキスケは少しずつ肉棒をアナルの奥へと掘り進めては止める行為を繰り返す。その度に特性ローションをアナルと肉棒の結合部に垂らして馴染ませていくことも忘れない。

そうやってアナルセックスを始めてから10分ほど時間をかけて、ラキスケはツアレのアナルに肉棒を根元まで挿入したのだった。

肉棒が挿入し終えたのを確認したラキスケは、膣の絡みついてくる締め付けとはまた違うアナルの触感と締めりを味わいながらツアレに問いかける。

「ツアレ、俺のがツアレのお尻の中に全部入ったけれども、どんな気持ちだい？」

「は……はい。お尻の中に……凄いや圧迫感がありますけれども、痛みとかはなくて……不思議な感じです」

「ああ、良かった。ここまで準備してもアナルセックスと相性が悪いと痛がる女の子は普通にいますからね。ツアレは大丈夫で安心したよ」

「私もです。お尻も……ラキスケ様に捧げることができて、本当に……良かったです。んっ」

ラキスケはアナルを捧げることができたことに涙を流しながら喜ぶツアレに覆いかぶさり、彼女の金髪の旋毛にキスをする。

そしてゆっくりとツアレを揺るように腰を動かし始める。その動きは普段のセックスよりも緩慢で、肉棒を前後に動かす抜き差しよりも左右や円を描く動きが主だが、じんわりとした柔らかい快感がツアレの体中に響く。

ラキスケが腰を動かす度に特性ローションと肉棒の先走り汁が混ざったものがぐちゅぐちゅと卑猥な音を立てる。その音がツアレに羞恥心を感じさせるとともに、アナルセックスの快感を沁みつかせていく。

「ああ……うんっ、はあはあ……、ラキスケ様あ……ああああ……、私の事は……んんっ、お気になさらずに……はあはあ、もっど動いて下さって……良いのですよ？」

「良いのかい？ いきなり激しいと裂けて痛い思いさせちゃうし、今のままでもツアレのアナルはすごく気持ち良いけれども。それじゃあ、ちよつとだけ、ツアレに甘えさせてもらおうよ」

そう言つて、ラキスケは皮膜状の翼をベッドにつけて自重を支えながら、空いた両腕でそれぞれツアレの胸と膣を愛撫し始めた。右腕はツアレの乳房を揉みしだきながら固く膨らんだ乳首を摘まみ、左腕はクリトリスを弄り蠢かす。

それに合わせてラキスケが腰をゆっくりと前後に動かし始めると、先ほどまでのじんわりと広がっていく快楽とは違う、三か所の性感帯から与えられる強い快楽にツアレは甘い嬌声をあげて悶える

「ひゃああー！ ああうあつ……、んひいつー！」

「ツアレも気持ち良くなっているんだね。アナルの締めりも良いし、エッチな汁もすごいよ。俺もそろそろ一度イかせてもらおうよ」

「はいいつ、ツアレのお尻に……んっ！ ラキスケ様のザーメンを……沢山注いでください、ううんっ！」

ラキスケの腰とツアレのお尻がぶつかる音が、結合部から漏れ出る水音と合わさって室内に響き渡る。ラキスケは射精が近い肉棒をツアレのアナルの奥深くまで突き刺し、腸内に大量の白濁液を解き放つた。

「ああっああうっあううん！ イ、イクうう……んうう！」

ツアレは自らの腸内に吐き出される大量の白濁液に今夜で二度目の絶頂を迎え、ベッドに備え付けられている枕に顔を埋めて声を押し殺す。

ツアレの乳房からは母乳が滲み、揉みしだいていたラキスケの片手を濡らし、膣口からも絶頂に伴う潮吹きでベッドに染みを作っていた。

「……ふう。とても気持ち良かったよ、ツアレ」

「はあはあ……、ありがとうございます……ごさいます。ラキスケ様の精液……あったかい。んっ」

長い射精を終えてラキスケは繋がったままのツアレの耳元で肛内射精の感想を伝える。

膣とはまた違った感触と締めりに加えてアブノーマルなセックスをしている背徳感が堪らない。

そのようなことを考えている間に肉棒がアナルの中で小さく跳ねてツアレを刺激する。

「あんっ……、ラキスケ様……このまま続けますか？」

性欲としては十分続けられるしアナルをもっと抱きたいとも思っていたが、ツアレの疲労具合から連戦は不味いとも考えていたラキスケは、ツアレの蠱惑的な提案に唾を飲み込む。

「ツアレは良いのかい？」

「はい。はしたないですけども……、私もラキスケ様ともっと一緒に気持ち良くなりたいです」

よほど恥ずかしいのだろうか。ツアレはそう言つて、顔を枕に埋めて表情を隠す。ツアレが勇気を振り絞つて言つた言葉で、ラキスケの頭からはこのまま終わりにする選択肢は消えていた。

「それじゃあツアレ、お言葉に甘えて続けさせてもらうよ」

始めてツアレとセックスした時と既視感を感じながら、ラキスケはアナルセックスを再開するのであった。

アナルセックスを始めて数時間の間にラキスケは屈曲後背位の体勢のままですらに二回、それからは背面座位に体位を変えて複数回ツアレのアナルに射精した。

始めはゆつくりだったアナルへのピストン運動も、繰り返される肛内射精で精液が満たされて滑りが良くなってからは膣を使ったセックスと遜色ない動きで動いている。

現在はツアレの疲労回復を兼ねて余らせていた特性ローションを彼女の全身に塗り、途中から用意した姿見の鏡に背面座位で繋がったままのツアレの全身を映して抱いている。

「ら、らめえ……。らきしゆけ様あ……。こんなはしたない顔の私を見ないでえ……」

「そんなことないよ、ツアレ。今のツアレのエッチな表情は凄くそえられるから、このまま射精するよ」

言葉では鏡越しに見られることを嫌がつてはいても本気では拒絶していないことを理解しているラキスケは、腰を揺すりながらツアレの両胸を背後から揉みしだき、乳首を摘まんで引っ張る。

そして嬌声をあげるツアレの痴態を覗きながらアナルに射精する。

「ふわあつ……。あああ……。あああああ」

肛内射精に対して力なく嬌声をあげるツアレとの結合部からは、収まりきらなくなった精液が溢れ、ベッドの上に精液だまりを作っていた。

ラキスケは射精が終わつたのを確認してからツアレのアナルから

肉棒を引き抜く。

「あああああ……、ああん」

アナルから肉棒を引き抜くのに合わせてツアレの喘ぎ声が漏れ、今まで肉棒で栓をされていた夥しい量の精液が菊門から溢れてツアレの尻肉を白く穢す。

特性ローションの治癒効果によるものなのかツアレの生来の素質なのかはわからないが、幸いにして菊門が開きっぱなしになって閉じなくなっている様子はない。

ラキスケは前戯の時にも使用した《清掃》^{クリーン}が込められたマジックアイテムを再び取り出して、アナルセックスを行った肉棒と菊門を重点的に綺麗にする。

「ツアレ。痛い所とか、調子に変な所とかはないかい？」

ベッドに座らせたまま放心しているツアレを正面から優しく抱きしめてラキスケはツアレに確認する。

「んっ……。痛い所は……ありません。でも、先ほどまでお尻にあった……ラキスケ様のおちんちんがないことに……違和感があります」
ぼんやりとしたままツアレは普段ならば恥ずかしがるようなことを答える。アナルを使った未体験の快楽にさらされすぎて羞恥心が一時的にマヒしているようだ。

「ごめん。本当にごめん」

「ラキスケ様は……優しいです。私を好きに扱ってくれて構わないのに……いつも私の事を考えて気持ち良くしてくれて、感謝しています」

罪悪感を覚えたラキスケがツアレに謝罪するが、ツアレからは反対に感謝の気持ちで伝えられる。

「今回のお願いの時も、話した時は痛いのを覚悟していました。けれども、ラキスケ様は私も気持ちよくなれるように準備してくださって、本当に嬉しかったです」

「ツアレ……」

「ラキスケ様は、私とのアナルセックスはいかがでしたか？」

「最高だったよ。気持ち良すぎて理性が緩むくらいには」

ラキスケはツアレに本心からの感想を伝えると、ツアレは微笑んでラキスケに唇同士で触れるだけのキスをする。

「ありがとうございます。私を愛してくれて」

「礼を言うのは俺の方だよ。俺は君と出会えて本当に良かった」

唇を放して礼を言うツアレにラキスケも礼を返し、ツアレの唇を啄む様に繰り返しキスをした。

その後、一夜明けて羞恥心が戻ってきたツアレは先ほどまでの自分の言動を思い出し、恥ずかしさのあまり布団にくるまり悶える姿がラキスケに目撃されている。

外伝「夢の中のツアレ」

衣装ダンスが一つと綿を詰め込んだマットレスのベッドが一つしかない、あまり大きくない殺風景な部屋で少女が幾人もの男たちに犯されていた。

今も男たちに前後を挟まれた少女の膣を、菊門を男たちの肉棒が貫く。思い思いに腰を振るその様子は少女のことを労わることなどない、むしろ少女が苦しみ泣き叫ぶほど興奮してその行為を加速させていく。

「ひぎいいい！…痛あ……い！」

「ああん？ うるせえ。てめえは大人しくチンポ啞えてる穴を締めたりやいいんだよ、肉便器が！」

「それとも、また殴られたいか？ 俺は別にいいんだぜ、殴るたびに穴は締まるからよ」

苦痛を訴える少女の懇願に対して少女の両腕を掴んで菊門を犯す男は罵倒で返し、膣を犯す男は握りこぶしを上げて脅す。

怯える少女の顔には痣があり、左側の頬はすでに何度も殴られているのだろう、赤く腫れあがっている。同じような痣は全身に点在し、日常的に暴力を振るわれていることを示していた。

唐突に前後の穴を犯す肉棒が震え、自分たちの欲望が詰まった白濁液を少女の中に吐き出す。

「いぎい……あつ、い……痛い」

これまで休みなく数えきれないほど犯された少女の膣は炎症を起こしていた。そのため男たちの肉棒が捻じ込まれる度に、膣内に精液を浴びせられる度に少女に痛みをもたらすようになっていた。

菊門の方も肉棒を何度も無理矢理捻じ込まれているせいで裂肛し、血が滲みだしている。

「おいっ、ザーメンくれてやったのに感謝の言葉も無しかよ」

「こりや躰が必要みたいだな」

「ひっ、御許しを……おごっ！」

少女が感謝を告げないことに男たちは苛立ち、膣に射精した男が少

女の顔に拳を叩きつける。

菊門を犯す男に両腕を拘束されている少女が懇願する間もなく、部屋に肉を叩く音が響いた。

「おっ、ケツ穴が締まったぞ」

「ぎやはは、やっぱ殴られて感じるマゾかよ。もっとぶん殴ってやるか」

感じているわけがない。しかし男たちにとっては犯す穴さえ締まるならばそんなことは関係がない。

少女に対して繰り返し拳を叩きつける音とその度に零れる少女の呻き声が室内に響く。

「おい、射精出したたんならさっさと変われよ！」

「まだぶち込んでねえんだから、死なれるのはまだ困るんだよ。ほどほどにしるよ？」

「おお、悪い悪い。今変わるぜ」

「安心しろって、この程度で死にやしねえよ」

少女を労わる者はこの部屋には、より正確に言うならばこの娼館には誰もいない。

少女を犯していた男たちは射精して幾分か小さくなった肉棒を引き抜くと、次の番の男たちに少女の身体を引き渡す。

男の一人が仰向けになって少女を跨がせて四つん這いにさせ、もう一人が少女の背後に覆いかぶさるように抑え込むと、すぐに男たちの肉棒が膣と菊門にメリメリとねじり込まれて凌辱が再開される。

「いざいざ！」

再び前後の穴を蹂躪され、その圧迫感と痛みに少女は再び悲鳴をあげる。

「この女、不感症なのか？ さっきから喘ぎ声一つ上げないで叫んでばかりでうるせえぞ」

「いっそのこと、喉潰すか？ そうすりやもう叫べねえだろ」

「それなら物品壊したって余計に金払わなきゃいけないだろうが」

「それもそっか。おい、誰かこの女の口を塞いでやれ」

「おう、分かった。おい肉便器、俺のチンポしゃぶれ」

一人の男が少女の頭を両腕で自分の方に向けさせて、肉棒を少女の口に突き込む。

「おごう！ んん！ ぶごぼ！」

頭を両腕で固定され、男が腰を振るたびに、肉棒は少女の喉奥を突く。

肉棒の嫌悪感をもたらす匂いが口の中に広がり、喉奥を突かれるたびに少女は呼吸が苦しくなっていく。

上下の前歯は抜歯されているため、噛んで報復することもできないし、そもそもそんなことしたらより凄惨な罰を受けることを知っている少女は、黙ってイラマチオを受け入れるしかなかった。

「あく、口マンコ気持ちいい〜」

「口に突っ込まれてからケツ穴も締まってきたぜ」

「こっちの穴もだ。とんだ淫乱女だぜ」

呼吸を塞がれて命の危機に瀕していることによる防衛反応。それを男たちは少女が淫乱だと蔑む。

「さて出すぞ。濃いのを出してやるから、一滴残さず飲み！」

少女の口を犯していた男が、喉奥まで肉棒を突き込んで白濁液を吐き出す。

「おごう！ ぶごう！！ んぐ！！」

男の両腕で頭を固定されている少女は、喉奥にびしゃびしゃと叩きつけられる白濁液を、吐き気を催しながら飲み込むしかなかった。

「俺らより後に始めたのに、早漏じゃねえか。こっちも出すぞ！」

「ちゃんと子宮で受け止めて、孕めよ！」

「まあ、その度に墮胎させられるんだけどな」

「はは、言えてら」

前後の穴を犯していた男たちも、少女を嘲笑いながら少女の体内に熱い白濁液を注ぎ込む。

直腸と膣内に煮えたぎる油を流し込まれるような錯覚を覚えながら、少女の意識は薄れていった。

「っは！……夢？」

目を覚ました少女——ツアレが不安げに辺りを見渡し、かつて自分がいた娼館ではなく地上船の自室にいることを確認すると、ぎゅっと自分自身の身体を抱きしめる。

息は荒く、着ている白のネグリジェは悪夢を見たために冷や汗を吸って身体に張り付いている。夢の中では赤く腫れあがっていた顔も抜歯され失われていた前歯も、綺麗なままだ。

ツアレがあゝの娼館で受けたあの仕打ちは、実質的な性奴隷である彼女たちに自分の立場を理解させるために定期的に行われていた、無償と言つていいほどの安値で八本指の配下やならず者たちの相手をさせる輪姦だった。

客を楽しませるための見世物として人だけでなく犬や豚に犯されることも、犯すためではなく初めから暴力をふるうために来る客だった。時には薬物をいくつも無理矢理飲まされて頭が壊れてしまひそうになる仮初の快樂と、薬が切れた後の禁断症状で気が狂いそうになったことだつてある。

ラキスケに助けられた時だつて、逃げられないように四肢の腱を断たれた上で、八本指の六腕と呼ばれていた男に首を絞められながら犯されていた。

——ほらほら。もっと穴を締めないと、死んでしまいますよ。

——良いですねえ。助かったと思つたところから奈落の底に突き落とされる、その絶望の表情！　そそられますねえ。

今でも思い出す、男の言葉。

あの男は女性の首を絞めながら犯し、そのあとで絞め殺して末期の表情を残した頭部をコレクションするのが趣味だとも言つていた。

ラキスケが助けてくれなかつたら、ツアレもそのコレクションの一つになつていただろう。思い出すだけで涙が出てきて嗚咽が止まらない。思わず大声を出して泣きそうになつてしまうのを、口元を抑えて堪える。

しばらくして涙と嗚咽が治まると、ツアレはベッドから降りて部屋

を出る。向かうのは愛しい淫魔、ラキスケの所だ。

ツアレがラキスケに助け出されて二年を過ぎる今も、こうして過去の悪夢を見ることがある。そういう時は、ラキスケの所に向かつて慰めてもらっている。

自分の部屋を出て通路を歩き、少ししてラキスケの部屋の前まで到着する。扉の隙間から明かりが微かに零れており、ラキスケは起きているようだ。ツアレは静かに部屋をノックした。

——入っていいよ。

ラキスケにそう言われて、静かに扉を開ける。ラキスケは机に座って本を読んでいたようで、《コンティニユアル・ライト永続光》が込められたランタンの白い光が、しおりが挟まれている閉じた本を照らす。

「あ、あの……。夜遅くにすみません」

「本もちょうどいい所まで読んだところだし、気にしていないよ。扉の前で立ったままなのもなんだし、こっちに來て座らないかい？」

「あ、ありがとうございます。それではお邪魔させていただきましたね」

ラキスケは椅子から立ち上がって部屋の前で立ち止まっているツアレの所まで行くと、自身の手をツアレの背中に回してベッドまで案内する。ツアレがベッドに腰掛けると、ラキスケも隣に腰掛けた。

「また悪い夢を見たんだね、ツアレ」

「はい……。今日は……」

「辛いようだったら話さなくていいよ。ツアレが悲しんだり辛かったりするの、俺も心苦しいから」

ツアレがどのような夢を見たのかを話そうとすると、ラキスケは人差し指でツアレの唇に触れてそれ以上話そうとするのを止める。そして、両手を背中に回してツアレを優しく抱きしめる。ツアレもラキスケに体重を預け、抱擁を受け入れていた。

しばらくして、どちらとも言わずにお互いに顔を向けて目線が合う。お互いの顔の距離が少しずつ近づき、キスをした。

ラキスケとのセックスの時に行く、舌を絡め合い互いの唾液を飲み合う濃厚な口づけではない、触れるだけのキス。それを何度も繰り返していくうちに、ツアレは心が温かくなっていく感覚がしてきた。

「ただそれだけじゃ足りない。もっとラキスケの優しいぬくもりに触れていたい。」

「ラキスケ様、……今夜は一緒に添い寝していただけないでしょうか？」

「うん、良いよ」

——私は酷い女だ。

そうツアレは思う。普段はあんなにラキスケ様の寵愛を求めているくせに、過去の悪夢を見た夜は彼の優しさにつけ込んでその温もりだけを求めている。

ツアレがベッドに横になると、ラキスケもその横に一緒に寝転んでその手を握って指を絡める。

ツアレの女としての感情は、今もラキスケに抱かれると嘯いている。ラキスケとの性行為はツアレを攫った貴族や娼館の客たちによるレイプとは全然違う。優しく、気持ち良くて、心が満たされるセックスだ。

しかし、今それはできない。ラキスケに抱かれるのが嫌なのではない。見たばかりの悪夢を思い出して、ラキスケを拒絶してしまうのが怖いのだ。

「ありがとうございます、ラキスケ様」

「どういたしまして。いくらでもしてあげるよ、ツアレ」

——私は幸福な女だ。

そうツアレは思う。ツアレに優しい愛を注いでくれるラキスケに拾われたのだから。

……そう。生き別れの妹と再会できていないのに快樂に溺れ、幸せだと感じてしまうような女だ。

今の私を妹が見たらどう思うだろうか？ 喜んでくれるのだろうか？ それとも軽蔑するだろうか？

妹を探さないのはあの生活が厳しい村の状態で無事に生きていけるとは思えないと諦めてしまっているのか、昔のつらい記憶を思い出したくないからなのか。

それとも……、再会できたとして軽蔑されることを恐れているのだ

ろうか？

「ねえ、ツアレ。ちよつと話したいことがあるんだけれども、良いかな？」

「はい。何でしょうか？」

「俺はしばらくしたら王国に行くつもりだけれども、ツアレも一緒に来て欲しいんだ」

「……えっ？」

「ツアレにとって王国がづらい場所だつていうことは分かっている。けれども、君の妹を探すために一緒に来てくれると助かるんだ」

妹のことを考えていたツアレにとって、ラキスケの話は大きな意味を持つものだった。

「ラキスケ様……。ひよつとして、時々王国に赴いていたのは……」

「うん。君の妹を探していたんだ。ごめんな、ツアレ。見つけれなかった時に君が悲しむ顔を見たくなくて黙つていて」

ツアレは思わず涙が零れる。ツアレがラキスケに妹のことを話したのはたった一度だけ。助けられたばかりの頃に、ラキスケから王国に未練はないかと聞かれた時だった。

それもラキスケに迷惑を掛けたくないから、昔を思い出したくないと理由をつけていた。

それなのに、ラキスケはツアレのためにずっと妹を探し続けてくれていた。そのことが嬉しくて、そして申し訳が立たなくて涙が止まらなかつた。

「ご、ごめんよツアレ。辛いことを言つてしまつて」

「いいえ、いいえ。違ふんです、ラキスケ様……。辛くて泣いているのではありません。あなたがこんなにも、私のことを思つてくれていたことが嬉しくて……。それなのに、私は自分のことばかり考えていたことが、申し訳が立たなくて泣いているのです」

「ツアレ……」

「私、怖かつたんです。もしも妹がすでに生きていなくなつたら……妹に嫌われていたらつて思うと怖かつたんです。だから探して欲しいつて言えなかつた。私の我儘でラキスケ様や船の皆さんに、迷惑を

かけることも怖くて言えなかつたんです」

ツアレの独白を聞いて、ラキスケはツアレを抱きしめる。ツアレはラキスケの胸に顔を埋めると、泣いていた。

十分な時間がたち、ツアレが泣き止んだ時にはラキスケの服の胸元はぐしやぐしやに濡れていた。

「あつ……、ごめんなさい。ラキスケ様の服を……」

「気にしなくていいよ、ツアレ。ツアレが今まで苦しんでいたことに比べたらなんてことないから」

ああ、この方はどうしてこうもツアレの心私に響く言葉を言ってくれるのだろう。

立ち止まってばかりいたツアレに優しくしてくれるラキスケだからこそ、ツアレは惹かれていたのだろう。

「私、決めました。私も王国に連れて行ってください、ラキスケ様」
「分かったよ、ツアレ」

ツアレは2年ぶりに王国に戻ることを決意する。正直に言えばまだ怖いと思っている。だからこそ、ラキスケから勇気を貰いたくなる。

その思いを伝えたくて、ツアレは唇をラキスケの唇に合わせる。それも、先ほどまでの触れるだけのキスではなくてより深い舌を絡め合うキスを。

「ちゅっ、ちゅぷ……んん、ちゆるっ、んちゅ……、ちゅう」

心を暖めてくれたキスは、今度はツアレに情欲の炎を灯す。

しばらく続いたキスを名残惜しむように唇を離して終わらせ、ツアレはネグリジェを脱ぎ始める。ラキスケもこの後を察して自らの服を脱ぎ始めた。

「ラキスケ様、私は夢の中で沢山穢されました。だから、あなたに抱いてほしい。私のすべてを、あなたの色に染め上げてください」

「ツアレ……。分かった。俺がツアレの身体を全部俺の色に塗りなおしてあげるよ」

衣服を脱ぎ終えて生まれたままの姿になったツアレとラキスケ。これから、今まで悪夢を見た夜は避けていたセックスを始めるのだ。

ラキスケはこの二年間で大きく育ったツアレの乳房を両手で揉み始める。ラキスケに掌全体でツアレの胸は揉みしだかれて形を変え、乳首を親指と人差し指で摘まんでクリクリと刺激されると、ツアレの口から声が漏れてくる。

「ああっ……はあんっ、くうん……！」

さらにラキスケはツアレの乳首を口でも愛撫する。乳首に唾液を塗すように舐められ、勢いよく吸われると、ツアレはそれだけで絶頂してしまいそうになる。

「ひゃん！ ラキスケ、さま……、いつもより……感じて、ひいうん！」

普段のセックスの時よりも明らかに感度が良く、乳房に母乳が溜まっていく感覚にツアレは戸惑う。

ラキスケもそのことには気が付いているのだろう。胸を揉む力を少し強め、執拗に二つの乳首を順番に吸い続ける。

そして、勃起した乳首を甘噛みされた時、ツアレは背筋をピンと仰け反り、一瞬強張ったと思うとその次の瞬間には脱力していた。

「あああっ……、あああああっ！」

一回目の絶頂を迎えたツアレの身体からはどっと汗が吹き出し、肌は上気していた。

ラキスケはツアレの胸を責める手を止めると、両手でツアレの脚を開いて絶頂によって愛液で濡れた秘所に顔を埋め、膣口に舌を差し入れた。

「ラキスケ様、そこ……は、あああっ！」

ラキスケはピチャピチャと卑猥な音をたてながら膣口から溢れる愛液を舐め取り、吸い出す。そのたびにツアレの身体はビクンと跳ね、弓なりに背筋を伸ばす。

「じゅる……ツアレの愛液、美味しくて病みつきになるよ！」

ツアレが感じるたびに溢れる愛液を、ラキスケは喉を鳴らしながら口で受け止める。

秘所が十分にほぐれ愛液で潤った所でラキスケは顔を放し、ツアレに繰り返し口づけしながら覆いかぶさる。ラキスケの肉棒はガチガチに固くなっており、膣口の前で今かと待ち構えていた。

「そろそろ良いかい？」

「はい……。私の膣内を……ラキスケ様で満たしてください」

ツアレはそう言つて両手で膣口を開いてラキスケの肉棒に差し出すと、ラキスケはツアレの膣口に肉棒をゆつくりと挿入した。

「ひう……。ああん、あああつ！」

ツアレは喘ぎ声を上げながら、ラキスケの肉棒がどんどん奥へ入つていく様子を潤んだ瞳でじつと見つめていた。

肉棒が根元までツアレの膣内に収まると、肉棒をゆつくりと円を描くように動かしながらラキスケはツアレに口づけする。

「んちゅ、レロ……。んっ！　じゅるじゅる」

互いに舌を絡ませ、唾液を贈り合う。受け取った唾液を良く味わいながら飲み、唇を離す。

ラキスケはツアレのたわわに実った胸を再び揉みしだきながら腰を動かし始めた。

両胸と膣、三か所の性感帯を責められているツアレにできることは、両腕をラキスケの首に、両足を腰に絡めながら快樂に身を委ねて喘ぎ声をあげることだった。

「はあつ、ああん……。んああつ！　ラキスケ様の……。おちんちんっ、はあうっ！　おくにつ……。きてっ！」

ラキスケが腰を動かしてツアレの膣内を肉棒が搔きまわすたびに、ぐちゅぐちゅと淫靡な水音をツアレとの結合部から鳴らしていく。

ツアレの胸への愛撫も疎かにはしないで乳房に指を沈ませてその形を歪ませ、勃起した乳首から母乳が滲み出ている。

ラキスケの腰の注挿は徐々に速くなっていき、亀頭が膣奥を叩く度にツアレは甲高い喘ぎ声を漏らす。

「ツアレ、出すよ。ツアレの膣内に沢山出すよ！」

「はあついい……。全部、くだつ……。さい！」

既にラキスケも射精を抑えるのは限界のようだ。ツアレは膣壁で肉棒を締め上げることで応え、ラキスケの肉棒が膣奥に押し込まれたところで大量の熱い白濁液が放たれる。

「っあああああー！」

膣奥に注がれるジェル状の白濁液に、ツアレは絶頂しながらその温かさを心地よく感じていた。

ラキスケの射精が終わっても、ツアレは両足を解かずに肉棒もつながつたままだ。

「ツアレ、まだいけるかい？」

「はあつはあつ、んっ……。はい、私は大丈夫です。ラキスケ様が良ければ、私のお尻も、お口も使ってください」

「分かった。全身を塗り替えてあげる。でも、自分の身体を使うだなんて言わないでくれ。俺は、ツアレのすべてを愛させて欲しいんだ」

二人の情事が始まって数時間が経過した。

ラキスケは後背位の体位で覆い被さる様に密着してアナルに肉棒を挿入し、揺るように腰を動かしながら彼女の豊満な乳房を搾るように揉みしだき、ピュッピュと母乳を吹き出させている。

子宮は繰り返し注がれた精液で満たされ、入りきらない分は膣口から溢れてベッドを汚している。

胸もそうだ。ツアレのパイズリ奉仕で精液を浴びており、既に肌に馴染ませるように母乳と共に刷りこまれている。

ラキスケと密着しているツアレの背中も同様に精液が浴びており、ラキスケが腰を動かす度に粘り気の強い精液がニチャニチャと音を立てる。

まるで酩酊している、実際に精液に酔いしれている顔にだって精液を浴びた痕跡がある。指先や足を含めてもツアレの身体に精液を浴びていない所はどこにもなかった。

「ツアレ、射精するよ」

「あああつ、気持ち良くて……。あつた……。かい。んんうっ」

ラキスケの肛内射精にツアレは快楽に体を震わせる。

白濁液が繰り返し直腸に注がれる圧迫感も、今のツアレにとっては

ラキスケとのセックスを彩る快樂の一要素となっている。

ラキスケは艶のあるツアレの金髪に顔を埋めてその香りを感じながら、精液を腸壁に擦りつけるように腰を動かすと、ツアレは喘ぎ声を上げて悶える。

「あああつ……ラキスケ様あ、お尻に……もつと下さい。んふうつ」
「分かったよ、ツアレ。君のエッチな顔が見たいから、体位を変えて続けようか」

おねだりをするツアレにラキスケは答えると、後背位からツアレごと上体を起こして座位の体勢にし、彼女の膝裏を抱えて繋がったまま器用に体の向きを変えさせて向かい合う。

「あああああつ！ ちゅぷ……んちゅう、んんっ！」

アナルに肉棒を挿入したまま対面座位の体勢になると、ラキスケはツアレの唇に口づけし舌を絡めながら腰を動かし始める。

肉棒の注挿の度に膣口から漏れる愛液と精液が混ざったものと、菊門から漏れ出る腸液と精液が混ざったものがジユクジユクと卑猥な音を立てて室内に響く。

ツアレの豊満な胸はラキスケの胸板に潰されながら彼の動きに合わせて撓み、勃起した乳首が擦れる。

「ちゅぱちゅぱ……じゅる、んんうっ！ ああああああつ！」

「じゅぷじゅぷ……ぷはあ。また絶頂したんだね、ツアレ。君のその快樂に染まったエッチな表情を見せてくれて嬉しいよ」

絶頂したツアレの締めりを味わうように、ラキスケは突き上げる腰の動きを加速させていく。

ツアレは嬌声を上げながら自らも腰を動かして、ラキスケが齎す快樂をより多く味わおうとする。

「ツアレの腰遣い、凄くエロくて気持ち良いよ。またすぐに射精してしまいそうだ」

「あああんっ！ 沢山出して……下さい！」

「ああ、イクよ！ ツアレのお尻に溢れるくらい沢山射精するよ！」

ラキスケはツアレの肛奥まで肉棒を突き込むと、龟头から衰えを知らないと言わんばかりに大量の白濁液を注ぐ。

先ほどの絶頂の余韻が消えないうちに新たな絶頂を迎えたツアレは、背筋を弓なりに反らして口が半開きのまま嬌声を上げる。

互いに絶頂の快楽を味わいながら、しばしの間抱きしめ合っていた。

しばらくしてアナルセックスによる絶頂の余韻が治まると、ラキスケはツアレを優しくベッドに降ろして肉棒を引き抜く。

そして《清潔^{クリーン}》の魔法が込められたマジックアイテムでツアレと自分の愛液や精液で汚れた体を清めると、ツアレの乳房に溜まった母乳をしゃぶって吸いだし始めた。

「ああんっ、ラキスケ様のおっぱいの吸い方……赤ちゃんみたいです。んんっ」

「じゅる……じゅぶじゅぶ。ちゅうちゅう……ちゅぱっ、そうになると随分エツチな赤ちゃんだね。ちゅっ」

母乳を吸い終えたラキスケはベッドに横になってツアレを抱き寄せると、彼女の額に軽く口づける。

ツアレは心地よさを感じながら、今後のことについて大切なことをラキスケに確認する。

「そういえば、王国に行くという話ですが、どの街を目指すというのは決めているのでしょうか？」

「うん、今までは八本指に気づかれにくいように故郷の村とその近くの町を中心にしていただけ、今回は人の往来が多い所にしようと思うんだ」

「そうなるか……、王都でしょうか？」

「いや、あそこは八本指が近すぎて危険だし、行くには時間がかかる。何より、ツアレにとってトラウマのような場所だからね」

「……それでは、どちらへ？」

「王国に帝国・法国の三か国の境界にもなっている城塞都市エ・ランテルだよ」

外伝「エ・ランテルの夜」

モモンガ達と今後の話をした夕方、ラキスケとツアレは黄金の輝き亭を出てエ・ランテルのある場所に向かっていた。それはツアレと心置きなく存分にセックスできるような、娼館とはまた別の逢引宿である。

ラキスケは今回、ツアレの妹を搜索するために帝国を出発してからずっとツアレとのセックスを自重していたが、家族と再会できた喜びと大好きなラキスケとのセックスを我慢しなくても良くなった解放感から、珍しくツアレの方から求めてきた。

黄金の輝き亭には主な宿泊層である王侯貴族や大商人のプライベートを守るため、大浴場とは別に個室ごとに小さいながらもマジックアイテムを使った浴槽とシャワールームが備え付けられている。

普通の人間のセックスぐらいならば、掃除をする者たちから多少白い目で見られる程度で済むかもしれない。しかしラキスケとツアレのセックスで発生する精液の量を考えると、浴槽が詰まってしまったりシートが使い物にならなくなったりして迷惑をかけてしまう可能性が高かったので、態々逢引宿を探したのだ。

従業員は亜人と思われるラキスケにぎよつとしたが、数時間部屋を使うことを伝えてチップ込みで代金を支払うと、素直に案内してくれた。

案内された部屋は決して狭くはなく、壁に掛けられたランプの淡い光に照らされた大きめのベッドの脇には、衣服をしまっておくための棚が置かれている。奥の扉を開けると小さいながらも浴槽が備え付けられており、衛生面も特に問題なさそうだ。

事前にこつそりと影の悪魔を何体か用いて、エ・ランテルに幾つかある逢引宿の内装や従業員の質などを調べさせてからこの店を選んだが、こうやって対応を見ると当たりだったことにほつとする。

ラキスケはツアレをベッドに座らせてから自身もその脇に座ると、ツアレの額に軽くキスをしてから唇を重ねた。

互いに舌を伸ばして絡ませ合い、ジュプジュプと音を立てて唾液を

混ぜ合わせる二人。

ラキスケはツアレを優しくベッドに押し倒すと、お互いの指を絡ませ合いながら唇の繋がりを深くしていく。

「んっ……んちゅ、ちゅぶちゅぶ……おっぱい、触って……んうっ」
しばらくの間ツアレの口内を楽しんでいると、彼女がその先を求めてきたので衣服越しに丰满な胸を確認する様に揉み始める。

ツアレの柔らかな胸の形を確認する様に指を這わせ、乳首をクリクリとなぞると、彼女は切なげな声を上げた。

「ああっ……、んっ。もつと……強く、んんうっ！」

ラキスケはツアレの丰满な胸に指を沈み込ませるように力を入れるのに合わせて、もう一方の腕をスカートの内側に滑り込ませる。

すべすべした太股を撫でながらその手はツアレの股間へと伸びていき、既にしっとり湿ってきている下着に触れる。

ラキスケは衣服越しではなく直接ツアレの柔肌に触れたいと、彼女のシャツのボタンに指をかけて一つ一つ外していく。全てのボタンが外されたシャツを捲り、彼女の胸を隠す最後の砦ともいえる下着を外すと、戒めから解放された乳房がプルンと揺れた。

ラキスケは露わになったツアレの乳房に手を伸ばし、親指と人差し指で乳首を摘まみながら全体を揉みしだき始める。

「ひやうん！ んんっ……はあん、ああああ」

ツアレの要望で普段抱く時よりも強く揉んでいるが、それでも彼女は喘ぎ声を上げて母乳を滲ませて感じている。今夜のツアレは激しいのを求めているようだ。

ラキスケはもう一方の乳房を舌で円を描く様になぞり、頂上にある薄いピンク色の乳首を舐る様に舐めまわす。そして、乳首を唇で包む様に啜えると、甘噛みしながら音を立てて吸い始めた。

「ああああん！ くうっ……んんっ」

口の中にほのかに甘い母乳が広がり、それに伴ってラキスケのいきり立った肉棒はさらに硬度を増していく。

——早くツアレと繋がりたい。

その一心でラキスケは下着を弄っていた手で彼女のスカートを脱

がし、露わになった下着を結んでいる紐を解いて取り払う。

秘部を隠していた下着は既に愛液でぐしょぐしょになっており、外気に晒された秘部はふやけて温かくなっていた。

ラキスケは母乳を吸っていた胸から顔を放し、母乳に濡れた手をツアレに見せるように丹念に舐め取ると、ズボンを脱いで抑え込まれていた肉棒を露わにする。

「ラキスケ様あ……ラキスケ様のおちんちんで、私の膣内を満たしてください」

ツアレはラキスケの肉棒を潤んだ瞳で見つめながら、足を開いて膣口を指で広げて蠱惑的に誘う。膣内に溜まっていた愛液が膣口からとろりと流れ出ていた。

ラキスケは頷くと、ツアレの膝裏を掴んで膣口に己の肉棒をあてがい、愛液を塗すように肉棒を擦りつける。

「あああつ……擦れて、んッ……あう」

十分に肉棒が愛液に濡れたのを確認したラキスケは、そのまま膣口を亀頭でこじ開けて一気に突き入れた。

「んんうううっ！ おく、までえっ……あああああんっ！」

ラキスケは肉棒が抜けそうになるくらい引き抜いては膣奥を亀頭で叩く様に突き入れる抽挿を何度も繰り返す。

ツアレの膣は中を行き来する肉棒を放すまいと膣壁のヒダヒダが絡みついて締め付ける。ラキスケは亀頭で膣壁を擦り、膣奥を突きながら肉棒に絡みつくヒダヒダを引き剥がすように腰を前後する。

ラキスケが腰を前後する度に、ツアレは母乳を迸らせながら胸を揺らして嬌声を上げる。

唐突に、ツアレの膣内がキュツと収縮してラキスケの肉棒を激しく締め付けた。

その甘美で強烈な刺激を受けた亀頭が膨れ上がり、今夜は射精を我慢する気が無いラキスケは、膣奥で濃い白濁液を吐き出した。・

「んんっ……あああああつ！ んんっっ！」

ツアレは背筋を弓なりに反らしながら身体をビクビクと震わせる。膣壁は啞えこんだ肉棒を舐り締めつけて、白濁液をさらに搾り出そう

とする。

その刺激を受け取った肉棒は繰り返し白濁液を膣奥に注ぎ、ツアレの膣内を汚していった。

「はあっはあっ……ラキスケ様あ、あううっ」

豊満な乳房を上下させながら、ツアレは唇の端から唾液を垂れ漏らしたまま口を半開きにしている。

一度目の射精を終えたラキスケは繋がったまま上半身を倒すと、ツアレの頬を伝う唾液を舐め取り、そのまま彼女の口内へと舌を侵入させる。

「あっ、ああっ……んちゆう、ちゆるる……あんっ、ああ……あああっ」

肉棒を膣内に突き入れたまま、両手で膝裏を抱えて上半身を倒していたので、ツアレの臀部が持ち上がる形になって硬度を保ったままの肉棒が膣奥を甘く刺激する。

ラキスケはツアレの口内にしゃぶりつきながら、マンガリ返しの体勢になった膣内に、肉棒を打ち付けるように挿入を再開した。

「んちゆう……あっ、あんっ……んちゆう、じゆるる」

肉同士がぶつかる音と、グチュグチュと淫猥な水音が部屋の中に響き渡る。

結合部では、肉棒の出し入れによって掻き出されて泡立った白濁液と愛液が混ざりあつて溢れ出している。

途中からツアレから唇を放していたが、頬を赤く上気させて艶声を上げる彼女の唇はだらしなく半開きのままだ。

肉棒を締め付ける膣壁が小刻みに脈打って、ヒダヒダが亀頭を舐めまわして吸い付くように蠢いていた。

先ほど射精したばかりだというのに、もう再びこみあげてくる射精感を堪えながら、ラキスケは肉棒でツアレの膣内を蹂躪していく。

膣内で肉棒の挿入を繰り返して、膣壁を何度も擦っては膣奥にあるコリツとした触感のあるところを突く度に、ツアレは身体をガクガクと震わせる。

「ああああああっ！ んっ……またあっ、っああん……っあああああああ！」

悲鳴にも似たツアレの喘ぎ声が部屋の中に響く。

ラキスケはツアレの絶頂が近いことを感じ取り、彼女の膣内に肉棒を突き入れて膣奥に亀頭を密着させると、子宮目掛けて熱く昂った白濁液を再び流し込んだ。

「——ああっ、あああああっ！ あっつ、んんううっ！」

絶頂して全身を震わせるツアレとは裏腹に、膣壁のヒダヒダは欲望を解放した肉棒に絡みついて脈打って白濁液をさらに搾り取ろうと蠢く。

その愛撫に導かれるままに何度も白濁液をツアレの膣内に吐き出して満たしていく。

「ツアレ、大丈夫かい？」

ラキスケは掴んでいたツアレの膝裏を降ろしながら、射精が静まっても未だに脈打って締め付けてくるツアレの膣内から肉棒を引き抜く。

ヒクつく膣口からは、膣内射精された二回分の白濁液が溢れ出て臀部に垂れていく。

「んああ……ラキスケ様のおちんちん、ぬけちゃった。ああんっ」

絶頂の余韻が残っているようで、時折身体を小刻みに震わせるツアレ。

二度の膣内射精の間、ほとんど手を付けていなかった豊満な乳房はツンと張っていて、乳首は固く勃起していた。

ラキスケは吸い寄せられるように魅惑の双丘を掴む。

「ああんっ……ラキスケ様、私は大丈夫ですから……んんうっ、思う存分楽しんでください、あああっ……」

捏ねるように揉みしだく度に乳首からピュッピュと母乳が溢れ、ツアレの胸を白く濡らして甘く淫靡な雰囲気を充満させていく。

ラキスケは胸の谷間に顔を埋め、舐めまわしながら母乳で濡れたツアレの身体を清めていく。ラキスケの舌が胸を這う度に、ツアレは艶声を上げて体を小さくビクンと震わせる。

乳房を綺麗に舐めたラキスケは、母乳を溢れさせている乳首を啜えて唇をモリモリと動かしながら強く吸い付いた。

チューチューと母乳を吸い、喉を鳴らして嚙下するラキスケ。ツアレの喘ぐ声がラキスケの興奮を煽り、亀頭の先端から零れる先走り汁がツアレの太股に垂れる。

「ツアレ、続きはお風呂でしようか」

もう片方の胸も同じようにしゃぶり母乳を吸った後、ラキスケはそう言っただけで居るツアレの衣服を脱がし始める。ツアレを一糸纏わぬ姿になると、自分も同じように脱いでから彼女をお姫様抱っここの体勢で抱えて備え付けられている風呂場へと向かった。

「あああああつ！　いく、いくうううつ！」

浴室にある鏡の前で立ちバックの体勢でラキスケに背後から抱かれているツアレが絶頂し、豊満な乳房を揺らしながらビクビクと身体を震わせていた。

続けてラキスケの肉棒から白濁液が大量に注がれて、収まりきらなかった白濁液と愛液の混ざった体液が秘部から溢れて太股を伝う。

浴槽に入ってから様々な体位でツアレは抱かれ、絶頂してはラキスケに精を注がれるのを何度も繰り返す、その度に張っていく乳房は母乳を吸われていた。

普通ならばすでに何度も気を失っていてもおかしくない快樂の波状攻撃だが、ツアレは恍惚とした表情でこの快樂を繰り返す味わう。

ラキスケはツアレと繋がったまま小刻みに腰を振りながら、彼女の胸から母乳を搾り出すように揉みしだき始めた。ツアレは甘い声で喘ぎながら、されるままにラキスケの行為を受け止めている。

母乳を搾る度にツアレの膣内を出入りする肉棒をキュウキュウと締め付け、新たな精液を強請って膣壁がヒダヒダを絡ませながら蠢く。

しばらく揉みしだいて乳首から母乳が出なくなったのを確認したラキスケは、乳首を振りながら膣奥に肉棒を突き込んで射精する。

「はあああんっ！」

与えられた強い快樂の刺激に、ツアレは背筋を弓なりに反らして絶頂した。

ラキスケは膣奥に亀頭を押し付けるように腰をグリグリと動かしながら、二度、三度と白濁液を注ぎ込む。

足元は夥しい量の精液や愛液で白く染まっており、壁面も母乳の飛沫で汚れている。黄金の輝き亭で行為に及んでいたら、二人とも出禁になっていたのではないだろうか？

射精を終えたラキスケがツアレの膣内から肉棒を引き抜くと、膣口から大量の精液と愛液が混ざった体液がドロドロと溢れて浴槽と彼女の太股を白く汚していく。

ラキスケは浴室やお互いの身体についた汚れを落としながら、ツアレに尋ねた。

「すごく気持ち良いよ、ツアレ。……普段と比べて大分激しくしちゃっているけれども、大丈夫かい？」

「はあっはあっ……。はい、私は大丈夫です。それに……。ラキスケ様に沢山求められて、私は嬉しいですよ」

絶頂の余韻から少し落ち着いたツアレが顔を赤らめながら見せる反応に、ラキスケはほっと胸をなでおろす。

汚れを洗い流してタオルで身体を拭いたラキスケがツアレを抱きかかえると、櫓立ち——俗にいう駅弁スタイルで膣内に肉棒を再び挿入した。

「それじゃあ、次はベッドでしよっか」

「っんあ、はい……。私の膣内に、もっとラキスケ様のおちんちんを下さい。……んふうっ」

ツアレが足を絡め両手でしがみつくのを確認したラキスケは、自分も彼女の背中に手を回して身体を支えながら浴室を出る。

ラキスケが歩く度に膣内に納まっている肉棒が膣奥を突き、熱く濡れそぼった膣壁を肉棒に絡ませながらツアレは甘い喘ぎ声を上げる。

ラキスケはベッドに腰掛け、放り出していた衣服を自らのアイテムボックスへと器用にしまうと、ピストン運動をしたままツアレの唇に口づけた。

「んふうっ、じゅぷじゅぷ……んふうっ。レロレロ……じゅる、っあう」

ラキスケは舌先で歯をなぞり、頬の内側に舌を這わせてその柔らかな感触を味わう。さらに口蓋から歯の裏、ツアレの舌へと這わせて彼女の口内をくまなく舐つていく。

ツアレの豊満な乳房はラキスケの胸板に潰れ、二人の動きに合わせて波打つていやらしく形を歪めている。

ツアレのくぐもった甘い嬌声にパンパンと腰同士がぶつかり合う音、そして肉棒が膣内を注挿するたびにネチャネチャと水音を掻き鳴らし、室内に淫らな音が響き混ざり合う。

「じゅぱ……ツアレ、出すよ」

ラキスケはそう言うと、背中に回していた手でツアレのお尻を掴み、膣内の最奥に亀頭を突き刺して大量の白濁液を解き放った。

「んふうう！ あああああつ……あああああつ！」

ツアレは身体を震わせ、甲高い嬌声を上げて絶頂しながらラキスケの情欲の奔流を受け止めている。

ツアレの膣内はラキスケのザーメンをもっと欲しがるように膣壁を脈動させて肉棒を締め上げ、ラキスケの肉棒もザーメンをせがんでくる膣内に応えるように繰り返し精を流し込む。

長い射精を終えて、ラキスケがツアレの口内から舌を抜き出すと、ツアレも身体の力を抜いて頭をラキスケの方に乗せてもたれかけた。

「愛しているよ、ツアレ」

「私も……です、ラキスケ様」

ラキスケはツアレと繋がったまま愛をささやくと、ゆっくりとした動きでツアレの全身を愛撫し始める。

ラキスケがツアレを解放したのは、繋がったままさらに膣内に三度精を放ち、事後処理のために膣内の精液を掻き出しながら溜まった母乳を吸ってツアレが三度絶頂してからであった。

久しぶりのセックスを堪能した二人は、手持ちのアイテムボックスから《清掃^{クリーン}》が込められたマジックアイテムを取り出し、掻き出した精液や愛液でグシヨグシヨになったベッドを簡単に掃除する。本来は従業員に任せることだが、普段のセックスの後の習慣はなかなか抜けないようだ。

掃除を終えると、今度は来店した時とは別の服とをアイテムボックスから取り出して着替え始める。

ラキスケは白いスーツを、ツアレは白を基調としたメイド服だ。

二人とも着替え終えたのを確認したラキスケがツアレの手を引いて部屋を出ようとした時、ツアレが近寄って耳元で囁いた。

「今日は私の我儘を聞いてくれてありがとうございます。明日は私にたくさんご奉仕させてくださいね、ラキスケ様」

「ああ、楽しみにしているよ。ツアレ」

ラキスケは顔を綻ばせながらツアレと腕を組んで逢引宿を後にする。そうやって、エ・ランテルを出発する日まで、二人は逢引宿で毎夜のように睦み合っていた。